
蒼天の真竜

逢河 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼天の真竜

【Zコード】

Z6335

【作者名】

逢河 奏

【あらすじ】

ある時ある森の中で。

出逢つたのは意味を見出だせない鍛治師見習いと、孤獨過ぎて何もわからないまつさらな少年だった。

それから四年後くらいのこと。

自称ドラゴンな少年シンは、家の前で暴れる小さな狼少年を見かける。家を守るために戦おうとするシンの前に立ちはだかるのは、その家の主にして間の抜けた鍛治師の青年。

「……何？」

「空氣読めえええ！」

そして動き出す物語。

それはホームコメディ？ 未来ファンタジー？ それとも自分探しの大冒険？

さてここに始まるのはそんな闇鍋みたいに目的の読めない見えないそんな話。

守りたかつたり大切なんだと叫んでみたり、泣いて喚いて果ては拐われちゃつたり。ドタバタ右往左往する彼らはそれでも何かのために泣いて笑つて戦つて。一生懸命生きている。

これはそんな頑張ってる人達のお話。

〇〇〇 森の中で【紫雲】（前書き）

興味を持って下せり、ありがとうございます。これは逢河奏といつ名前で初めて書いた話です。四話まで一区切りになるので折角ならそこまでは読んで欲しかったりします。拙い部分ばかりですが、良かつたらお付き合いで下さい。

タイトルは読み方はちゃんと決まっていませんが、出来たら『蒼天の真竜』の真竜はドラゴンと読んで欲しかったり……。ネーミングセンスなくてすいません。中身くらいはまともになるよう努力するのでよろしくお願いします。

では一人の出会いの場面を序章として、物語を始めましょうか。

俺は不思議な気持ちだった。

人のあまり踏み込まないような薄暗い、森の中。か細い木漏れ日がそこに踞る少年をぼんやりと、どこか幻想的に浮かび上がらせていた。

本来こんな森の中に、人間が居るはずもないのに、不思議と彼には違和感がなかつた。まるで森の一部のようだつた。
だからだろう。

現実味や、人間らしさに欠けたその場面を見下ろしていた俺は、気が付けば問いを発していた。

「お前は人か？」

その声で漸く気付いたように、少年は顔を上げ、俺を見た。

赤い、褐色の光。

薄暗くて髪色も黒っぽいとしか判別出来ないのに、その強い光を湛えた瞳の色ははつきりと見えた。

「…………ひい、とか…………？」

驚いたことに返つて来た声は下手くそだつた。まるでしゃべり方を忘れたみたいな、妙に揺れたすつとんきょうな声だつた。

俺は戸惑い、半ば思い付きで言葉を選択する。

「では獣か？ 森に暮らす者か？」

紅玉の瞳は揺れながらも、真っ直ぐに俺に向いていた。

「……もり、に、いる」

拙い発音。外見は同じくらいにしか見えないというのに、あまり大きな差が間にあつた。もしや会話をしたことがない……？ そんな馬鹿な。しかし……森に棲んでいたと言つのなら、有り得るのか？

「でも、人だらう？ それとも本当に獸なのか？ ……人間の変異^{へんい}種^{しゅ}、だとでも言つのか？」

俺もどうして良いか、わからなかつた。ただ、この不思議な少年が一体何者なのか。己が始め気紛れに投げ掛けた問ひが、その答えが、今は無性に気になつていた。

しかし少年は首を傾げた。

「おまえの、ゆう、ヒトか、ケモノって、なんだ？」

そう言われてみて、改めて思う。人と獸の定義は何か。そう言えばあまり考えていなかつた。その境目とは何だらう。何が両者を隔てるのだろうか。

暫く黙考した結論。それを訥々と口にする。

「人とは……面倒な感情を持ち、面倒こつをする。気紛れで、難解なようで実は単純な生き物、かな」

「ケモノ、は？」

「獸は、正しい答えを本能が知り、感情を制し、正しいを実践する。賢く、誇り高き生き物だな」

俺は俺の持つ知識から、そう考える。

そう付け足すよつに言った。ただ、言い切つてから不安になつた。

果たして俺の選んだ言葉は正しかったのか。そして正しく伝えることが出来たのだろうか。

正解なんてない問題に、そんな意味のない不安を覚えた。

しかし少年は先程までの反応とは異なった、難しいことを考えるよう眉間に皺を寄せるということをしているのが、何となくわかつた。暗くてあまりよく見えないから気配で、といつ不確かなものだが……。

伝わったようだ。とりあえず伝わってはいる。喋ることは上手く出来なくとも、言葉を理解することは出来るようだ。

少年は考え込むように俯いていた顔を上げた。それは困ったような途方に暮れた顔。

「お、まえは、なんだ？」

「……俺か？ 俺は、人だろ？ お前はどうなんだ？」

「……オレ、は……オレはっ、し、らなーいっ」

意地になつたように歯を剥き出して彼は答えた。怒つていよいよに見えるが、寂しそうにも見えた。

そこで漸く気が付いた。

今更過ぎることだが、でも自分でも驚く程唐突に理解した。何故だろう。薄暗かつたのもあるが……動搖、だろ？ こんなところで誰かと出会うなんてイレギュラー過ぎる。でもそれには理由があったのだ。

彼は足を怪我していた。

それはそうだ。足を抱えて踞っているのだ。普通に考えれば怪我を負っているから、だろ？ なのに今の今まで気付かなかつた自分の鈍感さに、観察力のなさに、呆れてしまう。

暗さに慣れた目でよくよく見れば、その足が微妙に奇妙な方向を向いていることがわかる。折れているのだろうか。しかしその割りに、目の前の少年は泰然としていた。

ふと、思い出す。そう言えば簡易医療キットを持っていたなど。出掛けに母に押し付けられたものだ。せめてこれくらいは持つて行きなさい、と。偶然の巡り合わせかね。

少し面白く思い、一人小さく笑った。

そして少年にまた視線を向けると、足を踏み出し、言葉を投げ掛ける。

「さつき人は気紛れだと言つたよな」

「……ああ」

「だから俺も気紛れを起こすことにした」

「……？」

足取りも軽く、直ぐに少年の元まで下りていく。近くで見れば流石にわかつた。彼の額にうつすらと脂汗が滲んでいることが。

「怪我、見てやろう。簡単な処置なら俺にも出来る」

「……あ、なんだ、それ？」

「要するに痛みを和らげてやるから大人しくしていろといふことだ」

「……おーほー横暴、だな」

「勝手に言つていろ。俺も勝手にするから」

そう言つて俺は宣言通り無遠慮に手を伸ばした。反撃、反抗も覚悟の上だったが、意外にも彼はあっさりと足に触れさせてくれた。野生の獣は意地でも弱みを見せないと聞くが、やはり彼は人間だからか。

本で得た知識を反芻しながら触診。ああやっぱり折れている。良くもまあ平氣な顔をして話せるものだ。逆に感心してしまう。

「なに、してる？」

「包帯を巻いて骨を固定、保護している。まあしばらくしたら外し

て良いぞ」

「……じゃま、だな」

不満気に口をへの字に曲げてみせるが、それでも包帯が巻き終わるまでじっと静かに見守っていた。

「よし。もう良こそ」

「もおっこ？」

「でも三田へりこは我慢しないよ。骨がくつつけば好きにすればいい

が」

「……みつか、てなんだ？」

「……日が三度昇つたつてことだ。わかったか？」

「……わ、かつたつ」

「クリと大真面目な顔して彼は頷いた。それに満足すると俺は立ち上がった。

「じゃあな」

挨拶はそこそこに、俺は足早に歩き出す。あまり遅くなると母が心配する。

しかし不意に、振り返りたい衝動に駆られた。そして俺はそれに素直に従つた。

見えたのは、何かもの言いたげな、けれどその言葉を知らない哀しい少年がいた。

それにどうしても応えたくなつて、気が付けばこう言つていた。

「観月紫蘭みづきしじらんだ。俺の名前はシラン。……お前は？」

その瞳は、生き生きとした煌めきを取り戻したそれは、まるで暁

のように、俺には思えた。

「たつみ、しん、たるひ」

懸命に「」の名を告げる少年を見て、しんたろうひてどんな字を書くのだろうと、惚けた考えが勝手に浮かんで来た。呼ぶなら、シン。

「シン、か」

無意識の中に亥っていた。うん、悪くない。妙にしつくづくの名前だ。

ふと少年を見る。彼は不思議そうに暁色の瞳を一杯に開いて俺を見ていた。口もぽかんと半開きの有り様だ。

俺はまた可笑しくなつて喉の奥で笑うと、珍しく自分の願望を混ぜた言葉を投げ掛けた。

「またな、シン」

もしも再びがあるのなら、その時はあの答えを。

そんな栓のない考えを頭に過らせながら、俺は背を向け、歩き出した。

001 灰幕【真】（前書き）

まだ色々ちゃんと決めていないのに始めてしまいました。明らかに見切り発車ですが……一応大まかなストーリーは決まってるんでそれを持つ走ることとします。

といつわけで、第一章の第一話が始まります。

「やーな天氣」

オレは一人空を仰いで呟いた。

空はいつもの厚い厚い灰色雲。取り分け今日は念入りに空を覆い、隙間一つない。いつものことだけど、オレの好きな青色は見れそうにない。やっぱり灰色なんて大嫌いだ。

そんなことを考えながら、オレは恨めしげな目を空に向けていた。

「おいおい、仕事してくれよ」

軽く呆れたような声が背に掛かり、オレは振り返る。

「おーよ
「あんた、大丈夫なのか？ 何事もなく向こうまで行けるよなあ？
「さあなつ」

依頼人の男の座る馬車の幌に、ひょいとひとつ飛びにオレは乗った。男は心配するような口調の割りに飄々とした顔でオレの動きを追っていた。

「何が起じるか、何が出来るかなんて、オレに知りようないからな」「そりやそうだ」

「ま、でも全力尽くして守るから、任しどけおつかやん！」

無駄に自信に満ちた笑みをこいつ、と向けると依頼人の男もふつ、と余計に力の抜けた、柔らかな笑みを浮かべると言った。

「頼りにしてるや〜」

「おおよつ」

そうして荷馬車は走り出した。
ガタガタと馬車を牽く馬は、異様な逞しさと小さな黒い角を額に持ち。

馬車の荷台には簡素な木箱に詰め込まれた野菜が山になり。見える景色は、後ろには街、脇にはまつさらな草原、遠くに森、その奥には山があり、ぼんやりと臨むことが出来た。そして馬車は踏み固められた道を、唯一道と呼べる一本の線を迷うことなく突っ走っていた。

（）は日本と呼ばれた島。今は孤島と呼んだ方が正しいだろ？
異常気象に天変地異。それにより世界がバラバラになり、政府はバラバラになつた。日本は西と東に真つ二つなんていう有り得ないようになつてゐる。

生態系はわけのわからない方向に突っ走りだし、気象はもはや神のみぞ知るものとなつた。

無秩序が秩序となつた世界にある元日本といつちつぽけな島。そこに生きる人々は遅しく、新しい秩序を積み上げることでこうして生きていた。

しかし、そんな話を人事のようには知つてゐるけれど、正直言つて今あるものがオレ達の現実で、昔がどうだつてことはどうでも良かった。ただオレ達は変わつた世界で強く生きていくだけ。それだけのことだ、とオレは思つてゐる。

分厚い灰色の雲の下、馬の牽く荷馬車は順調に街道を進んでいた。しかし、やはり役目を果たすことなく仕事を終えることは許してもらえなによつた。このままなら行けるかも、という考えが頭に過つ

た頃、それはやつて來た。

「おっちゃん、スピード上げれる?」

「何か、來たのか?」

出発前の聲音とはがらりと変わつた、緊張感に強張つた声が聞き返してくる。

「おうよ。来ちやつてるな」「いや……鹿臭い」

「兄ちゃん、大丈夫なのか?」

「まだ少ない。そんで遠いし……馬の脚次第、だなあ」

「おっし、そんなら話は早い」

そう言つと男は脇に置いていたケースを取り、そこから田畠のものを取り出した。

「……しあわせ?」

「気にすん、なつ!」

と声と共に男は手にした小魚を放り投げた。それは綺麗な放物線を描き、上手に具合に馬の眼前に躍り出て。

パクつ。

と食べられた。

「こっちょ頼むぞ、ツオン」

「ヒビンッ」

ツオンと呼ばれた小魚を食べる奇妙な馬は、一声鳴くと大袈裟な程の身震いをブルルとした。そして用意は出来たとばかりにダンツと地面を鳴らすと。

「シオンシー！」

と奇妙な鳴き声を放ち、唐突に凄まじい勢いで走り出したのだ。

「へ、うえええー！？」

なんだなんだなんだー！？ これ馬かー？ あ、いや変異種なんだ
うつせど……でもやっぱりこれ本当に馬なのか！？

そんなことを思つてしまひほゞ強引に、ガツツータ、ガツツータ、
とこう何だか半ば浮くよつたなスピードで馬車は引かれていく。

「な、な、なんだこの馬はー。」

「シオンだよ。『シオン』って鳴くから」

「やつぱそこが由来なのかー！」

口の今にも振り落とされそうな振動の中、慣れているのかおつち
やんは涼しい顔。でもオレは当然慣れていないから意味もなくあた
ふたとする。気を抜くと舌噛みモー。

そんなことを考えていたらふと小さな疑問が湧き上がり、あまり
考えず口に出す。

「おつかやんわあ、シオンをえこりや護衛なんていうねえんじゃね
えの？」

「ああ？ 馬鹿言つてんじゃねえ。敵がかなり近付いて来ないと俺
らにはわかんねえんだよ。それにまともに戦う手段がないんだ。だ
からあんたらを呼ぶんぜ、万が一のために」

そんな会話が交わされる中、敵は近付いている。

「逃げ切れそうか?」「

「……ビミラーだな。群れだつたっぽい。最初のは振り切つたけど連鎖的に気付いた奴らが来てる」

「なんでそんな見てもいなことがわかるんだ?」

不思議そうにおひちゃんが尋ねるのでオレはきつぱりと答えた。

「知らん。なんとなくだ。臭いとか音とか、気配とかだと感ひながら

「……お前さん、面白いなあ

「わづか?」

オレは不思議そうに首を傾げた。しかし直ぐに何かに気付き、遠くを見た。

「来るか?」

「……来る」

砂埃が遠くで巻き上がるのが見える。そしてよくよく田を凝らせば見えてくるものがある。

「……」

おひちゃんは絶句だ。オレは睨むようにそいつらを見ていた。

馬のような逞しい脚を持ち、シンプルな一本角をかかげ、赤く爛々と光る瞳をひたすら前に向けて怒涛の勢いで迫つて来る、あれは。

「鹿、だな」

草食ではまずない牙を見せて猛然と駆けるそれは、もはや鹿では

ないのかもしない。しかしそれは進化の結果だ。異様なこの世界で生き延びるために獲得した性質。

それが彼らの場合、肉食に、強者になることだつただけ。

そうした、今までの常識をぶち壊しても種を残し、繁栄を勝ち

取つた彼らを、オレ達はいつ呼んでいた。

変異種、と。

「……もうちよいスペードアップは？」

「……やばこか？」

「……」

どうしようかなー、と思ひ。

まあ無理じやかないけど、やだなあつて思つ。こんだけ数いるとやつぱり本氣で行かないと無理だ。自分しか生き残れない。それは嫌だし駄目だ。でもあんまりやりたくない。

とかまあ駄々をこねてる場合でもない、か。

腹をくくる。

「おっしー んじやあおっしゃん。オレ、今から本氣になつて来るから馬車止めて」

「……は、はあっー？ そんなことしたら俺らが死んじまうだろー？」

「でも乗つたままじや戦いにくいつて。かと言つてオレを置いてつたらおっしゃんの安全が保障されなくなつまつ。しうがねえだろ？」

「しうがねえ、つて……」

絶句するおっしゃんをひきとめて、とうあえず馬車を止める」といふことがある。

「ツォン、スピード落としてくれ

「……ツォン」

少し迷つたが、ツォンは大人しく言うことを聞き、減速を始める
と直ぐに止まつた。

「な、なんで言うこと聞くんだ……こいつは野生の馬で、俺以外の
奴には慣れもしなかつたのに」

「そつか。なら仲間だと思つてくれたのかなつ」

ちょっと嬉しくなりながら、またひょいと馬車を飛び降りた。そ
して腰の得物に手を伸ばす。

「ど、どうじつことだ？ それにお前、一体どうするつもりだ
？」

「さつきも言つたら？ 戰うんだよ。それしかねえだろ」

「でもあれは……一十近い数いるぞ。逃げるだらう、普通」

「なら普通だと思わないでくれ。とにかくおっちゃんは動くなよ？」

そう忠告すると得物をすつ、と抜き払つた。刀だ。大切な人がオ
レの願いを叶えるためにくれた大事な相棒。

それを持つとオレは馬車の後ろ、猛り狂う鹿の群れの真正正面に立
つた。

意識して大きく息を吸うと、ゆっくり吐き出す。スイッチを入れ
る感覺。覚悟を決めた。なら行こう、と自分に呼び掛ける。

オレは地面を思いつきり蹴ると、自分から群れの直中に突っ込ん
で行つた。

すれ違ひ様に刀を振るう。容赦はなし。瞬殺で切り捨てる。次。
一步で距離を詰めると切り上げる。次。返す刀で薙ぐように囲む敵
を切り払う。次。背後に立つたのを振り向き様に一閃。次。次。次

。

そりやうで半数近くの鹿を切り伏せるとオレは立ち止まつた。群れの真ん中にだ。でもきっと、傍田から見れば可笑しな状況だろう。なんせ鹿はオレに恐れを含んだ視線を向けているのに、オレはいつものように飘々と突つ立つていてるからだ。

オレは鹿達の視線を真正面から受け止めると、口を開いた。

「今更言つても信用ないと思つけど、オレはあんたらと殺し合いたくない。だから、退いてくんないか？」

「……」

沈黙がオレに刺さる。でもそれに堪え、オレはひたすら待つ。すると先頭の奴が一步後ろに下がつた。それに習つよつて他の鹿も下がる。これは……。

「いい、ってことだよな？」

「……ウオフ」

低い唸り声が返事だつた。オレはホツと胸を撫で下ろした。良かつた、これ以上はやらずには済んだか。

それだけ確認出来れば十分。オレは背を向けると鹿包囲網をひよいと飛び越えて御者台まで戻つてきた。

出迎えたのは依頼人のおつちゃんのあんぐりと口を開けて惚けた顔だった。

「おつちゃん、行かないとまたオレらがじこ馳走候補になるぜ?」

「……あ、ああ!」

遅れて言葉を理解したおつちゃんはつやへ手綱を握るとツォンを走らせた。荷馬車が再び猛スピードで走り出す。

しばらくそんな調子で進むと、ようやく建物が見えてきた。無事任務完了だな、と安堵しているとおっちゃんがこっちを凝視していた。

「な、なんだよ、怖い顔して……」

「あんた、一体何者なんだよ？ 人間、だよな？」

ああ、そのことか、と苦笑する。この人の依頼は初めてだつたが、本当に何も知らずにオレを選んだらしい。オレのことを面白いって言つたけど、このおっちゃんも十分面白いな。
そんなことを思いながらオレは答えた。

「オレは異真太郎たつみしんたろう」

そんでもつて人間じゃなくて 。

「ドランだ」

また半開きになつた口を閉じれずにいる間抜けなおっちゃんの顔を見て、オレはニッと笑つた。

001 灰幕【真】（後書き）

サブタイトルは多分統一感ないものになつていいくと思います。とりあえずノリです。ノリで何とか行きます。

因みに今回のタイトルは開幕の「開」に灰色の空の「灰」を掛けてみたのですが……あんまり深い意味はないような微妙な感じなので気にしないでください。全てはノリで切り抜けると信じて、次、行きましょう。

002 狼と竜【真】（前書き）

シン視点です。ようやく本編スタートな感じです。主要メンバーが何人かやつと出でてきます。あんまり説明なしでキャラ達が暴走気味に好き勝手なことを言つていますが、おいおい説明されるはずなので……細かいところは気にせず、雰囲気を楽しんでもらえたら、と思います。では一話目をどうぞ。

002 狼と竜【真】

ようやく仕事も終わり、もうすぐ家だな、とか思いながら歩いていたんだけど……。

「なんか……臭い？」

血の匂いに鹿の匂い、それと……犬、にしちゃあ獸臭い。一体何匹変異種が紛れ込んでんだ？

一人首を傾げていると駆けてくる足音が聞こえてきた。多分子供のものだ。

「シンにい、シンにい！　たいへんなんだよおー！」

振り向くと同時にぼすつ、と足にそいつはタックルしてきた。そしてそのまましがみ付き、氣の弱そうな垂れ目をオレに向かた。

「なんか侵入したのか？」

「そうなの！　こわいのがシカさん追つかけて入っちゃったの…」「で今はどこにいるんだ？」

「みんなであつちに追いつめてるよ。けビコわいの強いみたいだからから、様子見、なんだって」

「様子見てりや出てつてくれるのかねえ……」

とりあえず膠着状態らしい。ならオレが乱入してもいいだろ。

「どっち行った？　その鹿追つてる怖いものってのは

「あつち」

そう言つて垂れ目の中の男の子が指したのは……。

「おこおこおい……マジ?」

「うそつかなによ

それはそうだ。こいつは齧されてなきや素直なやつだから。と言
うか嘘を吐けと齧られる理由もそれな氣がする。

「いつも気の強いのは?」

「アンちゃんは危ないからおうちで待つて、って言つてきたの」

「そつか。じゃあお前もアンのところで大人しく待つてな、コウリ」

「うん。がんばってね、シンにいつ!」

「おうよひ

ト「コトコ駆けていく男の子、コウリを見送ると、彼が指示示した
方を向いた。それはオレらの家がある方向。あいつは多分、と言つ
か絶対家に居る。

「……マジかあ……大丈夫かな

とにかく急がねばと思い、全速力でスタートダッシュを切った。

大慌てでやつて来ると人だかりが家の手前に出来ていた。ほんと
家の前じゃねえか、と思わず悪態を吐くが、それと同時に冷や汗も
感じていた。

「シン、お前帰つてたのか?」

悪態は焦りもあつて思つていた以上に大きな声になつていったよう
で、オレの声を聞きつけた後ろの方にいた男が振り返つた。オレは
苛立ちやら焦りを隠せないまま荒っぽく答える。

「今帰つてきたんだよつ。何やつてんだよ、包囲網でやつかあ？
そんなことやつてる場合か！」

ほんと怒鳴るようにそれだけ叫うとそいつを押し退け、人だか
りに突っ込んで行く。焦つて焦つて上手く考えはまともないから、
もう考へない」とにする。だから人垣を乱暴に掻き分け、ドンと最
前列に出た。

鹿、だけじゃなかつた。灰色のやたら毛むくじやらな獸が、横倒
しになつた鹿の腹にかぶりついてくる。それが一番前に出て最初に
飛び込んできた光景だつた。

「……なんだ、あれ？」
「オオカミだ……」
「は？」

近くにいた誰かが呆けた声で答えた言葉を訝しげに聞き返したそ
の時、それは振り返り。

目が合つた、気がした。

濁りきつた沼のような灰色の目。長すぎる毛によつて口元はよく
見えないが、血が滴り落ちていた。あまりに人から掛け離れた姿に
見える。しかし、よくよく見てみれば前足は地に着いているように
は見えないし、頭の位置もおかしいような気がする。もしかして…
…？

なんてことを考えさせはくれないらしい。灰色の獸はふつと頭
を下げる、もう一本の足も地に着け、地面に吸い付くかのよつた体勢
をとつた。

あー、来るな。

呆けたようにそう思つ。本能がそう言つてゐる。だから気つけば柄に手が掛かっていた。

ガギイイイン 。

金属と金属がぶつかつたような音が響いた。けれどそうじやない。一方は確かに刀だが、受けたのは全く違うもの。それは。

「つ、爪つ？」

刃を止めていたのはまさかまさかの爪だつた。煤けた色をしたその爪はやたら太く、鋭く、なにより信じられないくらい硬いようでは……変異種だからって言つてもそんなのありか！

そんな風に内心仰天していたが、どこか不思議と冷静な部分もあつて……。

「ううううう！」

刀が力任せに跳ね上げられ、もう一方の凶悪なまでに研ぎ澄ました爪が、オレの首目掛けで突き出された。

にも関わらずスッと力を抜いて体を沈めることでそれをかわして見せたのは、戦い慣れているからなのか、本能のようなものなのか。……でも本音で言えばめちゃくちゃ怖かつた。あの爪コワッ！

「うううう！」

灰色の獣は睨みながら唸つていた。警戒しているらしい。オレも「ええよお前、と言いたい。言いたい、が。

「お前、一応人間だよな？」

困ったような顔で問い合わせる。言つた瞬間、辺りは怖いくらいに静まり返つてしまつた。そして爆発する。

「は、はああああ！……」

「うあつ、耳にいてえだろ！ 合唱すんな！」

「お前こそ馬鹿言つくな！ あれが人間なわけあるか！」

「馬鹿はてめえだ、あーほ！ どう見たつて人間じやねえか！」

睨まれている。それがわかるくらいに今は顔が顕あらわになつていた。灰色の長い毛の隙間から覗く、丸く大きな黄褐色の瞳は鋭いが静かで。微かにはみ出した前髪は毛皮に似た、しかし明るい灰色をしていた。

そう、毛皮。彼は犬だかの頭蓋骨の付いた毛皮をすっぽり被つていたのだ。そして幼かつた。十歳前後だと思う。

「うー」

灰色の獣、改め、灰色の少年はなかなか警戒を解かず、未だに唸つている。どうしたものかと思うが、けどこちらも警戒は解けない。本当にこいつはシャレにならない強さだからだ。あと怪力だ。馬鹿力としょっちゅう言われるオレが簡単に刀を弾かれたんだから。

「はあー」

どうしたもんかな、とため息を吐いた、次の瞬間だ。

「がちやり。」

「…………」

「……なんだ？」

「バカあああ！－！」

なんでじつじつ時に限って空氣読まずに出て来ちゃうのー？
オレの住む家の扉が開き、黒髪の青年が顔を出していた。状況が
わからず固まっている。そして毛皮を被った少年もその音にびくり
とすると、家の方を見た。

どうするどうする？ この狼少年めちゃくちゃ足速い。先にスター
トダッシュ切られたら間に合わないかも。それはダメだ。それは
ヤバい。じゃあどうすんだよ！ あー、もー……後で考える！
それだけ決まればもう良かつた。

「『めん…』

一言先に謝ると、オレは素早く行動に移した。

少年に肉薄するや否や、腕を掴み、引っ張る。と同時に足払い。
完全に体勢を崩し、浮いた少年を力任せに捩じ伏せる。

どたーん、という音が響き、あっという間に少年は地面に転がさ
れ、オレはマウントポジションを陣取る形となつた。

「うー、ううう……ぐおお……」

少年は唸り、身を捩るが、かなり本気になつて抑え込まれた体は
動かない。

「落ち着け、つてこなことじといて何、だけど……とにかく落ち着
いてくれつ」

「グルルルウ……」

本当に狼みたいな声を出し始めてしまい、オレは慌てて言葉を繋

げる。

「お、お前がここの辺にいる奴らを襲わないって約束してくれればもうオレらは攻撃しないから……頼む、頼むからそう約束してくれ!」

「うじやなきや力づくで追い出すなり殺すなりしなくちやならない。そもそも言葉を理解してくれるのか……？」
そんな不安が過る中、ふと少年の抵抗が止んだ。

「……口ウ、襲わない。なら、襲わない?」

「襲わない襲わない！ もう攻撃しないよ。だから約束してくれるか？」

「……なら、約束する。口ウ、ここの人、襲わない」

ほつとその返事を聞くとオレは息を吐き、少年を押さえる力を抜いた。上から退くと、少年はゆっくりと体を起こした。

「お、おい、大丈夫なの」

疑り深い外野からの声は、鈍い音と共に途切れた。そして野太い、能天氣にも聞こえる声がしてくる。

「馬鹿かてめえは。シンが大丈夫だと判断したから手を離したんだ。それに侵入者の方も落ち着いてんだ。野暮なこと聞くんじゃないよ」

声が近付いてくる。でもまあそれは良いか、と思い、とりあえず田の前の少年に手を差し出す。

「乱暴して悪いな。どうにも手加減苦手で。ほんとはもっとスマートにやりたいんだけどな……」

「さやきながら差し出された手を、不思議そうに彼はじばじ眺めると、黄色い瞳を輝かせて手を取った。

「強いな、強いな紅い目の人！」

「お、おお……なんだその呼び方？」

「変か？ 口ウ变？」

「変じや、ないけどよ……そんな風に呼ばれたの初めてだな。オレはシンつて言うんだ」

「シンか？ 強そうだなつ」

「そうかあ？ にしても口ウも強いな。怖いくらいだつたぜ？」

と、そこで何故か彼は首を傾げた。……なんだ？

「名前、口ウつて言つんじゃないのか？ わりきからロウロウ言つてるからてつきつ……」

「つうん。口ウは口ウだぞ。シンは間違つてない」

「そつか。なら良かつた」

名前がようやくはつきわかつて何だか安心した。にかつと笑うと、灰色の毛皮を被つた少年、口ウも虚説のない笑みを浮かべた。

「おー、俺を無視するなよ」

一段落ついたところで割り込んで来たのは、さつきも遠くから頗りらしい聞こえてきた、あの声だ。オレは思いつきつしかめつ面をすると、声の主にそれを向けて言い返した。

「おせーよハンダ！ なんであんたが今更ノコノコやって来てんだよー！」

「すまんな。情報が錯綜してなかなか来れなくてな」

「言い訳すんなよ」

「まあそつ拗ねんなつて。お前の活躍で場は治まつたんだから」

「むー。大体地区長のあんたが

「

ぱかっ。と台詞の途中にいきなり軽く後頭部を叩かれた。それに
続き後ろから声がかかる。

「半田さんにてらるな、シン」

痛くないけどイラッと来た。そして頭を叩いた人物がその苛立ち
に追い打ちをかけるような奴で……。ぷちん、とキレた。

「あの場面で空氣も読まずに出てきやつたお前が一番の問題だあ
ああああーーー！」

怒鳴りながら振り向く。

そこにぼさつと突つ立つてるのは黒髪の青年。成長期に伸び悩
んだ背丈を未だに引き摺つている、みみつちい二十二歳だ。因みに
オレの方が余裕で背が高い。

そして無駄に不機嫌そうな顔付き。でもそれは凝り固まった性格
によるもので、別に怒っているわけではない。ただそれがデフォル
トただけだ。

黒い瞳をぼんやりと開いているこの男。オレの住む家の家主であ
り、腕のいい鍛冶屋だが、どこか妙なところ抜けている、この男
の名前は。

「シリウスー！」

「……わかつた、わかつたから怒鳴るな。……耳が痛い」

田を細めて耳を押さえたシランはあまり反省したよつには見えなかつた。が、確かに大きな音は痛いといふことはさつき身に染みていたので繰り返す氣にはなれず、代わりに大きく息を吐いた。

「シランは本当にこいつこいつ時は絶つつつ対に頼りにならない。つか頼りにしないからな！」

「……前科もあるし、反論の言葉もないな」

「ふんだ」

完全にふて腐れてそっぽを向いたオレに、苦笑する氣配だけが何となく伝わってきた。なんだなんだ。シランなんて知らねー。……シャレじゃないからな？

「まあまあ。といあえず何事もなく治まつたんだし、良いじやねえか、シン」

「良かねえよまつたく……まつたく」

「お前の過保護っぷりは相変わらずだなあ

「過保護じやねえ！ シランが悪い！」

「駄々をこねるな。それより……」

不意に台詞を切ると、シランは辺りを見渡した。釣られてオレも一緒になつて見渡す。

落ち着いて見てみれば、何だかあっちこっち微妙に壊れている。元から掘つ立て小屋みたいな家が適当に並んでいただけだが、それの柱やら屋根が外れたり折れたりしていた。

「……口ウが暴れたから、か」

「口ウ気付かなかつたぞ……」

「……」

「……まあ、アレだ……いつものことだな」

「ハンドの言つ通り、こつものいとね。ロウは氣になくてこよ
だ。
「やうか？ ロウ憑く。ロウのせいだ……」

「修繕の手伝いをしてくればいい
「おお、それ良いな！ な、ロウ？」
「うん。ロウ手伝うー。」
「おこおこ。これ以上は壊してくれるなよ？ それに何手伝うんだ
？」

「壊さねえよ！ それにロウは凄いんだぞっ
「ロウ凄いぞっ」

「何がだよ。つかお前ら早速仲良くな……れつきまで戦つてたのに
「戦つたからこそその友情だ！ な？」
「そうだぞ、友情だつ
「……シラン、相棒とられたな」
「……なんで俺に言いますか。勝手にすればいい。それに相棒と言
うよりは同居人で主夫だ」
「そうだなー、シランはダメ人間だもんなー。オレが世話してやん
なきゃなつ」
「……」

さっきのお返しとばかりに追撃する。シランは口をやがて笑つた。
の顔を見て、ため息を吐くとハンダを見て言つた。

「それ以前にただの馬鹿だけどな」

「違ひねえ違ひねえ。うははっ」

「笑うなハンダ！ シランもひでえなー もつ怒つたぞ、シランの
昼飯なんて知つたことかー 行くぞ、口ウ」

「手伝い行くー」

怒つたのでシラン放置で口ウを引き連れ、修繕作業に乱入することにする。既に野次馬のようだつた戦闘員は散り散りになり、各自片付けを始めていた。

「俺も行くかな」

「俺も行きます」

「シランは待つた！」

こいつも生真面目氣質なので予想はついていたので、オレは速攻で振り返つた。シランは予想していなかつたよつて口をぱちくりさせてオレを見返した。

「な、なんだ？ まさか片付けも危険だから参加禁止、なんてことまで言う気か？」

「ちょっと言いたいけど流石にそこは良いとして……」

言葉を一回止め、オレが息を大きく吸うと、シランは身構えた。
しかしそんな」とお構い無しに怒鳴るよつて言つた。

「シランー また本読みながら寝てただろ、こんな昼間っから!
風邪ひくからやめろって何度も注意してるだろ！ そんなことして

るから警報が聞こえなくて逃げ遅れて、拳げ句の果てに空虚読まずに登場なんてことするんだろうが！」

「……すまん。って、なんでお前がそんなこと知っているんだ？」

「だつて家から出てきた時明らかに反応が鈍かつた！ 半分くらい寝惚けてたろ！」

「ぐつ……だがだからと黙つて修繕などの仕事は助け合ひのが当然」

「そりだ！ でも起き抜けで二つも以上に抜けているシリンにせりせたら危険過ぎるから！」

「……顔洗つてきまや」

「うそ、行つてこー！ その間に頑張つて終わらせりまつからなつ」

ふん、と不機嫌そうに鼻を鳴らすと口ウチハンダに田配せず。速く行けりぜ、ヒ。ハンダはやれやれと肩をすくめるヒンクンの肩をぽんと叩いた。

「愛されてるな」

「……母さん以上に過保護だ」

「鈴蘭いなくても寂しくないな」

「あつたりまあだろ！ スズさんからシリンのヒト田をねてんだからよつ」

胸を張り、にかつ、と笑顔で言ひやると、シランは困ったような顔で小さくぼやいていた。

「俺がお前のヒトを頼まれていたはずなんだがな……」

それに今度は口ヒト田をずに答える。

シランがいるからオレは笑つてられるんだ。お前はちゃんと役田を果たせてるよ。

オレは隣に立つ、小さな狼のような少年の白い顔を覗き込むと彼の名前を呼び、今度こそ歩き出した。

「ロウ、行くぜ」

「うん」

002 狼と竜【真】（後書き）

よしやくロウとシランが出せたー！って言つてもシランはもう出てたんですけどね。まあそれは置いといて……なんかシラン、この回じゃただの駄目な人だ（――）作者的にはこの不機嫌面な青年好きなんんですけどね……。ロウ、ちょっと置いてかれ気味ですが……きっと活躍する、はず。一人だけカタカナで呼ばれたり漢字が……だつたりと忙しい人、半田さん。ちょいちょい出てくるはずなんで良かつたら覚えとしてやってください。

003 満息と尻尾【紫雲】（前書き）

今回はシラン視点になります。

三人の会話を楽しんでもらえたら、と思います。作者的にはシンの
お母さんつぱりが書いてて楽しいんで。あと口ウの抜けてる感じと
か、シラン視点だと書かれてないけど終始不機嫌そうなシランとか
etc etc……。

とにかく第三話、始まります。

あいつは馬鹿なよ'うで案外言つたことはやせん質だ。^{たち} もしあいつは俺が戻るまでに終わらしてやる、と宣言していた。だからあまり驚くことではないのかもしれない、が。

「……速いな、本当に」

「お、シラン戻つて来たか」

わざ今までの怒りはビリに行つたのか、あつけらかんとしたシンが惚けた顔で振り返つた。

辺りの家屋の修繕は終わつたよ'うで既に閑散としていた。シンと口ウは最後に残つた食べ残し、鹿の死骸の前にしゃがみこんで処理方法を考えていたようだ。

「もつちやんと起きたか?」

「流石に起きた。しつかり冷水で顔を洗つてきたからな」

「うんうん、なら良いや。シランつて本当に寝起き弱いよなー。普段だったら刀もなしにあんなところで棒立ちにはならねえだろ」

「……悪かったな」

確かに目が覚めた今となつては我ながら、何とも間の抜けた登場だつたと思う。読書中のうたた寝には注意しよう。にしても……警鐘でも起きなかつたとは、な。

我が家の方を見やれば、簡単に木で組まれた櫛^{くし}が見える。警鐘はその頂上に小ぢんまりと備えられていた。見た目は頼り無さげだが、地区内には不思議な程よく響くように出来ており、緊急時にはガンガン鳴らされる。

起きる、はずなんだ……あんなに近いのだから。いや、そうでな

くとも起いやれるはず……なのだがなあ。

「警鐘を恨んでもしようがないぜ。聞いたら、ロウが」の辺りに来るまでずーっとガンガンやってたらしこし」

「……そつか」

「氣を付けるよお？ オレがいない時こそ警戒してなきやこないんだ。なのにシランは熱中するものが多くて危なつかしいよ」

「流石に起きていれば氣付くだろ？」

「どーだかねえ。工房こもつたら簡単には出で来ねえじゃん」

「……氣を付けよつ」

「そーしてくれ」

なんだか先程からシンに説教されてばかりだな……。ふと視線を脇にやると、狼の毛皮を被つた少年と皿があった。

「なんだ？」

「いや、なんでもないが……ロウ、だつたか？」

「……ん？」

「いや、名前のことなんだが……」

さつきから彼自身も、シンもやうほんじいたから多分そういう名前なんだろうと思つていたが……違うのか？ といふ感ついていたが、今度はあつわひとつ頷いた。

「ロウはロウだぞ」

「や、そつか」

……ワンテンポ遅いと書つか、彼の中での名前の認識は一体どうなつてゐるのか不思議だ。名前を呼ばれることになれていなかりだらうか？

まあいい。この流れだ、簡単に自己紹介しておこうか。

「俺の名前は觀月紫蘭だ。シランでいい」

「シランか？ 綺麗な名前だなつ」

「そう、だな」

眩しい、と思わず思つてしまつほど、彼の黄色の瞳は本当にきらきらと輝くようだつた。まさに子供の瞳。その目は外見年齢よつづと幼く、純粋な印象を受ける。

子供は、苦手だ……。

そんなことを心中で呟いてると、シンが話題を戻した。

「とにかくこれ、片わないとな」

「まさか食べる気じゃないよな？」

「食べようかと思つたけど、さ」

「先に食べられた」

「……？」

「……」

二人の話がよく分からず、首を捻つてるとシンが手招きした。
見に来いといつことりじこ。とつあえず見てみる。

見なきや良かつた。

見た瞬間、軽く後悔した。苦手な人なら卒倒なのだ。鹿の死骸には虫が集つていた。百を超える数が鹿の体全体に蠢いていた。

先に食べられたと嘆くのはいいことない。つまり虫に先を越された、と。

「これは流石に食べるな」

「食べねえよ。よつぽど空腹な時以外」

「どんな空腹下でもこれは食うなよ……」

「まあとにかくこんなだから仕方ない。森に置いとこいへ。ここにいると何かと危険だからな。口ウ以外の侵入者まで呼ばれちゃ困る」

「ああ、そうだな」

「つてことで口ウ、頼んだ」

「わかった」

「つて、口ウに頼むのか？」

「おう」

そんなやり取りをしている間にも口ウは鹿を無造作に持ち上げると、肩に担ぐでも、かといって引き摺ることもせず、ただ風のよう驅けていった。……よく走る勢いだけで鹿を浮かせるものだ。腕力の助けもあるんだろうが。

でもよく考えると口ウと鹿。明らかに口ウの方が小さかつた。シン並みの怪力の持ち主らしい。

「……凄いな」

「だろ！ ほら言つたら、口ウは凄いんだって」

咳きにやたら力強い相槌が返ってきた。シンを見ると、口ウのことはに何故か自慢気にふんぞり返つていた。馬鹿だな。

「で、何を考えているんだ、シン？」

「んなつ。な、なんでそんなこと訊くんだよ」

「わざわざ口ウに頼んだのは何か理由があると考えた方が妥当だからな。お前はあまり人にものを頼まない。特に会つて間もない相手にはな」

シンは図星なよつで言葉に詰まり、困った視線を向けてきた。それに俺が困る。仕方ないのでため息混じりに言った。

「とつあえず言つてみろ」

やう言つてやつても、まだ迷つことがあるらしく暫く視線をさせていたが、ようやく口を開いた。

「口ウを昼食に呼びたいんだけど、いいか？」

「……好きにすればいい」

そんなことか、と思わずまたため息がもれた。シンは逆に一転して喜びを隠さない笑顔で礼を言つていた。

「別に料理を作るのはお前だし、お金だつて大半お前の報酬なんだから、俺に許可を取る必要はない」「でもシランの家だし、やっぱり確認しなきゃだろ。とにかくありがとつ」

本当に単純な奴だ、と浮かれるシンの顔を見て、少しだけ違う意味の息を吐いた。

「シラン、口ウと一緒に銭湯行つてきてよ」

「……昼食はどうした？」

軽快に昼食の準備にとりかかったかと思えば、あまりに唐突にそんなことを言い出したシンに、思わずそう問い合わせてしまつた。しかしシンは何でもないかのようにけろりとした顔で答える。

「飯の前に口ウを綺麗にしてやつた方がいいだろ? 風呂上がりの方が飯は旨いだろ?」

「ならお前が行けばいいだろ?」

「やだ」

「……」

「あ、冗談だつて。えーと。オレ料理担当だし、食べる専門の一人が行くべきだろ?」

「別に食前に風呂に入るなんて習慣はないぞ」

「でも口ウずっと風呂入つてないみたいだし、やっぱり家とかで食べる時は身も綺麗な方がいいと思うんだよ」

まあ、筋は通つてるか。一理あるな。

シンが言つ通り、口ウは本当に汚れている。まずすっぽり被つた毛皮からして清潔と程遠い代物だ。フードを外して現れた灰色の髪は、元々もあるだろ? がごわごわを通り越してガチガチ。極め付きに、彼の肌はやたら白いため泥や血の汚れが酷く目立つ。

それでも普通に家に上げて平気な顔をしていられるのは、子供っぽい無邪気さに何となく誤魔化されているのか。はたまた単に慣れているからなのか。

ふとシンを改めて見てみるが、特に目立つた汚れもなく、普通だった。怪我もないこともついでに確認する。

「ん? なんだ?」

「いや、何でもない」

長い沈黙と視線にシンが首を傾げたが、特に何も言わなかつた。別に何事もないのなら、取り立てて話題に上げるようなことでもない。

「銭湯、か
「連れてつてくれよ
「でも昼食はそれまで待つていいのか？」
「ふふーん。よくぞ聞いてくれたね」
「……」

地雷を踏んだ気がした。少し躊躇するが、話が進まないので促すように滲々口を開く。

「……なんだ？」
「今日の昼飯はカレー ライスなのだつ！」
「……で？」
「最近仕入れた情報によると、カレーは一度寝かしてからのが美味しいらしい！だから一度冷ましてまた温めてみようと思つ！」「それでいいのか？それに理由は？」
「知らん！」
「……どうか」「でも美味しいカレーは食べたいだろ？」
「まあ、そうだな」「つてことでその待機時間を有効に使つてくれ！」
「……つまり銭湯行けと」「そゆことだ」

……さて、どうするかな、と思い、試しにロウに問い合わせてみる。

「ロウは風呂に入りたいのか？」

逃げるつもりはないが、一応当事者の意見も聞くのが筋だと思ったからだ。

ロウは何故か楽しそうに俺とシンのやり取りを聴いているだけで

今まで参加していなかつたが、話を振るとそれととした顔で俺を見返してきた。

「ふうって、なんだ?」「……」

そこから説明が要るのか、これから苦労を想像せられ、少しばかり脱力させられる。とりあえずこの場はシンに任せようと思いつ、俺は沈黙を選んだ。案の定、直ぐにシンがロウに向葉を返す。

「風呂つてのは水がたくさんあつてな、怖いとこだ」「怖いのか?」「おこ」

なんて説明をしているんだこいつ、と思わず口を出しちゃった。シンは慌てて付け足す。

「そんでも体を綺麗にするといじだ。だからロウは行つた方がいいと思うよ」「ふう……お風呂か? ロウ入つたことあるわつ。ずっと前に。ロウ、思い出した」「そつかそつか。良かつた。んで、ロウは風呂入りたいか?」「ロウ入るー」「だつてよ」

言質はとつたとばかりに得意気な顔をするシンに、呆れ顔で俺は溜め息混じりに答える。

「……わかった。行くか」

そう言って銭湯に口ウを連れて行くことを「承ると、俺は立ち上がった。口ウにも声をかけ、たお出掛けよつと、口に向かうと、シンが勢いよく待つたをかけた。

「シリコンー、せめてタオルくらい用意しようつとシリカー、それに着替え！」

「……そうだな」

わすが自他共に認める母親役。そういうのひせしつかりしているな。何てことを考へて、この間にシンがバタバタとタオルやらを取り出し、押し付けてくる。

「口ウ、服の替えは持つてゐる？」

「ないぞ」

「じゃあ貸すよ。シリコンのお古で良いよな？」

「それは良いが……口ウが着られるような服なんて残つていたか？」

「あるに決まつてんだろ？ 捨てるなんて勿体無いじやん」

「ああ、母さんがいるようだ……。

どんどん母親のようになつていいくシンを見て、何故だか寂しいような物悲しい気分になるような複雑な気持ちを味わつて、一度は子供服が投げ付けられた。

……本当にあつたんだな。俺以上に家の中を把握してゐるんだな、シン。母さんに仕込まれたか。

「その毛皮洗つとくよ。いいか？」

「うん。お願いします」

「うわー、下の服もすげえな、こりゃ。……いや。銭湯行くにしてもどりあえず着替えよ」

「はーい」

「……俺は外で待ってる」

「ほいよ。でもシラン、逃げるなよー？」

「逃げるか。お前じやあるまいし」

そんなことを言いながら外に向かう。この狭い家に三人いる時点で多少の息苦しさがあるというのに、慌ただしく動く人がいたら非常に落ち着かない。だから逃げるよつて外に出ることを選んだのだ。

「……はあ」

よくわからない子供の面倒を押し付けられた、といった感じだな。

「……シンほど手がかからないことを、願う。本当に」

そう呟くと、また深々と溜め息を吐いた。

「……やつぱりお前、人間じゃないな

銭湯の脱衣所にて。俺は対応に困っていた。何故なら普通に考えればあるわけのないものを目にてしまつたからだ。

「ロウはロウだぞ？」

尻尾が、あった。

灰色の、髪によく似た、でも髪と違い柔らかそうな毛質のものだ。それが目の前で機嫌良さげにゆらゆらと揺れていた。明らかに直接尻に生えている。

しかしロウは能天気な顔でとぼけた返答をするだけだった。

「……犬」

「狼だぞ？」

「……そうか」

自己申告を素直に受け取れば、彼は狼なのだろう……いや、狼の尻尾を生やした人間、のはずだ。

「お前は一体何者なんだ？」

本当に、真剣に、真面目な問いただた。けれど予想通りと言つて、彼はこう答えた。

「口ウは口ウなんだぞ？」

そう言って無邪気に首を傾げる口ウ。この肩透かし具合に俺は何だか既視感を覚え、少し頭が痛くなつた。

004 願い事と優しい人【紫闇】（前書き）

シラソ視点だとつい一つ一つ詰め込みがちになるようですが……や、なんかいろいろ説明してたら一万字ほど行ってしまいました。後回しに出来る説明は削つてみましたが、今回は前回の一倍ほどです。ちよつと真面目パートだし、地の文が多めですが、一章と詰つか大きな一話がようやく終わる感じなんでお付き合いください！では引き続きシラソ君視点な第四話始まります。

追伸。

この前置きの文章が邪魔臭いと思う方は言つてください。その場合は短くするか、ぱっさり消します。

004 願い事と優しい人【紫闇】

「人間と変異種の間の子、といつやつか
「んー？」

能天気な顔を向けてくる口ウに、少し言葉に迷つたが、ここで止めるのも気分が悪いので独り言覚悟で続きを口にする。

「変異種の遺伝子を使って作られた、人工的な人間の変異種。そんな噂を、よく聞く」

今日の日本は生態系がものの見事に崩れ去っている。

ある時期、異常気象を耐えるために様々な生物の突然変異が大量に現れた。それが次第に落ち着き、定着したのが現在変異種と呼ばれる常識はずれな野生生物たち、なんだそうだ。

しかし俺達は普通の生物とやらをほとんど見たことはない。遠い過去のこととは書籍の中にしかない。百年以上も前の日本は、もう本でしか知り得ないのだ。

「お前は人間の変異種なのか？ 狼の遺伝子を持つた、人間なのか
？」

様々な生物が突然変異を繰り返し、今の姿を獲得したが、人間は特に例外だつた、というのはよく聞く話だ。……本の中で、だが。何故か人間は大きな進化も退化も、突然変異も何も起こらないらしい。理由はわからないが、人間だけは百年前も変わらない姿をしているそうだ。その事実は、人間にとつて何だか安心してしまう事実だと俺は思う。

しかし、そうは考えない人がいるらしい。そうした人々は無謀に

も、非情にも、生命の神秘といつものに手を入れ始めた。という噂、なのだが……。

「口ウは口ウで、狼……だと思つた?」

「……やっぱ、か」

心の中で密かにため息を吐いた。ここからは本当に、どうしてそういう自分のことに無関心というか無頓着なのが。何だからだでやつぱり似ている。シンと口ウは。

「まあ、お前が話す必要がないと思つなら、それでいい」

「……口ウ、覚えてない。いろいろ」

「記憶喪失なのか?」

「わかんない」

要領の得ない会話はそれが原因でもあるのか、と妙に納得する。口ウは気に入った風もなく、ぱちやぱちやと水面を軽く叩いて遊んでいた。

いい湯加減。今はのんびりと一人並んび、がらんとした広い湯船に浸かっていた。

風呂に入る前に発覚した口ウの尻尾。俺には判断しきれないとだったのでとりあえず受付のお婆さんに確認を取つたが。

「平氣よ。大丈夫だから入つてらつしゃい」

と普通に言われてしまつた。何でも常連客にも尻尾がある人がいるらしい。寛容な銭湯だと感心してしまつた。寛容なこの街らしい判断だとも思う。

なので結局普通に口ウは銭湯に入った。と言つてもあの汚れ具合。まず湯船には浸かれない。口ウはたどたどしい手付きながら自分で

身体中を洗い始めたが、あまりに終わりそうになかったので助けてやり、何とか許容範囲だと言える程度まで綺麗に出来たので、こうして一緒に温まっているのだった。

「平和、だな」

「そうだなー」

口ウは大人しくて助かる。昔初めてシンを銭湯に連れてきた時、あれは最悪だった。非常に苦労した。

「シンは水怖い？」

「らしいな。飲んだり触る程度なら気にならないよつだが、浸つたり浴びる程の量になると何故か怖いらしい」

「なんでだろ？」

「さあな。当人も理由はわからないと言つ」

「不思議だ」

「不思議だな」

でもその水嫌いのせいでシンはこの銭湯で大暴れしたのだ。

まず銭湯、風呂というものを理解していなかつたらしい。初めての風呂を見て、使用用途を告げると逃走した。無理矢理なだめて体を洗わせた、と言うか洗つてやつたが、今度は頭からお湯をかけるといつところでもまた暴れた。何人か犠牲者を出しながらも何とか泡を流してやり、そこで俺は放棄した。シンは必死な顔で逃げようとしたが、何故か悪乗りした男達がいて、そいつらが上手く言いくるめたようでシンは恐る恐るだが湯船に入り、一応肩まで浸かつた。良くもまあ犠牲者が屍のように散乱している中でそんな無謀なことを、と思つた。

だがまあそこまでは良かつたのだが、とうとう恐怖が許容範囲を越えたらしく、なんとシンがぼろぼろと泣き出してしまつたのだ。

すると男湯内はまた別の意味で大混乱に陥り、俺は溜め息と困り顔でシンを連れ出し、再度なだめるはめになつたのだった。

「シン大丈夫だつたか？」

「しばらく混乱氣味だつたが、まあ何とかなつたな。でもそのおかげで銭湯はトラウマの象徴だな」

「だからやだつて言ったか？」

「だろうな。まあ、湯船には漬からないが体を洗う程度ならたまに行つてはいるはずだ」

「怖いのに、すごいな」

「恐怖心と氣遣いの葛藤の末、だろうな」

シンの仕事と言えば専ら都市間の護衛だ。依頼は多いし、割と実入りのいい仕事だから腕に自信がある人は副業のようにやつている。本業と言つと恐らく、一年契約などを交わして長く護衛したり、旅して回つてはいる人を呼ぶのだと思つ。

半田さん経由で斡旋してもらつていたが、次第に指名で依頼が来るようになり、一部では結構有名人のようだ。……と、話が脱線したな。

そういうわけでシンは護衛の仕事をしている。そのため泥や血で汚れやすい。だからそういういつたものが酷い時は銭湯なり近くの川で洗つたりしている。慣れただろうがあの嫌がりようだとやっぱりまだ苦手だろうな、と思つ。

「案外匂いを気にするんだ、あいは。血の匂いを家に持ち込みたくないらしい」

気にしなくてもいいのに、と思つてしまつが、意地のよつなものがあるらしく、曲げる気はないよつだった。

「でも多分シン、鼻良いからやなんだよ。口ウもあんまり好きじやない」

「やうか……そだよな」

俺はあまり匂いは気にしない。でもシンや口ウは多分俺と比べられない程に鼻が利く。それは仕事をする上では有利だし便利だが、日常生活を送る上では、優秀過ぎる。だからあいつは様々な匂いが混在する街中は苦手だし、口ウも戸惑っていた。

一般人基準で出来るだけ考えてやりたいが、やはり、違うんだよな。シンは人間の枠には収まらない。可哀想と思つるのは筋違いかもしない、が。

「あいつの願い、俺には叶えてられそうにないな……」

「願い？ シンのか？」

「ああ」

「きいても、いいか？」

口ウは遠慮がちにと囁つか、無理に話をなくていいんだ、と言つよつに優しく確認した。シンなら絶対に無遠慮か、好奇心を隠しきれずに相手に苦笑されるのが常だが、口ウはその点、丁寧だった。やつぱり記憶がないだけどちらんと誰かに育てられていたんだろうという確信を持つ。

そして改めて幼い顔には少し違和感を覚える、誠実そうな顔を見返すと、小さく溜め息をついた。こういうのは苦手なんだ。

「人間に、なりたいんだ」

「……人間になりたい？」

俺がぼそつと言つた言葉を、口ウがあつむ返しに言つた。俺は何となく気が抜けて軽く頷くと、天井を仰いだ。

「そう。あいつはな、優しい人間になりたいらしい。だからかいつの間にか母さんから料理やら家事を習つて、ああしている」

「なんになりたい?」「

「……あいつは勘違いしてるんだ。あれで頑固だからな、ちっとも

考えを改めてくれない」

「何を勘違いしてるの?」

素朴な疑問、と言つた感じに口ウは無邪気にそう訊いてきた。出来ればはぐらかしたいところだった。俺は何とも苦い顔をした。最後の抵抗に口ウの顔をちらりと見たが、あまりに純粋な子供の顔に、結局逃げられず、溜め息混じりに答える。

「……あいつは、俺を……優しいと思つてるんだ……優しい、人間だと」

「シラソは優しいぞ?」

迷うことなく返ってきた言葉に、思わずげつそりとした顔になる。

「冗談を言つた。優しいといつ意味すらわかつていないやつが優しいわけがない」

「でもシラソ優しいつ」

「ど二がだ……」「

「洗うの手伝ってくれた!」

「昼食が遅くなりそうだったからだ」

「でもシラソ優しいよ?」「

「……」「

「だつてシン優しいの、シラソ優しいからだぞ?」

「……なんでそうなる」

「そんな感じした!」「

「……はあ……大体気紛れに手当してやつただけなんだ。なのに家にまで来て……俺と居たつて何も変わらない」

あいつに必要なのは本当に優しくやつだ。母さんとか、半田さんとか、それに口ウだつてそつだ。なのになんで俺を選ぶのか……。そんな思考は次の言葉で遮られた。

「じゃあなんドシクン、シンとこねへ。シクンはこやつて叫んだ」「……」

真っ直ぐ過ぎて、少し痛い言葉だった。なんせ俺には答える言葉がないのだから。だから苦し紛れのよひに、言ひ訳のよひに呟いた。

「……感謝の言葉も知らない馬鹿を、放置できるか」

何となく氣まずくて、俺は天井を睨むよひに見詰めた。誰かの描いた青空が、俺を見返していた。

「おひ、おかえり～」
「……只今帰つた」
「ただいまつ」

狭い家の中を器用に駆けると口ウはシンに飛び付いた。

「おーおー、わいぱりしてきたか。見違えたな、口ウ」「お風呂おひきかつたぞ！ 錢湯すごいな、はじめて！」
「そつか～、銭湯は初めてだったんだな。なあ、天井見たか？」

「んー？」

「あそこ空の絵が天井に描いてあんだ、しかも青いのが！」

「口ウ見なかつた……」

「あー、出掛けに言えれば良かつたな。悪い、さつも思い出したんだ」「……俺としてはお前が気付いていたことが意外なんだが」

初めての銭湯の取り乱し様からして、銭湯では冷静を保てないだろつと思っていた。斯く言う俺も今田初めて気が付いた口だ。

「いやや、水見ると落ち着かないなら上見てれば、って言われて見たら青空の絵があつて、軽く感動して……やっぱり青つていー色だよなー。空は青だろ。なんで晴れねえんだー！」

「……」

ほとんど説明になつてない、と言づか最後なんて文句になつているシンを見て、会話にならんな、と諦めた。コートを脱ぐととりあえず椅子にかけ、口ウもシンから引き剥がすと上着を脱がせ席に着かせた。俺も席に着く。

何だかんだで手際の良いシンは、数分で仕上げを済ませると料理を並べ出し、昼食の準備は終わつた。上機嫌なシンが首頭をとる。

「んじや、命に感謝して、いただきますつー。」

「戴きます」

「いただきまます」

皆一斉にスプーンを持つとカレーを取り掛かつた。しばらく黙々と食事をしていたが、皿を半分ほど空けた頃に俺は顔を上げると、訊きたかったことをよつやく口にした。

「シン、なんで口ウの尻尾のことと言わなかつた？」

「これは尻尾の衝撃から落ち着いてまず思い浮かんだことだ。ロウを着替えさせたシンなら見ているはずなのだ。では何故何も言わなかつた？」

「え？　尻尾つてダメなの？」

「……？」

逆に首を傾げてしまつた。シンが慌てたように言葉を繋げる。

「だつて尻尾あるからつて何も問題ないじゃん。それにロウ、一応隠してたし、大丈夫だろつて思つて」

「風呂に入る時には見えるだろう？」

「でも前に尻尾ある人入つてたし」

「……」

もしさ普通なのか？　尻尾があるなんて常識なのか？　……つていやそれはないか。流石にシンも尻尾はない。しかしまあ……。

「今更、か」

そもそもこの街にはシンやロウのような人、と言つか人種は他にも何例かあるようで、シンの受け入れも案外簡単に通つたことを覚えている。その中に尻尾のある人だつているだろう。そういう街だつた。

「わかつた。そうだな。いけないことではない。……ただ、驚くから先に言つて欲しかつた、な」

「あ、悪い」

「いや……すまん、今のは意地が悪かつた。気にしないでくれ」

「……シン、ほんとめんど臭いよな、たまに」

「……悪かつたな」

「別にいい。慣れてるからな」

シンは仕返しどばかりに意地悪な顔をしてみせると、けらけらと笑つた。俺は苦笑するとカレーを口に運んだ。そんなやり取りをぼんやりと見ていたロウが、「飯を飲み込むと口を開いた。

「シンはいつからシランっこ来た?」

「んん? オレがいつからここに住んでるかってこと? エーと…」

「……四年、ほど前からじゃないか?」

「おーそつか、四年かあ」

シンは自分のことなのに俺の言葉で納得顔。まあここに来るまでは年を数える習慣を知らなかつたようだし、最初の頃は数字を知らなかつたのだから無理もないか。ロウは何故か嬉しそうに頷いていた。

「長いなつ。仲良しだなつ」

「だろー」

「……」

男一人にその言い方は、言葉は……逆に少し不気味な感じがするな。と顔をしかめそうになる。いや、もうなつてているかもしねいな。

そんなことを心中でぼやきながら、ロウを見た。

「ずっと一人?」

「つづん。前まではスズさんもいて三人暮らしだったよ」

「一年前だつたか。因みにそのズズさんと言つるのは俺の母親だ。観

月鈴蘭」

「優しい人でな、綺麗な人なんだ。今はシランの父ちゃんとこだけどな。シランも二十歳になつたし、オレもいるから大丈夫だろうつて、そつち行つたんだ」

俺の父親も鍛冶師だ。正しくは父親が鍛冶師で、俺も鍛冶師になつたというところだが。偏屈で人が苦手な父は、数年前に人里離れた辺境で新しく工房を構えた。なので残つた工房を俺が貰い、一人で仕事をするようになり、母は心配だからと一緒に残つていたが、シンが来てそれもなくなつたようで、二人目の心配な人、つまり父の世話をすることに決めたらしい。

「だから今は一人暮らしだな」

「……」

「ロウ?」

シンが気遣うような声で名前を呼んだので俺もロウの顔を覗き込んでみる。視線は上方を向いて、顔は呆けたようだつた。しかし直ぐに一、三度瞬きをすると何でもないように首を傾げた。

「なんだ?」

「……大丈夫なら、いいけど」

「ロウは、両親は覚えてないのか?」

何となく予感があつた。ロウの記憶の穴は、これだという勘が。そしてそれは当たりだつた。

ロウは目を見開くと、直ぐに固く閉じた。耳をふさぎ、膝に顔を埋めると、椅子の上で小さく丸まつてしまつた。

俺とシンは驚いて思わず顔を見合せた。

「……口ウ？」

「うー」

「口ウ、どうしたんだよ。何か悪いことしたか？ オレ駄目だったか？」

「……」

シンがいくら優しく話し掛けても口ウは顔を上げなかつた。たまに唸り声を発するだけだ。居たたまれない気持ちになつて、俺は立ち上がつた。

「……口ウ、俺が悪かつた。親のこと、不用意に訊いていいことじやなかつたな」

「……」

「もう言わない。許してくれとは言わないが……まだご飯残つているんだ、顔を上げてくれ」

「……うー」

「……」

困つた。しかし俺の心ない言葉が原因だ。なら、仕方ない。

「わかつた。俺は外にいるからな。シンなら大丈夫だろ？」「おーシラン……」

シンが不安そうな顔で引き留めてきたが、俺はそれを無視して裏戸から出ようと歩き出し、口ウの隣を通りうとした時だ。

ぐい、と。

弱いけれど、小さくだけれど、服の裾を摘まれ、俺は驚いた顔

で振り返った。

「シハーン、居なきやだめ……シン悲しい。ロウも、悲しい」

黄玉の瞳が、泣きたそうに潤みながらも、真っ直ぐに俺を見ていた。俺は苦笑も出来ず、間抜けな顔でそれを見返す。

「……いい、のか？」

「……ごめんなさい」

よくわからないけど……許してもらえたらしい。だから俺は小さく、『悪いながらも感謝の言葉を告げた。

温つぽくなつたが再び三人席に着き、昼食を再開する。未だに口ウはべすぐす言つていたが、一応は平和な昼時が戻ってきたようだつた。

「あー……」

「……なんだ？」

何か言いたげな、けれど言こにくこ中途半端なシンを、少し呆れながらも促した。シンはちりちりとロウを伺いながらも俺に向き直り、口火を切つた。

「あのひ、その……」

「はつきりしろ」

「……頼みがある、んだけビ」

その言葉に、ん、となつた。似たようなやり取りが既にあつたな、と思つた。あの時の願いは昼食に招待する、だつた。……。

「言つてみる」

そう言いながらも、何となく予想は出来ていた。しかしそんな様子には全く気付いていないシンは必死な顔で、願いを言つた。

「口ウも一緒に、住んじやダメかな……？」

「この狭い家で三人生活する氣か？」

「でもスズさん居た時も三人だつたし、いけるだろ？ なあダメかなあシラン……」

「わかった」

「やっぱり普通の人じゃないの一人も抱えるの大変だもんな。シランにこれ以上迷惑かけるなんて図々しかったよな。ごめんよシラン、でも」

「……お前、話聞いてたか？」

「……へ？」

間抜け顔のシンに思わずため息を吐きながらもつ一度言つてやる。

「わかった、と言つた」

「えと……何が？」

「だから口ウがこの家に住むことを了承すると言つてこる」

「ほ、ほんとか？ シラン嘘吐かない？」

……そんなに信用ないのか。今度は自分に対してのため息を深々と吐いていると、ようやく理解してくれたシンが飛び跳ねた。

「やつた、やつたぞ口ウー 住んでいいってー 嘘吐かないってー」「え……」

口ウも信じられないといつよつな顔で俺を見ていた。……本当に信用ないのか、俺。と軽く落ち込みながらシンに文句を囁く。

「最初からそり言えばこいだらう。こんな回りくどいことをせんでも……」

「うえー、き、気付いてたの？」

「流石にわかるだらう」

一度田のお願いの時、じこつは迷った。多分シンの中では口ウを住むことを俺に了承させるための計画があったのだろう。でも最初のといいで悩んだ。普通に頼んでみても良いんじゃないかという気持ちになつたから。でも結局はやめて計画通りにした。

「なんで遠回りな方を選んだ？ 断られてからやつても良かつただうつ。口ウを知つてもらつて納得させようと計画は」

「ひつ。全部ばれてるじやん……」

「ほり、吐け」

「これがあまりに信用がないため、直ぐには了承してくれないだろうと思つたから、と言われたらもう今口はふて寝だ、とか思ついた。しかしそうはならなかつた。

「シランなら多分何だかんだで良いくて言ってくれると思つたけど……せっぱりシランに決めて欲しかつたから。シランがすちゃんと断るなら断るで理由が言えるよつこ、したかつたから……」

「……はあ

贅沢かもしれないが、信用されすぎも俺こは荷が重いことだがな

。

「俺だつてお前を信用してゐる。お前がちゃんとした理由を聞いて、ちゃんと納得出来るものなら反対はしない」

それに、と続ける。

「俺の一存でこの特区に住めるようになるわけじゃない。半田さんに許可取つて、住民登録の必要もある。それにロウにも働いてもらう」

「ロウは強いから働くよな?」

「ロウ、がんばる……」

ロウは少し赤くなつた目で、力強く俺を見返した。まあ大丈夫だろと思つ。ロウは素直で誠実な子のようだから。

「でもシラソ。なんであんなこあつさつ良いつて言つたんだ?」

「……」

やつぱり素朴な疑問。俺は少し困つて、目線を泳がした。たまたま目が合つたのは、涙に濡れた、でも何だか嬉しげに笑つた黄色の瞳。それが何だか重なるんだ。

森の奥。暗がりに心細そうにこちらを見上げている、切なくなる程のひとりぼっちな目が。大きな体をしていても小さな子供のような少年の、寂しげに光る紅が。

「……ほつとけないから」

「ん?」

「いろいろと、事情がありそつだからな……。そつとお前の理由は?」

そう問い合わせるとシンは何だか満足そうな顔で答えた。

「シリヤンと同じだ。ロウは何かたくさん忘れてるみたいだけど、思い出すにはいろんなことして、たくさんきつかけを作ればいいと思うんだよ。でも森にいても何もないから……」

「……」

酷く説得力のある言葉。でも釣られて俺まで切なくなる。シンはうつ向かせた視線を直ぐに上げると意氣揚々と言つた。

「だから……ここで一緒に住めば何か思い出すと思う。それに一人は寂しいかな、うん、オレもほっとけなかつたんだ」

「……ありがとお」

ロウは泣きそうな顔で笑つていた。

もし俺が拒否したら、ロウはまた一人になる。一人で生きられるのと、一人でいられるのは違う。拠り所のないやつを一人にはしたくない。思い上がりも甚だしい、と言われるかもしれない。でも多分そうなんだ。俺はこいつらを……助けたい。

「……共同生活の基本は、助け合いだからな」

何故か一人はその言葉を真面目な顔で受け止めていた。そしてシンはうつと笑うと、やっぱり満足そうに言つた。

「やつぱりシリヤンは優しいな！」

「……どうしてその結論になるのか

「シリヤン優しいつ。ありがと！」

「……」

俺は大きくため息を着くと、ほんの少しだけ愉快そうに苦笑いを

し
た。

005 ようこそ第八特区へ【真】（前書き）

サブタイトルがなんか変？ 気にしちゃ駄目です、まだマシなタイトルだな程度に思つてください……はい。なんで特区？ という疑問はそういうものなんだと納得してください……説明は放棄しました、すいません！ かなりぐだぐだ感満載ですがよろしくお願ひします。

では一章の延長戦的な第五話、シン視点ではじまります！

005 むうじや第八特区へ【真】

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます！」

ロウの嬉しそうな声にオレも何だか嬉しくなつてくれる。

「良かつたな、ロウ」

「うん。ようやくロウもここの人つ」

「だな～」

「ローローと顔を見合わせるオレ達。そんなオレ達を少し柔らかい表情で見ているシラン。

「免許証と登録証は身分証明に便利なんで大事にしてくださいね。再発行にはお金が少しかかってしまうので」

「こやかな受付の人が言った。ロウとシランが真剣に頷くことで応える。結構この二人似ていたりする。特に真面目なところが。

ここは中央区。シランが言うにはお役所の集合地、だそうだ。名前の通り、この街、第八特区の中心部だ。そこに立ち並ぶ建物の中の一つ、住民生活管理局。そこで、この特区で暮らすための細々とした手続きをしていったのだ。

にしても。

「簡単だつたなー。ほんとあつさり。1日で終わつちました」

「今回は半田さんと稻城さん^{いなぎ}さんが骨を折つてくれたからな」

「骨折れたのか！？」

「……苦心してくれたで伝わるか？」

「ああ、なるほど」

確かにそうだった。オレの時もハンドが多少何かしてくれたけど、今回は守衛長まで頑張ってくれたらしいし。

「ほんとイナギさんは良い人だよなー」

「半田さんにも感謝しろ。あの人はお前の時も今回も口添えしてくれたんだぞ」

「わかつてゐつて」

ハンドはそつは見えないが実はちょっと偉い人。オレらの住む第六守衛地区の地区長だ。でもイナギさんの方がもっと凄い、守衛区全体の頭だ。だから守衛長。

この第八特区は特殊な街なため、ほぼ円形になつてゐる。その中心がさつきいた中央区。そしてそれを囲うように商業区、居住区、農業区があり、高い防壁の外側に守衛区がある。そして各区の中でも地区とこう区分けがされている。第六守衛地区とはつまり守衛区の六個目の地区ということだ。

「まあ稻城さんの口添えが大きかつたことは確かだな。あの人は街の防衛の最高責任者だ。あの人が必要な人材だと言つたら誰も断れんだろう」「だよなー、やっぱすげえよ

「イナギさん、つて誰だ?」

口ウがきょとんとした顔で首を傾げたのでオレが説明をかつて出る。

「壁の外で一番偉い人だ。口ウは会つてないけど……まあそのうち来るよ。そん時はちゃんと紹介してやるよ」

「……忙しい人だぞ？」

「でも推薦してくれたんだし、流石に会いに来るんじゃねえか？」

「……まあ、お前にしては納得出来る答えだな」

「なんだよその言い方は！ オレだってちやんと考えてんだぞ？」

シラウンの馬鹿にした感心の言葉にむかーと言い返す。でも意外と言えば意外。イナギさんなり口ウに会つてから推薦すると思つたけど、本当に来ないからなあ。

「イナギさん忙しいんかなー」

「口ウ会つてみたいぞ」

「会わせてやりたいよ」

ハンドは大体家に居んのにな。イナギさんは家にすら滅多にいな
いんだぜ？

そんなことを考えながらも足は中央区を抜け、第一商業地区に入つていた。中央区とはまた違つた活氣がオレらを呑み込む。ここはちょっと苦手だ。いろんな匂いやら音が混ざつて襲い掛かつてくるみたいだからだ。空気に酔いそうになる。

だから自然と足は早くなつていた。隣を歩く口ウも、わざわざまでの元気がしほんでいく。やつぱり口ウも苦手らしく。

「……なあシラウンー」

「好きにしろ。オレも好きにする」

「……」

「なんだ？」

「やあ……ふて腐れてる？」

「なんでそつなる」

「そんな感じだからだよ」

「……気にするな」

ふむ。腕を組んで考え込んでみる。……つん、面倒だ。結論は出てるし。

「はい」

「……なんだこの手は」

「ひょいと帰りたいだろ?」

「……別に多少は慣れている。図書館にも良く行くからな。俺は普通に帰れる」

「でも一緒にいんだし、一緒にいーじゃん?」

「……俺は一般人だ」

「んで非常識一家の家長なんだろ?」

「お前が言つか?」

「言つセー。な、口ウ?」

「なんだ?」

無責任に話を振つてみたら普通に聞き返されてしまった。まあいや。

「ズバツと帰ろうぜ、ズバーと」

「ズバカ? いいな、口ウそれがいい!」

「口ウ、わかつて答えてるか?」

「まあまあ、些細な」とは気にしない気にしない

何かもつ良いや。口ウも良いつて言つてるし、人ごみ歩いてるのも面倒だし、それに。

「おい、や、やめ

「しーらねつ、とあー。」

無理矢理シランの腕を掴むとひょい、と持ち上げた。腕だけじゃない。シランの体『じだ』。あたふたするシランは無視でそれを抱えると、ロウに田配せする。

「んじゃあ、行きますかー」「ズバ、だな！」

「にっこにこなー人と。田を田黒させて抱えられた人。あー、なんつうかな……。」

「「どうり」「放せーー！」

たのしーんだ、なんか。それに、何よりシランの反応が面白い。オレとロウは息もぴったりに飛び上ると、手近な建物の屋根に飛び乗った。

「よーし、ズバッと帰るぜ」「ズバッと帰るー」「馬鹿か！」

最後の一名は無視。オレは北を、第六守衛地区の方向を、オレ達の家を見据えると、にかつと笑った。

「家まで競争！」「口ウ負けない！」「俺を抱えたシンの方が不利な勝負をするなー！」

うん。いいかんじに混乱して突っ込みどころが可笑しなシランが楽しい。だからオレは無駄に自信満々に言つてやる。

「なに言つてんだ。シラン程度重荷になるわけない！ オレの勝ちに決まつてんだろ」

「いやお前、本氣か？ 本氣で本氣出す気」

「ふふん。オレが負けに甘んじるような大人だとでも思つたかシラソ？」

「そこは自慢するところではない！」

「スタート！」

「話を聞けええええええ」

オレの掛け声と共に勝負の火蓋は切られた。一人の元野生児の瞳に手加減の文字はない。

と言つても、空を飛べるわけでもないので勝負内容は地味だ。屋根から屋根へ飛び移り、家を目指すのみ。まあでも他の人がやつてることには見たことないし、多分変なことなんだと思う。シランも反対したし。

でもさ。人ごみ苦手なの我慢してもしょうがないし、別に悪いことじゃないよな？

まあ、多分飛び移る時の浮遊感が慣れないから怖いんだろうけどな、シランは。でも落とすわけないし、慣れれば楽しいし。つてことでオレは全力で跳んでいた。

シランの怒声というか悲鳴は長く尾を引いていた。

「はつはー、オレの勝ちー」

「うー、シンの方が不利なはずなのにー」

「何を言つか。シランを持つてこそオレの真価は發揮されるのだー」「ずるいぞシンー！」

とか言つやり取りをしながら家に入つていぐ。ぐつたりしたシラ
ンは丁寧に椅子に座らせた。

「酔つた?」

「……大丈夫だ」

「水飲む?」

「……いやいい」

「そか」

やりすぎたかな、と内心反省。楽しげに、シランも人ごみ苦手
だからやつたけど、逆効果だつたかなと肩を落とす。まあ夕飯の準備
でもするかなと歩き出すと、いきなりシランがむくつと起き上が
つた。思わずびくつとする。

「シン」

「な、なんだ?」

「……感謝しどちらにが……でも感謝する」

「へ?」

「街中歩くよりは……随分マシだった」

それは。それはさつきのこととか? 感謝、されてるつてことは、
良かつたのか? なら、なら……。

「良かつたあ~」

「……泣くなよ」

「泣かねえよ、こんくら~でー。でも良かつたあ。シランが嫌なこ
としちゃつたかもつて思つて……良かつたあ」

そんなこと言いながらも実はちょっと泣きそうだった。だってシ
ランに悪いことするなんて、嫌だ。さつきは調子に乗りすぎたとか

なり後悔しそうだった。

心底安堵した。

だから泣き笑いみたいな顔になる。自然に泣いちゃうし、笑っちゃうんだから仕方ない。

「シン大丈夫か？」

「うん、大丈夫大丈夫。夕飯作るからな」

「口ウ手伝うぞ」

月のような瞳がきらきらと向けられていた。けど少し考えてから言つ。

「今日はいいよ。口ウも面接とかで疲れたろ？」

「口ウ元気だぞ」

「いいの。それより明日のオレの仕事一緒に行こうぜ。口ウも慣れなきやな。何かしら仕事しないと」

「そうだなっ。じゃあそつする！」

「……口ウ、もう少し落ち着いてからでもいいと思つが？」

シランの言葉だ。それにちょっと拗ねた気分になる。

「なんだよー。オレン時は直ぐに仕事だつたじゅんかよ」

「お前はもう大人と変わらない歳みたいだつたからな。でも口ウは子供だ」

「口ウ出来るぞ？」

「そうだ、口ウは強いんだ！ 即戦力というのはまさに口ウのことなんだぞ！」

「……好きにしろ」

なんだか急に面倒臭くなつたような顔になると、シランはまた机

にうつ伏せになつた。その様子にちょっと心配がむくむくと沸き上
がつて来そうだつたが、シランが気にするなと言ひよつて手を上げ
たのでそれも治まつた。

夕飯の準備、だな。

「さて、今日は何が出来るかなー」

「……せめて何を作るかな、にしてくれ

オレはそんな突つ込みに笑顔で答えた。

「ムリー！」

006 吹雪と睡魔【狼】（前書き）

初の口ウ視点です。主に口ウが頑張る話です。つか口ウだけ頑張つてます。そしてさうひとシンの能力的なものをシランが言つてる、けど、まあ現時点ではあまり気にしなくていいところですねー。まあそんな口ウ君の頑張る六話目をどうぞ。

「シン大丈夫かあ?
「…………あ…………ん」

全然大丈夫そりゃなかつた。今にも倒れそりゃ危なつかしいシンに不安になる。それにしても…………。

「まつしろ」「う…………な」

どつもシンは「そりゃだな」と相槌を打つて、と言づか打ちたいようだ。しかし言葉になつていない。それ程までに眠いらしい。これは、重症だ。

「シン戻ろ」「…………こ」とお、…………なきや」

ほどんじ言葉にならない言葉。でも不思議と何となく伝わっていく。いやだ、仕事やんなきや。多分そんな意味だ。口ウはため息を吐いた。白く、吐く息すらも一瞬で凍り付いてしまいそうなくらい。いや凍る間なんてない程強く吹き付ける風があるから「ぐら寒くてもそれは無理か。

「ふふわ」

見事に吹雪いでいた。視界はぼぼゼロ。寒さは無視出来ても、視界がないこの状況は無視出来ない。見えないんだけど。

「……シン」

シンは今にもこの凍える風に吹き飛ぶか、生きた雪だるまになりそうな様子だ。動きが緩慢で、シンらしさが微塵もない。防寒具でぶつくりと太ったシンは、それでも寒さに背中を丸め、凍えていた。

「だから口吻すべりで言つたのに……」

話は少しばかり遡る。それは今朝のことだ。

「冬眠か、シン」

「…………ん、あ？」

かなりの間があつてようやく微かに反応があつた。シンはとろんとした目をしばたかせ、ゆっくりとシリコンを向き、しばりばりんやりと見てから言った。

「……呼ん、だか？」

「タイムラグがあるな

「ん……ああ」

「起きてこるか？」

「…………ん…………お、てる」

「……」

びっくりした。正直驚いた。シンが恐ひしく反応が悪い。と言つより、全く起きてない。一応意識はある、と何とか表現出来るレベルだ。一体どういうことかと、疑問をシリコンに視線という形で問い合わせる。案の定、シリコンは直ぐに気付き、溜め息混じりに教えてくれた。

「変温動物、に近いいらしげ」

「へんおん動物？」

「自立した体温調節ではなく、外部の温度変化により体温を調節する動物だ。トカゲやカメが当たるな」

「……シンは、何？」

「ドライゴン。……多分爬虫類に入るのだろうな。外見的にも、恐ら

く

「シン、ドライゴン？」

「まあ自称、だがな」

シランは不機嫌そうに顔をしかめた。わからないことがあるのがもどかしい、といったところだろうか。いつも不機嫌をより深めたような顔をして眉間に皺を寄せていた。

「しかし実際、皮膚に鱗を出したり、火を吹く」とを鑑みるに……まあ普通の人間ではないことは確かだな

「火い吹くのかシン！」

「ああ。今度見せてもらえ」

「うん！」

凄いなシン、とか思つてこるとシランが深々と溜め息を吐いた。

「一番妥当なのが何か爬虫類の変異種の遺伝子を持った人間なのだろうが、火を吹くとなるとわからんなあ……」

どうもそれはシランの悩みの種のようではしゃべり方にそんなことを呟いていた。

「なあシラン。変温動物だとどうなる？」

「……ああ続きか。変温だと環境の変化に弱いいらしげんだ。自分で

体温が調節出来ないから、体を動かすエネルギーを確保出来なくなる

「暖かくないと動けないのか？」

「まあそういうことだ」

「ドラゴンなシンは寒いと動けないのかあ」

「まあ人間部分もあるから全くではないが……かなり機能停止に近いな」

「ふうん」

話を聞いて改めてシンを見る。話の途中で力尽きたようで、机に思いつきり顔をぶつけて眠つていた。腕を触つてみる。人にしてはひやっとした感触だつた。

「大丈夫かシン」

「駄目だろうな」

「……」

返事はやつぱりなかつた。そんなことをしている間にシンの仕事の時間が来てしまつた。仕方ないからロウが行く、と出ようとしたら死靈のようなシンに足を掴まれ、結局半分寝ながらも意固地になつたシンが無理矢理ついてきて。

「…………つ、あ」

シンは小さな小石に器用に躡つまむくと、顔からもろに雪に突つ込んだ。

田も当たらぬいような状態になつていた。

「……」

「シン、大丈夫かあ？」

「……ああ……うん」

シンの首根っこ」と言つた防寒具をむんずと掴み、シンを救出してそう尋ねると、多少ましな返事がよつやく返つてきた。しかしどうしたらしいんだろ、という感じだ。

とりあえず面倒になつてきただので掴み上げたシンを持ったまま口ウは歩いた。遅れ氣味だつた荷馬車に追い付くと、ふにゃふにゃなシンを荷台に放り、ロウは御者台に顔を出す。

「馬大丈夫かあ？」

「なんとか、ね。シン君は？」

「多分だめだ」

「あはは、そつか」

苦笑いをして答えるのは今回の依頼人さん、ハギノさん。シランと同じくらいいの年格好の優しそうな男の人だ。切れ長の目を和ませて、吹雪の中とは思えない程安穩とした調子で話す。

「ロウ君が来てくれて良かつたよ。ロウ君は寒さに強いのかい？」

「うん。ロウ寒いの得意だぞ」

「うんうん、頼もしいね。あと少しだからお願ひね」

「うんっ」

力強く頷くと御者台から今度は屋根の上に飛び移つた。見晴らしは全く良くないが、多少はわかりやすくなる。痛いくらいに吹き付ける風とか雪の塊に負けず、毛皮のフードの中で耳をそばだて、鼻を利かす。何となく、何となくだけど予感がする。来るのか、来ないのか。

じつ、と氷の彫像のように静止して集中していると、耳が何かを

捉えた。田を見開き、辺りをよく田を凝らして警戒する。すると視界の隅に動くものを見つけた。直ぐに屋根から降りるとハギノさんの隣に立つた。

「来たぞ。走って」

「ロウ君、流石にこの天候でこれ以上のスピードは無理なんだ」

困った顔でそう返されてしまった。そつか……ならわかった。ロウは御者台から小窓をするりと抜けて荷台に行くと、死んだようにじぐたーとなつたシンの肩を掴んだ。

「シン起きるーーー。」

「ぐいぐこと肩から体」と容赦なしに揺らす。しかしふんは起きない。むうつ、と膨れつ面になつたロウ。もう本気なんだぞ、とばかりに今度は頬をバチンバチンと叩き始めた。

「シンーーー！」

「……………って、えよ」

弱々しくも何とか開いたシンの目はかなり涙ぐんでいた。

「ロウ、痛い……」

「シン馬車守る、ロウ行くつー！」

「守る、だな？ わかつた、わかつたから痛い……」

シンは腫れ上がつた頬を泣きながらさすつていた。流石にやりすぎたので手短にでも謝ると、ロウは再び屋根の上によじ登つた。いた。

それは綿のような毛玉のような白い田だ。こや白い田のよつな生

物だ。雪に紛れたそれが吹雪の中、ポンポン跳ねていた。たくさん。

「……」

初めて見た。なんだろあれ？

でもあんまり大丈夫ではなさそうだった。跳ねてるだけなら平和
そうだけど……多分それだけじゃ終わらない。

だから口ウはフードをぐいっと深く被ると前屈みになり、爪を構
えた。

一つ、他より強く弾んでいたやつが一番乗りを決めたらしい。一
瞬動きが止まつたかと思うと、縮こまり、一気に伸び上がった。狙
いは馬。白い玉はがばつと中身を見せるように開くと、上から馬田
掛けて落ちていいく。それを。

べしつ。

と叩き落とした。白い玉もどきは思いつきり地面、ヒョウとか雪、
に叩きつけられたが、特にダメージはなかつたようでも跳ねた。
でも警戒はしたようだ。

だからか今度は本気だった。待っていましたとばかり待機組が一
斉に飛び掛かつて来たのだ。

口ウを狙つて。

赤い赤いおつきな口を広げて。

「うああああー！」

はつきり言つて。

悪夢だった。ホラーだった。

白い玉の中は口だつたんだ。口しかないのかつて言つほど歯がび
つしりと並んだ真っ赤な口腔を見せ付けるように跳ねてきたのだ。
団体さんで！

口ウはかなり必死だった。いくら野生児と呼ばれるような生活し

いても、こんなのに狙われたことも襲つたこともない。本気で恐怖を感じながらも口ウは必死に対応する。

まずとりあえず逃げた。避けた。まあなんの正面から受けられないで避けた。幸い口ウ曰掛けてやつてきたので馬には届かなかつたから。

そして落ちたやつらに狙いを定める。白い玉もどき。大きさは口ウの両の掌をいっぱいに広げたくらいの幅で、丸い。頭くらいなら丸呑みされそうだ。だから狙いやすこと言えればそう。なので雪玉の山のようになつたそれを、思いつきり。

殴つた。

だつて一つ一つ切りつけるにしたつて、数が多くなる。だから滅多に使わないようなことだけど、殴つた。爪は収納してから。

ブギイ！

変な悲鳴のような鳴き声がした。でもとりあえず。殴る。渾身の力で殴る。殺さなくていい。ただしばらくなつてこないよう。あとは時間稼ぎ。

馬車は上手く口ウと白玉を避けてもう走り過ぎてこる。シンに頼んだから大丈夫。多分、大丈夫。……大丈夫だよな？
とにかく口ウは出来るだけ多くを引き付けて、適当に弱らせて逃げ切れば良い。

脇から最初にあしらつたのとか、殴打から逃れたやつが再度襲い掛かってきたけど。

「口ウは負けないぞっ」

また爪を出すと、狼の瞳で笑つた。

何とか白い玉』一行を追い払つたので、大急ぎで馬車を追い掛け

ていた。でも多分そこまで先には行つていないとと思つ。この吹雪だし、護衛がシンだけでは今日は不安だろうから、多分待つてる。だから急いで走つてゐるのだ。が。

「やな感じ」

もしかしたら別の獣に襲われるかも、と思つた。
案の定。

「ロウ君、シン君が……」

熊がいた。多分熊。や、牛？……わからない。

はつきり言つてよくわからない生物がいた。でも多分、熊。全身に皮膚が弾けるんじゃないかってくらいに肉を詰めた、筋骨隆々な、熊だ。それとシンが戦つていた。眠氣でふらふらなまま。

急いで間に割り込むとシンを抱えてそのまま通り過ぎた。

「シン大丈夫か？」

「……まあ、何とかあ、あ

「……」

やつぱり駄目かもしれない。

とりあえずシンは離脱させることにして馬車付近にほっぼると、ロウは一本足で堂々と立つ熊に向かい合つた。

ロウの獲物は大体こんなのだ。あんまり小さいと面倒で手間なので、大抵大物を一頭狩つたらそれを腹に詰め込んで数日もたせる。だからこりこりある程度大きなのは得意だ。

でも、ロウは狩りが得意なのであって、殺傷は得意ではない。そういうところは器用じやないのだ。そして今は食事してゐる場合じゃないし、そんな時間はない。今立ちはだかる熊は、ただの障害でし

かないのだ。

なら、退かす。

それだけでいい。

「帰ってくれ

。 。 。

返答はなし。殺意はあり。

それならいいよ。受けて立つべ。

そう無言の内に意思伝達を済ますと、ロウは腹を決めた。熊の目の前までずんずんと迫ると、熊の手に自分の手を伸ばした。

……届かない。

身長差に理不尽を感じながら、少しいじけた気分になりながら、仕方ないのでぴょんと跳ねた。それでようやく熊の手を掴めたのでぐつと腹に力を入れ、前転をするように体を捻った。

どつたーん、と。

ロウは全身を器用に一転させることで熊の固体を思いっきり投げ飛ばしたのだ。

背負い投げ、といつのを一応知っているが、多分違うだろう。掴んだ手を無理矢理引き寄せ、そして強引に相手の体を浮かせて、これまた力任せに地面に叩き付けたのだ。熊は全く反応が追い付いていないようでぽかーんとした顔で固まっていた。

まあ、いいだろ。

……ちゅうと惜しいけど。けど。

「シンの料理が待ってるからなつ

だから帰りに会つても食べないぞ、熊つ。と聞いてなさそつな台詞を言うだけ言つと、ロウは馬車に戻ろうと振り返つた。

馬車が横転しかけてる。

「口、口ウ……」

「シンー?」

何だか呼ばれているので慌てて馬車まで駆け戻る。

どうもさつき熊を叩き付けた振動で馬車が傾き出したのだろう。それをまあ仕事の一環だし支えようとしたのだろう。けれど睡魔という敵と戦っているシンにはあまり力が出せなかつたのだろう。だからシンはピンチだつた。今にもシンは馬車に押し潰されそうだつた。

「ウ、……」

倒れる！

口ウは思いっきり地面を蹴つた。弾かれた球のように、猛スピードで突っ込んで行き。

「……口ウ頑、張つた」

息切れしながらも何とか手を伸ばし、傾いた馬車の側面を支えた。間に合つたみたい。軽く力を入れて車輪で立てるように戻してやる。口ウにとつてはさほど重くはなかつたけど、シンにとつては重かつたな、と思つた。そして足元でどしゃ、といつシンの力尽きた音を聞く。

「ドラゴンも、大変だなあ」

限界を越えて本格的に眠り始めてしまつたシンを見て、シランがいつもするよつこ口ウは苦笑した。

「ただいまー」

「…………あ…………いま」

「…………苦労かけたな、ロウ」

早速労われてしまつた。シランは本当に申し訳なさそうに、背負われたシンを見ている。

「ロウ頑張つた!」

「ああ、偉いなロウ」

ぽん、と温かい手が頭に乗つた。ちょっと硬い、でも優しい手。偉い偉い、とロウの頭を撫でてくれた。ロウは照れ臭くて、嬉しくて、えへへと笑う。

シランはそうしてからまたシンに視線を移すと、苦笑しながら言った。

「さすがに寝かせてやるか

「だなつ」

毛布を引っ張つてくるヒシンを降ろした。もうだるんだるんなシンはもぞもぞと毛布を体に巻き付けると落ち着いたのか、直ぐに眠つてしまつた。

「だらしないやつだな」

呆れ顔で呟くが、どこか安心したような雰囲気もあった。それを見て、ロウは閃いた。

「そっか」

「……何がだ？」

いぶかしげに問うシランに向かってにっこりと笑むと、ロウは言った。

「シラン心配だつたんだな、シンのことー。」

「……当たり前だろう。こんな状態、なんだからな」

いつもより不機嫌そうでもあり、どこか照れたようにも見える、動搖したシランの言葉が返ってきた。

ふと、仕事中に考えたことを思い出し、シランに質問する。

「明日はシンの料理、食べれる？」

「……ああ、な。気温が戻れば直ぐにでも復活するだらうが……そんなこと、誰にもわからないだろ？」

シランは窓の外、未だに真っ白な雪が舞い、吹き付ける景色を見て言葉する。

「昨日は秋晴れだったのにな……」

「ん？」

「いや……独り言だ」

シランはそつそつと深々とため息を吐いて、また一言漏らした。

「まだ十月のはず、なんだがなあ……」

その意味を知らないロウは、ただ小さく首を傾げる」としかできなかつた。

007 家と役目【真】（前書き）

予定は未定つてことで予定無視して全く別の話を上げます。今回はシン視点の短い日常の話です。まあゐるいんで軽く読んでください。
では第七話をどうぞ。

キッチンと机。それがこの家の全てと言つていい。

まず一つある戸口を遮るような中央に立派な木の机がある。そして折り畳みの椅子が三脚、机を囲むようにあった。大体席は決まっていて、キッチン側がオレ、裏口と呼んでる戸の方がシラン、表と呼んでる戸側がロウだ。

あとは本棚。と言つてもいろんな物が入っているので混沌としているが、その本棚が裏口の手前の壁にある。だからシラン定位位置はその近くだとも言える。ちょうど田線の高さ程の棚一一段はシランの本が占拠しているのだから。

以上が狭いと連呼される觀月家の全てである。と言つても、シランの工房という離れが裏にある。因みにシランはそこで寝て、オレとロウはこっちの家で雑魚寝だ。

そんな狭つ苦しい家をシランはあまり好きではないようだが、オレは結構好きだった。狭い方が何だか落ち着くし、掃除も楽だからな。

と、言つわけだ、掃除だ。

「シラン、散歩行つてこい。掃除すつかう」

「……なんで追い出されるんだ。俺も手伝うぞ」

「でも狭いだろ？ 一人でやつた方が動きやすいの。嫌だつたら工房の掃除してろよ」

「……わかつた」

とぼとぼとシランが出て行つた。多分散歩だ。シランは結構マメだから工房は案外清潔にしてある。まあ寝床もあるし、当たり前か。結局やることがないからぶらぶらして来るのだろう。

「一時間くらいしたら良からなー?」

「……適材適所だよな」

と返事なんだかよくわからないうとをぽせながら行ってしまつた。まあ、多分聞いてただひつと判断する。因みにロコはお仕事で夕方まで帰らない予定だ。

……よじつ。

「やるか」

オレは意氣揚々と腕捲りをした。

「珍しくないけど珍しい」とつぶんな、お前
「あ、ハンダじょん。なんだ?」

砂やら埃を外に掃き出しているところに舌がかかり、振り返るとムサイおっさんがいた。まあハンダだけじ。

「いやあ、掃除なんてやんねえからな。マメなことだ、と思つたんだよ」「なんだとー? 掃除しないなんて病気になるだ?」

「そこまで不潔にはしてねえよー。でもまあそつそつちゅくちゅく掃除するのは偉いな、と」

「三人も出入りすんだ。ちゃんとやんないとな。スズさんなんて毎日やつてたんだぜ? オレはそこまでは出来ねえよ」「でもお前仕事があるんだし、いつも家にいらされたスズさんと比べんでも……」

「こーや、やっぱ頑張んないと。家の管理はスズさんに託された

オレの仕事なんだからなー!」

「……主婦対主夫か」

「あ?」

「やあ、なんでもない。とにかくあんま根を詰めるなよ。お前のおかげで依頼の回転が随分と早くなつたんだ。お前に倒れられると俺がどうされるんでな……ほじほじにな、頑張れよ」

「おひー!」

満面の笑みで応えると、ハンドもこいつと笑った。ハンドはオレより少しだけ背が高い。それが何だか少し安心するのは何故だろうか。そんなことをハンドの後ろ姿を見送りながら思っていた、が。

「おおっ。掃除掃除……」

我に返ると慌てて掃除を再開したのだった。

「綺麗だな、家!」

「お、わかってくれるか口か。そうだけ、今日ようつと夕々に掃除したんだ」

「ありがとーシン」

「良いって良いって」

何だか照れくさくて頭を搔く。口からは素直に感心するように黄色の瞳を輝かせてオレを見てきた。恥ずかしさを紛らわすように衬衫に話を振る。

「こつものじだよな、シリコン

「やうだな、お前がいつもやってくれてることだ、いつも一人でな。本当に」「苦労だ、感謝している」

あ、あれ？ やたら早口な上に険のある言葉に、驚いてシランを見返してみるが、なんだか目を合わせてくれない。しかもいつもより不機嫌度が上がっているような気もする。あ、あれえ？

「し、シラン？ ……なんか、怒つてる？」

「怒る？ 怒るわけないだろ？ いつも一人で手早く綺麗にしてくれるシンを有り難く思つてしる」

「いや、でも、怒つてるだろ？ なあ、なんか悪いことした？ オレ何かした？」

「だから怒つていない。俺は手伝つていなからな。お前のおかげだ。だからお前はロウに感謝されるべきだ」

「あつ、あつ、追い出したこと根に持つてるな！ なあそつなんだろ？ ゴめんつて、言い方悪かつたよつて、だからねちねちと責めないで！」

「責める？ 責めるわけがないだろ？ 俺は何もしていないんだからな」

「うわー、シランが壊れたー」

「シンひ、ロウ今度は手伝うぞー！」

「え？ 別にいいけど」

急にロウの言葉が割り込んできたことに不意をつかれついつい普通に了承してしまった。でも一瞬で後悔した。なぜなら左に座る人から凄い不機嫌オーラがオレを襲つたからだ。

「……何故俺は追い出しだ、ロウは手伝わせる？」

「ああ！ やっぱりロウはいいよ、仕事大変だしー。」

「シンも仕事大変だぞ？」

「そうだ、お前は

「あー！」

大声出して無理矢理一人を止める。気持ちを汲み取ってくれたらしく、二人は大人しく黙った。

「わかった。わかったから落ち着け

「……」

「なんだ？」

とりあえず落ち着いたようなので話す。

「ま、シラン。シランは二房もあるし、家のことは良じよ。こっち
は二つちで寝てる組でやるから。……ダメか？」

「……そうか。わかった、そうしよう」

「じゃあ今度は口ウもいの時に掃除しようか。口ウもそれでいい？」

「わかったぞ。口ウ頑張る

「……ふう」

収まつたようだ。何だか疲れたなー、と思つ。シランは生真面目だからな、何だかんだで気にしてたのか。でもまあこれで一件落着ということでの

「飯にしますかー」

とまた腕捲りをすると、キッチンに向かったのだった。

「……お前は働き過ぎな気がする

「シンお仕事好きなんだよ」

そんな言葉を胸に受けながら。

008 歩いていくために【狼】（前書き）

なんだこの真面目なタイトルは…こんな感じで使って良いのかと思うけど案外真面目な話な気もするので良いんじゃないでしょうか、と自己完結してこのサブタイトルになりました。

でも口ウとシランのちょっと気が抜ける感じの会話がちょいちょい挟まっていると思うんで大丈夫です多分。無駄に設定があるので今回はなんだか思わせぶりな回になってるかもしだせんが当分放置になると想いますがご容赦を。

では、ほのぼのなスタートのシンが全くいない第八話が始まりますつ。

008 歩いていくために【狼】

シランはいつも本を読んでいる。大抵家にいて、ずっと読んでいる。

「シランは仕事ないのか?」

「……」

いつもの顔が引きつった。

「……急になんだ?」

「だつてシラン本読んでばつかだ」

「……まあ、そうだ。有り体に言えば、仕事がない。かと言つて好きなものを打つてられる程鉱物は自由ではない」

「シラン何する人か?」

「……言つていなかつたか」

「言つてないぞ」

「鍛冶師だ。刀鍛冶、と言いたいところだが、刀だけでは商売にならんからな」

「かじし? かたな?」

「鍛冶師と言うのはな……金属を鍛え、加工して物を作ることを職業とする人、といったところか。で、刀と言うのは……端的に示せばこれだ」

そう言つてシランは本棚に立て掛けてあつたものを机の上に置いた。何となく見覚えのあるような形に首を捻る。

「かたな?」

「そうだ。シンも持つていただろう? オレとしてはひちが本業

なんだが

シランは慣れた手付きで一点を持つと、すつ、と慣れた手付きで両側から引っ張った。いや、滑らせた、と言つた方が正しいみたいだ。

すらりと伸びた、鈍く光る銀色に、目を奪われた。

「わあ……」

「綺麗だろう？ 刀と言つより日本刀と呼んだ方が正しいか。この武器はな、折れず・曲がらず・よく切れる、という三點を多くの日本刀の鍛冶師が追求したことにより生まれたものなんだ。少し前は美術品としての価値ばかりに注目され、碌に本来の役割を果たせずにいたそうだが、この時代になつたことで再び武器として扱われるようになり、有用で強力な、変異種だろうと幾らでも斬れる得物として普及し始めたのだ。しかし高価であるし、生半可な腕の者が持つたならどんな業物でも無用の長物にしか成り得ない。しかし刀とはやはり何かを守るために在るものだと俺は考えている。だから俺の居る時代が確かに俺の打つた刀がその役目を果たせるものであつたことに感謝している。だが刀が何かを守るといつことは同時に何かを奪つているということだ。それは武器を製造する者として肝に銘じておかねばならないことで、それに

「……シラン？」

「……悪い。調子に乗つたな」

びっくりした。相変わらずの不機嫌顔ではあつたが、その中にも嬉しそうな時や難しい顔の時があつて、なんだか表情豊かなシランだった。シランがあんなに楽しそうに、長々と話すなんて。

「よつぽど刀が好きなんだな」

「……ああ。好きだからやつていい」

「す」「になつ。良かつたな！」

「……と、とにかく。無職では、ないんだぞ、俺は」

なんだか照れくさそうにするシランがちょっと面白かった。

「うんつ。シラン鍛冶師頑張れ！」

「ああ、自分の仕事は常に最高であるよつに努めている。大丈夫だ」

一転して真剣な顔になつた。迷わずそう断言したシランを凄いと思う。かつこいいと思った。やっぱり職人さんつていうのは誇りを持つて仕事を全うする人だな、と何だか嬉しくなつてしまふ。それと同時に懐かしくも、ある。

「……どうかしたか、ロウ？」

黙つたロウに違和感を持つたのか、いぶかしげにシランが問い合わせた。ロウはちょっと困つた顔をしたけど、結局素直に思つたことを口にした。

「ロウ、職人さん好き。ミ工もやうだつたから」

「ミ工……誰かの名前か？」

「うん。毛皮作ってくれたのもミ工なんだぞ」

「ああ、あの狼だか犬の毛皮か……あれは見事だ。相当腕の良い人なんだろうな」

「うんつ、ミ工は凄いんだ。死んだ体にも役割を、意味を与えられる、凄い人だぞ」

「……そうだな」

シランはゆっくりと頷いた。言葉を理解し、噛み締めるような動きは何だかシランらしい。

「友達か？」

「ん……ロウはよくわかんない。でも大切な人だ。優しい人。シランにちょっと似てるな」

「そう、なのか？」

「うん。拾つて住ませてくれるとことか」

「……」

「心が広いって言つてるんだぞ?」

「……そつか」

何故か複雑そうな顔をされた。小さく「似たようなことをする人はいるものなんだな」と呟くのが聞こえた。その辺りが何やら感慨深いようだ。しかしふと、何かに気付いたようにロウを見るとシンは聞き返すように言つた。

「一緒に住んでいた?」

「そうだぞ。少しだけ。確か一年くらい」

「……道理でシンよりはものを知つていてるわけだ」

やたら納得顔のシラン。そんなにシンは大変だったのか、と思いつたけどどう言えれば銭湯のエピソードがあつたなど思い、ちょっと口も納得してしまった。

「ならもしかして読み書きは出来るのか?」

ちょっと期待のこもった目で見られたが正直に首を横に振る。

「ううん。基本、おしゃべりしてたから。でもHAN手紙書けてた。だから教えてもらわなかつただけ」

「そつか」

「ほんとはな、もつとこりこり、読み書きとかも、教えてもらいたかった、んだぞ……」

「……そつか」

「……」

「」の話はやめよう。そう思った。大切な思い出だけじ、今傍にいてくる人を心配せることはない。今口にする必要のある話、でもない。

「といひるで」

「……なんだ？」

唐突な切り替わりにシラソがきょとんとした顔で聞き返す。

「シンは読めるか？」

「……出来ないな」

「深々とため息を吐いてシラソは答えた。これまた悩みの種のようだ。……シラソって大変そうだな、いろいろ。ふとそう思った。

「あいつは本当に食わず嫌いと言つか……直ぐ逃げるんだ、この手の話題になると、な。だからまともに教えられたことはないな」

「シン嫌なのかあ」

「ロウはどうなんだ？」

「んー？」

何のことか？　とロウが小さく首を傾げると、シラソが言葉を続けた。

「本を読んだり、手紙書いたりしてみたいか？」

シランは興味深そうな、好奇心が宿る深い夜空の色の瞳で口ウを見ていた。したいこと。口ウのしたいことか。ちょっと考えてみる。

「シラン本読むの楽しい？ 好きか？」

「……」

シランは不意を突かれたような困った顔をした。でも考え込むよう少し俯くと、口ウの目を見ていはっきり答えてくれた。

「昔は暇潰し以上の意味はなかつたが……今は楽しいし、好きだな。先人、他者の考え方や知識を知ることは純粹に面白い。そして直接的に生きる糧になることもある……つまり、為になるな」「おー、本つてすこいつ！」

「ああ。書物は文字の意味を知つていれば誰でも見て得ることが出来る。まあ今はかつてのような大量生産は不可能だが、今でも数冊この街でも発行している。特区と呼ばれる程の規模を有した都市でも、そうそう出来ることではない」

「八区はすごいんだな！」

「……一応正式には第八特区だからな？ この街は」「わかつてゐるぞ？」

「ならないんだが……」

ちよつと心配そうな顔だ。そこは来たばかりの口ウでもちゃんとわかってるぞ。気を取り直したシランが話を戻す。

「で、どうなんだ？ 読み書き覚えたいか？」

「教えてくれるのか？」

「それは……当たり前だ。お前の保護者を務めるからには、一般教

養を教える義務があるからな……まあそれは大分昔の話で今は法律もなく、正しくは過去形なのだが……」

何だかじぶんもびるだ。でも気持ちほんわかしてくし、何を言つたいのかわかる気がする。泳ぎまくっていた黒い目がようやく止まり、口ウを見た。

「…………どうなんだ?」「

だから口ウは満面の笑みで答えた。きっとシランが欲しい答えたし、それに……。

「あのなつ。口ウ、忘れたこといつぱいあるけど、それ以前に知らないことも、いつぱいある」「

そう。口ウも知りたいことがいつぱいある。知らないことばかりなのだ。

手探りでずつと歩いていた。

いや、ただただ迷っていた。始まりも終わりも見えない世界を。前に突き出した目標のない手は、一度温かい手に出会つて拾われた。けどそれは抗えない時の流れに離れてしまった。だからまたさ迷つて、走つて、転んで、真っ暗闇をがむしゃらに進んで、歩いて、不安になつてまた走つて、躊躇つて転んで。

また、拾われた。

よいしょ、つて立たせてくれて、明るい道を一緒に歩いてる。隣で手を引いて歩いてくれてる。でも、頼つてばっかりじゃ駄目だと思うから。また離れても、ちゃんと前向いて歩けるよつにならなくちゃいけないとと思うから。

だから口ウは踏み出したい。
ううん。踏み出すよ。

だからその一歩だけ、もうちょっとだけ、手を引っ張って欲しい。
だからシラン。

甘えかもしれないけど。

「教えてください」

それにシランはふつ、と頬の筋肉を緩めて、嬉しそうに微笑むと
待つてましたとばかりに答えた。

「負け負った」

その顔は、何だかシンに似ているな、とちょっと思った。

009 シラソ先生と勉強会【紫雲】（前書き）

タイトルがふざけてるって？ 今更です。気にしてはいけません。
話はサブタイ通り。まんまです。
では久々にシラン視点の第九話をどうぞ。

「勉強面白いな、シランッ」

「…………」

「シラン。なんで口ウを撫でながらオレをそんな田で見る?」「爪の垢をもらう相手が出来たな、シン、といつ意味だ」

「……丁重に断らせてもらう」

「なら俺は口ウに頼み込もう」

「どうやって?」

「……口ウ、お菓子食べたくないか?」

「食べるー。頼み引き受けんぞ」

「うわ、きたねっ! 食べ物で釣りやがったー?」

「さあ、口ウの爪の垢を煎じて飲まされるか、自分から読み書きを学ぶか、どうする?」

「やあー

そんな平和な時間。

俺は今、口ウの先生だ。……大袈裟か。

この間読み書きを覚えたい、と気合に十分な希望を受けたので今田から早速授業だ。図書館から田畠をつけていた資料を借りてきたので朝食を終えると直ぐ様始めたのだ。

まあ適度な休憩も必要だろう、としばらくやんな調子でシンに軽く逆恨みな仕返しのような会話をすると、気が済んだので口ウの家庭教師を再開する。しかしシンはどうしてもいつ頃なに拒むのだろうか……。

そしてまた家の中は静寂に包まれた。シンは「洗濯だ」と鼻唄混じりに出て行つたので本当に静かだった。

「シラン、合ひてるか?」

「……ああ、正解だ。平仮名はもう大丈夫そうだな」

「カタカナも大丈夫だぞ？」

「そうか……じゃあ簡単な漢字に行くか」

「うん！」

しかし……本当に速いな。ロウの覚える速度。平仮名の表を見せただけで覚えたと言うのでテストをしてみたが、慣れないため多少歪なこと以外、特につつかえるでもなくすらすら書いてしまった。昔の十歳くらいなら当たり前かもしれないが、今の時代では俺の倍生きた人でも読み書きが出来ない人はざらにいるだろう。逆にこの街の識字率が異様に高いと言つていい。紙の生産も盛んであるしかなり以前の生活に近いのではないかと思う。特に中央区辺り、行政を取り仕切る役所仕事に従事する人々はほとんど出来るのだとか。斯く言う俺は父の趣味だった読書に興味を持つた時期があつたため、父に教えてもらったのだ。父は人と話す代わりに鉄や文字と話しているみたいな人だから。

そして今俺は父から習つたことをロウに教えていた。こうやって先人の文化や知識は伝わっていくのだな、と柄にもなく漫り気味。

「シラン、漢字のは何使う？」

「あ、ああ……確か一応借りてきものがここにあるはず」

ロウの声に我に返つた俺は思わず上擦つた声で答えた。……今は先生なんだ。今くらいしつかりしろシラン。自分に言い聞かせると腰を浮かし本棚を漁る。前回返し忘れた本と調子に乗つて借りすぎた本で本棚は許容量一杯だつた。馬鹿だつた昨日の自分を恨みながら落とさないよう気をつけて本棚を探す。

「これ、だな」

昔の子供向けの漢字の本。由来も一緒に学べて丁度良いだろう、とかなり前から目をつけていたにも関わらず、今まで出番を延々先延ばしにされていた可哀想な本である。……本自体には何の感慨もないと思うが。

「読んでいいか？」

「ん、ああ」

本を机に置くと直ぐにロウが手に取り、早速表紙を捲り始めた。そして普通に読み始める。確かに基本平仮名で、簡単な漢字の書き順や由来が書かれた絵本みたいなものなのだが……。

「読めるのか？」

「読めるわ。シンの選んでくれた本、ロウでも読めるなつ

「そ、そつか」

……シンに見習わせたい。

そんな無謀な考えが浮かぶ程、ロウは真剣で真面目だった。しかも吸収力が半端ない。これは直ぐに一人で本読み出すな。もはや予言でもなく決定事項だ。一人空いた時間、読書をする勤勉なロウが容易く脳裡に浮かぶ。

「仕事行ってくるなー」

「シン行つてらっしゃいつ

「……気を抜かず、気を付けて行くんだぞ」

「わかってるつてー。んじや勉強頑張れよー」

そんな会話を交わすと着替えを終えたシンが上着を羽織ると表から出て行った。洗濯は終わったのだろう。家事に関しては実にそつなくこなすやつだから。

口ウは今日仕事がない口だし、俺は……言わずもがな。

たまに来る口ウからの質問に答えながらゆったりと時間は流れ。

「昼、だな」

「そう言えばシンいない時、どうしてる?」

「俺が作ってるに決まってるだろう?」

「シラン料理できるのか?」

「……」

出来ないと思われていたらしい。まあ、そうだな。普段はシンに丸投げしている身だ。無職で何も出来ない人間だと思われて、どう反論出来ようか。……地味に痛い事実だな。

「口ウは座つて読んで待つていてくれればいい」

「手伝うぞ!」

「いや、俺はあいつほど手際が良くないから上手く指示が出せない」

「そうかあ。わかったぞ」

口ウは素直に引き下がってくれた。俺は本棚から厚めのノートを引き抜くと、台所に向かった。ノートをパラパラと捲り、適当な頁を探す。

「それなんだ?」

「これが? 母さんお手製の料理本だ。あまり料理をやらない俺や父さん、物忘れがたまに酷い母さん自身のために書き貯めたやつだよ」

「ふえー」

感心の声が上がる。それから思い出したように本に視線を戻した。そんな口ウに習い、俺もノートに視線を落とす。メニューを決める

と材料と器材を出して早速調理開始だ。シン程ではないが手慣れた調子で進めていく。

料理をしているといつも疑問に思うことがある。それはシンの料理のことだ。

同じメニューでも毎度味付けも具も全く違つて謎だが……何故か美味しいのだ。かなり不思議だ。そしてシンの料理の師が俺の母親にも関わらずちゃんと美味く出来ていることは奇跡だと思う。

本当のことを言うと母さんは何故か非常に料理が下手だ。そんな母さんがシンに教えたのはほほこの一言のみ。

「料理は感性！」

詰まるところ勢いとか思い付き。シンはまさにこれを実践して気分のままに料理をする。流石に慣れてきてからはある程度法則のようなものがあるようだが……凡人にはわからない何かがあるらしい。未だに俺には理解出来ない。

そんなことを考えながらも順調に料理は出来上がり、昼食の時間となる。基本、俺は黙々と食べ、時折休憩のように話す口ウに相槌を打ちながら滞りなく食事を終えると、片付けもそこに勉強会を再開だ。

そんな調子で夕方、帰宅したシンの一言。

「お前らは金太郎か！」

それを言つたら一富金次郎だと思つ。

そして早速だが後日談。

半田さんに泣き付かれた。

因みに嬉しく泣きの方だ。なんでも上に誉められる程正確でわかりやすくまとめられた、見事な報告書が上がつたらしい。言わずとも

わかると思うが口ウのものだ。

嬉し泣きの場合、泣き付かれたという表現は不適当かもしけないが、まさにそんな感じだったので、まあ、良いんじゃないだろうか。シンにも教えてやつてくれないか、と頼まれたが丁重に断つた。

「不可能です」

最早シンが何かを書いている場面など、全く想像がつかないのでから。

010 狼少年の謎【狼】（前書き）

ロウ君の謎に迫つてみましょーな回です。ぶつちやけ中途半端な上に何もわからなかつたような気がしてきましたが……あんまり氣にしてはいけませんね。相変わらずの脱線したお話です。ではシンの叫びから始まる第十話をどうぞ。

010 狼少年の謎【狼】

「つめー！」

「……？」

「きなりシンが叫んだ。堪えきれなくなつたらしく。……何がだ
わい？」

「口ウ、お前に訊きたいことがあるつー。」

「……前後してはいなか？」「

発言が。

「気にすんなよ些細なことはー」

「……」

シリコンは放棄したらしく。ため息を一つすると、本を引っ張り出していつものように読み出した。シンもシリコンはどうでも良かつたようだ、咎めるではなく、ただただ意氣揚々と口ウを見て言った。

「さあ、今日この答えてもらひや～」

隠したつもりも、はぐらかしたこともないのに。で。

「何のことだ？」

「惚けるなー、お前の爪のことだー。」

「口ウとほけてないぞ？」

と言つても妙なスイッチの入つてしまつたシンには通じないからし

い。

「ほり爪ー。」

とりあえず言われた自分の手を見てみる。……ふーむ。

「何訊きたい?」

「シン落ち着け」

「……一人で言わんでも」

言つたことは別々でも意味は何となく近かつたからか、ちょっとシンの勢いが弱まつた。シランはシンの調子が目に余るものだつたから口を挟んだだけらしく、直ぐに田線は本に戻つてしまつた。でも何かあればまた助けてくれるだのひ、とかよつと安心しながら、ちょっとと変なシンに目を戻す。

そしてシンもよつやくまともに話す氣になつてくれたようだ。

「口ウの爪つゝか、刀普通に受け止めてたじやん?」

「うん」

「しかも黒くてぶつとかつたじやん?」

「うん」

「じゃあさ」

「うん」

「どにに収納されてんのー。」

穏やかな会話はいきなりの大声によりぶち壊された。まあ、いいんだけどな。

「どひつて……」

指の、付け根に近い方の節田を指差す。

「IJの辺だけど」

「……出んの?」

「出るよ」

「……皮膚切れちゃうじやん」

「うん」

「痛いじやん」

「すぐ治るぞ」

「……大変だな」

「そうか?」

「どんな仕組みになつてんだよ?」

「わかんない」

「……そうか」

「うん」

何だかシンが痛々しいそうな田でロウを見ていた。ロウとしては
気になったこともなかつたのでそんなに驚くことなのか、と逆にびつ
くりだ。

「お前だつて異常な治癒力があるだろ?」が

「それはそれ、これはこれ!」

といつシランとシンの会話が間にあつたが一人の話はそれだけだ
つたよつで直ぐにシランは視線を戻し、シンもロウに向き直つた。

「でも普通の爪もあるんだよな?」

「うん、あるぞ」

ちょっと硬めで尖つた爪が小さく指先にある。でも狩りの時は役

に立たない。でも木登りなんかの時は便利だ。

「なんかすげえな」

「そうかあ？」

「なんでそうなつてるんだ？」

「口ウが狼だからだぞ」

「ちなみに足は？」

「なんだ、足は見てないのか？」

シランからの疑問が挟まつた。本を読んでいる割りにちやんと話
聞いているんだな、と思つた。

「じゃあシランは口ウの足知つてんだ」

「まあ、風呂に入れば、そりゃ あな」

「オレは結局着替えくらいだし、見てねえんだよお」

「そんなに気になるなら見せてもらひえば良いだろ」

「そだな。口ウ良いか？」

「うん」

別に断るようなことでもないので素直に頷くと、クツを脱いだ。
わづく口くロでクタクタだけど、随分前からずつと履いているもの。

「こつちは収納出来ないのか？」

「みたい」

足の指の方が獸に近いと思う。指先は丸まり、地面に立てゆるよつ
に爪も伸びていた。でもやつぱり太く硬い。ついでに足は小さかつ
た。

「なんか、妙な感じだな」

シンの素直な感想に、口ウは笑つて答える。

「毛がないからな。普通の狼とも違つ」

毛で生え際が隠れないから本当に、爪がどう生えているか見えてしまつ。しかも下手に人間味のある肌色の皮膚から異様な黒い爪が生えているから。歪で、何だか怖く見えると思う。

「でも口ウ、狼だ」

何だか曲げちゃいけないとと思う。覚えてないけど、でも狼だから口ウだから。強く生きる象徴だから。

「だなつ。すげえな口ウ。狼少年だ」

「口ウは嘘つかないぞっ！」

「へ？」

どうもシンは歎はなしを知らずに言つたようだ。シランが密かに笑つているのが見えた。

でも、シンも嘘つかない。本当に感心してるだけ。怖がるわけでも氣味悪がるわけでもない。シランも同じく。何でもないようになってしまった。

心が広いなあ、と思つた。

「満足？」

「うん、満足満足。ありがとな」

「ううん、いいよ」

クツを履き直した。実は爪で空けてしまった穴がある」とは……

内緒だ。

「ついでにもひとつ良い？」

「いいぞー」

「尻尾つてどんな感じ？ オレ尻尾生えたことないから良くわからねえんだけど」

最初もせうだつたがシンは尻尾についてかなり寛容なよつだ。何で爪は駄目なんだ、と不思議に思つ。

「せうだなあ、例えると……顔みたいだ」

「かおお？」

「楽しいと自然と動くぞ。でもあんま使い途ないぞ」

「せうじつもんか」

「うんひ」

「いや、顔は必要だろ」

「田はいるけど顔自体に用途はあるか？」

「……なるほど」

シラソも納得させて質問攻めは終了らしい。ついでに補足すると、普段は丸めてズボンの中に納まつてゐる。十数センチメートルの柔らかい尻尾なので苦もさほどない。

「いやー、解決したあ、すつきつしたなあ」

よつぽど氣になつていたようで、實に清々しい笑顔のシンだつた。でもそんなに気になつていたなら……。

「なんで聞かなかつたか？」

「ふえ？」

不意打ちだつたのか間抜けな声を出してシンは振り返つた。でも一応聞いてはいたようで考へ始める。そんなに歎むよつた理由なんか？と思つたら違つた。

「んー、何となく」

「ふーん」

「あ、でも」

「ん？」

「訊いていいのかな、と思つて」

「そか

「そだ」

最後にはにっこりと笑い合つた。まあ良いか、と面葉なぐへ言つて合つた。

「どうちもどうちだな

不機嫌そうに聞こえる低い声がぼそりと感想を漏らした。
そう言えはシンは、鱗を生やして火も吹けて怪力らしい。それなら確かに口ウの小さな尻尾と黒い爪の生えた手と足くらいい、そんな驚くことでもないのかもしれない。

一番豪胆と言うか許容力があるのは、何も聞かずにそう在ることに特別疑問を抱かないで一緒に居てくれる、シランだな。

冷静な第三者の呴きにそんなことを思いながら、口ウは苦笑いを溢した。ちょっとだけ安堵を混ぜて。

011 そこの在る意味【真】（前書き）

結構真面目な話ですが、シンとハンダのやり取りが楽しい話でもあります。シンは何でシリコンを選ぶのか。そんなシン視点の十一話が始まります。

011 そこに在る意味【真】

「お前つてほんつとシラン好きだよなー」

「はあ?」

いきなりハンダが話し出した。

オレは現在報告義務を全う中だ。だから第六守衛地区長の家、つまりハンダの家に来ていた。

大体の仕事が第八特区に仲介してもらつた、と言つかえられた仕事なので、オレには報告義務、というものがあるらしい。そしてもし戦闘があつたならその相手、数、場所なんかについてを詳しく記した報告書を作らなくてはいけないんだそうだ。でもオレは読み書きがからつきし。それにどちらにしろ大抵地区長であるハンダがくれる仕事だから、ハンダに仕事がどうだつたか、という内容を報告しなきゃいけない。だからハンダに言つて、ハンダが必要だと思ったところをオレに確認しながら報告書を書く、という形を取つていた。

と言つわけで現在オレは報告をしに、ハンダの家に邪魔しているのだ。因みに報告は済み、今はハンダがかきかきと忙しなく手を動かして報告書作成中だ。もう帰つていいと言われているのだが、何となく惰性でハンダの作業を眺めながら勝手に入れた茶を飲んでいた、のだが。

「いきなり何言い出すんだよハンダ」

「だつてそうだろ?」

「そうだぞ。で、どうしたよ?」

「や、普通に返されても困るんだけどな」

ハンダが頭を搔く。オレは首を傾げた。何が言いたいのやら。で

もまあ沈黙に飽きたハンダの世間話的な軽い振りだったんだろうなとも思い、何かいい話題はないかと記憶に検索をかけることにした。しかし気を取り直した、話すことを決めたハンダが会話を再開したので結局それは中断されることとなつた。

「なんでシランなんだ?」
「んん? 何言いたいんだよ?」
「だつてよ、シラン以外にもいただろ? 世話してくれそなつて言つか、優しそうなやつ」「……? 確かに今はいっぽいいるけどな」「あ? ジゃあなんだ。お前、今まで他の人間に会つたことなかつたとか言うのか?」「そうだけど?」「……」「……」

何故かハンダが絶句してくる。ビラしたんだが、と小首を傾げるがわからない。

「ハンダ?」
「……嘘だろ? え、生まれて初めて会つた人間がシラン?..」「ああ」「嘘だあ」「嘘吐いてどうすんだよ? とりあえずオレの覚えてる限りじゃシンランが初めてだつたぞ」「マジか?」「マジだ」「マジだ」

信じられんとまさに顔に書いてあるかのよつた形相だつた。もはや書類作成の手を止め、目を見開いたハンダが身を乗り出すよつて訊いてくる。

「じゃあ親の顔は？」

「さつぱりだ。つかそもそも人間じゃねえし」

「育ての親は？」

「言つならシランだ。誰かに育てられた覚えはねえよ」

「じゃ、じゃあどうやって生きて来たってんだ？」

「今更何言つんだよ？ 狩りしてに決まつてんだろ。野生児つてからかうのはあんただろが」

「…………」

どうも衝撃的な事実だったらしい。シランから聞いてそうだったけど、知らなかつたのか。そっちの方が意外だな。

「お前、いくつだ？」

「歳か？ さあなあ……外見だけで言えば十八とかその辺らしいけど、そんな習慣知らなかつたからな。数えてなかつたからはつきりとは知らない」

まあアレなら知つてるのかもしれないけど……話したの一回だけだし、面倒だからなあ。

「なあ、オレ何歳に見える？」

「外見でか？」

「あー、や、中身的に」

ちょっと氣になつたので尋ねてみた。案外ハンドは真面目に考えてくれるやつだ。ペンを置き、腕を組んで唸る。

「……お前つてとりあえず外見以上に見える」とはないな

「やうなのが？」

「んでたまに」……もの凄く幼くも見える。ほんとガキな時あるよな

「…………まあ、いいや。で？」

「俺に精神年齢なんてわかんねえよ。人の心なんて把握できるかつ

てんだ」

「なんだよ、あんだけもつたいつけて放棄かよ」

「…………聞くのか？」

何故かやたらと真剣な顔で問われた。ロウソクの灯がすきま風に揺られて、橙色の光が怪しくハンダの顔を照している。……なんだこの空氣。そんなに重要な話か？

「いいから言えよ」

「…………詰まりんやつだなあ」

そのぼやきはいつものちょっと情けない感じの顔だったので少し安心して、ハンダの言葉を待つ。ハンダは顎を擦りながら少し思案するように上を見ながら言った。

「まあ、なんだ。お前は多分十五歳前後のガキだよ、きっと

「…………ビミョーな答えたな」

「つるせえ。お前が微妙なんだよ。ほら主夫は大人しく家で家事してひ」

「へーー」

適当な返事をするとオレは素直に席を立つた。椅子にかけて置いた上着を手に取ろうとした時、急に待ったがかかる。

「やつぱ茶をもう一一杯淹れてから帰つてくれ」

「…………わざと帰れって言つた癖に」

と文句を言いながらもやつぱり素直に空のカップを受け取つてしまひ。

「お前が淹れた方が美味しいからな。……それともう一つ、いいか?
「注文の多いハンダだなー。なんだよ?」

力チャカチャと手は動かしながら応える。振り返らなかつたから
断言は出来ないけど、多分ハンダは神妙な顔で呟つた。

「だからシランなのか?」

「……なんだ、さつきの続きか?」

「まあ、そうだな」

はー、と息を吐き出す。びりじてそんなにそこじが気になんのかね
ーと思ひ。オレは手を一回止めると、何となく上を見た。

「やうだなー。話したのも、『えてくれたのも、教えてくれたのも
……シランが最初だつたよ』

声を出して自分の考えを話して、相手の考えを聞くつてことを。
相手に優しくする、手当てをする、自分に出来ることを相手にして
あげるつてことを。そうして伝わつた思いに応えるつてことを。教
えてくれたのはシランだ。

はじめてだつた。

話し掛けてくれた。優しくしてくれた。オレを呼んでくれたのは。

「あの時出合つたのがシランだつたから。優しかつたシランだつた
から……」

だから会こたいと思つた。知りたいと思つた。優しくなりたい、

人になりたいと思つた。

「まあ、もしもあの時会つたのがシラソじゃなくても、やつぱり好きになつたかもしないけどな」

「……もしも、なんて言つた」

そこでオレはようやく振り返つた。ハンダはしんみりとした顔をしていたが、それを振り払つかのように頭を振ると、ニカッと笑つて言つた。

「シラソとお前が出逢つたから今がある。それだけが眞実だ。シラソだつたから今のお前になつたんだ」

「……そうだな」

「だから俺はお前達が安穩と暮らせりゆつ、これからも勝手に見守つて助けてくんだ。それが俺の役割。お前は何がしたい？」

オレが何がしたいかだつて？ そんなんわかんない。わかんないけど……。

「シラソを守りたい。オレはシラソといたいから。口ウモ、ハンダだつて……守りたい」

「はは、俺も入んのか。そりやありがたい」

「ちや、茶化すんじやねえよ！」

「わかつてゐつて。それがお前の願いで役割なんだろ？ なら頑張れ。迷つても弱音吐いても構わねえ。余裕で受け止めやるや？」

「……あ、ありがどつ」

なんだか氣恥ずかしくて俯いてしまつ。ハンダが立ち上がると、頭をぐいぐい乱暴に撫でてきた。

「だからガキなんだよ、お前は」

「うしし、と笑って髪をくしゃくしゃにしてくるハンダに抗議しながらも、思った。

ほんとお節介焼きだな、あんたは。だから変なやつらに好かれんだよ。だから妙に安心しちまうんだよ。

だから、いつもありがとつ。

012 等価交換できないもの【狼】（前書き）

これで本当に一章終了になります！無駄に長くてすいませんね。でも楽しんで戴けたら幸いです。

締めは口ウの不安、悩みの話です。それを心配する一人の子供。そんな三人の第十一話をどうぞ。

012 等価交換できないもの【狼】

口ウにて大事なのはシンとかシランとか、近くにいてくれる大切な人たち。優しくて温かくて、大好きな人たち。でも口ウに出来ることはない。たくさん貰つても、返せない。優しさに甘えて口ウは生きてる。いいのかな、いいのかなあ？

「口ウ君、なんだか元氣ないけどどうかしたの？」

そんな風に言われて慌てて声の方を見る。ぶつかるのは垂れ目で氣弱そうだけど本当に心配したような男の子の瞳。

「あなたが心配するほど口ウは弱くないわよっ。あなたが心配するなんてとんだ思い上がりね！」

「アンちやん、ひどい……」

勝ち気につり上がった、幼さよりも氣の強さが目立つ女の子がそいつ言つと、垂れ目の子は肩を落として呟いた。

報告書出した帰り。夕飯には少し早い夕暮れ時の第六守衛地区をぶらぶら歩いてなく歩いていたらこの一人に出会したのだ。

氣の強い女の子がアン。漢字で「杏」と書くらしい。十歳の割に頭良いやつだけどたまに無鉄砲なんだよな、とはシンの評価。

氣の弱い男の子がユウリ。漢字は「悠里」。年はアンの一つ上。勇気も根性もあるけどことんアンに弱いんだよな、とはシンの言葉。

因みに一人とシンは仲が良い。しかし年齢も身長もかなり差のある

る三人が一緒にいてもあまり違和感がないのは何故だろう？

シン経由で仲良くなつたのでたまにいつしても話すのだが……何だ
うらやましいぜ。うらやましいぜ。こんな風に見えるのがな、

「でもやつね……なんか悩みでもあるの？」
珍しげにうつむいたいな
「氣弱な田になつてゐるわよ？」

一 そう、かな「

何となく自信が持てず、曖昧な返事になってしまい、思わず視線を落とす。すると二人が、ユウリとアンが顔を見合させる気配がした。

「えと、どうしたの？」

「どうだ。何かあるなりにならこなれど、うじうじしたるばかりにならぬぞ？」

「だからアンちゃん、ひどいよお」

二〇一

なんだかユウリがひどい田に合っているので慌てて顔を上げた。

「アン、口かき悪くないで。口かき弱虫じやない。優しくて強いや」

「……強くなれないわよ、ほぐれ！」

ロウガ口裏を弁護をすむと、アンはふて腐れたよつにそつぽを

向いてそんな風に答えた

「強くな?

「へ、うながー。わつよロウ、あんたがはつせつしないのが悪いんだわー。」

何故だか口ウが悪いことになつたらしい。でも口ウも悪い氣がする。とにかく先は口ウに真つ直ぐ向いたらしく。

「ほりー、」の際弱音でも何でもいいから、ちやつちやつと吐くー。

ぐいっ、と背伸びしたアンが人差し指をぴんと立てて口ウに突きつけた。年の割に背の高いアンが背伸びをすると簡単に口ウを追い越してしまった。軽く上から突き付けられた人差し指は案外に威圧感を放っていた。

でもやつぱり子供は子供なので怖くはない。そもそもあまり恐怖心というものを口ウは持ち合わせていないみたいなので変異種相手でもあまり怯えたことはない。ないけど……。

「う、うん……」

何となく話さなければいけない気分には十分させる効果があつたようだ。気が付いたら口ウは頷いていた。

「はー、言ひー。」

了承を得るや否や、御者が馬に鞭を入れるように間髪入れずアンは促すように声を上げた。思わず慌てると、口は勝手に本音を吐き出していた。

「これでいいの、って、思つて……」

「何よ？ はつきりしてよね、口ウ」

「アンちゃん、ちょっとは優しく……」

「時には強引なことも必要なのよー。」

おおよれ子供らしくない」とを堂々と叫ぶアンは、口ウコヒロウサメ压倒されていた。

「ほり、ロウ！ 意味わかんないわ、説明してよー。」

「え、ど。ロウ、シンとがシンにいつも優しくして貰つて、助けて貰つて。でもロウ、何も出来ない……」

「シンが何か言つてきたの？」

「ううん。でもロウ何も返せない。だから、だから……」

自分でもよくわからない、整理出来ていないことは、上手く言葉に出来ない。ロウはどうしてもいかわからない。だからただただ小さく俯く。

「ばっかじやないのー」

「あ、アンちゃん！」

「つー！」

びっくりして顔を上げ、まじまじとアンの顔を見てしまつ。アンは鼻を鳴らして、心底アホらしい、といつ気持ちを隠すことなく全身から発していた。

「等価交換なんて法則、成り立つわけないのよー！」

「……あ、アンちゃん？」

「ウリはポカンと呆けた顔でアンを見返した。ロウは困ったように眉に小さく皺を寄せた。

「知ってる？ 同じ価値のものを交換するのを等価交換って言うのよ

」「一応、知ってるけど……」

「ロウも知ってるぞ」

「じゃあ話は早いわ。こんなのがタラメよ。」

「……なんで？」

アンの意図が掴めず、一人拗つて首を傾げてしまう。意思の疎通が滞りなく行えない男一人が気に食わないようで、アンはあからさまに不機嫌な顔をしてみせたが、やれやれとかぶりを振ると説明を続ける。

「いい？ 全く同じものなんてないのよ。ほつきり言ってあたしは納得してないわ。ペラペラの紙一枚が銅貨百枚と等価なんて！ ちやんちやらおかしいのよ！」

そう言つて何故だか高笑い。アンの奇妙を通り越して軽く不気味なテンションに、思わず今度はユウリとロウで顔を見合させる。でもそんな空氣を物ともしない無敵状態なアンは豪胆に続ける。

「だからねえ、あたしの言いたいことわかる、ロウ？」

そう訊かれるがわからないものはわからない。だから素直ロウは問い合わせた。

「……アンは何言いたい？」

「だからあ、いい？ 同じもの、価値観として本当に釣り合つものはないの！ つまり！」

「つまり？」

「あなたが受けた好意、親切を全部返せるわけはないの！ つかぶつちゃけそんなのわからないの！ そんなの価値観の違いで一にも百にもなるんだから」

「……」

ちよつと圧倒される。そして妙に納得する。アンはいつも以上に氣の強さを表すまなじりを吊り上げると言つた。

「だから、あなたはあなたなりの思いを返せばいいじゃない。小さくても感謝してると言つて、お返しだからって行動すれば、それでいいのよ」

「そつか……そうだね」

アンはそれを聞くとこいつ、満足げに笑つと締めの言葉を告げた。

「要するに、自己満足よ。自己満」

「……」

「あ、アンちゃん……」

「あははははー」

アンの高笑いが再び響く。ユウリはそんなアンの身も蓋もない言い方にあたふたと取り繕つように変な動きをしていた。そしてそんな動きをする一人を見て、なんだか心が軽くなつた口ウガいた。

「ありがと……アン、ユウリ」

「なんでユウリの名前が出るのよ。何もしてないのに」

「う、ううん。えっと……何だか」めんね

全く違つ一人の反応がおかしくて、笑いを堪えるのが大変だった。不思議なくらい、口ウは幸運だ。こんなに優しい人ばかりに会えるなんて奇跡だ。だから。

「本当に、ありがと」

誰にともなく、感謝の気持ちを眩いた。

013 招かれる訪問客【真】（前書き）

一章突入で本編スタートです！……似たようなことを何度か言った気がしますが気にせずに。観月家／＼謎な三人組つて感じです。まあ一名ずつと読書していますが。

と言つわけで一章第一話にして『蒼天の真竜』第十三話……どんどんややこしく墓穴を掘つてる気がするけどとにかくスタート！

013 招かれる訪問客【真】

「暇

「 「……」

「ひこまあだーー。」

「 「……」

「 ……ひでえ」

沈黙しか返つて来ない。めちゃくちやブルーな気持ちになつた。

「 ……なんだ鬱陶しい」

ようやくシリコンが本から顔を上げてくれたので、オレは一瞬にして笑顔になつて食い付く。

「だからシリコン、暇なんだよー」

「そりゃ

「そりなんだよ」

「 ……」

「シリコン~」

「 ……非常に鬱陶しいな」

眉を吊り上げ、眉間に皺を寄せて心底面倒臭そうにシリコンは言つた。いろいろ突き刺さるリアクションだな。

「仕事がなくなると直ぐにそれだ。いい加減家事以外の趣味を持つて「えー」
「字を読むのも書くのも嫌ならいつそのこと絵でも描いてみたらどうだ」

「やだ」

「……」

「黙んないで！ 悪かつた、オレが悪かつたからだんまりはやめて！」

「……はあ」

シランは厄介だな、と言いたげな目でオレを横目に見ていた。鬱陶しいのはかなり承知だ。でも暇。

なんでこんなに暇かと言うと、ある意味口ウのせいだ。当人は隣の席でゆつたり読書タイムだが。

オレらの本職は戦闘員。外敵から特区を守るのがお仕事で、だから外壁の外なんて妙な場所に住んでいるのだ。

オレは戦えます、という申請をしてそれが上を通れば晴れて給料の出る戦闘可能住民とかいうのになれるし、必要最低限の生活が保障されるようになる。オレもシランもロウも登録済みなので都市防衛が義務となる代わりに食糧やらを貰える。

しかしもう一つ仕事があつて、それが第八特区が受けた依頼の遂行だ。それは主に商人の護衛依頼である。そして食費が馬鹿にならないウチの主な収入源もある。

だが、ロウとオレが片つ端から仕事を受けてしまったからスムーズになつたのは良かつたが他の住民に仕事が行かなくなつてしまつたのだ。だから調整のため、強制的に一週間の休みを言い渡されてしまった。そんなルールないだろ！ と抗議したけど、お前ら働き過ぎ、と言われて却下されてしまった。

そうなるとやることが家事しかなくなるが、家事なんて無限にあるわけじゃないし、午前中には終わってしまい、非常に暇になつてしまつたのだ。

「まあある意味自業自得だな」

「なんで…」

「だつてお前が口ウに働くよつ卑くから言つて始めて、しづめりへじた
ら直ぐに別々に仕事を受け始めただろ」

「うわー、言づなー」

確かに自業自得なのはわかるが……やつぱり言づな。

「うつー、何かやることないかあ

「散歩でもしてきたりどうだ?」

「うーん、それは考えたけどさあ

「けど?」

「……なんか、やな感じすんだよな、今日」

屋頃から何だか雲行きが怪しい……ってまあ空は相変わらずの灰色なのはそんなんだけど。何だか空氣の流れみたいなのが変な感じする。

「……不吉なこと言づな」

「でもほんと不安で。だから家出たくない

「でも暇だ?」

「うんつ」

「……勝手に喚いてる」

「ひでえよ」

どんどん扱いが悪くなつてきて、いじけ始めた頃、やーな気配を感じて顔をドアに向けた。口ウも同じよつに顔を上げた」とを氣配で知る。そんな妙な雰囲氣に流石のシケンも気付か、口づけを向いて多分嫌そうな顔をした。

「本当に何か来るのか」

「みたい」

シランの歯きに口ウが返す。オレは椅子を下げるヒ立ち上がり、ひょいと机を飛び越えてドアの前に立つた。頭にあるのはハンダが教えた四字熟語。

先手必勝。

「何の用だ！」

オレは怒鳴りながら勢い良く戸を開いた。

ドガツ。

「ぶつ」

ばた。

「 「 「……」」」

鈍い音とドア越しの手応え。場の空気が氣まずやつに淀んで静まつた。

「……」「めんなさい」

とりあえず謝った。

「つてえよ、何だよ、ちくしょー、うー……」

「わるい、大丈夫か？ 泣くなよ？」

「泣いてねえ！ つか泣かねえよー」二十路過ぎた男が泣かされてたまるか！」

「リーダー、泣いた方がすつきりすることもありますぜ?」

「そうですよ、強がる必要はありませんよリーダー」

「馬鹿、変に優しくすんな! 真面目にやれ! 仕事だぞコリニア」

何だか良くなき状況になってしまった。しかしさか顔面クリーンヒットとは。そこまでは狙ってなかつたのに。不運な訪問者は三人。出鼻を速攻で挫かれたのがリーダーで、それを慰める一人が部下A、Bつてどこだろうか。部下一人は同じ濁った感じの緑色の服だったが、リーダーは似ているがちょっと違つ、装飾のついた服を着ていた。

しばらく揉めるような仲良しなような会話が続き、ようやく落ち着いたようだ。

「あー、なんか」めんな。で、何か用? 「

悪いことした気分だつたので結局普通に用件を訊く。するとようやく気を取り直したリーダーが前に出て、仕切り直すように咳払いをした。一応言つておくとリーダーはオレより背が低かつたので全く迫力がなかつた。

「えー、我々は観月紫蘭殿に用があつて参つた」「シラソに?」

振り返るとシラソはもう座つていなかつた。つか家の中に姿が見えない。リーダーも家を覗き込んで同じことを思つたらしい。

「紫蘭殿は?」

「何の用だ」

「つおつー」

「せなり隣から不機嫌な声がしてリーダーが飛び上がった。シラソせつき以上に面倒臭そうに顔をしかめてオレの隣で足を止めた。なに、裏戸から出でぐるりと回ってきたらしい。普通に出てくれば良いものを。

「お前らがあの不幸の手紙モドキの送り主の仲間か？」

「その表現は酷くないか！？ しかもモドキって中途半端だな！」

「どうなんだ」

「ひこつ」

無駄に不機嫌オーラで田付きの悪いシリコンは確かに怖い。ちよつとリーダーは後ずさつた。しかし部下一人がいることを思い出し、少し勇気付いたのか、もつ一度咳払いをすると胸を張つて言つた。

「よ、用件はあの文書の通りだ！ 来てもうら「断る」お、う……」

言葉が終わるのも待たずに否定されたせいか、リーダーの台詞は尻窪みに終わった。何だか落ち込みやすいらしい。

「リーダー！ 根性ですぜ！」

「ファイトですっ！」

部下の声援に向とか再びシリコンに向き直すが、もはや始めの勢いは微塵もなく。

「あ、あの、俺らも仕事でして、ね？ 話だけでも……」「手紙は読んだ。答えは行かない。それで良いだろ？」「はい、え、あー、でも話、もつちよつと……」「断る」「…………」「…………」

心が折れたリーダーは部下に慰められていた。ずーんと沈んでいた。もう駄目だ、俺は駄目な男、役立たず……、とかいう呟きが聞こえてくるのが何とも居たたまれない気分にさせる。

「……なあ、もう少ししゃらい話を聞いてやつても良いんじゃないかな？」

贖罪、というわけでもないが、ついついそんなことをシランに言つていた。しかしそれに対するシランの答えも実に素つ氣ない。

「あいつらは俺にこの特区を出て行つて欲しいんだ。お前はそれでも良いのか」

「うん、よし、可哀想だけど今日は諦めてもいいわ」

「……お前は本当に単純だな」

ちよつとシランに呆れられたけどこれは曲げられない。俺はシランと離れたくないし、シランだって街は出たくない。なら、うん、諦めでもらおう。

「しかしここからもしつこいな」

「へ？」

「五回は断りの手紙を出してくるのに、とうとう人まで寄越すとは、どういまで」執念なんだ」

苦虫でも噛んだような顔をしてシランが吐き捨てるよつて言った。ふと疑問に思った。

「なあ、差出人は誰なんだ？」

「日本政府だと名乗ってる。まあ本家はとつぐのとつに解散してい

るから、騙りか看板として使っているのか、或いは……」

「何だよ日本政府つて」

「まあ、」Jの特区の中央区みたいな役割の組織だ。随分昔に匙を投げたから、今はこつして自治組織が発達して小さな国のような街が点在しているがな」

「わ、私たちはそんな無責任な政府に代わり人々を守るために出来た新日本政府なんです！」

部下Bがいつの間にか近くにいた。拳を固く握り、力強く言い放つ。

「基盤となつたのは元日本政府ですが、今ではたくさんの人達が一緒にになって暮らしを良くしよう、多くの人を守りうつて頑張つてい るんです！」

「だからあなたの協力が必要なんですね。来てくださいよダンナ」

部下Aも追撃の言葉を言う。そしてリーダーが一人に背中を押されて再びシランの前に立つと。

「お、お願ひ、しますっ！」

頭を思いつきり上げた。今にも土下座しそうな勢いだ。

「ほんと、本当に、ただ一緒に来て、俺達のボスの話、聞いてくれるだけで良いんだ！ 頼むつ、一緒に来てください！」

ここまで言われたら……シランはどうする？ 横田にシランの様子を確認する前に、シランは口を開いていた。

「……断る」

「紫蘭殿…」

「シラン…」

思わずつられてオレも声を上げてしまつたが、シランのやけに静かで冷たい目にぶつかり、それ以上は言えなくなる。

「……行くだけなら、良い。しかし答えを変えるつもりはない。全くない。ただの迷惑にしかならないだろう。だから俺は、行かない」

答えが決まつてしまつていいから断る。シランらしく答えたと言えば答えた。俺はこれ以上何も言えない。

「それに、俺はこの特区と契約する形で暮らす人間だ。簡単には移籍できないはずだ」

とじめどばかりにシランが言い放つ。しかし、意外な反撃があつた。

「特区といひの間では話はついている。あとはあんた次第なんだ」

リーダーが少しビビりながらも勇気を振り絞つてそれだけ言った。オレには良くわからない内容だったが、シランが動搖したのだけはわかつた。

「……明日また来てくれ」

「シラン?」

「本當か! わかつた、出直して来よう!」

「何かよくわからぬけどやりましたねリーダー!」

「良かつたですなリーダー! ゆっくり休みましょ! ゼー!」

三人は浮かれながらも素早く退却して行った。逃げるの、じゃなかつた、帰るの速いなあいつ。
でも……。

「シリコンどうした？ 急に意見変えるなんどどうしたのか？」

「……必要がある」

「は？」

「確認する必要がある。俺は出掛けたからお前は
オレも行くよー！」

何だか少しシリコンの様子がおかしいし、何を確認したいのかも気が
になる。

「ロウはまだいる？」

「……あ。ロウは留守番しているだ？」

ロウは未だに読書タイムだった。今のゴタゴタの最中もずっと読
んでいたのだろうか？ いや、間違いないなく読んでたな。シリコン
以上の読書家かもしけない。

「じゃあ出掛けてくるから家頼んだよ」

「任せやー」

全く信用出来ない返事。だって本から全く顔を上げる」ことをしな
いのだ。でもまあ大丈夫だらう。泥棒なんて滅多にならないし、ロウに
勝てるような人も早々いないから。

それよりもすたすたと既に歩き始めているシリコンの方が心配だっ
た。

「んじゃあ行ってくるー！」

「いつてらっしゃーい」

だからオレは挨拶もそこそこに、シランのあまり大きくない背中を追つて駆け出したのだった。

013 招かれる訪問客【真】（後書き）

学校が始まりました。慣れない環境なのでいつ更新できるかは断言できませんが、とりあえず四月前半にはあと一話程更新出来る、かな。シランはリーダーの言葉を確かめるために稻城さん（何気に未登場）に会いに行きたいが待ち受けるのは変な地区長、副長たち。シランは無事に辿り着けるのか？って感じの話になります。うわ、初めて次回予告っぽいかも。

とにかく頑張るのでよろしくお願ひします。あと、『ダラゴンと僕と彼女と』という短めの小説を移動してきたので良かつたら読んでみてください。

014 容赦無用のお世訪問【紫蘭】（前書き）

さて、区切り所に悩んだ結果、少し長めになりました。今回は新キャラばつかですが、再登場あるのか怪しい奴らばつかでもあります。

まあ副長の彼は『近所なのでまた出るでしょうが。

そんなわけ（？）で新キャラ増量期間に入つていく第十四話、始まります！

014 容赦無用の訪問【紫雲】

「で、どこへ氣なんだ？」

「……とつあえずは半田さんのところを訪ねようと思つ」
「なあなあ、何を確認したいんだよ？ なあ、シクン…」

俺は一度足を止めると、振り返つた。そこには急に止まつたことに驚いた顔のシンがいる。

「な、なんだ？」
「好奇心や暇潰しのつもりなら家で待つて。俺は眞面目な話をしに行く。もし騒ぐようなら直ぐに追い返すからな」

少しこつもよりキツい言い方をしてくるのは自覚している。でもこいつがついて来る必要はないのではっきりと言つてしまつた方が良いこと思つた。ナビ。

「わかつてゐるよ。でもシラソん何か様子おかしいし、だから、その…」

…

言ごとにくせつゝ、少し俯きながら、俺をうかがいながらシンは口ごもつていた。でも流石にわかる。四年間一緒に暮らしてきただからわかるに決まつている。

心配なのだ。いや、不安と言つていいかもしない。でもそつと傷付けるかもしれないから、だから上手く言えない。
……何やつてるんだ、俺は。ここに心配されてどうするんだ。

「とにかく。静かにしてるからね、つこつても良いか？」

「……好きにしろ」

「お、ねいひ」

安心したように不安顔から一転して嬉しそうな笑顔になる。それを見るとやつぱり思つてしまつ。

『うして俺なんだ、と。

「……」

でも今訊くことではない。だから俺は体の向きを元に戻すと再び歩き出した。

「あー、シントーンのシモンも元にシンへどじやないですか」

「……」

「//カキツ」

半田さんの家をノックしようとした時、背後からそんな妙な挨拶が聞こえた。俺はしかめつ面をより深めて、シンは喜色を浮かべて振り返つた。

そこに居たのはボーアッシュショな女の子でも通りそうな、俺より少しだけ背の高い、明るい茶色の髪をした男だ。

第六守衛地区副地区長。それが彼の肩書きだが専ら副長と呼ばれる。そして童顔な彼に合わせたような名前が。

美崎先みさきせん

「シンさんつひこんでくれないんですか？ ひどいなあ、シンくんだつたらちやんとつひこんでくれるのに、差別ですね」

「……シンはそう言つことは言わない」

「あー、そつか。うん、わかりました、任せてくれださー！」

「何がだ」

「大丈夫です。次回をお楽しみに。ね、シンくん？」

「え？ あ、うん」

「よしつ」

「……」

ターゲットロックオン、と言ひ感じの美崎。ガツツポーズまでして……何をやらかす気だ。

「これ以上シンに『いらん』とを吹き込むな」

「ええ！ そんな残酷なことを言わないでくださいよー。」

「……」

俺こそそんな残念なことしないで欲しい。シンに変な知識を植え付けるな。後が面倒だつた。

「にしても、またこつちまで寒くなる格好してますね、シンくん」「そつか？」

その通りだ。今日は多分十月に相応しい秋晴れだがどこか涼しげな空氣漂う気象だ。だから俺は黒いコートを羽織っているし、美崎はカーキ色のジャケットを着込んでいる。そんな面々の中。

シンは涼しい顔して半袖だつた。

寒い、本当に。黒いTシャツに下は明るい茶色の、確かカーポパンツとかいうやつ。

「だつてシランが行っちゃいそつて慌ててたからせ、上着着そびれた」

「……悪かった。取りに戻る」

「寒くねえけど？ 急いでんだろ？ 風邪なんてひいたことないし

大丈夫だつて

「まあ本人が大丈夫なら良いんぢやないですか？」

「……」

二人に言われ、渋々頷く。確かに俺とシンじや全然体力や免疫力が違う。この程度じや滅多なことがない限り体調を崩したりはしないだろう。それに。

「隊長もよく薄着、と言つか上半身裸で歩き回りますからね。このくらこ普通つちや普通、ですね」

「……では何故話題にした」

「何となくです。昨日は急に夏日でしたからね。流石に僕も結局半袖出しちゃいましたよ」

「……そうだな。昨日はそうだった」

今更改まつて言つようことでもないが、やはり異常だとしか言い様がない天気の変わりようだ。四日前はまた雪が降りそな程の冷え込みだつたし。

「で、何かご用ですか？」

「……」

いきなり話題が変わった。眞面目になつたと言つか本題の前振りがようやく來たと言つか。

しかしそれについては何も言つまい。俺はシンとロウだけで一杯一杯だ。美崎については半田さんに任せることにしている。決してシンにいらんことを吹き込む片割れだから逆襲の意味を込めているわけではない。

「半田さんに訊きたいことがあるんだ」

「あー、隊長はちょっと出てるんじばりくは帰つて来ませんよ。僕でわかる範囲でなら答えますが?」

「……」

一つの質問がある。片方が目的を果たす質問で、もう一方が手段のための質問だ。目的のための手段。

……流石に副長ではあまり知らないだり。だからまざと的に辿り着くための手段の質問だ。

「稻城さん、守衛区長に会いたいんだが、今どこに居るかわかるか?」

「守衛長ですか? なら多分今回つてる途中だと思いますよ」

「……回る?」

「はい。守衛長はほんと真面目で優しいのほぼ毎日各地区長を回つて問題がないかとか、報告書の回収をしてくれてるんです。絶対ではないんですけど、悪くても防衛長には会えますよ」

そんな話を聞いたことあるな、と思つた。

因みに防衛長と言うのは外敵、危険な変異種や滅多にないが賊などに対する対策を立てる人だ。位としては稻城さん、守衛区長の次に偉く、地区長の上。守衛区は実は内回りと外回りで分かれしており、内回りの第一～四地区が警備長管轄域、外回りが第五～八地区が防衛長管轄域になっている。まあでも結局は守衛区全体を纏める稻城さんの補佐みたいな役割だ。

最悪防衛長が捕まれば、稻城さんの居場所はわかるだろうし、もしかしたら知りたい話も知つているかもしれない。なら、決まりだ。

「地区長の家を回る順序を教えてくれ」

「簡単ですよ。ぐるっと回れば良いんです。すうりくみたいに」

「……」

「だから、ここが第六なんで第五、第四、第三、って調子で回つて行けばどこかでぶつかるはずなんです」

「どうも第一守衛地区から順々に回つてこらしい。確かに簡単だ、わかりやすい。」

「わかった、ありがと」

「これも仕事ですか」

についつと笑つて答える美崎。

「じゃあ頑張つてくださいね」

「ああ」

「死にたくないればちゃんとノックして名乗つて許可取つてから入室するんですよ」

「……ああ」

何だか恐ろしいものが待つてゐるらしい。よく考へると半田さん以外の地区長とはほぼ会つたことがない。半田さんの愚痴では聞いているが……。

「まあ大丈夫ですよ、シンくんついてるし」

「そうだぞ、頼もしいだろ?」

「……頼もしい、頼もしいが……お前が逆鱗に触れるようなことをしないかが心配だ」

「でも本音を言つなら。」

「一人じゃなくて良かつた、だな。」

「副長はお留守番してなきゃいけないんで案内出来ませんが、まあ辺りの人に訊けば地区長の家くらい直ぐわかるでしょう。御武運を御祈りしますから」

爽やかな笑顔と不吉な言葉に見送られ、俺達は早速第五守衛地区に来ていた。

「なんかさ、守衛地区長お宅訪問ツアー、つて感じだな」

「……お前はどうしてそういう妙な言い回しばかり覚えてくるんだ」「だつてエノキがマンガ読んでくれるんだもん。三人で読むと樂しいんだ」

「……」

「エノキ……榎つて確か第七地区の副長だつたはずだ。そして間違いなく三人とは美崎、榎、シンだ。……副長一人も揃つて何やってるんだ。」

「まあエノキがいつも忙しいから滅多に出来ないけどな」

「……まあ、地区長が大変らしいからな」

これは半田さん情報だ。第七の地区長はちやらんぽらんで榎が可哀想だ、とか言っていた。榎は眞面目な方らしい。と言うかいろいろ話を聞いて思つたが、地区長と副長のペアは眞面目と不眞面目でセットみたいな決め方なのだろうか……あながち一笑には伏せない生々しさがあるな。

「……ほどほどにな」

榎にとつて迷惑なのか息抜きなのかわからなかつたのでとりあえず

ずそう言つのみに止めた。

そしてそんな会話をしている間に目的地についてしまつた。第五守衛地区長モ。お隣のもあつて良く噂を聞く。

口が悪い。美人なのは否定しない、でも性格悪いのも否定しない！ 口と暴力が同時進行。ドラ。容赦なし。

しかしそれでも地区長をやれているのだし、まだまともな人、であると思いたい、願いたい。

「……」

深く息を吸う。気に障ることをすると地獄を見るらしい。なんで俺はそんなおつかない人の家を叩かなくてはいけないのだろうか、という疑問すら過る中、意を決して手を上げた。

「コン、コン。

「名乗りな

もしかしたら半田さんと同じように留守かもしれない、という希望は打ち碎かれた。なので用意していた言葉をはつきりと述べる。

「第六守衛地区に住む觀月という者ですが」

「ああん、あの間抜けのことだあ？」

いぶかしげな声と共に扉が内側に開いた。覗いたのはきつい顔の、確かに美人なのだろう。日に焼けた少し浅黒い肌に、豹を彷彿とさせる鋭い目や鼻は整っているからこそ威圧感のようなものを強く放つていた。

「何の用よ」

「稻城さんに会いたいんです」

「守衛長？」

怪訝そうに眉を吊り上げる。その顔はかなり怒つてこむように見えるが、多分怒つてはいない。そういう顔なのだと思つ。

「守衛長はまだ来てないよ。どうせ上野のところで止まつてんでしょう上野……？」

「第三のやつ。とにかくここには居ないの。……もしかして順番に回つてんの、あんたら?」

「ああ」

「そ。なら次は三好^{みよし}ね。あそこは無駄に黄色いからわかりやすいでしょうか」

「わかった、ありがと」

「ええ、じゃあね」

ばたん、と乱暴に扉を閉められたが……意外とまともな人だった。やつぱり地区のリーダーをやつているだけあって無茶苦茶な人ではなかつた。わざわざ家の特徴まで教えてくれたし、普通に親切な人だつた。……まあ、良かつた。

「次、行くか」

「おつづ」

「地区長は不在ですが、何かご用ですか?」

「守衛区長はまだ来てませんか?」

第四地区長宅は本当に黄色かつた。卵色という感じに綺麗に塗られたその家の戸を叩くと出てきたのは柔らかな物腰の女性だつた。

栗色の髪は長く伸ばされ、癖があるのか先は軽く跳ねている。髪に似た明るい茶色の瞳は小さく、色白で、さつきの人とは真逆のような人だが、やっぱり美人なんだろう。

その人が俺の質問に首を傾げる。栗色の髪が砂のようにさりせりと溢れるように揺れた。

「守衛長、ですか。今日はまだいらしてませんわ

「そうですか」

なら次は第三か、と考えながら礼を言つて立ち去ろうとしたところを引き留められた。

「もうすぐいらっしゃると思ってます。」
「お待ちしてはどうですか？」

それは少し嬉しい誘いではあったが、第五地区長の言つていた「どうせ上野のどこで」というのが引っ掛かる。いつもそこで時間がかっているようだ。そしてそこは第三地区。なら直接行つた方が早そうだ。

その旨を告げると相手も直ぐに引き下がり、扉は再び閉じられた。

「そんなに急ぐのか？」

「出来れば手間は取らせたくない。歩きながらでも話を聞ければと思つてな」

「ふうん。しつかし今の人、綺麗だったなー」

「……そうだな」

シンはいろいろ疎い割にはそつこつと話していく。だからといって女性に興味があるわけでもないよつて。思ったこと感じたことを素直に口にしているだけらしい。

「地区長んちに居たつてことは副長だろ？ 多分すげえ強いんだぜ」「……お前がそんなことを言つたら怪物になつてしまつ」

無茶苦茶な馬鹿力で人並み外れた戦い方をするシンより数倍強いなんて人がいたらよつぱど人の棒からぶつ飛んだ人だ。それこそ化け物だろ？

「それにさつきの人は下手すると母さんよりも細腕だつただ」

パンツ。

「 ろ……」

乾いた音が短く聞こえた。

事態が把握出来ず棒立ちになり、続く言葉は霧散してしまつた。シンの腕に見えるもの。

一瞬火傷に見えたが違つた。網目模様のようなもの。でも模様ではない。それは立体的にシンの皮膚に浮き上がり、錆びた金属のような色に鈍く光るもの。人にはないものだ。

ウロコ。ドラゴンの鱗だ。シンをドラゴンたらしめるものであり、シンを人間の枠から弾き出す象徴でもある。

そのトカゲの皮膚のような鱗がシンの腕に現れていた。いや。腕だけじゃない。頬や首筋、多分服に隠れたところにも、ぽつぽつと浮島のように赤銅色の欠片が出てきている。

気が付けばシンが俺を庇うように立ち、扉と対面する形になつていた。

「シラソ狙うなんて良い度胸だな……殺されてえのかよ」

シンの怒りに呼応するように皮膚が赤く燃え立つ。

「わたくし私を侮辱した貴方を、赦す訳には行きません」

「ぎい、とゆつくり開かれた扉からまず覗いたのはこちらを狙う銃口。次いで先程応対した女性だ。静かな鬼が睨んでいる。そんな表現が似合つ。

「退いて下さい」

「やだ」

「そうですか。貴方も私の力などちつとも怖くないと、戦力になどならないと申したいのですね？ 良いでしょ？ その考え、私が撃ち抜いてみせましょう」

力チャヤ、と銃口が位置を変える。狙うのは恐らくシンの額。頭が真っ白になりそうだ。

ふと蘇るのはいつかの半田さんとの他愛もない会話の欠片。

「二重人格タイプはゴエーよな」

今なら俺もそれに答えられる。全力で肯定しましょう。

怖い以上に危険人物じゃないか！

どうしよう、ピンチだ。紛れもないピンチだ。かなり怖い状況。シンが静かだ。喋らないという意味もあるが、それだけじゃない。何と言うか、空気が張る、鎮まる、そんな感じなのだ。緊張とか気を研ぎ澄ますと言つたものからなのか。とにかく怖い空氣。

このままじや殺人が起きる。それがシンが怒りのまま女性を殺すのか、女性の銃で俺が撃ち殺されるのかは知らないけど。

でも。嫌だとつちも。

シンは息を止め、足に力を込めた。

女性は拳銃に掛けた指に力を込めた。

次の瞬間にあるのは殺し合いだけだ。やめろと言いたいが殺氣に満ちた空気呑まれ、上手く声を出せない。だからシンの肩を掴んだ。その気になれば簡単に振りほどかれるだろうが、思わず掴んでいた。

誰よりも人間が好きなやつだと思うから。誰よりも優しいやつだから。

やめてくれ、シン。

頼むから。

でも、シンが撃たれたら ?

そんな迷いを嘲笑うかのように響く音が、俺の耳朶を容赦なく打つた。

パンツ。

015 やがて辿り着く場所【真】（前書き）

視点はシンに戻ります。
さて、第十五話をどうぞ。

015 やがて辿り着く場所【真】

パンツ。

肩を掴む手が力んだ。

ちつとも痛くないがスゴく痛い。その手から伝わってくる思いが痛くて重くて、結局俺は出遅れた。

しかし、女も似た理由で出遅れていた。

そうしてこの場にはただただ間の抜けた空気が漂い、気の抜けた音だけが響いたのだった。

「喧嘩しちゃ駄目じゃないか。しかも僕の家の前で」

張り詰めた糸を切ったのはただの手拍子だった。続いて割り込んだやたら緩い場違いな声が、緊迫した空気を完全に破くこととなつた。

「地区、長……」

「また拳銃抜いちゃって、美那ちゃんたら血の氣多すぎだよ。せ

かくの美人さんなのに、どうしてそう直ぐ実力行使に出ちゃうかな?

?

「すみません……でも、侮辱されるのは見過^こせません」

「悪気ない時もあるんだよ? 少しは分別を持^とうね、良い?」

「……はい」

そんな会話により女は肩を落とすと、大人しく黒い怖いものを下ろした。そしてようやくオレとシランが解放される。ほっと息を吐いたのは多分二人同時。肩の力が一気に抜けた。

ふと闖入者が振り返った。何だかほわほわとした笑みを浮かべな

がら、でもちよつと困った感じの声で言った。

「迷惑かけてゴメンね。ほら、美那ちゃんもちゃんと謝る」

「……すこませんでした」

素直に謝った女を見ても何だか怖くて、とりあえずシランの近くにこようと心に決める。またあの危険なのを出された時でも対応出来るように。やうしてようやく助けてくれた声の主をちゃんと見ることが出来た。

薄い茶色の髪に、同じ色の瞳は優しげに緩んでいる。一見若そうだが、何だかおじいさんのようなゆつたりとした時間の流れを纏っている感じで、年齢ははつきりしない。とにかくにっこり笑顔だ。

「君たちが真太郎君と紫蘭君かな？」

「なんで名前を……」

「初めてそう呼ばれたかもー」

「…………」

真太郎って。

自己紹介でも滅多にフルネームを名乗らないし、最初に呼んだシランが「シン」だったのでそれで良いかな、と納得していたし気に入つてもいた。周囲もシランが呼ぶのに習つてから今までそのまま呼び方をした人は多分いな。

「あ、そつなの? やつた、一番乗りだね」

「だなー」

「……あの、話戻してもいいか?」

「どうぞ」

シランの申し出にこじかに応じる男。そつにやオレ達のことは

何故か知つてゐみたいだが、オレはこいつを知らないぞ？ シランも同じことを思つたらしい。でも少しほはオレよりわかつていたらしい。

「あん……や、あなた、が第四地区長ですか？」

途中女に睨まれて慌てて言葉を修正するシラン。オレは女を睨み返す。シラン睨むんじゃねえよ！

険悪なムードで睨み合つ一人。しかしこいつの雰囲気なんて氣付かないように、男は変わらずにこっやかに答えた。

「そりだよ。僕が地区長の三好小々路。^{みよこじいろ}こいつちが僕の補佐役をしてくれる副長の椎名美那ちゃん」

「あ、俺は観月紫蘭でこいつが異真太郎で」

「うん知つてる」

「……何故、ですか？」

「まー……あ、いや。正哉君から聞いてるからね。君たちのことば^{まなざわ}」

イナギマサヤ守衛区長をマサヤ君なんて名前で呼んでる人、初めて見た。新鮮だな。つか本当にこの人何歳だろ？ 確かイナギさんは四十八だつて聞いたな。……同じくらい、なのかな？

「で、こんなとこに居るなんて、何か用かな？」

「あ、そう、守衛区長に会いたくて来たんです」

「ああー、なるほど。彼ならまだ葉月君のところだね。まだ来ていないのなら」

「ハヅキ、君？」

「上野葉月君。守衛区の第三地区長だよ」

「ああ……わかつ、りました。そつこに行つてみます」

シラン敬語とか苦手だからな。今の不自然なところは多分「わかった」と言い掛けたところを直したんだろう。ま、オレはシラン以上に敬語とか使わねえけどな。

「うん、気を付けてね」

「……はい」

一番の危険人物はあんたの隣に居るよ！ と叫びたかつたがこれ以上シランが狙われる理由を作りたくない。早く行こうぜ、とシランに目配せする。

しかし何故かシランはそれを無視し、なんとオレの前に出た。ギヨツとして慌てて戻そうとしたが「大丈夫だ」の一言で聞いてくれやしない。確かにミヨシってやつが出て来て大人しくなったけど…不安なんだよ。

だからオレはせめてシランの隣に立ち、いつでも庇えるように構える。

「椎名さん、でしたか」

「……何でしようか？」

まだ怒りが残っているようだ、女、シイナは睨むようにシランを見た。

「さつきの会話、言葉はあなたを侮辱するつもりで言つたものではありません」

「……」

「でも誤解させたのなら、謝ります」

「え……？」

「すいませんでした」

抵抗なく、シランはすっと頭を下げた。逆にシイナはきょとんとして呆気に取られている。謝罪は全くの予想外だつたんだろう。オレだつて予想外だ。

「許してもいいえ、ぬか？」

敬語はやめたらしい。顔を上げたシランは真っ直ぐにシイナに向かひ合つた。シイナは戸惑つていたが、ミヨンに小突かれてようやく口を開く。

「もうこいつ」と、やしたら、あの……」

あたふたと意味もなく手を動かしていたが、直に落ち着くところを見つけたのか、栗色の瞳で黒瞳を見返した。

「私の早とちりで銃を向けてしまい、申し訳ありませんでした」

はつきりそつと、綺麗なお辞儀をした。花が日が落ちるのに合わせてゆつくりと頭を垂らすよつと。そして太陽に照らされた花が起き上がりゆつくりと開くよつと。シイナは顔を上げた。
それを見て、シランはほつと表情を緩めた。安堵の息を一つ吐くと、また口を開く。

「申し訳ないと思つてゐるなら一つ、約束して欲しいんだが……」

「……何でしようか？」

「……どんなに怒つても、銃を撃つのは最終手段にしてくれ

げんなりした顔で心底そう願つ、といった口調でされた申し出に、シイナはちょっと驚いたような顔をしてからクスッと小さく笑うと、了承するよつと微笑んだ。

「わかりましたわ」

「ありがとう」

「本当に大丈夫、美那ちゃん？ 約束できるの？」

「善処致します」

怪しいよなあ。だつて多分地区長のミヨシにも散々注意されてるだろうし。大丈夫かあ？ と思つたが。

「俺は信じる。だから約束守ってくれよ」

「はい」

楽しげに笑つて答えるシーナ。何だよせつさまで睨んでた癖に。シーランもあつさつ許しちゃつてせ……つたぐ。

「ほりシラン行こうぜ。オレはシーランの安全を確保する義務があるんだ！」

「義務はないだろ」

「つむさいー それより……」

我慢して來たがシーランの顔を見たらやつぱつ心配になつてきた。真剣な視線を感じたシーランがちょっと怯む。

「な、なんだ？」

「流れ弾！ 来てないよな？ 大丈夫だよな？」

と言ひながらももう勝手にチェックを始めてしまう。顔とか腕をぺたぺた触つて確認、確認。

「お前なあ……大丈夫だ。お前が守つてくれたからな」

「ほんとか？ 本当に痛いとこないんだな？」

「それよりお前は大丈夫だったのか？ 弹丸、ビード受けたんだ？」

「あ？ 腕だけど」

言いながら一応腕を見てみる。鱗はミヨシが割り込んで気が緩んだ頃に引っ込んでしまったので、今は普通の人間みたいな皮膚だ。でも特に傷痕はないし、違和感もない。そもそもあんな小さい弾くらいじや貫通出来るわけないし、傷もねえよ。だから簡潔に答える。

「鱗で受けたから平氣」

「そう、か……良かつた」

シランもほつとしたらしく、不機嫌な中に喜色が滲む。慣れないとわかりにくいけどな、シランの表情の変化は。

「怪我がないようで良かつたよ。美那ちゃんも、約束したからには本気でその癖治して行こうね？」

「はい、地区長」

癖なのかよ……なんつづ物騒な癖なんだ。シランも苦笑いだ。

「では失礼します」

「良かつたらまた遊びに来てね。美那ちゃんのケーキはとっても美味しいから

そんなについつ笑顔の地区長と、ちょっと表情が柔らかくなつた副長に見送られ、オレ達は恐らく「ホールへとなる家へと足を向けたのだった。

「」の辺り、のはず。……もつ一人くらい訊いてみるか

そんな風に一人づぶやくシランを揺すって名前を呼ぶ。鼻がわかつていることを教えるために。シランはいつも皺の寄り気味な顔で振り返る。

「シランシラン」
「……なんだ？」
「あの家だつて、多分」
「どうしてだ？」
「イナギさんの匂いするから」
「……そつか、流石だな」

納得すると素直に感心したように頷くシラン。イナギさんの匂いが近い、強い。だからあの家にいるんだとわかる。

「へえ、君、鼻が良いんだね」
「ん？」

振り返ると男が一人立っていた。氣付かなかつたけど、一体いつから居たのや。ひ。

無駄に意味ありげな風に青闇色の目を細めた男は、真っ黒な外套を纏っていた。背はオレよりも高い。てか足がすらっと長い。口を愉快そうに歪めた黒髪の男は、オレを真っ直ぐに見ていた。

「やあ」
「……？ 誰だお前？」
「まあ、初対面だからね。俺は遙。よろしくね」
「ハルカ？ オレはシンだ。えと、よろしく？」

「じゃあついでに狼君にもよろしく言つとこでね」

「あ？ それ口ウのこと？ お前何なん」

とオレが問い合わせる前に、既に用は済んだとばかりに男は口を閉じると、深みのある笑みを口元に浮かべたまま背を向け、直ぐにスタッフと歩き去ってしまったのだ。

……何だか消化不良と言つつか、納得行かねえ会話だつたな。

「何だつたんだ、あいつ？」

「……わからない。しかし鼻が良いな、と褒めていたといふことは、お前の判断は正しい、といふことじやないか？」

「うーん、まあそうだな……入るか」

さつきのことはあまり気にしないことにした。確かにあいつは肯定してたからイナギさんは間違いなくあの家に居る。ならシランの目的が果たせる訳で、なんも問題ない。うん、よし。

「行こうぜ」

「ああ」

シランはオレがさつき指差した家へ真っ直ぐに向かった。しかしふと予感がしたので手を伸ばすと。

「わっ

シランの襟首を掴み引き戻した。そこでもたふと思つた。シランは安全圏に入つたけど、オレはどうするんだ？ その答えが出る前にそれは勢い良く。

「うひ。

丁度シランと入れ替わり自然と前に一步踏み出したところだつた。そこへほぼ同時に踏み込む人がいたのだから……まあそうなるに決まつている。そして幸か不幸か背の高さはあまり変わらなかつた。だから盛大にぶつけたのは互いに額、頭だつた。

「つてえ！」

「つ！ つ、つ……！？」

火花みたいなのが見えた気がする。目がチカチカするぞ……。オレは数歩後ずさると頭を押さえ、顔をしかめた。

しかし相手の方が勢いがあつたせいか、声も上げる余裕すらないらしく、尻餅を付いたまま深く踞つてしまつた。

「……大丈夫か二人」

「オレは平氣だけどよお」

最初は痛かつたが直ぐに痛みは引つ込んでしまつた。ドラゴンならではの回復力。だけど衝撃やら痛みで危うくドラゴンの鱗が出てしまうところだつた。銃弾もへつちやらな鱗に人間の頭が思いつき衝突したりなんてしたら……どうなるんだろ?

「うわ……すみません、慌てました」

ようやく痛みから復帰しつつあるようで相手も顔を上げた。シランくらいの年だと思う。薄い黒の少し野暮つた髪の青年は、つり目に涙を溜めてオレを見上げた。立ち上がる程は立ち直れていないらしい。

「オレの方こそ何か、ごめん」

今日は何だか扉と縁があるのかね、と思いながら青年が飛び出して来た扉の方に田をやると、武骨な困った顔にぶつかつた。

「あー……まあ、なんだ」

扉の向いへ、つまり青年の出てきた家の中に立つ大男は、そのまま体に似合わず何だか安穩とした雰囲気を纏つて言った。

「まあは落ち着いてつか、お前ら」

。

「でも！」

「まだ子供だったんだろう？ 気を付けるよ！」他にも言つておく。
それで良いだろ？」

「良くありません！ 危険度を貴方も存知でしょう。」
「だが子供は脅威ではないだろ？」「

「成体になつてからでは遅いんです！ だから俺が

「……まあイナギさん」

「なんだ？」

「いつまでこれやんの？」

「うむ。上野が落ち着くまでだな」

「わかった

「わからなくて良いです離してください～」

何故かイナギさんの命令で青年、ウエノを確保していた。つか羽交い締めだ。結構力のある抵抗が返つてくるが、本気で押さえてしま

まえはオレに断然分がある。……でも何だろ、この状況？

落ち着けと言ったイナギさんを無視して走り出そうとしたウエノを止めると言われたので、ついつい素直に捕まってしまったらこうなってしまった。身動きの取れないウエノが大男なイナギさんを見上げる形で抗議している。因みにシランは後ろで沈黙だ。

イナギさんは尚も暴れるウエノを見て、深々とため息を吐くと、とじめとばかりに言った。

「お前は地区長なんだ。もう少し泰然と構える。仲間が不安がるだろ？」「

「そう、ですが……」

「副長はもう卒業したんだ、自覚を持って、上野」

「……はい」

随分と厳しいな、と思った。こんなイナギさん初めて見た。いつも怖そうな顔だけど、普段から優しくて穏やかな人だから。仕事の時はやっぱり別なんだな、と思った。

しかしウエノがようやく落ち着くと、ほんのちょっと顔が緩み、空気が和らいだことを感じる。

「とにかくその件は保留だ。まあ、暇な時間に無理のない程度であれば俺がとやかく言うことじゃないがな」

「はい！あの、取り乱してしまい、すみませんでした……」

「シン、もう離して良い

「わかった」

抵抗はもうなかつたので普通に解放した。すると直ぐにウエノは振り返るとオレをまじまじと見てきた。

「なんだ？」

「あんなに抵抗したのに全く外れませんでした……」

「どうも驚いてるらしく。確かにこの男自身も見た目と反してかなりの馬鹿力だ。だからそれなりの自信はあったのだろう。

「他地区の人、ですよね？ 見掛けない顔ですし」

腰の刀に刃を向けて言う。まあ武器を持つていればほほ間違いなく守衛区の住民だからな。傭兵とかもあるけど、服装や装備からして違う」「とは一目瞭然だ。

「そうだけど」

「……刀。もしかして觀月さん？」

「……觀月は俺だが

とよひやく隅に面したシランが前に出た。やつぱつシランは翻つと有名だよなー、と思つ。

「ああやつぱり。鐵さんの面影がありますね」

ウエノは顔を綻ばせて言った。クロガネ、こうのは確かシランの父ちゃんの名前だったはずだ。しかしシランはムスッとした顔で答えた。

「そうですか

良くなは知らないが、あまり父ちゃんのことが好きじゃないらしいへ、シランは父ちゃんの話になると不機嫌度が上がるのだ。それを感じたのかウエノもそれ以上は言わなかつた。

「じゃあ君が紫蘭君なんだね。噂には聞いていたよ。でもじゃあ彼は……？」

オレを不思議そうに見るウエノ。何か言つ前にイナギさんが口を開いてしまった。

「半田から聞いただろ？ シンだ、ドランの」「ああ！ 彼がそつなんですか！」

田を丸くするウエノ。対称的に渋い顔になるシラン。

「半田さん……」

「心配するな。別に言い触らしているわけではないぞ。必要な時に対処出来るよう、限られた人にしか彼は教えていない」

「そう、ですか」

何だか思い詰めたような顔で俯くシラン。心配になつて声をかけようとしたが、その前にイナギさんが苦笑した。

「お前も背負い過ぎだ。もう少し軽く考える。一人分も背負つてたら潰れちまうぞ？ そんなに頼りないか、俺達は」

「……俺が弱い、だけだ」

「お前も大概、不器用だなあ」

苦く笑いながらイナギさんはしゃくしゃくシランの頭を撫で回した。それを見て、何だか寂しくなった。理由はわかんないけど、やつぱり寂しい気がした。

「守衛長つてお父さんみたいですよね」

いつの間にか隣に並んで立っていたウエノが微笑んでオレに言った。でもオレは答えられない。答えを知らない。ふて腐れて見せるところ虚栄すらり出す余裕もなく、ただぼんやりと呟いた。

「むといひやく……」

オレの知らないものだ。

015 やがて辿り着く場所【真】（後書き）

苦労性な葉月くんが何に困っていたかの説明がないんですが、……話すと長くなるのでスルーしてしまいました。とにかく変異種のことです。何かと巻き込まれる葉月くんは本編の裏できつと苦労しているんです。何気なく気に入ってるキャラなんですけどね。

016 進むべき道を探して【紫蘭】（前書き）

今回は本当にタイトルのまんま、真面目にやつこいつ話です。おせつ
かこと書つか心配性なキャラづかですね。理由は一応あるんです
が。

まあそんな感じで十六話、シラン視点でお送りします。

016 進むべき道を探して【紫蘭】

「ああ、あの話な」

ようやく落ち着いたところで直に起つた出来事を簡潔に伝えると、そんな反応が返ってきた。

「では本当、なんですね?」

「人聞きの悪い話だがな、本当だ。すまんな、話していくなくて」

「……」

「紫蘭が移籍した場合の扱いの確認、こちらが何を代わりに得るか、お前に対する交渉に関する制限、が取り決めの主な内容だ。お前やこの特区が不利にならんようになると、あちらの話し合いで感じた」

「……はい」

「お前抜きに話を進めたことは本当にすまなかつた。だがお前は馬鹿に真面目だ。下手に話しておくと変に悩むと思つて伏せていたんだ。悪かつたな」

「いや……案の定、といった感じなので、反論は出来ない」

「わづか」

しかし少しほつとしている自分がいた。見捨てられたわけではなかつた、なんて見当違いな安堵。矮小な自分が露見するようで、非常に嫌だつた。でも安心してしまうのは仕方ない。

「わづかことだ。だから決定権は間違いくつお前だけのものだし、その辺りの取り決めもしつかりやつた。それを破つて来たらそれなりの対処をすることも伝えた。もちろん、具体的にな」

悪戯をした子供のような顔をしてみせる稻城さん。この特区はか

なり強い。力での意味ではない。それも確かにあるが、何より信用がある。発言力も強い。だから報復の内容も大体予想がつく。そしてそれなら流石に相手も無茶はして来ないだろうと安心出来た。

「……ありがとう」

「なに、お前らを守るのが俺の役目だ。当たり前だろう」

そういう人だ、稻城さんは。

手の届く範囲全てを気に掛け、全てを守るのだ。それは嘘ではないし、それがこの人の矜持。そしてそれを貫き通した結果が今、第八特区全てを守ると言つても全く過言ではない役職、守衛区長だ。今や、稻城さんの手は特区全体にまで伸びている。

こんな凄い人、俺は他に知らない。だから稻城さんは誰からも信頼され、尊敬されている。それもまた、当たり前のこと。

「しかしな、紫蘭」

「何ですか？」

妙に真面目な声に、改まる。稻城さんは真っ直ぐに俺を見て言った。

「お前はあまりに外を知らない」

「……」

「鐵ほど極端なことをやれとは言わないし、まあ、やられても困るんだがな」

と、急に少し締まらない顔になつた。この差がなかなかに脱力させられる。ついさっきまでの神妙な雰囲気は、あつという間に霧散してしまつた。稻城さんは気にせずそのまま続けてしまう。

「だから、なんだ……見に来て話を聞いてくれないかつて話なんだ
わ！」

言わんとしていることはわかった。しかし答えが出せないので沈黙のまま続く言葉を聞く。

「だつたらせつかくだ、行つてみたらどうだ？　見学？」
「……偵察してここ、と？」

意地の悪い返しだつた。我ながら嫌な性格してると思つ。しかも答えから逃げるために絞り出した台詞だというのが何とも嫌になる。しかしそんな自己嫌惡の渦にも稻城さんはひょいと入つてしまつのだ。

「そう取つた方が氣が楽ならそれでも良いけどな。まあ謎の組織だ。それも助かるな」

「……すいません」

「謝るな。確かにそういう意見が出たのは嘘ではないんだから。ただ俺としてはだな……」

そこで凶切ると稻城さんは俺を見た。何かを読み取つとするかのよつて。そして照れ臭そうに笑つて言つた。

「余計なお世話かもしけん。けど俺は結構心配してゐるんだ、お前をな。少しばかりを見るようになつたが外はまだだらう。だから俺はお前にいろいろ見てきて欲しい。このまま閉じ籠つて押し潰されないように、な」

考え過ぎだと我ながら思うんだがな、と付け足すが、本当にそう思つてくれることはわかつた。心配されている。本当に、本当に

……俺は周りに迷惑をかけてばかりだ。

「ただでさえ狭くなつた世界なんだ。全てを見るのは容易くて難しくなつた。あとは踏み出すか否かなんだ」

「……外には、森の向ひには、何があるんですか？」

稻城さんは怖く見える顔を精一杯緩ませて言った。

「その答えをお前が見つけるんだよ」

踏み出せるのか？

俺は見付けられるのか？

そして。

あいつの「」とも、答えを見付けてやれるのか？

でも、きっと足踏みしているだけじゃ何も変わらない。きっと前に出わなきやどこにも行けない。

答へば見つからない。

なら、今俺が持つ答えは一つ。

「行きます」

間違つてゐるかもしれない。けど、「」に座つてゐるだけじゃそれすらわからないのだから。

「気を付けて行つてこいよ」

稻城さんは和やかな笑みを浮かべたかったんだと思つ。声はとても優しい温かな低音だつた。

「こつでもおいで。何もないところだけど、相談に乗つたりくらいは出来るから。ちょっと俺達似てるみたいだし」

半田さん程頼りがいがないかもしないですけど、と苦笑しながら言つてくれた上野さんに礼を言つと、俺達は直ぐに立ち去つた。長居するつもりは元からなかつたから。しかし。

「……そういう約束ではあつたが、どうかしたか、シン?」

上野さんの家を出てからも延々と黙りを続けるシンに心配になつてきた。何だか様子がおかしい気がする。何というか……寂しそうな雰囲気。シンはゆっくりと顔を向けた。

泣きそうな顔に見えた。

「なあシン!」

心なしか涙声のシンは、小さな小さな声で言つた。

「父ちゃん、つて何だろな

「…………」

「母ちゃんつてスズさんみたいで、兄弟つてシランとかロウで、そんで、そんで

「…………シン」

「父ちゃんつてなんだろ、そもそも家族つてなに? オレは知らない、知らない、知らない!」

ああ、あの時だ。

初めて出逢った時の心の悲鳴みたいな叫び。胸を刺すような痛々しい表情。わからなくて戸惑って、何だかわからない感情に押し潰されそ�で。

俺はどうすれば良いのだろう。

なんでシンの父はここに居ないのだろう。

「……シン」

「教えてよ、オレは知らないから、教えて、誰か教えてよ……」

泣いてないけど泣いていた。

「わかんない、わかんないんだ。父ちゃんも母ちゃんも本当は知らない。家族だけじゃない、本当はオレ」

「もう良い」

ピタッとシンは止まつた。視線を感じるのに俺は顔を伏せたままだった。怖いのだ、その真っ直ぐ過ぎる目が。自分を感じるその曉色が。

「俺にだってわからない。わからないから、だから」

それでも口は勝手に動いて、勝手に願つて、勝手に。勝手に祈つていた。

「探しに行く。俺は探す。答えを持つものを、見付けに行く。見付かるかなんて知らない。けど、俺はちゃんと」

答えを出したいんだ。きっといつか、胸を張つて答えられる何か

が欲しいんだ。シンやロウを背負えるような、守れるような、何かを。

傷だらけな彼らを溢したくないから。また一人ぼっちにならなくていいから。だから。

「いろいろなものを見て、聞いて、知つて 見付けたい、答えを。
その意味を」

「……なら、オレは」

気が付けば顔を上げていた。見えるのは泣きたそうで泣けなかつた、中途半端な苦しそうな顔。潤んだ朝焼け色の瞳は、それでも迷うことなく真っ直ぐで。

哀しくなる程真っ直ぐで。
曲げることを知らないで。

「シリヤン、守る」

だから張り合つてしまつ。この瞳を裏切りたくない。だから俺も愚直に進む。間違いは正しながら、迷いは向き合いながら。

俺達は前に進めると信じてる。

そう、信じてる。

017 夕暮れ時の小さな影法師【狼】（前書き）

ようやく出番の少ないロウ君のターンです。そのせいかは知りませんがちょっと長めになりました。

シンヒシリコンの間みみたいな彼視点で送る第十七話、始まります。

017 夕暮れ時の小僧な影法師【狼】

「あれ、あいつらまだ帰つてねえのか?」

日が大分傾き、濃い影を落とすよになつた頃だった。薄暗い家に顔を出したのは、厳つい顔だがどこかのほほんとした雰囲気を持つこの地区の頭、ハンダさんだつた。

「まだだぞっ。何か用か?」

「いやあ、オレが留守の時に来たらじこからせ、無事守衛長に会えたかなと氣になつてな」

と言いながら慣れた調子で家に入つてくると普段は使われていない口ウの左隣の席に腰を下ろした。

「守衛、長?」

聞いたことある氣がするが、誰のことだうと引っ掛かり、首を傾げてみせるとハンドさんは苦笑した。

「稻城の旦那のことや。この辺りが守衛区つて呼ばれてることは知つてんだろ?」「うん知ってる」

「で稻城さんはその守衛区の長だから守衛区長なんだが、街の防衛に関しては一番上にいる人なんだよ。だから一部の奴ら、特に俺みたいな人は尊敬とかそんな意味を込めて『守衛長』、守る長とある人を呼ぶ」「ほー」

イナギさん。何だかんだで会えていない人だけ、ハンダさんとかたくさんの人に慕われてるなんて凄い人なんだな、とちょっと期待が高まる。

「あー、まあそんな大袈裟に捉えて呼んでる人は少ないかもしんないけどな。実質的に守衛長だからそう呼んでるだけかも」

期待の目で少し見てしまったからか、控え目に言い直されてしまった。でもそれは関係ない。ハンダさんがそういう意味で呼んでるだけで十分意味があると思うから。

「いつか会えると良いなあ」

「同じ街だし住んでりや会えるわ。お前の仕事ない時に今度回つて来たら教えようか?」

「ほんとかつ！」

「あ、おお」

怯むハンダさん。そんなに大きな声を出したつもりはないんだけどな。

「近いぞ口ウ

「んお?」

いつの間にか身を乗り出していたみたいだ。机に手をついて、ぐいっとハンダさんに迫っていた。「ごめんなさい」と謝つてからすますこと席に戻る。

「ハンダさん、約束だぞ？」

「おひ、約束な」

そこで会話は一区切りついたらしく、微妙な沈黙が生まれた。とりあえず口ウは読み掛けの本に栞を挟んで閉じた。

その動作があつたからなのかは知らないが、ハンドさんは再び口を開く。

「留守番だつたのか？」

「口ウ本読みたかったから」

「こんな暗いのに灯り点けないのか？ 字、読み辛いだろ？」

その言葉に首を傾げた。だって光源が一切断たれたら見えないのは当たり前だけど、室内はまだまだ薄暗いだけで光はちゃんとある。なら問題ない。

「……そつか、お前、田え良いもんな」

何故かわしゃわしゃと頭を撫でられた。不思議そうにハンドさんの顔を見上げる。いつも優しそうな顔にちょっと陰りがある気がして。

「口ウ変？」

「変じやない、凄いんだよ。お前うはな

そこで漸く納得した。そつかシンはドラゴンなのが嫌なんだっけ。ハンドさんはそのことを実は結構気にしているんだ。でも口ウは違う。

「口ウ、人間よりは狼だぞ？ それが普通」

「お前は狼の方が良いのか？」

ハンドさんは急に言われた言葉に困惑したように眉をハの字にす

ねじ、やつ間に返した。だから口ウサイくんと頷いた。

「ロウは狼だ。やつこつもの」

「……そういうもんか」

何か言いたげに視線をさ迷わせていたが、結局そつ呟いて納得することにしたらしい。それで良いと思つ。ハンドさんは思った通り、ロウにはこれ以上の答えを持つていなかつから。多分どこかで溢して来たものの一つだ。ロウだってわからない。

それでもロウは狼で。

ロウはロウだと覚えているから。

「あらがと」

まさにかんじでロウは言つた。

「……お前はあこつと違つて賢いなあ

ハンドさんは苦笑混じりの感心の声を上げた。

とそこじで遠くから聞き覚えのある声が聞こえてきた。出合つてからまだ短い時間しか経つていなが、馴染み易い、温かな声。

「シリコン達帰つてきたつ

笑顔でそのことをハンドさんに伝える。それを聞くとハンドさんも耳を澄ませた。暫しの沈黙。そして口を開くハンドさん。

「なあ」

「ん?」

「俺の耳には怒鳴り声が聞こえたんだが

「口ウもだぞ」

「何でケンカしてんの?」

「さあ?」

「…………」

「仲良いからなつ

「や

それで片して良いのか? とこうハンダさんのシッ ハハせせせとん
ど意味を為さなかつた。ただただ笑顔で楽しそうに遠くの余韻に耳
を傾けている口ウには。

そして数分後。

「ぜえつたいにっ! 絶対に! オレはついて行くんだからな!」

「お前は待つてゐる」

「やだね! つかさつきの聞いてたのか? オレはシラソ守んの!
近くに居なくてどうすんだよ!」

そんな言葉の応酬が家の前に立つまで、いや、戸口に立つた今尚
続けられていた。でも家の戸に手を掛けたのなら口ウのやる」とほ
一つだ。口ウは皿を輝かせ、喜び満タンな笑顔で叫んだ。

「おかえりシン、シリソウ」

「おう、ただいま!」

「……今帰つた」

「おー、いつも元気だねえ、お前ら。あ、お帰り」

喧騒と共に帰宅した二人。と言つより喧騒そのものな二人だけ。
でも言い争つていた割りに普通に返事が返ってきてちょっとびっくり
した。まあこの二人らしい。

そしてシンとシランは今ハンダさんに気付いたらしく、交互に言葉を浴びせる。

「なんでハンダが居るんだ?」

「……ひとりくくりにしないでください。騒がしいのはこいつ一人だ」

「……なんで俺にばつか。刺のある言葉だな」

ちょっとハンダさんがしょんぼりとした。しかしシランもいつも冷静ではないのか何も答えずに定位置、ロウの右隣の席に落ち着いた。シンはロウの向かいだ。でも座る前に台所に常備している水差しを持つと一杯コップに注ぎ、自然な流れで自分とシランの前に置いた。

「……案外ホテルとかで働けそうだよな、シン

「あ? 何だよ、ハンダも何か飲むのか?」

「や、長居はしないから良い」

「そか」

相当喉が渴いていたのか、会話が切れるとシンは水を勢い良く飲み干した。シランは半分程口にすると、コップを置いた。

「で、何か用ですか?」

「……」

「何だよ、言えよ」

「いや、てっきり放置されると思つたからな。あんな登場だった癖に普通に構ってくれるのな」

「一応客だし」

「……まあ、悪いですかから」

顔を見合させて額き合つ二人。入ってくるまで喧嘩していた人達

とは思えないくらいこの息の合ひよつだ。水の鎮静効果なのか？

「用つて程の用でもないんだけどな。で、守衛長には会えたのか？」

「なんでハンダが知つてんだ？」

「美崎から聞いたんだろう。心配してくれてありがとうございます。無事会えた」

「そりや良かつた。上野のとこだつた？」

「ああ、第三地区だつた」

「ふうん。ならぼちぼち戻つて良い頃合いかね」

何かを計るようにな空を見てハンダさんは咳いた。シリコンヒシンは何かわかつてゐるらしく、同意するよつたな雰囲気。

「まあでも、一つ良いか？」

「なんだ？」

「守衛長なんかに何の用だつたんだよ？」

確かにそうだ。今まで聞いた話を総合すればイナギさんといつのはかなり偉い人。わざわざ直接会いに行く必要がある用事とは？ つて言つても脳の出来事を聞いていたから想像はできる。だから口ウにとつて必要なのはその結果、結論。

いや。

それすらさつきの喧嘩の内容で知つてゐる。あとはその喧嘩の結果だけが本当に重要なのだ。

シランは少し考えをまとめるように俯き、眉間に皺を寄せた。

「……急な話なのだが、何と申つか……ベッドハンティング、と言つて伝わりますか？」

その言葉でハンダさんの顔は一転して険しくなつた。そして怖い

顔で静かに訊ねる。

「……詳しいことは旦那に聞こいつ。で、お前の答えは？」
「話を聞いて欲しいと言われた。俺は行く気はない。しかし……聞くだけ聞いてみようと思つ」

「それは、あちらさんのところに赴くつてことなのか？」

「ああ」

「……なるほどな。それであるの言い争いな。ふん、なるほど」

ハンダさんは顔の陰を深め不機嫌そうに鼻を鳴らし、納得の言葉を漏らした。

「一応聞くが、それはお前の意思、なんだな？」

「そうだ。俺は知らないことが多いすぎる。それに見付けたい答えがある。だから……必要だと思つた」

「……そう、か」

ふつ、と顔の険しさが失せた。ちよつと情けないような、けれど優しい不器用な顔に戻る。

「それは良いことだな。うん」

まあ確認は要るけどな、と低い低い声で呟いたのは聞き逃さなかつた。それからハンダさんは二人の顔を見比べて言った。

「来たいって言つてんなら連れてつてやれよ」

「……でもこれは」

「てめえの都合だつて？ まあ良く話しあつて納得しちけよ。俺はシンに一票」

それだけ言つとハンダさんは立ち上がつた。

「んじや邪魔したな」

立ち去る背中。それを眞黙つて見送つた。そして始まるのは戦いだろつ。一人をハンダさんがしたよつに見比べてみる。

シランは黒い瞳を揺らしている。迷つている。悩んでいる。何がシンにとつての最善であるかを。眉間の皺を深めて考へている。シンは褐色の瞳で真つ直ぐに見詰めている。守りたいと願うひと。それは痛い程わかる。その強い願いは揺れることは決してない。口ウの答えは決まつていて。そしてこの問題はシランが折れるか、シンが納得しなければ解決しない。そしてそれは互いの言葉でしか意味がない。第三者の言葉なんて無意味だ。

つまり口ウが居てもしようがない。

「ロウちよつと出掛けいく。一人は納得出来ぬまでゆつへつ話し
てて」

椅子から降りると直ぐにドアから戻りましたが、シランの声に引き留められる。

「口ウせ、じつあるんだ?」

何を訊いてるかなんて改めて尋ねる必要はなかつた。ロウは振り返る。微笑んで答える。当たり前のことを。

「決まつてゐる。シンが行くならロウもついてく。行かないならシンとお留守番。そつじやなきや意味がないぞ」

「……そつ、だな」

意味がない。

だつてシンを置いていくのに口ウだけ連れていくなんてシランはしないし、出来ない。そしてその逆、シンを連れていくのに口ウだけ置いていくことも。だから口ウはシンと同じ選択を取るしかない。シンのことなんてどうでも良いなんて思えないけど、シランやシンを無視してまで我が儘を言つつもりはないし、そこまでの意思も口ウにはないのだ。

まだまだ不安定。やらやらしてるのが口ウだ。だからやつ答えた。その答えにシランは困ったような、曖昧な笑みを浮かべた。多分どんな顔をして良いのかわからぬのだ。そしてそれがわかつていたのに意地の悪い返しをした口ウは良くない。

でも喋るのが苦手な口ウは、簡潔にまとめて話すべき、その方が伝えやすい、そう思つてゐる。頭の中ではいろいろ考えているけど、それを全て表現するのって難しいから。

だから最小限で最大限の意思の疎通が出来たら良いと思つ。

「……行つてきます」

でも多分口ウは悪い子だ。あんまり正しくない。上手くない。
『めんなさいは言わなかつた。

「ハンドさん」

例えるなら四角い。そんな大きな背中。

無駄にあるわけではない肉は、鍛えられているだけあつてきびきびとした動きを可能にしていた。それでも出て間もなかつたのれんずんと歩くその背中は直ぐに見つかつた。

そして口ウの声に気付くと、そのがつしりした肩を振り向かせた。

「口ウ？　どうかしたか？」

「口ウも聞きたいから来た」

「……？　田那から詳しい話を聞く、ってやつか？」

「ひくんと頷き返す。ハンダさんはちょっと困ったよひに頬を搔いた。

「そりゃあ良いけど……あいつらに訊かないのか？」

「シンとシラン話し合ひ。それは一人の問題。時間要る。口ウ邪魔したくない。それに約束したぞ？」

「約束……ああ、田那に会わせるつてあれ。……せひいやそうだな。今日は休みなんだつたか」

すっかり忘れていたらしく、申し訳なさげに頬を搔ながら口ウを窺い、それから諦めたように息を吐くと言ひた。

「……まあ、良いか。じゃあ来いよ。暫くすりや田那も来んだる」「うん！」

無事了承を得たのでハンダさんの隣に並ぶ。シランとハンダさんの家はそこまで離れていない。だからハンダさんに追い付いて間もなくハンダさんの家は見えてきた。シラン家以上にこぢんまりとした家が。

「狭いからなあ。美崎追い出すかねー」

とほやきながらノックなしでドアを開けた。迎えたのはのんびりとした緩い声。

「あ、隊長ー。お帰りなさい」

「おひ。何かあつたか？」

「ええ。等々力さんが『酒はねえかー』となまほげみたいなことを

言いながらやつて来ましたよ」

「……あいつ、何やつてんだよ」

「いつも楽しそうな人ですよねー、つぐ、あれ？ 口ウくんじゅな

いですか。隊長で見えませんでしたよ」

「……暗に邪魔だと言いたいのか？」

「うんこひつけ、ミサキさん」

ハンダさんが口を譲ってくれたので顔を出すと挨拶した。家の
中のミサキさんは椅子に座つたまま手を振つて応えた。

「まひほら入つて。今日はびしだんですか？ 仕事もない日でし
ょつ」

「口ウ、イナギさんに訊きたいことがあるの」

「また守衛長ですか。大人氣ですねー」

「はあ、お前は平和そうだな、万年」

「あれれ、結構真面目な話なんですか？ 僕、席外しまじょうか？」

ミサキさんの言葉にハンダさんはちょっと戸惑ふるような顔を置く
と、頭を振つた。

「や、まあシソの話なんだよな。お前が必要以上に言つて触りひな
いと誓えるなら別に居ても良い」

「僕だつてちゃんと良いことと駄目なことの分別くらには出来るん
ですよ？ 僕が確認したいのは、聞くべき話なのか、聞いてはいけ
ない話なのか、どちらでも良い話なのか、ですよ」

隊長の判断に任せます。

「サキさんは迷いなく坐つた。ハンダさんはちょっと迷つて、ついに間を置いて答えた。

「聞かんでも良い話だが、シランに今後も関わって行きたいなら、必要かもな」

「じゃあ聞かせてください。それに、シランさんが出てきた時点で他人事では無くなりますからね」

「ふん、お前らしきつちやあらじい答えだな」

についつと微笑むミサキさんに、満足そうな顔をしたハンダさんが頷いた。追い出すかと言つていたのはやつぱり[冗談だったみたい]と思つたが。

「でも狭いからお前は立つてろ。邪魔でかい俺は座つてるから」

「隊長、何気無く根に持つてますね？」

「何のことだ？」

と窓けてみせるハンダさんは普通にミサキさんを押し退け代わりに席についた。ミサキさんはやれやれと言つた顔で歩き出す。

「ロウくんはこれに座つてください」

「ミサキさんは？」

「あはは。僕は平氣ですよ。やっぱり優しいね、ロウくんは

何だか笑いで誤魔化されてしまったけど、ミサキさんに座る気が全くないようなので、落ち着くために座らせてもらつことにした。それを見届けるともう一脚、椅子を出すると、ハンダさんの隣に控えた。

そして唐突に再開する。

「で、等々力さんは隊長秘蔵のワインを掘り当てる嬉々としてお土産を手に去りましたよ」

「おーい！ あれか、あれ持つてつたのか！ なんで止めないんだ！」

「！」

「あはは、等々力さん止めるなんてダムの決壩を止めると言つようなものじやないですかあ」

「絶対に面白いがつて見送つただろ美崎いー！」

地団駄を踏むハンダさんを余所に、ミサキさんがトドロキさんについて教えてくれる。

「第七地区長さんなんですよ。お隣さんってことですね。因みに副長の榎大地くんは僕の友達で上野さんに次ぐ苦労人として名を馳せてます」

ウエノさんもエノキさんもわからなかつたが、そんな理由で有名になるなんて大変だなと思つた。

「地区長も副長も面白い人ばっかりだから楽しいですよ。暇だつたら今度挨拶回りつてことで行きません？」

「楽しそうだな！ 行きたいぞつ」

「おい、口ウを混沌に巻き込むな」

「やだなあ、混沌の親玉じやないですか隊長は」

「俺は割かし普通だ！」

「僕の方が普通ですよ？」

そんな不毛な感じのやり取りを聞いていると、ふと、扉の前で足音が途切れることに気付く。普通に考えればお姫さん。今に限定すればそれは。

「入つて大丈夫ですよ旦那」

「あれ、守衛長ですか」

ハンダさんは気付いていたようだ。やつぱり地区長をやつてているだけあつて普通の人ではないみたい。ロウが来てからは随分と平和だつたから未だにハンダさんが戦つているところは見たことがないが。

みたいな。戦つて、みたい。

けどそれは今言つことではない。ロウは扉に目を向けた。

「……ああ、お前がロウか」

入つて来たのは大男だ。

背が高い、高過ぎる。同じようにがたいの良いハンダさんよりもずっと高い身長は、ロウが一人いて肩車したつて頭には手が届きそうにないくらいだ。巨人と言つても良いかもしない。

熊みたいだ、というのが第一印象。別に毛むくじやらではないし、横にがつしりしているというわけでもないが、雰囲気がそんな感じなのだ。

頭をぶつけないよう屈んでいるので陰つてしまい本来の目の色はよくわからないが、とりあえず黒かつた。それが余計に迫力に拍車をかけているように思う。しかし奥の奥、微かに覗く柔らかさがそれを打ち消す。きっと慣れてしまえば怖いなんて思わない。緩く優しげですらある。

多分そういう人だ。

色の判然としない瞳から、それでもいろいろ読み取つて下した結論。それはきっと間違いではないと今まで聞いた風評が裏打ちしてくれる。

「そうだぞ、はじめましてイナギさん」

だからロウは安心して心の底からにつっこりと微笑んだ。

018 ひだまりの待つ家【真】（前書き）

タイトルだけが決まりず一週間経過……馬鹿ですね。結局雰囲氣で決めました。

それぞれの思いが上手く伝えられなかつたり、そもそも自分でも整理出来てなかつたり。そんな中での旅立ちの日。思ひは一つになるのでしょうか。

第十八話の語り手はシンです。

真つ 暗闇。

そこにぽつんとあるのは赤く褐色がかつた、ほんやりした光を放つ大きなもの。

それだけがその世界の全てだ。

大きなものは微かに赤銅色に発光していて、輪郭がほんのりと浮かび上がっている。それは山のようでもあつた。でこぼことしたその輪郭は、しかしどこか整然と並んだ突起により、嫌な感じとか怖いとかいう感じはない。どちらかと言えば綺麗。

鋭い表皮、否、鋭く立ち並ぶ鱗は後ろに撫で付けたように揃い、同じ方向性を持ち。斜めに倒れた針山のような巨体は微塵も揺らぐことなく、当たり前のようになにに在つた。

大きな眼があるであろう場所には重たい瞼が落ちたまま。ただただ静かな巨像のように、それは在つた。

ドラゴンは在つた。

夢だな、とは思った。来ようと思つた覚えはないし、何だかいつもよりぼやけて見える気がするから、多分そう。そんな風に一人納得するようだつた。

オレの中。奥の奥。そこに居座る赤銅色のドラゴンは常に静寂を体現するようだつた。

かつて一度。初めて口を開けた時に一方的に言われたり。その後一度でも口を利いたことは記憶にない。

でもオレが力を貸せと言えば面倒臭そうに尾を振り、火を出せと叩けば鼻を鳴らし、守りたいんだと言えば小さく息を吐いた。

願えれば応える。しかし言葉ではなく、力を貸すという形で。貸してくれるのは鱗、火、腕力などの身体的能力。

この目の前に鎮座してることつが、オレがドラゴンである理由。

それだけじゃないけど最たる理由。

でも、と思う。

もしかしたらこのドラゴンがオレの中に居るから、オレは人間じゃないんじゃないのかつて。もしかしたらオレだけなら人間になれるんじゃないかつて。そんなことを考えてしまつ。

「なあ、オレは何なんだ？　お前は何でここにいるんだよ？」

しかし答えは静寂のみ。死んだように動かない、くすんだ赤の竜が在るだけ。

オレはムスッとなつた。だからオレはやなんだ。

「お前なんか大嫌いだ！」

それでも何一つとして答えは返つて来ない。
オレは顔を歪めて願つた。
早く目が覚めますように。
シランに、ロウに、会えますように。

そして世界は暗闇に沈んだ。

「シン大丈夫？」

「……ロウ」

まず最初に見えたのはロウの顔だつた。それで何だか安心した。溜まつていた息を吐き出すと、改めてロウの顔を見て、言った。

「口ウ、近いよ」

「あ、ごめん」

まじまじと覗き込むように、口ウの顔は握りこぶし一個程も離れていなかつた。寧ろ指一本が間にに入るかすら怪しい。

「なんで近いの？」

「んー。なんかシン、苦しそうだつたから。心配だけど、起こすの悪いから」

「だから見てたの？」

「うん」

出来れば起こして欲しかつたけどな、と思つたけど、でも結局はそのフレッシャーみたいなもので起きた氣もするからまあ良いか、と一人納得することで落ち着いた。

「シン元氣？」

「ああ、口ウのおかげで元氣だ」

「良かつたあ」

破顔する口ウに釣られてオレの顔も綻ぶ。大分癒された。

「ありがとな」

「ん？ どう致しまして？」

「うん、それで合つてる」

そう言いながら体を起こす。珍しく寝坊したようで、窓の外には既に朝の支度を終え、出回る人の気配があつた。多分八時くらいだろう。

「悪い、直ぐに朝飯用意するから」

と手早く着替えながら言つて、口ウが首を傾げた。

「シラソがもう下降りてるだ?」

「へ?」

いつの間に家に入ったんだ? ジゃなくて、オレが居るなら朝飯はいつも任せてくれるし、じゃあなんどと考へていたらピソンと来た。

着替えもそこそこに、慌てたオレは口ウを飛び越え、床を開いた四角い黒い穴、出入口に飛び込んだ。

この家が例外と言うわけではないが、守衛区の小さな家に住む人は大抵床下、つまり地面の下も利用している。貯蔵庫として食べ物なんかを収納しているのだ。地面の下なら外が真夏日にならうが、氷点下にならうが、そこまで温度が変わらない。冷蔵庫なんて便利な道具はそうそう使えないし、そもそも守衛区は機械を動かすための電気というのがないから当たり前だ。

だからついにも床下はある。ただ例外と言えるのは、最早地下室としか言い表せないような空間になつてているからだ。因みに他は精々掘つて腰くらいの高さまで。結局梯子まで作る羽田になつた。まあ、自業自得なんだけどな。

そうして地下室に飛び込んだオレは普通に着地した。シラソの田の前だった。非常に驚いた顔。

「あ、ごめん」

「……埃が立つから梯子を使えと言つておるだらけ」

眉間に皺寄せて注意するシラソ。でもそりゃじやなくて。

「シランー。」

「……なんだ？」

落ち着いた調子でシランは先を促した。オレは焦っていた。自分でも理由がはつきりしていても、惑うくらいの焦燥感があった。

「行くのか、一人で行くって言い張るのか！」

「……そうだ」

結局。

結局昨日は決着がつかなかつた。どちらも譲らず、引き分けたままだつた。シランが貯蔵庫、いや、地下室にいる理由は朝食の材料を取りに来たわけではない。旅支度を整えるためだ。ここには頻繁には使わないようなものも収納されている。シランの用はそれなのだ。

オレを、置いていくんだ。

「一人じゃなきゃダメなのか？　オレは居ちゃダメなのかよお」
シラン。

また泣きそうな気分になりながら、必死に訴える。シランはさつさよつもきつく皺を刻む。そして言つのだ。

「……お前はここに居るべきだ。オレと居てどうする。半田さんや美崎、稻城さんのいるここの方がお前にとつて良いはずだ」

その言葉に、田の前が真っ暗になつたような錯覚に襲われた。

シランは、何を勘違いしているんだろう？　だって、シランじゃなきゃダメなんだ。確かに大切な人達だ。でも違う。シランはシラ

ンで、一番大切な人で、離れたら。

また一人だ。

そんなのイヤだ。

だからだからだから、だから！

オレは振り絞るように叫ぶ。

「オレはシランと一緒に、シランを守りたいんだ。……どうしても曲げないって、ならいい、勝手についてく。んで守る。悪いか！」

それだけ宣言すると、ふいっ、と顔を反らし、朝食の材料をてきぱきと揃えだす。

今の言葉は実は考えなしだった。つまり勢い、出任せ。でも自分の言葉に後から納得する。そうだよな、シランがダメって言つなら勝手について行けば良い。それだけだ。うん、そうしよう。

そう思つと急に楽になつた。開き直つたと言つべきか。始めからそうすれば良かつたんだ。

「……はは」

そして唐突に上がつた力ない笑い声に驚いたオレは手を止め、振り返つた。そこにいるのは勿論シラン。途方に暮れたような顔をして突つ立つていた。

「そうだよな、お前なら簡単だ。俺は間抜けだな、本当に……本当に」

言葉や表情だけでは読めない意味も含まれている台詞のように感じた。でもオレにはわからなかつた。でも次の言葉でそんな些細なことはどうでも良くなつてしまつた。

「一緒に行くか……いや、一緒に来てくれるか、だな」

「……ほ、ほんとか、いいのか?」

「俺が馬鹿だつたんだ。本当はお前や半田さんが正しかつたんだろ
う」

疲れた顔でぼやくシラン。最早違えようのない答えをもらつたオ
レは飛び跳ねた。

「やつた、やつたぞ口ウー 良いって、一緒に行って良いくてやー.
「良かつたなシンツ」

上の、家中から口ウの嬉しそうな声が返つて来た。オレは大き
なリュックを引っ張り出すと必要なものをとりあえず放り込み始め
た。シランが荷造り途中だつたカバンからも勝手にいろいろ取り出
しリュックに詰め込む。着替えと保存の利く食料、寝袋、タオル、
水筒などなど。

「口ウー
「はーい」

と阿吽の呼吸。説明なくオレが投げたリュックを入り口に顔を出
した口ウが受け取る。

それから朝食準備の続き。今度は昼御飯分の材料も手に取る。

「……はあ

シランは何故か疲れた息を吐き出すと、朝食分だけ受け取つて先
に上に戻つた。昼食の材料を揃えたオレがそれに続く。

「張り切つて行くぜ！」

「おー！」

「…………」

シランはもう一度だけひつそりとため息を吐いたのだった。

「ロウも行くよな？」

「シランが良いって言つてくれるならつ」

「……良い」

「やつたなロウ！」

「やつたぞシン！」

無駄にテンションの高い一人だった。でも昨日からの落ち込みようが結構酷かつたのでその反動みたいなものだ。実際すごく嬉しいし。

一先ず朝食の準備。ロウはリュックの中身を一度出して仕舞い直してくれている。適当に突っ込んだだけだったので助かるな。シランは何かがショックだったらしく、気持ちの整理をしている最中のよう。そつとしておくことにする。

「コンコン。

「…………」
「返事を聞きに来た」
「行く」
「え、それだけ？」

「来たのは案の定と言つか、あの三人組だった。

「……他に何があるか？」

「いや確かにそれで良いんだが、あまりに簡潔と言つか、なあ」「リーダー、素直に感謝の言葉で良いんじゃないですか？」

「そうですゼリーダー。素直に行きましょうぜ」

「なんで俺が素直になれないキャラみたいな方向にフォローするんだよお前ら」「だよお前ら」

あの三人、おもしれーなやつぱり、と思ひながら聞き耳を立てる。

「だがそうだな、ありがとう。我らの身勝手な願いを聞き入れてくれたこと、感謝する」

「……そつか」

非常にどうでも良さそうな返事だった。心にもつてないぞシラン。つか何だか氣まずそうな雰囲気がここまで漂つてくるな。これは……助けねば。

一時火を消すと手を拭き、台所を離れるヒシクンの後ろに立った。ギヨツとしたリーダーと皿が合ひ。……あれは悪氣があつたわけじゃないんだ、そんな目で見ないでくれ。

「あー……朝飯食べてく?」

「お誘いありがとうござります。でも済ませて来たので」

「じゃあ茶でも飲んで待つてくれよ。それとも何かやることある?」

「あ、いや、特にないが」

「なら上がるよ。狭いけどさ。……ロウー」

以心伝心といつも葉を知つてゐる。知つてゐるがロウは本当に察しが良い。どちらかと言つと未来予知みたいな感じだ。

「椅子一つでいいか?」

「ぱっちりだ。ありがと口ウ」

口ウは既に地下室から予備の椅子を出して並べていた。机の両側に一つずつ追加だ。これで六人全員座れるよつになつた。

「シラン良いよな?」

「……そうだな」

特に不満もないようで静かに頷いた。三人組を招き入れると入口側の三席を勧め、シランと口ウは裏口側の一席につく。オレは手早く再び火をつけるとやかんを置いた。

「……お前が料理作るのか」

「そうだよ。オレの得意分野だ」

リーダーに答えながら鍋をかき混ぜる。昨日の残りのスープ。ちゃんと今朝で食べられる量だ。それからパンも焼く。あと野菜切ってサラダっと。

「ちゃんと料理するんですね。流石第八特区です。交流都市と呼ばれるだけありますね」

「しかもモッターは時給自足。難攻不落の城塞みたいなもんだな、本当に」

何故か感心する部下Bとリーダー。つてそう言えば。

「名前聞いてなかつたよな。オレはシンツていうんだ」

料理の手は止めず、振り返らず問い合わせる。答えたのはリーダー

だ。

「それもそうだな。俺は秋峰あきみねだ」
「名前は？」

「お、お前こそ『シン』だけしか名乗つてないだろ？」「あそつか。オレは異真太郎だ。シンで良いよ。で？」
「ぐう……」

何故だか口くちもるアキニネ。すると部下一人が代わりに口を開いた。

「私は新見閑歌にいみじかと申します」
「俺ア、戸狩丸太とがりまるたって名前なまえや」
「で、リーダーは？」
「待て、待て！ 自分で言えるー お前まなの卑ひまんなつ」

「こいつら面白おもしろいよなあ、ほんと。苦笑を浮かべるオレの顔は多分見えていない。ついでに言うと後ろでわいわいやつてる奴らの顔も見えないんだけどな。でも非常にわかりやすい声が割り込んだ。

「結局なんて名前だ？ あ、口ウハロウヒトコウンダガッ！」
「……既知じしだらうが、観月紫蘭くわづしじらんだ」

口ウの笑顔とシラクの困り顔が田に浮かぶ。そして無言で促すようになっているんだろう、リーダーを。無言の視線に耐えきれなくなつたリーダーがとうとう口を開いた。

「…… だよ」
「聞こえませんよ、そんなぼそぼそじゃ
「ええい！」

開き直つたらしく何だかやけくそな声が響いた。

「スバルだよ昂！　秋峰昂が俺のフルネームだよ悪いがコンチクシヨー！」

「……悪くないが」「かつこいいなつ」

素直な答えが返ってきた。と言うか、なんでそんなに名乗りたがらなかつたのかがわからぬよつた名前だ。別に悪くないよな、スバル。口ウの言う通りかつこいいくらいだ。しかし何か以前あつたのか、やけくそな声が続く。

「似合わない」とは知つてゐる、誰一人として名前で呼んじやくれねえんだからな！　ああそうさ、昂つて顔じやあねえんだ、それでもさう名付けられたからには名乗るしかねえじやねえか！」「……誰も否定していない、昂さん」

ピタツとリーダーの動きが止まつた。いや振り向いて確認したわけじやないが、でも空氣で何となくわかつた。

「呼んで、くれるのか？」
「……そこまで言われたら、な」「じゃあ口ウもスバルさんつて呼ぶぞつ。良いか？」「あ、ああ、ああ！」

感極まつた声が上がる。シランは優しいよなやつぱり。しつかしなんで他の奴は呼んでやらないのやう。

「んじやあ面倒だしスバルとシズカとマルタだけ？　それで良い

よな?「

結局皆まとめて下の名前で呼ぶことにする。特に反論はなによつた。しかしふと疑問に思つたのかスバルが口を開いた。

「アリージやその一人、シンとロウだつたか……連れて行くのかい、紫蘭殿」

「そうだ……それを拒否するのなら」

「あいやいや、そういうつもりで言つたわけじゃないんだ。護衛として三人程度なら付き人の許可はもらつてると大丈夫だ」

「……そつか」

安心したようなシランの声。もうオレ達がついて行くことに関しては決定事項らしい。良かつた良かつた。

「んじや話もついたことだし」

「飯だー！」

ロウの歎声が上がつた。

そして暫し朝食タイム。各自ある程度満足すると自然に打ち合わせが始まる。数田家を空けるとなると、いろいろ片付けやらがあるからだ。

そして話し合ひの結果。

「んじや一 手に分かれるか。ロウは板もらつて来て。二人は終わつたら地下室の整理頼む。昼飯とか準備終わつたら手伝つから」

「……ああ」

「わかつたぞつ。ロウ行つてくるー！」

そんな会話の後、勢い良くロウは飛び出して行つたのだった。既

に自分の皿は綺麗に平らげていた。

そして残ったオレ達は中途半端な朝食を片付けることとする。

「あ、聞くの忘れた」

「……なんだ？」

「サンディッチの具、何が良いかって」

「肉だろ？」「

「やっぱし？ まあいつか。肉入れよ。どうせ今あるのは使い切んじゃないといけないしな。まあ残つてたら残つてたで代わりにハンドガ喜ぶな」

地下室は何だかんだ言つてもやっぱり貯蔵庫。天然の冷蔵庫みたいなものだ。だから食料満載。保存食も多くあるが、そう長くはもたないものも多いから、ハンドに渡して適当に地区内で分けて消費してもらひことにした。

多少もちそうなものは持つて行くけどな。そして昼食はそういうして残つた余り物でサンディッチを作ることにした。

「さてと、やりますか」

「……そろそろ帰つてくるだろ？しな」

「え、さつき出てつたばかりだけど、ロウとやい」

「ただいま！」

「……はやつ」「

ロウの足とスタミナを嘗めちゃいけない。スバルの驚きの声をそんなことを思いながら聞いた。それにロウのお使いはハンドのところで済むから直ぐ近くだ。数分あれば十分。

「ありがとう、行くか」

「うんつ」

シランとロウが出て行く。オレは昼食の準備だ。そうだ、もう一つ訊き忘れてた。オレは振り向くと机の方を見て言った。

「お前らも昼飯いるか？」

多分満面の笑顔だった。

結局シズカ達が手伝ってくれたので昼食の支度は思っていたより早く終わった。別に昼食に誘つたのはそんなつもりでもなかつたんだけどな、と思ったが、皆で作るのは結構楽しかったのでまあ良いか、と納得し、地下室の片付けを始めた。そして暫くするとシンが戻ってきた。

そして皆で片付け始めるとあつとう間に地下室はがらんとした寂しい雰囲気になり、トントントンという軽快な音で封印された。それから三人揃つてハンダの家に、改めて行くことを伝えに行つた。

「ま、シンもロウもいづや俺も安心だな。シランを頼んだぞ、お前ら」

そう言つてハンダは思つていたよりもすんなりと笑つて頷いた。

「任せとけ！」
「ロウ頼まれたぞっ」

でも家に戻る時、ハンダがシランに耳打ちするのが見えた。何を言つたから風向きが悪いこともあって聞こえなかつたけど、気にな

つた。シランの顔がほんの少しだけ曇つたように見えたから。

それから家に帰ると何故かイナギさんとミミシ...さんが居た。

……わざと「わん」を付けておいた方が安心だ。

「……どうしたんですか、守衛区長に、第四地区長まで」

「いやね、正哉くんが見送りに行くから来いつて聞かなくてね。ち
ょっと拐われて来たんだ」

それは笑顔で言つことなのか？ //ミミシさんはやつぱつ//「ハハハ
笑顔で答えた。

「拐つてないぞ。少し持ち上げて来ただけだろ？？」

「本人の意思尊重してよー」

「……嫌だつたか？」

「別に良いけどね。君の我が儘なんて今に始まつたことじやないし

「ん、ハハは心が広いな」

「あはは、分かりづらい言い方だね。それに小さい小さい路つて書
くから、あんまり僕の名前は心広そうじやないよね」

「そう言えばそうだな」

……何なんだこの一人。やたら仲良しだぞー。とびつくつしていく
ると。

「……ハハ、つて」

シランがツツツーンだ。いや、ツツツーンと呼べる程の勢いはない、
最早咳きのよくなものだったけど。でも//ミミシさんはしつかり拾つ
てくれたようだ。

「ああ、僕のあだ名だよ、一応。名前が小々路だからハハ。因みに

恥ずかしいからあんまり呼ばないけど、正哉くんはまーくんだよ

「友達なら何時でも何処でも愛称で呼ぶべきだろ?」

「ちゅうとほほ体面も気にしないよ君」

「わづか?」

イナギさんつて確かに普段からフレンドリーだけど、何かその上を行くフレンドリーさだな。そう言えば幼馴染みなんだっけ? 名前はあんまり覚えてないけど聞いたことがあるな。

だからなのか?

「えーと、まあわづかっわけでお見送りに来たんだよ。何か手伝うことあるかな?」

「いや、そんな……」

「あとは家のドア閉じれば終わりだぞ!」

狼狽えるシランの脇からロウガが口を挟む。

「おや君が尊のロウくんかな」

「尊は知らないけどロウだぞ?」

「もうか、僕は三好小々路だよ。みろしくね」

「うそ、よろしくだぞ!」

といつやつ取りも挟みつつ、出発の最終準備に掛かる。

オレはこつも仕事の時に使う服に着替えた。一番動きやすいし、元々外に出るための服だから何かと都合が良いからだ。そして腰に刀、上に深い蒼のジャケットを羽織れば準備完了。用意したでかいリュックを手にする。

シランは藍色のマントを羽織った。腰には勿論自ら鍛えた刀が一振り。マントの下には小さなリュックが隠れている。中身は多分手放せない鍛冶師としての道具だ。刀は得物もあるし、やっぱり必

要なんだろう。基本的に二人の荷物はオレのリュックの中だ。

そして口ウはオレと同じで仕事用の服だ。最初に着ていた立派な狼の毛皮は置いていき、シラン同様灰色のマントを纏っていた。その身一つあれば十分な口ウは軽装も軽装。動き易さ重視なその格好は寒そうだけど、寒さに強いと豪語するだけはあるので、口ウにしては平気だろう。

準備は出来た。

あとは旅立つだけ。

「なあ、どのくらいで帰れるんだ？」

「片道は普通に歩いて五日程だな」

「そつかあ」

最低でも十日くらいは帰れないらしい。正しくはシランの家だからちょっと間違っているかもしねいけど、でもオレの帰る場所は間違いなくここだ。

どうしても名残惜しく感じてしまう。

離れるのが何だか辛い。自分で言い出した癖にだ。だからシランはあそこまで頑なに一人で行くと言ったのかな、なんて今更思つ。

「……お前は、行かなくても良いんだからな」

だからかのタイミングでシランにそう言われて、酷く動搖した。

「べ、別に、オレは、行きなくて着いてくんだ」

「……無理をする必要はない。半田さんなら面倒見てくれる」

「う、うるさい！ シランだけ行かせられるかよ、行くよ、行くに決まつてんだるー！」

シランは静かにぐらぐら揺れてるオレを見ていたが、それ以上は

言わす。

「……そつか」

とだけ頷いた。

まだテンパっていたオレは、いつの間にか強引に話題を変えていた。口を衝いたのは無意識の内に今一番気になっていたこと。

「そ、それより、シランは何言われてたんだよ、ハングダに」

「……ああ」

少し意外そうな顔をしたシランは、ちょっとだけ迷うような間を置くと答える。どこか翳りのある顔で。

「シンは子供だからお前は引き摺られなによつてひかりしるよ、
と
「ハングダあ！」

ほとんど条件反射で叫んでいた。それと同時に気になるシランの表情も軽く吹っ飛んでしまっていた。怒りの対象が目の前にいないためその怒りは燻つたまま出発する段となつてかなり不満だったが仕方ない。

「体に氣を付けてな。無理はするな」

「見付かると良いね探し物。遠くから君たちの幸いを祈ってるよ」

そんな二人に見送られてオレ達は住み慣れた家を離れ、暫しの旅路へと着いた。

シランは見付けるために。
オレは守るために。

口ウは共にいるために。

わからない答えを知るために。

「行つてきます!」

オレ達は今日大きな一歩を踏み出した。

019 心配事と退屈病【紫蘭】（前書き）

浮かれたまま投稿です。何があったかって？初めてお気に入りユーチャー登録して頂いたのです。本当に皆様いつもありがとうございます。

今回はちょっとグダグダな本編と本編の間の話をシラソに頑張って語つて貢つてます。
ではタイトル通りな十九話をどうぞ。

「なあシラニー」「

わかつてはいた。

シンが家を離れたくらいではあまり変わらないだろう」と。そもそも人間、そう簡単には根つ子は変わらない。だからそこはわかつていた。

だが、だ。

何日も家を空けるようなことは一度もなかつたため、俺にとってこの旅は重々考えた末の結論であり、一大決心と言つて良いほどの決断だったのだ。その上シンとロウまで巻き込むとなればかなりのプレッシャーがあつた。

自分のことですら不安なのに、責任を持つとは言い難いのに。果たして俺にあと一人分の責任を持ち、ちゃんと出来るのか。守れるのか。

弱い俺は不安で、不安だからこそ結局一人を巻き込んでしまつた。その責任は一人の後見人でなくとも背負わなくてはならない。逃げることは赦されない。

だから俺は、有り体に言えば。

緊張していた。

馬鹿だ愚かだ阿呆だと指差されても、別にいい。俺は反論出来ない。でも正直本当に緊張していたのだ。

シンは馬鹿だが根が真っ直ぐ過ぎてたまに無謀なことでも考えなしに実行してしまうことがあるし。ロウはロウで普段は大人しく素直な上に聰いのだが、好戦的過ぎるきらいがあり、暴走としか表せない状態も希に見られる。そんな一人を俺が無茶しないよう、見ていられるのか？いや、逆に見ることしか出来ないのでないか？なんて。

ことばかりが頭を過つた。

但しそれは数分前のこと。今の俺は別の問題に、軽く頭が痛くなつてきた。

それが。

「暇だよなー。なああ何かやることない、シーランー？」

「……」

最早シンの病氣。常に何かやつていないと落ち着かないところアレだ。数分前からそんな調子で黙々つ子になつていた。

「シーランー」

「……」

正直。

「鬱陶しきや、お前

「ぐあっ、また言われたあ

「……」

そう言えば最近同じようなことを呟ついた気がした。いや多分言つ

た。と言つか、昨日だった。

「出発してまだ一時間しか経つていないだろ？」「

「一時間も我慢したんだぞー！」

「……」

シンに我慢は難しい。

今とても良くわかつた。

「シン暇か？」

「そりだよ暇なんだよー」

ロウが助け船を出した。いやせりと血分も退屈していたからだろ
う。ロウはさきりとじか黄玉の瞳をシンに向けて言った。

「なら戦うか？ ロウと戦うか？」

「いやあ……遠慮してくよ、なあシラン？」

ロウが好戦的だとこいつことが発覚したと同時にシンが案外戦うこと好いてはいないこともわかった。強いからと言つて戦うことが好きなわけではないらしい。しかもどつも一度手合させただけで苦手意識を持つたらしく、ロウが幾ら誘おうが、シンは絶対に相手しない。とにかく逃げるのだ。

「……暇ならやれば良いだろ？」

「うわシラン、裏切るのか！？」

裏切るも何も鬱陶しいシンが悪い。しかも多分自覚してやつてい
るから尚質が悪い。俺は深々と溜め息を吐いた。

「……まあ、迷惑になるから出来れば遠慮して欲しいが」

「そうかあ。ロウ大人しくするー」

「……ロウは素直で良いな

「どーゆー意味だよ」

半眼でじとーと俺を見るシン。そのままの意味だ、と答える俺。

「どーせつオレは素直じゃないですよーだつ

いや、かなり素直な部類に入るぞお前、と言いかけたが結局言わ
す。

「少しは我慢を覚える」

とだけ言った。シンは膨れつ面になると、ぶつぶつ文句を垂れながら地面を蹴つたり無駄に飛び跳ねだした。

と言うか、無駄に凄いことをしている。

いきなりとんぼ返りしたかと思えば、背中から倒れて逆立ちしたり、その状態から飛び起きる勢いで木の枝に乗り、そこから枝でぐるぐる回つたり。

お前は曲芸師にでもなるつもりか、と問いたくなる程器用に飛び回るシンを呆れた顔で見ていた。こちらからは楽しそうに見えるが、良く良く見ると不機嫌全開の膨れつ面のままだつた。恐らく全く樂しくはないのだろう。

これはこれで鬱陶しいと言つた落ち着かないが、しかしシンの曲芸の間も俺たちは進んでいて、シンもそれに合わせて動いているので問題はなかつた。変なところで器用な奴だ、本当に。しかし同時に不器用だ。

「…………」

器用で不器用。

妙な既視感を覚えたがあまり深くは考えないことにする。

「すまない」

唐突に昴さんが謝つたので虚を突かれてしまつた。シンも同じだつたようで少し先の木からずり落ち、ぼてつ、と落下した。シンのことだから大丈夫だろうと思つてゐると、案の定ケロッとした顔で

起き上がった。そしてびっくりした顔を昂さんに向ける。

「馬車があれば直ぐだつたんだが……」

「……そのことか」

何でも。

始めは馬車で第八特区に向かっていたそうだ。しかし途中変異種に出会い、何とか撃退したが馬車がやられてしまつたらしい。

「仕方ないですよ。あのアライグマの食い意地は半端なかつたですし」

「そうですね。リーダーは最善を尽くした」と言づか。食われたらしく。

アライグマに。

どんなアライグマだよ、と思つたがシンは。

「あー、あれな。嫌だよなあ、」ええし

と頷き、口うは。

「危険度はこだけどちつゝへじ介らしこなあ」

と本から仕入れた知識を口にしていた。俺だけが知らないらしい。変異種はそれ用のリスト、本が各特区で作られており、常に書き足され、修正されている。変異種の情報はそれこそライフライン。知識があるのとないとでは、やはり対処のしやすさに差が出るし、迅速な対処も可能にする。だから特区間での情報交換は頻発に行わっているし、年に一回、まとめられた情報は書籍として発行され、誰でも閲覧出来るようになつていて、多少出回りもある。商人なんかにとつてはまたにライフラインと言えるものが変異種の情報なん

のだ。

俺だつて図書館を利用しているだけあつて見たことはある。しか
しそれはかなり昔、軽く目を通す程度だつた。だからあまり覚えて
いないし、そもそもその時点では馬車まで食つアライグマなんて載
つていなかつた可能性も十分ある。

だから別に俺が特別無知なわけではない。……なんだか我ながら
言い訳染みてるな。

「別に気にしなくて良いって。つかどうせ馬車でも屋根に乗るか走
るし」

「は、走る？」

立ち止まつてしまつた俺達のところまで戻つてきたシンの言葉に、
昴さんが呆気に取られた。と云つか。

「……お前、仕事でもそんなことしているのか？」

「えー、や、や、ねえ？ なあ口ウ」

「口ウもやるぞ。けど、今回は仕事じゃないし、落ち着きないだけ
は迷惑だぞ？」

「……口ウまで説教しだすのかよ」

げつそりとした顔になるシン。お前が落ち着きなさすぎだ。でも
まあこの一人なら馬車と併走するだろつ、平氣な顔で。オオカミと
ドラゴンを自称するだけある。

「はー、大将みたいな奴だなお前ら」

「……それは、人間か？」

「へ？ そら人間だろ。『イツらも人間だろ？』

「…………」

否定はしないが肯定もし難い問いだな。口ウは言わないとじてるのか知らん顔。シンは口ウにまで説教されてちょっと凹んでるため聞いていない。

しかし、公言するよつだから氣にしていないのかと思つていたが、案外口ウもオオカミだとかいう辺りは伏せるつもりらしい。いや。もしかしたら俺を気にしているかもしね。そのことを気にしている俺を。

臆病で怖がりな俺を。

「……大将、といつのは？」

「ああ、何だろな……俺の上司、みたいなもんかね。地位としちゃ同じくらい何だが、アイツの方が上だな、実質的に」「だつてリーダー、大将に頭上がらないですもんね」「それどこのか尻に敷かれてるに近いしな」

「……お前らは本当に俺を貶すことしか言わんな。そんなに俺が嫌いか？」

ちよつと泣きそつな顔をした昴さんが閑歌さんと丸太さんに問つよつに言つと、瞬く間に凄い勢いで反論が襲つた。

「何を言つんですか！ 大好きですよ、大変お慕いしております！」
「そうですね、リーダーに一生付いてく覚悟すらありますから俺」「じゃあなんで苛める！？」
「愛情の裏返しですよ」

丸太さんが閑歌さんの言葉を受けてウンウンと繰り返し深々と頷く。もつ昂さんは涙目だ。

「どうな部下なんてもう嫌……」

まあ、好かれてはいるようだ。ただ……あれだ、人望はあるがちよつと残念な感じの、変わった人が集まってしまう、そんな体质みたいだ。

「好かれてんだし良いじゃん」

「まあそうだよ、そうですよお」

口調すら何だか変わってしまった。大丈夫か？

「落ち込まないでくださいリーダー！ 大丈夫です！ それより暇なシンさんの退屈を紛らわす方法を皆で考えましょう」

「だな」

「そうだな……ってあれ？ 僕のこと自然に流した？」

昴さんが一人を見るが、微妙に視線が合わない。本気で質の悪い苛めだ。好いてるのも本当だし、苛めるのが樂しい、愛情表現というのも本当だろう。運のない人だな、昴さん。

「もう良いけどさあ」

いじけたようにじょやくが、でも眞面目に考えてくれているようだ。

「しりとりとか、どうだらうか？」

「流石リーダーです。良いんぢやないですか？」

ただ、それを挫くよづですまないが。

「「しりとりっ」」

家のことでは天才なシンと知識欲全開の口ウでも、一般教養と言

うか、常識のようなものは大層苦手分野だった。

二人は仲良く首を傾げた。

簡単な説明を終え、二人も乗り気になつたところでしりとりが始まりた。

「まあ定番に、『しりとり』の『り』から……林檎」
「『り』……ゴリラ」
「えつと、『ら』だよな？ ラーメン！」
「……おい」

速攻で終わってしまった。当事者はきょとんとしているが、周りはびっくりである。流石のシンも自分の失敗に気付き、あつ、と間抜けに口を開けた。

「そついや『ん』で終わっちゃいけないんだつたけ。メンドーだなあ」

「ゲームのルールだ」

遊びとは言え枠が、決まりが無ければ成り立たない。何でもありはそれはそれで楽しいかもしれないが、万人が楽しめるものではなくななるだろう。

縛りがあるからこそ楽しむ余地があるので俺は思っている。シンも同じなのか、渋い顔をしながらも素直に『ごめん、と口にした。仕切り直し。

「えーと……ライスでどうだ」

「スイカ」

「か、『か』か？ かがみ！」

「御影石」

「『し』？ 竹刀^{しない}」

「リーダーらしいっすねー。じゃ俺は糸で

「んじゅトマトー」

「砥石」

「栗つ」

「リーダー」

「なんだ？ つて『り』だからかよ。しかもこの場合『だ』か『あ』

か？」

「どっちでも良いんじゃないか？」

「じゃあ『だ』で」

「……大根おろし」

「鹿威し^{しきおし}」

「なんだそれ？」

「えっとね、名前の通り鹿とかの糞を荒らしたりする動物を脅して近付かないように竹筒と水を利用して音を出すものだぞ。段々庭の飾りになつてたみたいだけど」

「へー」

「良く知つてんなあ、坊主」

「この間読んだ本にたまたまあつたんだぞー」

わからない言葉だとシンが面倒だったが、口ウが辞書のように解説したり、時折口ウも知らない言葉は適当な人が説明しつつ淡々と進むしりとり。そして所々昂さんが地味に苛められている。わざわざ『だ』で、トリクエストしたのは閑歌さんだ。本当に地味だな。

そして大分時間が経つた。シンがうーあーとつめきながら頭を抱えている。

随分と続いたからか、さつきから考える時間が長くなっていた。

元々言葉をあまり知らなかつたシンは、半田さん等々に生活や仕事に必要な言葉は叩き込まれている。だからこそやたら偏りがあることは否めない。本を読まず、守衛区と外にしか行かないのだから。

「どうした、降参か？」

鼎さんが茶化すように呟つ。しかし惱むシンは真剣だ。くわつと目を見開くと。

「降参なんかしねえよ！」

その怒鳴り声は結構な音量で、慣れていない人には強すぎたのか明らかに鼎さんら二人は怯んだ。怯えたと言つても良い。

「シン、怒っちゃダメ」「へ？ 怒つてねえけど」「でも怖いから怒鳴っちゃダメだよ？」
「ああ、わりい」

全く悪気のないものだったから。シンはさつきの剣幕が不思議な程あつさりと謝つた。三人は何が何だか分からず、棒立ちだ。シンは見た目や普段の話し方だけで判断してはいけない。それでは、ずれるから。

本人も自負する程に、実際の年齢どうこうははつきり言つて関係ない。本当にシンにとつての始まりは俺と出逢つてから、つまり四年間くらいしかないのだ。

あまりに大きな四歳児。

それがシンの時折感じる違和感の正体だ。だから我が儘で、優しくはあるが自分勝手。落ち着きはないし、我慢も大の苦手。子供な

のだ。

でもだから、半田さんは出掛けに、俺に忠告をくれた。

「あいつの、ガキのワガママには引き摺られんな、お前は冷静でいるよ」

そんで口ウに頼んな。

それは結構痛い言葉だった。

でもそうだ。口ウに苗字をやり、保証人になつたのは助けてもらうためじゃない。助けたいから、守りたいからだらう。本末転倒というやつだ。俺はとことん愚かだ。

「シン」

「な、なんだよ」

怒りられると思つてゐるのかびくびくした、揺らいだ瞳で俺を見た。俺は溜め息を吐きつつ。

「遊びなんだからもう少し気楽にやれ」

「わ、わかってるよ。でもよ、もう思い付かねえんだよ」

「……やめるか？」

「それはそれで癪だ」

「……」

また面倒臭いことを言つた。本当にちよつとは大人になつて欲しい。

そんな呆れ顔を見たからか、急にシンは不機嫌を深めたよつた声で乱暴に言い出した。

「いいよわかったよ。だけど良いか、これからオレが言つた言葉はオ

「もしかして、ほつちも意味わからねえやつだから話くなよ？」

「…………？」

“ひつじつ意味だ、と問ひ前に、シンは言語通りの言葉を口にした。

「小泉純一郎」

「「……」「」

皆ほぼ同時に首を傾げた。確かに次の頭文字は『J』で、ルール変更により人名ありには大分前からなっている。間違ってはいない。しかしそれすら死きたと自分で言つていて、いきなり出したのは明らかに人名だ。しかも聞いたことがない。

しかし、誰だそれ、とは誰も言わなかつた。むつきのシンの言葉と、酷いしかめつ面なシンの顔のせいだらつ。だがシンの謎の言葉は続いた。

「杓子果報」

「クレッシヒンド」

「アンデス山脈」

「人工衛星」

辛うじて推測するなら漫画から仕入れてきた、といつたところだが、しかし意味も分からず言葉をシンが記憶してくるとは思えない。そして気になるのはやたら不機嫌なシンだ。少し前までは悩みながらも楽しそうに言葉を出していたのに、今はすらすら言ふているにも関わらず大層詰まらなそうだった。

結局直ぐに昼食になり、そうなると直ぐに機嫌を良くしたシンはいつも通りになってしまったので理由はわからなかつた。

しかし。

「ほれシン。ちゃんと食べろよー」

しかしこんな一転して上機嫌なシンに、あれだけ嫌そうにしていたことを訊くのは憚られて、俺は黙々と昼食に徹する他なかった。まだ出発したばかりだというのに不安ばかりが募る。不甲斐ない自分につい溜め息が漏れた。

020 図書館のケモノ【真】（前書き）

さて漸くじこまでやつて来ました。あの子がやつといわ登場です。今まで男ばっかりでもさ苦しかったでしょう。シズカいたけどとにかく二十話目です。シン視点でどうだ。

第一印象としてはえらく中途半端な場所。

そこは一応第十六特区の管轄らしいが、発展した街を中心にある程度の人が集まり、何となく特区というくくりでまとめただけだそうだ。周りの村や町はついで。数合わせ程度でしかないのだろう。

言うなら広く薄っぺら。

確かにオレがいつも行く第十六特区とはまるで違う街、いや村だつた。話は聞いていたが、今この目で見て、ようやくちゃんと理解出来た気がする。

スバル達の用があるのはその特区の端の端。整備などされていなし、小さな村のような、簡素な家が疎^{まば}らに建ち並ぶところだつた。第八特区とは大違ひだ。あそこはみんなで協力して生きていこうといふ街だけど、ここはそんな思いやりが一欠片も感じられなかつた。例えるなら家族に無関心な人ばかりの家。さみしいな、と閑散とした村を見て思つた。

「……」

「無言で責めるなよ。俺だつて仕事じやなきや嫌がる奴を無理矢理説得して連れてくなんてこと、したくなんだ」

「……わかっている」

そう。もう一人スバル達のボスが呼びたい人がここに居るのだ。シランが嫌な顔するのもわかるし、板挟みになつてるスバルも複雑なのはわかつてゐる。だからオレは黙つてシランの傍にいた。

この話を聞いたのは昨日の晩、夜當の準備も夕飯も済み、ゆつたりしていた時だ。シランはただ一言。

「遅い」

だつた。

言うのが遅い、ということだ。

スバルはしきりに謝っていたので流石のシラクもそのことに付けては許しただろうが、納得が行かないのも分からなくもない。スバルたちのしつこい勧誘に困る人が他にもいたのだから。しかしスバルたちも仕事は仕事。あまり割り切れない気持ちがある。仕方ないと言つてしまえば片がつくと言えなくもない、のかね。

柄にもない考え方をしているといつの間にか目的の場所についていた。

「まあ、無用な誤解を受けるのも面倒だらう。あんたらはその辺で待つてくれ」

と言われ、結局茂みに隠れるまではしなかつたが、大分離れたところでおれたちは立ち止まつた。スバルたちの背を見送る。

彼らが目指す建物は村の中でも一際目立つものだった。別にどきつい色とか変な装飾があるからではない。逆だ。黒と白のとても質素な外観は、品、みたいなものがあつて、他の建物とは雰囲気からして違うのだ。でも一番の理由は、

「大きいな、あれ」

「図書館だな」

「雰囲気としてはそんな感じだな」

「ああ、そういう本の匂いがするな」「でしょ？」

「……相変わらず凄い嗅覚してるな」

確かに本独特的の、乾いた埃っぽい妙な匂いが微かにする。しつかし、図書館か。

「司書さんに用があるのかなあ」

「……どちらかと言えば田辺では書籍だらうな、恐らく」

シランが眉間に深く皺を寄せて言った。気に入らない、といった顔だ。本当にそういう感情は全く隠さないよな、シランは、と思う。普段は仏頂面過ぎて、喜んでいたりしても慣れた相手しかわかつてもらえないのに。あ、隠さないじゃなくて隠せないのか。

「シランの仏頂面も困ったもんだよなー」

「……なんで今言つ

「何となく」

しかしちょと皺が緩和された。今のやり取りでちょっと力が抜けたみたいだ。良かつた良かつたと、再び視線を大きな建物、多分図書館に戻した。

そして丁度、スバルが動いたところだった。コンコンと控えめなノック。

…………。

分厚い扉に音は呑まれてしまつたらしい。反応なしだ。スバルもそう思つたらしく、大きく拳を振りかぶり、扉を叩く。

バンッ。

重厚な木の扉は、軽々と勢い良く開いた。最早お約束。扉は吸い込まれるようースバルの顔面へ一直線に。そうして吹つ飛ぶスバルに対し、黒い扉は解き放たれた。

それはまるで雪のような純白で。

灼け付くような強い意志の赤が煌めいた。

「私は行きませんよ！ 貴方たちと話すことは一つもありません！」

「帰つてください！」

ものすじに勢いでそう叫んだ少女は小さな赤い瞳を、しかし弱々しさなんて微塵も感じさせない雰囲気で言った。

立ち止まり、勢いで浮き上がっていた髪がふわりと肩に降りた。それは透き通るような白で、ひどく細く、光を反射してキラキラして見える。

白と赤。

そのコントラストだけで十分目を引くが、もう一つ特徴を挙げるとなったら、それはぴょんぴょんと自由に跳ねる癖つ毛だ。長い髪があるで意思でも持っているみたいに見事な跳ねっぷりを見せていた。

「は、話だけでも、聞いてくれないか……」

「お断りします、帰つてください」

顔、というか鼻を押さえてようよろと立ち上がりながら言うスバルに、冷たく言い捨てる少女。どうも凄く怒っているみたいだ。オレだって流石にあれば思わず謝つたけど、あの子は流されないらしい。いや、怒り心頭で冷静じやないだけかもしねないが。

流石に二十歳は行つていなうが、整つた顔に凛とした雰囲気で大人びて見える。背はシランよりほんの少し低めで随分とほつそりしている。でも軽々と、勢いよくあの重たそうな扉を開いてみせたのだから、見た目は当てにならないんだろう。普段はちょっと垂れ目氣味そうな目が今は吊り上がり、相当な怒りなことは容易に察することができた。

「とめる?」

「……どっちを訊いているんだ」

「もちろん両方」

「もちろんか?」

「だってどっちの味方もやるつもりないなら、ここはケンカ両成敗、

つてやつじやない？」

「シン、ケンカじやないし、成敗しちゃダメだよ」

「あ、そっか」

でもじやあどうすんだよー、と口を尖らせていると向こうに何やらアクションがあつたようだ。

「諦めてください。私はここを離れるわけには行かないんです。その旨はそちらにはすでに伝えましたよね？……これ以上ここに居座ると言つなら実力行使もやむを得ないと見なします」

「ひつ」

スバルが遠田にも青くなつたことがわかつた。事前知識として知つていたのか、さつきの登場で察したか。とにかくスバルもその実力行使がやばいということだけはわかつたようだ。

ここで退かなきや本氣でオレらが割り込む必要がありそつだつた。スバルの数歩後ろに控える一人も緊張の面持ちだ。

しかしスバルは明らかに及び腰だつたが言つた。交渉のために武器を部下に預け、丸腰で怖いに決まつてゐるのに、逃げなかつた。

「本当に、すまない。でも仕事なんだ……明日、また訪ねよう。その答えを聞いて納得出来たら俺が代わりにそれを上に伝えて、もう人を寄越さないよう、嘆願しよう」

スバルは真つ直ぐに少女の鋭い赤い目を見て、振り絞るように、けれど逃げることなく言い切る。

「だから今日一日、真剣に考えて欲しい。明日、その答えをくれ……失礼した」

深々とスバルは礼をした。田の前の少女に恐怖しているのは間違いないなかつた。でもその気弱な顔には申し訳なさも含まれていることも間違ひなかつた。

「……わかり、ました」

小さな小さなか細い声がスバルの頭に降り掛かつた。そして扉はゆっくりと閉まり出し、慌てて下がつたスバルを待つてから堂々と元の位置に帰つた。

スバルはもう一度、改めて感謝するようにその場で頭を下げると後ろに控えた二人に目配せをし、それからオレたちの方へと歩いてきた。

「らしいな、お前らしい」

「ああいう風にしか出来ないんだ。不器用だからな」

迎えたシランの言葉に苦笑して答えるスバル。それから何故か妙に神妙な顔になるとシランの顔を窺うように見た。

「……なんだ？」

「……さつきの会話、聴こえてたか？」

「ああ、把握している」

それは微妙に嘘とも言えなくもない。何故ならやつぱり普通の人間の耳ではこの距離は離れすぎていたから、シランには会話が全て聴こえていたわけではない。だがオレとロウが通訳みたいなことをしていたから、シランも内容を知つてはいる。

しかしスバルはそんな裏話は知らないので神妙な面持ちのまま、

続けた。

「勝手に約束してしまったことは謝る、すまない。でも一日、時間が欲しいんだ。……頼む」

明日答えを聞くということだろう。どこまでも腰の低い人だな、と感心だか呆れだかを抱いていると、シランは予想通り即答した。

「長くて明後日までだ。それなら待とう。良いな？」

「……ああ、有り難い」

少しほほとした顔でスバルは頷いた。でも実はオレもちょっと意外だった。即答するだろとは予想していたが、明後日まで待つと言つとは。譲歩しても精々一日かと思っていたから。でも話を聞いた時から決めていたのだろう。シランは考えることもなく、泰然としていた。

シランの快諾もあり、徐々に余裕が戻ってきて表情が柔らかくなつたスバルが微笑しながら皆を促す。

「じゃあ宿に行くか。一応こんな時のために宿屋は把握しているからよ」

それに呼応した皆は歩き出しが、オレは動かなかつた。なぜならシランが歩こうとしなかつたからだ。

「俺は図書館に用がある」

スバルがパツと振り返つた。驚きの表情。しかしシランはいつも仏頂面で淡々と答える。

「言っておくがお前らの仕事のためにオレが動くことは決してない」

「……だよなあ」

スバルが頷く。それが落胆ではなく安堵だったのは、早くもシランの性格を掴み始めているからか。確かにこの場合のスバルたちにシランが協力するわけがない。

でも。優しいシランは何だかんだけで助けられるなら助ける。事情にもよるが、何かしらスバルたちを助けることをしそうだとオレは思っていた。口にはしないけどな。

「それは良いが、宿屋の場所は知らないだろ？　迎えに来てもそりや良いが……」

「大丈夫だ。この村の中の宿屋か？」

「ああ。一つしかない、って、なら誰かに聞きやわかるか」

一人で納得するスバル。まあでもオレがロウがいればそうじやなくともスバルとかの匂いを辿つて行ける。だからシランは迷う必要がないんだろう。

「二人も良いか？　先に宿に行つていっても良いんだが」「

「シランといるに決まつてんだろ」

「ロウも図書館行きたいぞ」

オレは当たり前だったので直ぐさま頷いて、ロウは田を輝かせて声を上げた。

「決まりだな」

「では何かあつたら宿に来てくださいね。誰かしら居るよつこしますので」

微笑んでシズカが「」、スバルとマルタも適当な挨拶をしてから村の奥へと足早に歩いて行き、直ぐに見えなくなつた。

「なんか急いでるな」

「作戦会議でもするんじゃないかな」

じつでも良さげな顔でシランは呟くと、図書館へと足を向けた。そしてゆっくりと扉を叩く。気負いは一切ない。そして分厚い扉の向こうから冷ややかな声が返ってきた。

「……どなたですか、何の用でしょ」

「」の本が読みたい。それとお前と話がしたい

「……わたくしの人のなか」「

多分「仲間ですか」とでも言おうとしたのだが。「」しかレシランは頼着しない。

「関係ない。俺はどうしても知りたいことがあるんだ。守りたいものがある。じうか話を聞いて欲しい」

「……」

沈黙。長い長い沈黙という返事に、シランは静かに唇を噛んだ。よつほど知りたいことがあるらしい。ならオレもそれを望む。オレだつてこんなのは悔しいからな。

「なあ、シランの話を聞いてくれないか。シランは悪いやつじゃないんだ。そりゃいつも不機嫌な顔してて愛想ないし、怒ってるみたいにしゃべり方でこわく見えるけど」

「おこ」

「でもなでもなつ。嘘吐かないし優しいし、無駄に甘党で体に悪いから止めろって言つても聞かねえし、器用だけど不器用で、頑固で納得できることとは曲げないし、寝起き悪いしお説教長いけど！つてあ、あれ、憑口になつてる？ セ、で、でもでも、違うの、案外素直なところがあつたり、いろいろ気づいて助けてくれたりして、良いやつなんだよ、シランはほんとー！」

「……おにシン」

何だかシランに睨まれてる気がするけど気にしてない。言葉を物言わぬ木の壁にぶつける、その向こうへ投げる。ヒミツ、おもし。そう願う。

「なあ、なあ！ シランと会つてくれよ、頼むよ」

しかし答えは。

「…………」

切なくなつてきた。そこで延々と返事のない扉に向かつて話していくと何だか悲しくなつてきた。だからか、段々と声が上擦つてくれる。

「返事くらいしたつて、いいだろ？ …… そんなに、シラン嫌いなのか？ オレも口ウも、嫌われちゃつたのかあ？」

「シン、もう」

シランが見兼ねて優しげな聲音で言おうとするが、オレはそれをキッと睨むようにして制した。

「良いのかよ、訊かなくて良いのかよ！ 大切なことなんだろう？

何訊きたいのかオレ、知らねえけどさ、でもやだよ、諦めんの。

いやだ

「……俺は」

俯いたシランが口を開いたその時だ。
ギイ。

と蝶番の軋む音が鈍く鳴つた。はつとなつて扉を見るとほんの少しだけ開き、赤い目が覗いていた。

「あ、なたはどうして、どうして目的もわからないその人の願いを叶えようと、泣くのですか？」

否定よりもまず先に、いや、勝手に口は動いていた。

「大切な人だから。シランを知っているから。だから手伝いたいし、諦めて欲しくない。シランが諦めるところなんて見たくないんだよ」

真つ直ぐに赤い目を見返す。キラキラと寂しげに揺れるその小さな瞳は、最終的にシランで止まった。

「何を、訊きたいんですか？」

しかしシランは答えず、黙つてオレを見て、ロウを一瞬見た。なんだろ、と首を傾げるオレ。ロウも一瞬だつたがその視線に気付いたようでシランをやたらと静かで澄んだ目で見返したが、それだけだった。ロウは意味をわかっているみたいだ。しかも何故だか赤い目の女の子にも伝わったようで直ぐに黙考に入り。

「……私に危害を加えないと誓つて貰えるのなら、多少はお話しても良いですよ」

それにオレは田を見開いた。

「ホントか！ ありがとー！ シラン良かつたなあ
「……お前はオレの保護者か何かか」

シランは苦笑していた。しかし怒つたり呆れたりはしていなかつた。オレは胸を張つて答える。

「似たようなもんだろ」

「逆だねー」

「いやー、シランの世話をじてるのはオレだもんね」

「」しし、と笑い返す。すると近くでクスクスと小さな笑い声がした。赤い田の女の子だ。いつの間にか扉は開き、再び姿を見せていた。

真っ白い髪は何だか雲の向こうから射す月の光を細く束ねたみたいで。赤い田は何だかトマトみたいな色だとオレは思つた。力強い、きれいな瞳。一発でその目が好きになつた。柔らかくて夏の夕暮れに照らされたトマトつて感じ。優しい感じ。

オレとは違つてとても澄んでいる赤だつた。オレの田も赤だけど濁つたような、赤茶色、赤銅色つて感じだからなんだか羨ましい。そんなことを考えながら見ていたからか、女の子が照れたように白い頬を赤くして言つた。

「あの、そんなに見られると恥ずかしいですよ」

「あ悪い。オレはシンツていうんだけど、あんたは？」

「あ、はー」

赤い田の少女は小さく笑むと、澄んだ、でも弱さなんてこれっぽ

「さ//ここめす。姓は夢見ゆめみを名乗なまなりせていただいてめす」

やわらかな朝田あさたがアマテ色の瞳を潤うるしていた。

「さ//を感じせなこ志のある声で叫さけつた。

021 知識の代償【紫蘭】（前書き）

最初コメティ？、後半真面目な感じです。シラクの思い、本音がわかります。

では今更シンやシラクのキャラが掘めてきました、という爆弾発言をしつつ、シラク視点の2-1話をじります。

通されたのは図書館の奥、司書の控え室みたいなものだろ？

大きめの本棚が一つと、古めかしいどうしりした木の机、それに隠れるように小さな丸椅子が四つあった。あとは細々とした筆記具の類いやメモが、机の隅やラックの上に纏められているだけ。

部屋の主は几帳面らしく、とても整然としている。本棚の中のノートなどの資料も名前の書かれた背表紙は全て手前に向けられ、丁寧に置かれた仕切りで多種多様な資料は秩序を作り、綺麗に分かりやすく並べられていた。

ヨミと名乗った、恐らくこの部屋の主である少女は、俺たちに席を勧めると自分は奥のキッチンに隠れてしまった。それにシンがそわそわしだす。多分ヨミが用意しているお茶が気になるのだ。シンは客が、自分が接待を受ける側になるのが大の苦手だ。落ち着かないらしい。しかし人の家だから勝手に台所に入るのは失礼だろうと何とか堪えているようだ。……ちょっとは素直に好意を受け取れよ、と思う。

「シン」「
なんだよ」

不機嫌そうな声なのに、こちらに向く目はあるで待てをしている犬みたまに真っ直ぐだった。それに思わず苦笑しつつ、尋ねる。

「今から何を話そうとしているか、お前はわからないだろ？」「ああそうだよ、そーですよ。バカなんでオレにはさつぱり伝わんなかったさ。で、親切に言葉にして説明してくれんの？」

どうやら酷く腰を曲げているシンは、口を尖らせて、全く期待し

ない目で、でもやつぱり真摯な目で見ている。

しかし俺は未だに答えを出せずにいる。つい月色の瞳を探してしまったくなるが止まつた。そこは頼つてはいけないところだと思ひから。

しばし黙考する。

シンにとつて何が良いのか。シンは過去に囚われない。だからと言つて過去が要らないのではない。自分が何者なのかの答えを必要としないわけではない、と思う。

いやそもそもこれがシンに関わる話になるかもまだ俺にはわからない。ロウとシンは根本的に違つものである可能性だつてある。

狼と竜。

その一つの間には本当は大きな違いがあるのではないか。実在している動物と、空想の世界の生物。その違いはどう受け止めれば良い？ どう判断すれば良い？
でも最後にそれを決めるのは 。

「ロウは狼だぞ」

不意にした声に、はつとする。気が付けばティーカップを並べ終え、正面の席に着いたヨミがいた。そしてヨミの隣に座つたロウが好きな食べ物でも教えるみたいに言つた。

「狼、なんですか。だから狼君……でも怖くないですわ

「ロウは人間っぽい狼だからなっ」

「そうですか。なら私は兎ですよと答えなければいけませんね

「ああ兎かあ。そつかそつか、確かにそんな感じだよなヨミは」

シンまで納得顔で頷く。何と言つか……案外あつたりしてゐるな、と思つた。ついさつきの悶着はどこへ行つた。と拍子抜けした顔をしていつたようで、ヨミが俺を見てクスクスと笑つた。

「すみません。なんだか……ほつとしちしました。さつきばりめんなさい。話も聞かずに酷い対応をしてしまいました」

そう言つて深々と頭を下げる三井。それに思わずムスッとした顔になる。

「俺は気にしていい。謝るならシンに謝つてくれ。それより俺こそあんなタイミングで、あんな説明で話を聞かせて欲しいと言つのは……図々しかった。しかもそれをわかつて強行した。……すまない」

立ち上ると俺は机に頭突きをする寸前まで頭を下げた。そして更に図々しいことを言う。

「それでも、そうしてでもこうして話し合いの場が欲しかった。気分を害しただろ？ が、話を聞かせて欲しい」

「……そんな、仰々しいものでもありませんよ。それに……全て話すつもり、ありませんから」

そう言つて三井はいつひとつ微笑んだ。何と言つて黒かった。

「では何からお話をしようか」

一口紅茶を含み、落ち着いた三井が静かに改めて口火を切つた。

「そもそもどこまで知っているのですか？」

「……推測の域を出ない程度、噂程度だな」

「お一人は何も知らない、と？」

その質問に、カップを引き寄せた手を止め、神妙な顔で答えた。

「もしかしたら記憶喪失なのかも、しれない」

「オレは違うからなー、それ」

シンが無駄に自信ありげに、いや、当たり前という風に言った。そして俺の手を遮るように手を伸ばして砂糖の入った小さな壺を捌つて行つてしまつた。流れるような動作に唖然となる。目標を失つた手が力なく机に落ちた。ギチギチとオイルをさしていないゼンマイのようにゆっくりとシンの顔を見る。

すごい笑顔だった。

しかもいつの間にか俺のカップまで手にしている。全く気付かなかつた。お前は手品師か。

「砂糖はあんまり入れちゃうと、せっかくの紅茶の味がわからなくなっちゃうから程々にな。一番はやっぱり砂糖なしミルクなしそのまんまだよ。元々良い匂いなんだしな」

とか言いながら手際良く俺のカップに砂糖小さじ三杯を入れるとこり笑つて。

「はいシラン」

「……ありがと」

カップを受け取ると小さく啜つた。スッとした紅茶の香りとほんのりとした甘さが口に広がる。確かに良い匂いだ。

再びシンに目を向けると今度は口ウの紅茶を拉致していた。こちらは砂糖一杯。

「仲が宜しいんですね」

ミリが微笑んで言った。それに俺は苦笑だ。確かに険悪とは程遠い、良好な関係。それは喜ばしいことだが。

「シンが俺の母に似たおかげで、まあ生来のものかもしれないがちよつと度を超す世話を焼くになってしまい、いつもこんな感じだ」「だつてよー、シランとかほつとくと砂糖五杯とか平氣で入れるんだぜ？　と一によーびょうつてのになつても知らねえからな」「なら放つておいてくれ」

「やーだよ」

そう言つと小憎たらじい顔でにしづしと笑つた。俺はため息一つ吐いてもう一口紅茶を口に運んだ。

口ウも俺もかなり甘いものが好きだ。そのせいでたまに半田さんや美崎に「甘党」だの「糖尿病予備軍」だのと言われ、それがシンにまで定着してしまつたのだ。……困る。

「では口ウ君が記憶をなくしている、と言つことがありますか？」

「そうだぞ」

「……生まれが野生といふことは

」

「そうこうとこの記憶はすっぽつ抜けてるみたいだから良くなわかんないぞ」
「そうですか……そうですね、それに関係ありませんし」「関係ない？」

意外に思い、思わず口を挟む。するとヨリミが「うちを見た。何だか哀しげで、微かに青くなつた顔で。

「私達が危惧する」とこと、出自は関係ないでしょつづへ。」

その言葉に、田を見開く。田は小さく微笑む。

「知っていますか？ 狂った研究者、まさこマッシュサイエンティストに相応しい、生命の冒涜者たちを」

「……噂、程度にな。実在、するのか」

「ええ、私が証明ですよ。明らかに人間の枠を越え、変異種の中でも異質な存在。人間のようで人間でない、獸。混ざり者、レプリカ、獣人、劣化ファクター……変異人間なんて呼ばれたりもしましたね」

そう言つてヨミははにかんだ。何だかそれが痛々しかった。俺は自分のカップに目を落とすことで、逃げた。赤褐色に染められた、香り立つ湯気を立ち上らせている境面は、不器用でどうしようもない自分の顔を勝手に映し出している。

「すみません。気持ちの良い話ではありますんよね」

「……謝るな」

まるで弱い自分を責められているようだから。やめてくれ、頼むから。そういう達觀したような、諦めた笑みなんて、しないでくれ。唇をきつ、と噛み締める。無力感がただただ俺を襲う。

「逆にあなたは、何に対して謝っているんですか？」

再び田を見開く。いつの間にか顔を上げていた。だから固まる俺をよそに、ヨミは不思議なほど穏やかな表情で、緩く結ばれた口をそつと動かしたのがよく見えた。

「あなたは何に罪悪感を抱いているんですか？ あなたが悪いことなんて、一片足りともないと、私は思いますけど」

会つて間もない、しかも一度拒絶したにも関わらず、ミリは何故か妙に確信を持った口振りで話す。俺は戸惑うばかりだ。

「どうしてそんなことが言える?」

「だって、シン君とロウ君を見れば一目瞭然じゃないですか」

驚いて一人に視線をやろうとしたが、その必要はなかつた。何故なら一人共俺を見ていたからだ。真つ直ぐな目で、迷いなく。言葉で言つ必要なんてないと知つてゐるみたいに。

「重たいと、思いましたか?」

「思つた……思つてゐる。ずっと、前から」

あの日、鮮烈な赤に出逢い、再会の願いが果たされた、あの瞬間から。

背負つて行かなくてはいけないような気がして。それなら決して落とすものかと踏ん張つて、歩いて行かなくてはと思つて。でも俺一人ではあまりに無謀で、結局何も出来ずただただ『えられてばかりなのが口惜しく。反面、居心地よく。だからと言つてそのままで良いはずもなく、そして俺の責任が消えたわけでもない。

「俺に出来ることなんて何もない。だから重かつた。何も出来ない、何もしてやれない俺を選んだシンが。その上にロウが。俺は弱くてどうしようもない、何も知らない愚か者だと言つのに」

俯きかけたその動きを止めたのは、盛大に音を立て椅子が転がつたのと、乱暴に机が叩かれた鈍い音だった。続くのは悲鳴のような心からの叫び声。

「そんなことねえよ！ 何言つてんだよ、シンが教えてくれたことも、これも！ シランがしてくれたことじやねえか。オレは、オレにとつては！ シランはすぐえ物知りで優しい、本当に、本当に

これも、と言つて刀を突き出して見せる。俺は鍛えた刀。人間に
なりたいと言つたこいつにやつた刀だ。それを掲げてシンは何故か
今にも泣き出しそうな顔で。いや。

「悪かつた……だから泣くな」

「な、泣いてねえー、泣いてねえよお。つ、だいたい、シラソん悪い
……こつともこつとも自分は、ダメだとか……なつ、なんでそんな
うぐう、悲しこじと、言つんだよお」

もつぐつちやぐぢやだつた。涙が際限なくぼろぼろと溢れ返り、嗚咽で言葉も隠れてしまう。体裁も羞恥も何も考えていないような泣き方。思いのまま、この大きな泣き虫は泣いていた。

「大丈夫ですか」

「シンの言つ通りだぞ。シランは自分を卑下しきり」

『いい』はシンの顔を気遣わしげに覗き込んでハンカチを差し出して
いた。口では駄目でしょと言つように、ちょっと怒つた風に俺を見
た。俺は小さくなることしか出来ない。

「つばーかばーかシランのばーか！ もう知らねえ、つづづづ」

ぐずぐずと鼻を啜つたり涙を拭つたりと忙しいレシンはそんなこと
を言い捨てるが、するすると呪を引き摺るみたいな、死靈のような
動きでゆるゆる歩いて部屋を出て行ってしまった。走らなかつたの

は多分前に感情が高ぶった時に勢いのまま駆け出し、何軒か建物をぶち破つた事件を忘れていないからだろう。微妙にほっとしてしまうのは仕方ない。

「シラン。自分が好きじゃないとか口ウもわかるナビ、でもシラン好きな人はそういうことをシランが言つちやつとすつてい哀しいし、シンみたいに傷付いちやつから……特にシンの前では言つちやダメだからな？ 約束だぞ」

「……ああ、すまない……約束だ」

絞り出すように何とか俺が答えると口ウは苦く笑みを浮かべ頷き返した。そしてヨミに頷く、と言つた会釈のようなことをすると口ウも席を立ち、シンを追い掛けて行つた。

残つたのは一人。

「ではシン君のことは口ウ君に任せて、話しまじょつか

「……ああ、頼む」

微笑むように言つヨミ、我ながら苦しそうな情けない声で応えた。しかし後が続かない。そのことをこぶかしみ、いつの間にか下を向いていた顔をヨミに向けた。ヨミは微笑を湛え、待つている。いや、待つていた。俺が顔を上げるのを。

「何が辛く思つのですか？」

「俺には出来ることがあまりに限られてることだ。俺は何一つ返せない」

「何を貰つたのでしょうか？」

「……意味」

見たことない程透き通った赤から田が離せなくなる。シンとは違う、水晶のような鏡のような瞳を見返して、自分を見詰めて続ける。

「俺は何をしたいのか、わからなかつた。知つてもその意味が解らなかつた、解ろうとしなかつた。でも、あいつが」

あいつが尋ねたのだ。人とは何か、獣とは何か。何をしている。お前は誰だ？

言葉ではない何かでそう、訊かれた気がして、それに応えたくて。逆に訊きたくて、知りたくなつて。

お前の名前は？

それが始まりで。言いたいことを知らないやつと、言いたいことが解らない馬鹿が会つて。教えられたのはこっちだ。

「あいつが、訊くんだ。」これは何だ、どうしてそうなつてる。知っていることを教えると言つんだ。本当だおいしいな、すごいな、きれいだ……俺は改めて考えたこともなかつた。そういうものだと思つていて、でも理解しようとせずそのままを受け入れていて

だから改めてシンに教えるために考えて、シンが感じた素直な気持ちを聞いて。

「シンのおかげで漸く解つてきた気がするんだ。世界が急に広がつた氣さえした。俺は知つていたのにまるで見えてなかつた」

「シランさんにとって、シン君は大きな存在なんですね」

「ああ、本当に」

「だから失いたくないんですね」

「そうだ。口ウだつて、そなんだ。欲張りと呼ばれても構わない。ただ守つてやりたいと思つ。もう独りで戦わせてやりたくないんだ」

「そうだ。口ウだつて、そなんだ。欲張りと呼ばれても構わない。ただ守つてやりたいと思つ。もう独りで戦わせてやりたくないんだ」

「……よつやく、わかつた気がします」

息を小さく吸うと、穏やかな顔で唐突にヨリが言った。声のトーンがまた変わり、虚を衝かれ、さつき以上にまじまじと赤い目を見てしまつ。しかしヨリは全く気にしない、マイペースで続けた。

「シン君たちの信頼の理由や、私が安心出来ると思った理由。シラソさんは誰よりも純粹で真つ直ぐなんですね」

「んなつ」

意外性が高過ぎてそれ以上の反応が続かなかつた。硬直する俺を楽しげに、愉しげに見るヨリ。案外悪女なのか、と膠着を逃れた頭のどこかがそんなことを呟いた。

「研究所は大小様々、無数にあります。でも今のところ気付かないならきっと大丈夫ですから、いざというとき動けるよう心構えをしていれば良いと思いますよ」

「な、んで」

」のタイミングで本題に戻るんだ。

惚けた顔にそう書いてあつたのを読み取つたのか、ヨリは歌うように応えた。

「シラソさんは渋い顔よりも間抜けなくらいが良いと思つたからですよ」

「答えになつてない……」

「ふふ。何かあつたら私にお知らせ下さい。是非力にならせて貰いますから」

「それだけ?」

「シラソさんは知つても知らないでも無駄に悩みそつですから、

なら無闇にリスクを冒す必要はないのですよ

「なんだって？」

「だからシランさんは幸せに暮らしていれば良いんですよ。ほら、

シン君達も図書館の中で待っています。行ってあげて下せー」

あまりに優しい笑顔。

まだだ。まだ終わっていない。俺の用事はまだ一つ残っている。

「……お前は、お前はどうするんだ？」

「図書館を守ります。それが私の願いで役目ですから」

「それで良いのか？」

「私がやりたいんです。シランさんは気にしなくて良いんですよ。その優しさは一人に

「良くない」

グッと眉間に皺が寄ったのが自分でもわかった。それにヨリはきょとんとした顔をする。

「どうしてですか？」

「单刀直入に言つと、俺も日本政府とやうに呼ばれて、今向かっていふところだ」

ヨリの顔が凍り付いた。でも俺は続ける。

「頼れる人がいるなら良い、だが」

「大、丈夫です」

苦し紛れな声。急に弱々しい顔になつたヨリが、振り絞るよう口にする。

「図書館を守るのが、私の仕事ですから」

「見たところ一人だろう、図書館に居るのは。他の人は」

「大丈夫ですから！ 私は大丈夫なんです、強いから、普通じゃな

いから！ 一人で、守れます、大丈夫なんです……」

叫び、俯くヨミ。その上に声をかける。

「強がるな」

「強がつてません」

「人に頼るのも必要だ」

「必要ありません」

頑ななヨミの言葉に違和感があつた。さっきまでのヨミはそんなことを言つやつだったか？ いや。じゃあどうして。

「もしかして、怖いのか？」

びくっと肩を大きく揺らしたヨミが俺を見た。怯えが湛えられたあの赤い瞳で。本当に兎のようだと思わず思った。

「人が、怖いのか？」

「あ」

悲鳴にもならない声が一滴だけ溢れた。見開かれる目には微かに絶望が見えた。

そして漸く俺は自分の愚かさを知った。

知つては、教えてはいけないもの。触れてはいけないものに触れてしまつたことを、今更自覚した。

しかし全ては手遅れで。

静寂が場を支配した。

022 痛みの訳【狼】（前書き）

知つてしまつたことをなかつたことは出来ないんだよ。
そんな風に語る口ウ君視点の第一十一話。ちょっとだけ時間を巻き
戻した冒頭より始まります。

022 痛みの訳【狼】

図書室から出た口ウは、辺りを見渡そうとしてやめた。だつてシンは直ぐに見付かったからだ。

「シン」

「うわわ、口ウ？」

と言つた、図書館の扉の前で踞つていて、ナレは図書室から丸見えだつた。そんなちよつと間抜けなところに座り込んだシンの田元は腫れ上がり、鼻も赤くなつていた。

シンは田をぱちくりさせて近付いてきた口ウを見上げた。でも元々身長の高いシンはしゃがんでも口ウの肩くらいにしかならなかつたのだけだ。

「な、なんだよ、話終わつたのか？」

「そつこののはシランに任せてきた。ほら、顔凄いことになつてるぞ？」ミハにハンカチ借りただる、貸して

しかしシンは困つた顔をするだけ渡さうとしない。口ウが首を傾げると、ほそぼそと言訳するよつと言つた。

「なんか、悪いから」

「汚すのが？」

「……うん」

「そんなの氣にしてたらハンカチ使えないし、ミハの好意も無駄になつちやつち、良いのか？」

「わかるの、ミハが手を差し出す。シンは暫く口ウの手と

三ツのハンカチを見比べていたが、観念したようにハンカチを口の手にぽんと置いた。

「……良くない」

「うそ、じゃあ拭くね」

涙やら鼻水でぐじぐじになつた顔を拭つてやる。ちょっと戒めみたいなものを込めて心なしか強めだつた。でもシンは文句もなく、何だかシランみたいなムツスーとした不機嫌顔でされるがままにしていた。

何となくわかる。これは機嫌が悪いと言つよりは、恥ずかしいんだろうな、照れ隠し、あと決まりが悪い。皆の前で泣いたこととか、いじけてるところ見られたとか、そんな感じ。

「はい終わりだぞ」

「……ありがと」

でもぶつかり合ひに答えるシンは、そんな事情を抜いても何だかシランにやつくりだつた。

「どうしようか」

「どうしようか、つづ……」

びくびくしながらシンは同書室の方を見た。

「戻るか?」

「つづ……」

頭をぶんぶん横に振つて答えた。よほど嫌だと、恥ずかしいと見える。

「む、無理、却下！」

顔を少し赤くして、声が向こうに届かないよう堪えながら叫ぶと
いつ器用なことをして見せたシン。流石に可哀想だよな、と思い苦笑した。

「そうだな、口ウも今から戻るのは気まずいし……本でも読もうか」「うえつ」

恥ずかしがっていたはずのシンは、ゲッ、という顔に瞬時に替わった。そんなに嫌なのかと、つい笑ってしまうと、シンがまたムスツとした顔になる。だから直ぐに訂正を入れて機嫌を取ることにする。

「大丈夫、口ウが声に出して読むから」

「良い、のか？」

「うん。それに一人の方が楽しいからな」

すると一転して曇りのない笑顔になるシン。本当にわかりやすいなあ。

「シンが選んで良いぞ、何が読みたい？」

自然と出たのは苦笑じゃなく、微笑だった。シンに笑い掛けながら問う。

そして返事は最高の笑顔と共に。

「もつちろん料理の本！」

「これ以上があるのかと思つ程晴れやかで無邪氣な笑みだった。

「あ、シラン」

涙もちちゃんと綺麗に拭いていつも通りになつたシンが、やつぱりいつも通りの喜色の滲む声で図書室から出てきたシランを迎えた。ついでつきまで夢中になつていた本は、扉が開いた瞬間にシンの意識から弾かれてしまつたようだ。本当にシラン第一主義だなあ、と思つ。

しかしシランは。

「わざわざ本を持ってまなかつた……出でや」

とだけ言つと早足に図書館を出て行こうとする。慌ててシンが一緒に読んでいた本を棚にしまい、シランを追つた。口ウは立ち上がるともう一度図書室の方を見た。扉は固く閉ざされてゐる。シンが戻した本をちらつと見ると、口ウも急ぎ足で一人を追い掛ける。

「パンダラの箱」

開けちゃつたね、と一人呟いた。

「ビーしちゃつたんだよシラン。マリセ、結構ビーフ話したん

だよ？ 途中で出でちゃったオレも悪いけどや…… シランへ。」

怪訝な顔をしたシンがシランの顔を覗き込むがシランはふせいだ
ままだ。

宿に到着したロウ達は部屋で休んでいた。と言つか、シランが黙つて一番端のベッドに座つたかと思つと部屋の隅を向いたまま動かなくなつてしまつたから、なのだけど。

「具合悪いのか？ ミミに何か言われた？ それともせつとの氣に
してゐ？ あ、ばかばか言つて」めんない。…… ババーと」

シンも困つてしまつている。弱つた顔でロウを見て、またシランに視線を戻し、懸命に話すがシランは反応がなく、ちょっと泣きそうな田で口ウを見て。 。

その繰り返し。

流石に見ていられなかつた。シンがあんまりにも可哀想だし、シランの落ち込みよりも酷い。

また田があつた時、今度は頷いて見せた。シンはほつとした顔で頷き返す。ここからはロウの仕事だ。

「じゃあシンはスバル達の部屋にでも行つてくれるか？ シラン
と話したいから」

「……わかつた。お願ひ」

逡巡したがシンはもう一度頷くと、部屋を出て行つてくれた。足音が斜向かいの部屋に向かつたことを感じ、素直だなあと感心のよくな安堵みたいな感想を抱く。

「……どうしてシンを出した？」

横からシランの問い掛けに、ロウは微笑んで向を直る。

「居た方が良かつたか？ シン居たら話しへこだらうと思つてなんだけど」

「いや……ありがと」

なんだらうな、と苦しかつた声で、でも安心したみたいな顔をするシランを見る。

「辛かつたなら、シンにもいへば良いの？」

心配されてることが心苦しかつたなら、しばしばほつとこくられと言えば良い。後悔に押し潰されそつなら話を聞いて貰えれば良かったじやないか、と思つた。

全部伝わったかはわからなかつたが、自虐的な笑みを浮かべてシランは答えた。

「救いを求めることがまず筋違いだ」

「……バカ」

なんにもわかつてないじやないか。

思わず拗ねたみたいに言つてしまつた。シランが田を丸くする。シンの時は驚かなかつた癖に、なんでロウが一回言つただけでそんな驚いた顔するのぞ。

「シランはそれ直す。それ、シンは泣くかもしれないけど、ロウは

怒るぞつ」

「……すまん」

「ムカツと来る。せめてシンの前では言わないでよ。そん時は殴るから」

「なぐつ……わかつた」

「バーか」

シンの生き靈でも入ってるのかと自分でも不思議に思つ程自然に怒つてた。簡単とは言え罵倒の言葉も平氣で飛び出す。調子が狂うな。

「うん。うじうじしてゐるシランが悪いんだ。

「まあ、でも、考えなしにヨリニ『人が怖いのか?』とか言ひやつて傷付けた後じゃそつなるよな」

「んな」

シランが硬直する。それを見てちょっと落ち着いた、と言つか溜飲が下がつた口ウは、逆に申し訳なくなり小さく呟つた。

「ごめん、聞いてた」

「な、なな、ど、どづけつて? だつてお前……」

「あのくらいの距離なら頑張れば聞こえるだ。ドアも隙間微妙に開けて出たから」

「…………」

絶句したシランがまじまじと口ウを見た。それから恐る恐る口を開く。

開く。

「シン、は」

「つうん。まず間違ひなく聴いてない。まあ実は凄い賢い子でした、とこつなら聞いてたかもしれないけど、本に夢中だったし聞いてないよ、多分」

「は、ちょっと待つて、本に夢中? 字を読めないシンが?」

「口ウが讀んであげてたの」

「音読しながら耳を清ませてた？」

「そう」

「…………」

再び絶句のシラン。漸く呴いたのは、器用だな、の一言だった。

「心配だったから、つい。」めんなさい」

「いや、良いよ」

呆れと感心がないまぜになつたような、惚けた顔でシランは許した。それに口ウも安堵する。

「じゃあ本題に話戻すぞ？」

「ぐつ……ああ」

口をへの字に曲げた情けない顔で渋々と頷いた。しかし逃げるつもりはなさそうだ。そんなシランにっこりと笑い返すとゆっくりと話し始める。

「ミミは人が好きなんだぞ。だから怖いといつ矛盾を隠してたんだ。他の人にだけでなく、自分自身にさえね」

「何故、そう言える？」

「シランも見たでしょ？ 同書室にあった資料とかメモ。大体は図書館の学問の本だった」

様々な人が利用出来るよう、しゃべくなるように考へるもの、考えられたもの。そんな本や本から書き留めたらしきメモが大量に見受けられた。

「もし自己満足で図書館を守る、って考へる人ならそんなことしな

いし、利用する人のことを大切に思つてなきやあそこまで出来ないよ」

「……ああ、俺も見た」

「だからあんなミミを見て思つたんでしょう？ 矛盾してる、おかしいって」

「……その結果があれだけどな」

「知つてはいけないことだつたんだよ。シランはそれを教えちゃつたんだ」

シランは沈痛な面持ちで頷いた。わかつてゐるのかな？ でも多分わかつてゐる。結構シランはそういうところは理屈じやなく感覚、心で感じて理解するから。

だからこそシンと出逢つて世界が広がつたと感じたのだろうけど。しかしどうするかはとことん頭で考えてしまつから袋小路に入つて、身動き取れなくなり勝ちなのだろう。

「ミミは今まで独りで強がつてたんだ。そうじやなきや立つてられなかつたから。矛盾が心に突き刺さるから」

自衛の為には知らないことにしなければいけなかつた。無意識の防衛だ。

「でもシランが教えちゃつたから、もう知らん顔出来なくなつた。ミミは人が好きで人が怖いという矛盾と戦うことになる。つづん、戦つてる」

「無神経な俺の、せいだな」

「そ'うだな」

田を丸くした、ギヨツとした顔のシランがロウを見た。ロウは二二二とその驚愕の表情を受け止める。するとシランは直ぐに頃垂

れてしまった。

「やうなんだ、だから、俺がやらなきゃいけない。俺が、出来る」とをしよう……ヨミがちゃんと向き合えるように」「

「口ウ達ができる」と、だぞ？」

「……口ウ、達？」

ゆうくじと顔を上げたシランは、全くの予想外といった惚けた顔でおうむ返しに言った。

「シランの失敗は残酷だったかもしれない。でもきっと踏み出さなきやいけないものだから、シランで良かったんだよ」

「良かった？　俺が突き付けた事実が？」

あんまりにも情けない、珍しいくらい狼狽したシランに、思わず笑いが込み上げて来る。

「ちょっと違う。口ウが言いたいのはな、たまたま矛盾を指摘した人が、超絶にお人好しで責任感の塊みたいな人だからほつとくことなんか出来なくて、ヨミも問題から逃げずに済むね、ってこと」

シランは林檎でも丸呑みしたみたいな変な顔になった。そして恐る恐るとこつた体で確認の問い合わせを口にする。

「それは、俺がしつこく何とかしようとするとするから、ということか？」

「そこは素直に受け取ろうよ。ほら、一人で立ち向かうには、現実つて冷たいじゃない。世知辛いって言葉もあるし」

「……今日は一段と子供らしくない発言だな」

「口ウは子供じゃないもん」

そう言つて笑うともうシランは何も言えず天井を仰いだ。何だか声にならない悲鳴が聞こえる気がする。

「とにかく伝わったか？ シランの問題なら口ウモシンも勿論手伝うし、そもそも優しいシランなら口ウ達居なくとも絶対円満解決してくれると思つてるんだぞ」

「……その信頼度の高さは何とかならないか？」

「それは無理だなあ」

だつてシランがシランだからこそだから。

どんなに失敗しても、間違つても、シランがシランにひじへ止もうとする限り全く信頼は裏切られないから。シランのその眩しいくらいの真っ直ぐさは、どう考へてもシランの性格じや曲げられないだろつじ。だからもつこの信頼度はビリビリしようもないんだよな。上がることはあつても下がりそうにな。

渋い顔になつた彼を見返しながらそう思い、一人頷く。彼は深々と嘆息した。

「まあまあ、誉めてるんだぞ？」

「笑顔で言われてもな……遊ばれている氣しかしないのだが

「そんなことないぞ？ ちょっと楽しくなつてきたけど。ミリの気持ちがわかると言つか」

「…………」

「あは、『めんつて。ほり、ミリのひと、まだ言つてないでしょ、あれ』

「あれ？」

きょとんとした顔で首を傾げるシランに、もう普通の表情を忘れてしまつたみたいに自覚できるほど凄い良い笑顔のまま口ウは言つ。

「ほひ、俺も行くから一緒に来て話聞いて、で断るなり一緒に頭下げて帰つて来よう、みたいなお誘い」

その言葉に、シランは完全に固まつ、次に顔を真つ青にすると言んだ。

「な、なんでロウが知つ、あ、いや…………はあ。お前は本当に何でもわかるんだな」

「シランのやるひとつで、ひとつも分かりやすいよね」

シランはちよつと恥ずかしそうに顔を赤くした。けど、直ぐに妙に神妙な顔になるとロウに尋ねた。

「それをアリサビハ受け取ると思ひへ。」

不安なんだろ?な、と思ひ。でもロウはあつせつと首を横に振つた。

「それはアリサビに聞かなきやわからないことだよ。シランが聞く」とだ。シランがどうするかが大切なんだよ。心配しなくともなるようになる」

「……そんな軽く構えられない」

「うん、シランはそれで良いんだよ」

「……そうか。じゃあ立て続けだとアリサビも落ち着いて考えられないだろうから」

「そうだなつ。スバル達が行く前に訪ねてみよつか」

「……読心術でも使えるのか?」

「脣の方なら多分出来るぞ」

「それはそれで凄いな」

何となく田を合わせ、一人は動きを止めた。ロウは相変わらずの笑顔で、シランはいつも仏頂面に戻つて、互いの視線を受け止める。

先に降参したのはロウの「機嫌にうごめいたようなシランだつた。

「……シンにちゃんと謝つてくれる」

「それが良いな。シンはもう全く氣にしてないから、焦らず氣負い過ぎないようにな」

そんなアドバイスに苦笑したシランは感謝の言葉を告げると、疲れた横顔で部屋を出ていった。

一人部屋に残される。

「意地悪だつたかな」

いろいろな意味で。でもシランにはズバズバ言つちゃつた方が良い。一人だと長いから、ひたすら悩む時間が。そういうのが必要な時もあるけど、今回はそんなに猶予はなかつたので強引にまとめて答えが出せるよう手伝つてみた。余計なお節介だつたかもしけないが、でもシランを助けられるなら助けたいし、ヨミも放つておけない。

でも、だ。

やつぱりああいう読心術みたいなことは控えた方が良いだろ? なとも思った。シンやシランだから好意的に受け取つてくれるが、下手すれば気味悪がられる。怖がられる。それは……避けるべきだろ? ロウだって嫌だから。

「 うわわシ、シランー!」

不意にシンの声が響いてきた。向こうつの部屋が何だか騒がしい。あれだけ言つてもやつぱり土下座とか始めちゃつたかなシランは、と思い苦笑する。だつてシンの慌てた声がまだするから。

口ウは腰を上げた。このままじや苦情が来る。止めて来なきゃな、ヒドアに向かつ。

その道すがらに思う。

これから未来。口ウは余計なことを散々してしまった。いや、するだろう。今のことも、今までのことだつて余計なことと言える。でも好きな人達だからほつとけないのだ。知ったことを知らなかつたことには出来ない。丁度今のヨリのよろこび。突き付けられた現実から逃げる術は生きている限り皆無だつ。だから口ウは逃げずに向き合うしかないんだ。やれることをやつて、最善を尽くすしかないんだ。たとえ。

たとえその結果が、どんなに悲しい事実に辿り着くとも。

急に胸が張り裂けそうな気持ちになつて、引き吊るような声がか細い声が溢れた。零れ落ちた。

「……シ、ラン。シンッ」

誰か、聞いて。誰か大丈夫だと言つて。そんなことないよつて慰めて。

「誰か」

誰でもいい。

「だれでも、いいから」「

でもこの声は届かない。ロウがそう望むから。

歪な笑みは笑顔の仮面で隠そう。歪んだ言葉は優しさで包む。悪夢の未来は誰の目にもつかぬ場所で消してしまおう。

大丈夫。まだロウの世界は温かく優しいから。

「続くための努力をしよう」

幸せのための努力を続けよう。

023 夢の理由【三】（前編）

急遽一つの章にある予定だったものを二つに分けました。なのでかなり短いです、すみません。

初めての三//視点で二十三話をお送りします。

「何故」の字を選んだ?」

懐かしい声。

いつも怒っているみたいな声だつた。でも怒られたことは一度もない。そもそも怒るのが苦手な人だつたから。だからいつもそつと諭すように言つうのだ。この時のように。

「他にもあつただろ?」

私は自然と答えていた。いや、記憶の中の私が言つたのかもしれない。けどどちらでもいい。凛と張つた糸のような、でもこの優しく染み渡る声に耳を傾けることに忙しいのだ。

「ありました、とても素敵な言葉が。でも、私には出来すぎています」

「またその笑みか……儂は好かんな。やめろ」

「……すみません」

実はまだこの頃はあの人気が怖かつた。怒つているようにしか見えないのだ。今は違う。たくさん一緒に居たからもうわかる。意味が汲める。

あの人は深々と嘆息をすると言つた。

「……勝手にしろ。最後に決めるのは自分なんだ。自分が納得出来るのなら咎めない。これ以上は言わん。……ただ」

あの人は躊躇つよつて一度言葉を止め、唇を運びすと、ゆっくり

と問い掛けた。

「どうしてそれを選んだ?」

私は微笑んだ。きっとあの日の私も同じ顔をしていただろう。結局私の本質はあの日からちっとも変わっていないんだ。

そんなことを思ったからちょっと寂しげな笑みになつたと思う。あの人の顔がそれを見て微かに歪む。あの日の私が気付かなかつたもの。

あの人は優しかつたから辛く思つたのだろう。自分に呪いをかけるような行為を。自傷のような命名を。

それは自らを縛り付ける戒めであり鎖。そんな風に考えた私は、そして今もここにいる。消せないから。消えないから。

嘗ての私が願つたのは酷く残酷な願い。それをあの日、心に刻み付けた。忘れないように、^{ナイス}消えないようのこと。

自分の意志で。

淡い光がカーテンの揺らめきに合わせて漏れる。その光は薄く張つた闇を緩やかに奪い去るよう、じんわりと館内に染み込み、そして闇に消えた。それはちっぽけで弱々しいものだったから。闇を照らすには足りなかつたようだ。自分で闇に呑まれてしまいそうな錯覚に襲われ、私は小さく微笑んだ。自傷の笑みと認識しているのに未だに直らない癖。自虐的で自己を否定するようなものなのに、未だに私は自分の存在を肯定してやれない。罪深過ぎるから、と言い訳して。

「感傷、ですかね」

ふつと笑んで独り呟いた。多分まだ夢の余韻が消えないからだ。とても懐かしい夢を見た。ここへ来たばかりの頃の夢だ。あの人故居た頃の夢。今にも酷く無愛想で怒ったような顔が、目の前に現れそうな空気を感じるが、そんなことあるはずもなかつた。

ふと、誰かが来る、と思つた。図書館に向かつ足音が一つ、聴こえてきたからだ。一組程候補が直ぐに浮かんだが、自分で打ち消す。これは馴染みの足音ですね。

私は埃を立てないよう氣を付けた早歩きで扉まで行くと、真鎗のノブを握つた。

「おはよウミ姉ー！」

扉が開くタイミングにぴたり合わせた元気な挨拶が私を迎える。慣れたものだと私は思わず内心苦笑してしまつた。彼はもう扉が勝手に内側から開くことには慣れているのだ。

「本当に早いですね、晴太君^{せいいた}」

私は顔を綻ばすと、彼に微笑んだ。晴太君はこの図書館の常連の小さな男の子だ。ちょっと気が弱いところがあるが、ちゃんと勇気を持つていて、本が好きで笑顔が素敵な男の子。しかしその笑顔が何だか曇っているように思えた。

「どうかしましたか？」

「……あのさ、昨日変な奴ら来てたよね」

「『変な奴ら』なんて失礼ですよ晴太君……でも、ええまあ」

何とも答え難い間に、濁すように答えてしまつ。何せよくよく

考えると一組目は名前すら知らないのだから。……いや。どこから来たかは知っているのだから、そんなことは些細なことかもしない。

「でもどうして晴太君が知っているのですか？」

すると晴太君は慌てた勢いで大きくなつた声で、弁解するよつこ言つた。それで私は理解した。

「あ、あの、わざとじゃないんだけど…」

「ああ」

聞いていたのか。全く気付かなかつた。便利と言えなくもない異常に発達した聴覚も、これでは意味がない。きっとシラソさん達が隠れているよりも遠くに上手く隠れていたのだ。

「「」「めんなさい！」

「いいんですよ。私の不注意ですから。それで……何か伝えたいことがあるのですか？」

「……うん」

神妙な顔で頷く晴太君。私は少しだけ怖くなる。馴染みの彼が、私の日常の一部までもが、その話題を口にする。何だか私の世界が侵食されているような気がして気持ち悪さと恐怖を感じた。

「……なんでしょうか

「あいつらグルだよ」

「……え」

私は何を言われたかわからず、呆けた顔をしてしまつた。そして

直ぐに思考が追い付き、驚いた。ショックを受けている自分に。思つた以上にシランさんを信頼している自分、裏切られたのかと愕然とする自分に驚きが隠せなかつた。

「な、何を根拠に、言つてゐるのですか？」

「あいつら同じ宿屋に泊まつたし、仲良さそうに一緒に行動してたし、絶つ対にグルだよー！」

私は動搖して瞬きを意味なく繰り返していた。確かに帰り際に彼は言った。俺も同じ境遇で、そこへ向かつてゐると言つた。そして恐らく私のせいで足止めを食らつてゐるのだろうことも容易に想像がつく。でももし私を騙そうと思つのならそんなこと言わぬ方が良いはずだ。それに。

「あの人人が人を陥れるような器用なこと、出来るとは思えません。シン君も、ロウ君も同じです」

「……なんでヨミ姉はそんなにあいつらを信用してんだよ」

その問いに私は困つたように田尻を落とした。確かにそつだろう。一時間程度話しただけの相手なのは確かだ。でも信頼しても良いと思わせる何かを彼らが、シランさんが持つていたのも確かなのだ。そして私はそれに対するがりたいのだと思う。失つた私の支えになつて欲しいなんて傲慢な願いが心の奥底に間違はあるのは誤魔化せない。

「……なんだか似てゐるからかもしれませんね」

「館長さんと？」

「……ええ」

「だからってその人は館長さんじやないから嘘つくかもしないよ

わかつてゐる。わかつてゐるけれど。シランさんの言葉はあまりに
眞実に近すぎて、私は何も答えられなかつた。ただただ意地を張つ
た頭ごなしの否定しかできなかつた。情けない。

でも何かを伝えようとしていた。

あの人はわかりやす過ぎる。少し話しただけでわかつた。酷いお
人好して、子供のように意地を張り、自分を曲げない人。曲げられ
ない人。眩しいと思う程澄んだ想いを持つ人だつた。

そしてそのお人好しを私にも向けていた。それを断つたのは、拒
否し否定した私はどれほど酷い人間か。いや、人間でもない。ただ
の実験動物だ。

それでもわかるよ。

「あの人は嘘つきじゃないよ。嘘なんて吐けない、不器用な人です

から」

「……ふう」

「はい？」

よく見たら晴太君がふくれていた。非常にわかりやすく不満な顔
をしていた。しかし私には理由がわからず、小首を傾げ問う。

「何か機嫌を悪くすることを言いましたか？」

「……べつに。とにかく注意！ あいつらのことも気を付けてよヨ
ミ姉っ。ヨミ姉つてほやほやしてるから危なつかしいよ」

「そうですか？」

「そうだよ！」

「では気を付けますね」

につこりと微笑んで答えると、晴太君はちょっと照れたような笑
顔を返してくれた。

そして新しい足音を耳が捉えた。今度こそ昨日のお客さんだ。二

組田の。私はそのことを晴太君に告げた。

「ならおれも『るー』『マリ』姉が騙されないよつこいよ」

「頼もしい言葉ですが……晴太君、お母さんに怒られますよ？ こんな早朝に抜け出してきたのが見付かつたら」

まくづか、とこう風に肩をすくめ、困ったように私を見上げてきた。

「……あとで説明する手伝つて」

「弁解するの間違いでしょ、う？」

「そ、そつとも言つかも、ね」

視線を明後日の方へやる晴太君がおかしくて、ついクスクスと笑つてしまつ。彼は尚食い下がろうとしたが私が止めの言葉を囁つ。

「今ならまだ間に合いますよ。忠告が貰えただけでとても助かりましたから、怒られなによつてこいつそり上手く、速くベッドに戻つてくださいね」

「うー」

まだ不満そうな顔をしていたが、流石に観念したようだわかつたよ、と小さく呟いた。さあさ、と背中を軽く押して勝手口に向かわせる。

「頑張つてくださいね」

戸を開け、見送つたしだが、急に晴太君がくるりと回り顔を再び私の方へ向けた。まじまじと神妙な顔を近付けて言う。

「マリ姉、ほんとーに氣を付けるよ？ 騙されんなよー」

「どうしてそんなに私なんかを心配するんですか？」

ちょっとその必死さに疑問を持ち、つい問い合わせると、何故か晴太君にぽかんとした顔で見上げられた。間抜けな顔。でも多分その表情を向けられる私が間抜けなんだろうけど、と何となく意味を汲み取り思つ。

晴太君は何か言おうとして、それを搔き消すよつて一度頭を振ると、真っ赤になつて叫ぶように言つた。

「当たり前だろー。ヨミ姉がいなくなつたら悲しいに決まってるよ！　うう～、ヨミ姉のバカ、鈍感！」

「は、はあ？」

突然の罵倒に付いて行けず呆けていると、その間に晴太君は猛スピードで走り去つてしまつた。追い掛けることは容易いが、しかし来客もあるし、と迷つてゐる間にもう背中は見えなくなつていた。しううがない、今度あの台詞の意味を問い合わせそうと決め、私は正面扉へと向かつたのだった。

「たのもー」

そんな声に自然と微笑みながら。

024 心の涙【真】（前書き）

結局シン視点になつた第一二十四話です。
後半は勢いで書きました。予定外の方向へ暴走しだしたので次回が
作者にもわからないというダメな状況ですが勢いで更新しました。
なんかすいません！でも楽しく書けたので楽しく読んでもらえた
ら幸いです！

024 心の涙【真】

「たのもー」

「……」

「なんか文句あんなら言へよ」

ちょっと拗ねた風に言つと、シランは相変わらずのローテンションで弁解しているのが微妙な口調で答える。

「いや、意味をわかつて使つていいのか、と疑問に思つただけだ」「なんとなくは知つてゐに決まつてんだる。エノキが使つてたし間違つてはないだろ?」

「……まあ、そうだな」

なんだよその引っ掛かる言い方は、とちよつと膨れた。しかも扉の向こうからもシランと似たような空氣を感じる。オレそんなに変なこと言つたかな、と首を捻りつつも、扉が開かれるのを見ていた。

「お早いですね」

扉を押して出でてきたヨリは柔らかく微笑んでそう挨拶したので、オレもおはよーと笑顔で応えた。ヨリの周りの空氣は温かくて好きだ。真っ白な髪に朝日が溶け込み、キラキラと辺りに光が散らばる。なんだか朝日なんてなくても光つていられるんじゃないかとまで思った。

「今日はまよつとすつきりした暁り空だなつ
「やつですね、今日は良い暁りですね」

口ウもヨミとほんわかした挨拶を交わす。Jの一人は端から見ているとともに和む癒しオーラが出ているように思える。

それからヨミが何だか急に顔を強張らせるシランを見た。シランもヨミをじょうじ見ていたのでぱちり目が合ひ、二人揃つてしばらく固まる慌てて顔を反らした。しかし横田で互いに相手を確認すると気まずそうな、恥ずかしそうな顔になる。

なんだこれ、とオレは首を傾げた。

でも本題に入らなきやと思い、シランの代わりに口火を切った。

「あのや、なぜか理由は教えてくんないけどシランがヨミに謝りたいんだって。何したか知んないけど、シランかなり気にしてて、何でも言えれば出来る範囲の、えーとつぐない、をする、しょ、しょ

」

なんだっけ、と言葉に詰まっていると口ウの助け船がやつてくる。

「償いをする所存だから、多田に見て欲しいな、っていうお願いなんだよ」

「……おい」

不機嫌そうにオレらを見るシラン。口ウはちょっと苦笑いして、オレはやつと言いたかったことが伝わった清々しい顔で、そういうことだ、とウンウン頷いていた。ヨミはそんな三人をしげしげと見ていた。なぜかわかんないけど。

シランはそんな三々五々な反応に深々と息を吐くと、ヨミに向き直った。しかしあまだ決まりが悪そうで、何だか眉尻が下がり、凜々しさが薄まってちょっと情けない顔だ。クスクスという声まで上がり、シランの不機嫌ゲージは大分上がった、よう見えるが、実際はただ困っているだけだ。

「……笑うなよ」

「すみません、つい。シランさんって意外と顔に出来やすいタイプなんですね」

「そーなんだよ。嬉しかったり楽しい時の表情がわかりにくいいだけで、すごいわかりやすいんだよ。特に不機嫌とか」

「負の表情がデフォルトだからね」

「おい、いい加減にしてくれ」

「うんやれつしたシランの苦情に、それでも笑顔なオレ。口ウも同じような雰囲気。和氣藹々としたいつもの会話。そこにやっと漏れた言葉はやたら寂しげに響いた。

「……羨ましい」

「『『ハハヤモシ』』、つて何のことだよ?」

ナツ思わず聞き返すと、ミリは慌てて口元を押された。どうも無意識からの歎きだったようだ。恥ずかしいらしく顔が熱れたリンクゴみたいにみるみる赤く染まっていく。しかし不意に落ち着きなくキヨロキヨロしていた赤い目が一点に留まった。黒曜石と紅玉がぶつかる。一方は気に入らないといつ不満顔。一方はきょとんとしたような、何か意外なものを見つけて呆けた顔だった。

「羨ましい、とはどういう意味だ?」

「いえ、その――」

ミリはまるで真っ黒な瞳に囚われてしまつたみたいにシランを真っ直ぐに見たまま固まってしまったミリは困っているように見えた。でも一瞬くしゃつと困り顔が歪み、俯いて見えなくなつてしまつた。そして絞り出された声は震えてくる。

「 なんでも、ありません」

納得行かない答えに、文句を言おうと一歩前に出ようとすむ前に、シランが躊躇なく言葉を突き出していた。

「嘘つきだな」

その言葉に貫かれたヨミの声にならない悲鳴が、大きく足りないものを補つよう吸つた呼気が、やたらと耳に刺さった。そして衝撃に襲われたヨミが思わずといった風な驚きの表情で顔を上げた。

「逃げるのか。お前は結局逃げるのか？ 事実から、自分から」

「わ、わた、私、は 」

「独りじゃ立ち向かえないと言い訳してこれからも田を反らしていくのか？ お前はいつまで勝手な言い訳をして勝手に孤独を気取つているつもりだ」

「か、勝手なことを言つてるのは…」

「そうだ、俺だ。でも俺は田を反らさないし逃げないし自分勝手な言い分も平気で口にしてやる。何故なら気付かせてしまつたのは俺のせいで、指摘したからには最後まで付き合つべきだと俺は考えるからだ。だからお節介なのは承知で言つや。お前は向き合つべきだ。お前は独りじゃない」

シランが冷たくよく切れる刃物のような漆黒の瞳でヨミを貫く。ヨミは怯えた顔で、まるで大きな動物を見つかってしまった小さな生き物みたいに縮こまつて、宵闇を閉じ込めた瞳を見上げた。

そして絞り出すように。存在を必死に主張するように、肯定するように答えた。

「独り、ですよ。私はあの人気がいなくなつた日からどうしようもな

く独りなんですよ。そしてもう、それでいいんです。喪うのは辛すぎます……人間なんて脆くて、温かくて、恐くて、騙して、優しくて

「

「好きなんだる?」

「好きです、好きでも恐いんです、好きだから恐いんです、嫌いだから恐いんです……愛してるから、喪いたくなかったんですよ……」

赤い皿にキラキラと光るもののが浮かんでくるのが見えた。胸が苦しくなつてくる。それを見て、言葉を聞いて、胸がきゅうと鳴きそうになる。なんでこんな辛いことを続けるのかわからない。でもシランがしなくちゃいけないと誓つから、口ウと……口を出さないつて約束したから。

だから胸を、心を抑えてオレは見守る。だつてシランにあるのは痛いほど真っ直ぐで迷いながらも確かに自分の中の正解を掴み、伝えたいという気持ちだけだから。救いたいという甘過ぎるほど優しい思いだから。

「悲しかつたら全てを諦めるのか?」

「もうやなんです」

「大切だつたものを見失つてもいいのか?」

「大にしていたものを私が守るんですけど、忘れません、ここに居る限り、ここがある限り」

「甘えるな」

「甘えてなんかいません」

「俺は人間だ、ただの弱く脆い人間だ」

「知つてます」

「恐いか?」

「恐いですよ、恐いに決まつてます。あなたは怪しいじゃないですか、私を陥れようとしている可能性があります。信じ、たいのに……信じてみたいのに!」

血でも吐くみたいに吐き出されるのは言葉。ホントの気持ち。だからシランは口を反らさない。真正面から受け止める。正々堂々立ち向かう。愚直なまでに、直球でだ。

「信じていい」

「何を根拠にですか」

「そんなものない」

シランらしそうな答えにヨミが一瞬ポカーンとなる。でも直ぐに小さく吹き出した。それを不機嫌な顔で、でも揺らぐことなく見詰め続けるシランがいた。

「言い訳はいらない。もういらないんだ。いつまで死人にしがみついているつもりだ」

冷たい台詞に、ちょっと今まで笑っていたヨミが今度は怒った顔で応じた。

「あ、なたに、何がわかるんですか！ 知りもしないの！」
「知らないが想像はできる。死者を言い訳に生者が急けたら、死者も嘆くだろう。言い訳にされるなんて迷惑だ」

……あー。

「ここまで来るともうわかる。迷ってない。シランはもう迷ってない。そして。

怒ってる。

ちょっとびり怒つてゐなこれ、と思つた。出来るだけ優しく話そうとしているが、限界が近いなと思つ。シランがキレると何するかわからんないんだよな。口ウと約束してるけど、程々で止めた方が良い

かもと思い出したが。

ヨリにふと田に向けると、今までで一番驚いた顔をしていた。呼吸を忘れたような、心臓まで動くのを忘れて彫像になってしまったみたいだ。

そしてゆうべつと思い出すよつにひつむがれた声は、震えて、泣きそうだった。

「泉さんの、生まれ変わりか何かですか、あなたは」

「俺は俺だ。それ以外の何者でもない」

「あなたは、喪う痛みを知らないでしょう？ 私の気持ちは、あなたにはわからない」

「そうだ。俺は知らない。だが痛みを知つてそれから逃げているやつに言われたくない」

完全にケン力を売つてる台詞だ。流石に止めよう、と思つた時、空気が変わった。

あれ、とヨリを見る。田は怖いくらいに真っ直ぐにシラランを見ていって。なんだか幽霊みたいな雰囲気を纏い。

ヨリの華奢な身体から殺氣が吹き出した。

「ああ！」

考えてなかつた。だつてすごい静かで優しい空気を持っていたから。でも忘れてた。あの重たい扉を軽々と開ける腕力を。さつきから揺れ動く不安定な感情を。

ヨリだつて激情はあるんだ。

「ヨリッ！」

怒りに囚われてもヨリは静かだつた。無音のまま床を踏み切り、

迫る。右手には怒氣の拳。目指す場所は シランの顔面。

声にならない悲鳴は今度はオレの中についた。オレは必死にシランを右肩を掴んで引き摺り倒した。でも、間に合わない。ヨミが速すぎる。だからすぐさま切り替える。シランを全力で抱き込むと庇うために頭を代わりに突き出す。一瞬過つたのはどこか遠く他人の思考のようだつた。

「オレ、死ぬかな？ あの拳はかなりやばそう。でもドラゴンだしなんとかなるかな？ あとは運次第。」

「ダメだよー」

不意に場違いな声がした。そんで気が付いたら田の前に小さな影がいて、ヨミがいなくなつっていた。

「あ、れ？」

間抜けな声が口から漏れる。視界から消えたヨミは直ぐに見付かつた。左脇の床。そこに仰向けに転がされていた。ヨミもオレに似た間抜け顔、呆けた顔だ。

「ダメだぞヨミ。シランはロウヒシンの大事な人だからね。そういうのも勿論とめるけど」

オレの前に瞬時に躍り出た小さな影 ロウは、やつぱり場違いに和やかな笑みを浮かべて言つた。肺に詰まつていた空気が、気が抜けると同時に吐き出される。

「でもヨミ、ヤツジやないでしょ。ヨミは決めたんでしょう？ だからこんな使い方しちゃダメだぞ。間違つちや、ダメなんだよ」

ミミは何も答えられずにいた。そして先に立ち直った人がいた。
シランだ。

「……痛みを知らない。でもそれを避けるための努力を続けていく。
そうでなければここには来なかつた。俺は臆病だ。痛みを知らない
からこそそれは最大で最悪の恐怖の未来だ。だから意地でも失わな
いと決めた。その覚悟はある。否定させは、しない」

伝わつただろうか。わからない。そもそも頭がさつきの衝撃でぼ
んやりする。オレもシランの台詞をいまいち理解できていかもし
れない。殴られた訳でもないのに、何だか変だ。視界がぼやつとす
るし、熱い。

オレはゆるゆると引き摺り倒したシランを離すと足に力を入れた。
上手く力が入らないけど立つことは出来たから、ゆらゆらと歩き出
した。

目的地に着くともう完全に気が抜けてしまった。立つてるのがや
つと。でも手を伸ばした。

「よみいい

赤い目がオレを映す。情けない顔をしたオレを映す。ミミは恐々
とオレの差し出した手を見て、オレの目を見て、それからそろそろ
と自分の手を伸ばして……握つた。ほとんど反射的に握り返して引
つ張りうとするのだけど、気が抜け切つているオレに引き上げる力
なんてあるわけがなくて。

「さやつ

ミミは上半身が持ち上がるまでしか行かなくて。オレは途中で膝
が砕けてしまい、ミミと同じ位置に降りてしまった。もういいやと

思い、そのまま抱き着く形になる。

小さかった。口よりはずつと大きなはずの體中は、口よりもずつと小さくて細く、脆く感じた。壊してしまったで恐くなつて、今にも消えてなくなつてしまふんじゃないかと思つてキュッと抱き締めた。

「 もへ、 やだよ」

不安が溢れ出す。痛みが溢れ出す。ただそれだけのことだった。

「一人がケンカすんの、 やだよ。 つらこよ。 いたいよ

「 痛い？ どこが？」

「 口口口に決まってる。みんなみんな、あんな傷つけ合いみたいな言葉、いたくてつらいに決まってる。もうやだよ、がまんしてるのでうして？」

「 だつてオレ、二人共好きだもん。シランがいたいのも、ヨミがいたいのも、や。血が流れるみたいな言葉、聞きたくない」

「これはわがままだ。でももう我慢しない。ヨミも我慢しないで欲しい。シランに意地悪言わないで欲しい。仲良く楽しくしてみたい。ヨミの顔はオレの背中に回つてしまつて見えないけど、代わりに心臓が近くなつて教えてくれている気がする。だからわかる。ヨミが驚いてる」と。息を吸う音がいやに大きく聞こえた。

「 ……何の話していたか、わかりましたか？」

「 わかんない。ぐちゃぐちゃしてよくわからなかつた。だから教えてよ」

素直に訊いた。ヨミのドクドクというリズムが少し早くなつた。ヨミは決心するよつてゆつくりと深呼吸すると、ほんのちょっと

脅えの混じった声で言つた。

「私、人間が怖いんです」

嬉しかつた。ようやくわかりやすい話になつたからと、やつとヨミを助けられる糸口が見つかつたからかもしれない。いや、小難しいことはわからない。ただ、教えてもらったことが嬉しいんだ。

「オレは人間大好きだ。ヨミはシランもこわい？」

「ちょっと、怖いです」

「まあ顔はこわいけどな、でも全然こわくないんだよ。優しいんだ、めちゃくちゃ甘いの」

「わかります」

笑つた。自然とオレも、あは、って笑う。じゃあなんで人間こわいの、と訊くと、酷い人がいたからです、とヨミが答える。

「シランとか、村の人はひどい人？」

「いいえ、優しい人間です、私の好きな」

「なんだ、人間好きなんじやん。オレと一緒に」

「そうですね」

「でもこわいんだな。それはそのひどい人間のせい?」

またそうですね、と繰り返したが、今度のは少し震えていた。それが嫌だつたから、回した腕に力を込めた。

「こわいなら誰かと一緒にいればいい。一人はこわいよ。一人ならこわくない」

「なら、ずっと一緒に居てくれるとでも、言ってくれるんですか?」

シランが何か言いたげな気配があつたけど無視して、シランが口を開く前にオレは答えた。

「お願ひしてみればいいじゃん。良いつて言つてくれるかもしんないだろ」

また息を呑む音、いや、動きがあつた。震える身体が感情を伝える。

「……我が儘すぎる、願いです」

「オレはいつもわがまま言つてゐるよ。返そつて気持ちがあれば大丈夫」

「返す、気持ち？」

「そうそう。オレはシランとロウからいっぽいもらつてゐるから、返したいつて思つてる。家事くらいしか出来ないし、わがままばつかだけど……きっとこいつか返せるよ。全部じやなくていい。義務でもない。そういうもん」

後ろでシランが小さく呟いたが、それはとても微かで、途中で消えてオレの耳には届かなかつた。ただヨリイが苦笑したことだけはわかつた。

「シン君は優しいですね」

「シランがいてくれるからだ。ロウが教えてくれるからなんだ、きっと。優しいつて思えんのは」

「私に、出来るかな」

「誰だつてやれりつと思えば出来るよ。でもオレのはほとんどわがままなんだ」

「でも、温かい我が儘です」

「なんだそれ？」

わからなかつた。でもヨリミが笑つて、納得したならそれで良いかとも思つた。

「一緒に、居てくれますか？ 怖いものが来ても、一緒に」

ヨリミは迷うよつて言葉を切つた。でも多分迷つてない。決まっていふなど怖くて言えない言葉。だから背を押すように、ぎゅっと抱き締めるんだ。包むよつて。

そしてヨリミは小さく、でも力強く言つた。

「一緒に、立ち向かつてくれますか？ 手を握らなくともいい、戦わなくていい。ただ、ただ」

見守つてくれますか？ 一緒にその場に居てくれますか？ 一人を一人にしてくれますか？

なんて。なんて我が儘が下手くそな人なんだろつかと思つた。迷うこととはなかつた。決まつっていたことだから。だからオレは答えた。

「いいよ

「あり、がとう

」

ぽたぽたと。温かい滴が背中を濡らしていた。やつと淋しくて冷たく重いなにかが減つたように感じた。まだヨリミのあの小さな背中にそれは残つている気がしたけど、もつ押し潰されはしないだろつ。

「もう、ケンカしない？ ヨリミセシワソウノ歎らなこし、シワソウセヨリミ
に意地悪言つたりしない？」

「大丈夫ですよ。もうしません」

「そか。よかつたあ

「どうして」

「ん？」

「どうして私にそんなに優しくしてくれるのですか？」

なんでもんなことを訊かれるのかわからなかつた。だからただただ正直に答えを返した。

「アリが優しくて、好きだから。でもそんなのなくとも、アリがもんだら？」

「誰かに優しくすることに理由はこらない、とアリはどうか？」

「うん。そういうもんだと思つてゐるわ」

素敵なことですね、と靈の向いの声のよつに微かに眩くアリは離れた。それから口吻に向き直つた。しつかつと血へ細ご一本の足で立てて。

「あなたが言つた通りです。昔決めたんです。この力は誰かのために使おうと。出来るのなら……誰かを救う力にしたいと」

自分の拳に視線を落としたアリは悲しそうな表情でそう言つた、深々と頭を下げた。

「止めてくれて、本当にありがとうございました」

「うう。口吻はただシランを失いたくなかっただけ。本当にアリを救おうとしてたのは、シランとシンだよ」

「ふえ？ なんでオレが出てくるの？ わざわざまで理由も知らなかつたし、それにオレはただ一人がケンカしてるのがやだつただけだし……」

「そもそも嘘偽りないしな」

疲れた感じの声でシランが言った。いつの間にか立ちあがつてヨミの前に来ていた。ヨミは恐々とシランを下から窺つように見ていた。

「本当に、すみませんでした……」

「ケガないよな！」

「お前はいつもそればかりだなまったく。口ウのおかげで無傷だ。ヨミも気負う必要はないが、口ウにはよくよく感謝すること。口ウ、ありがとうな」

「どうしてそこで口ウを持ち上げるの……」

「シランも口ウも元気そうだからいいや。つかそもそもシランの言い過ぎだったんだよ、シランの意地悪！」

「話の内容がろくに把握できてなかつたやつが何を言つたか。まあ……言い過ぎたことは認める。すまなかつたなヨミ」

「ほんとじめんなヨミ。意地悪口悪大魔人が変なこと言つて」

「それは俺のことか？ 大魔人って、なんだそれは……」

「まあまあ良いじゃない。みんな怪我もなく一見落着な雰囲気なんだからな。なつ、ヨミ」

「ふふつ」

「「「え？」」」

「ふふふ、ふふ、あは、あはははははつ」

「ヨ、ヨミへ」

何故かヨミが大爆笑をはじめてしまつた。なんでだー。でも。

「まあ、いつか」

なんか丸くおさまつた模様。よかつたよかつた。……つてあれ？ 何か忘れている気がする。と思った時だ。ぴたりと笑い声がやん

だ。ミミー、と謝しげに口ウが声をかけるがそれには答えず、急にそわそわし出した。

「どうかしたのか？」

「……敵です」

掠れた言葉は完結な答えた。走り出るミミをすんでのところでシランが腕を掴むこと止める。

「何が来たのかと言え」

「は、離してください！ 行かなきや、今すぐ！」、急いで…」

「少しば落ち着け。俺たちだつて戦える」

「ダメっ！…！」

いきなりの大声に驚いたシランが思わず一歩後ずかる。でも手は離しはしない。シランはぐつと氣合いを入れると今度は前に一歩ずんずんと進んだ。ミミが怯むが構いやしない。夜の色をした瞳をミミの顔に近づけ、反らせないようにする。逃がさないようにする。

「なにが『だめ』なのか説明して、敵の場所を吐いてから行け。お前はいつまで独りで戦っているつもりだ？ いい加減キレるぞ」「だ、って……私が異常でなければ皆死なかつた。もつと生きられた。でも私が生まれてしまつたから、そうなつてしまつた。異常でなければ赦されなくなつた。私が出来なければ良かつたのに。でももう取り返しがつかないなら、戦うしかないじゃないですか。それが私の生まれた意味で、存在し続ける意義、なんですよ？」

「わかるよつに言え」

「だからー 力を持つた異常な兎は生まれちゃいけなかつたんですよ！ 私は成功作で失敗作だったんですよ！ 私を見本に作られた兄弟は皆普通だから殺されてしまつたんですよ！ ジャあ生き残ら

されてしまつた強い鬼はどう償えればいいと思いますか？ 戰うしかないんです。生きることを肯定するにはそれしかなかつたんですね！ わかつたなら離してください、つよー！」

「……わかつた。よつくわかつた」

あ、怒つた。とだけはわかつたのでオレだけは身構えた。そして雷は落ちた。

「お前が賢そうな兎の皮被つたただの馬鹿力鬼だつてことがなああああーーー！」

「ひーいっ」

ミリが怒声に脅えたように首を縮めた。しかしシランは離さない。口ウですり疊然として何も言えなかつた。

「事情があるのはわかつてゐる。だがそんなもん余裕があるおやつの時間にでも回せー いいか？ さつきから言つてるだろ？ 僕が訊きたいのはな、昔話ではなくな、今の話なんだよ、今近くにいるつていう敵の話だつて言つてるだらうがあ！」

「み、南の境界線付近ですっ！ 小型の変異種らしき足音や鳴き声が五十ほどですう！」

「よしシン行くぞ」

「ほいほい。あ、口ウは留守番頼むぞ？ じつにも来るかもしないから」

「う、うん口ウわかつた……」

「おい、来るのか待つかはつきりしろ」

「は、はい、行きます！ 行かせていただきますー。」

結局シランが暴走モード入っちゃつたな、と思いながらオレはシランを背負い、なんだかグラついているミリを適当に持ち上げると、

朝霧の中走りだしたのだった。

025 強がりの結末【三】（前書き）

たつた独りで戦っていた彼女には見えなかつた眞実。容赦ないシランに手を引かれ、彼女はようやくそれを知るのです。そんな第二十五話をどうぞ。

025 強がりの結末【ミリ】

「うわー、うじゅうじゅいんな。シラン、離れないでくれよ?」「わかっている。おいミリ、お前は住人の避難だ、行け」

「イ、イエスサー!」

私は落ち着くために深呼吸を繰り返した。避難誘導です。いつもやつてこようになれば、大丈夫。

「ミリ、本当に大丈夫か?」

「はいっ、大丈夫ですよ。お手数ですが、あの丸屋根のお家の前辺りにひょいと軽く投げてもらえますか?」

「えつと、ミリを、つてことでいいんだな?」

「はい、お願ひします」

「んー、んじゃ頑張つてな。ピンチの時はちゃんと大きな声で呼ぶんだぞ?」

心配そうにそれだけ言つとシン君は、いつてらつしゃいと告げて要望通りひょいと私を投げた。その一拍前にシランさんの声が私にかかる。

「お前は馬鹿だがこんな奴らには負けないな?」

「はい! 行つて参ります!」

何だかシランさんのノリが妙だが、それに対する私の返事も釣られていることがちょっとおかしい。そして清々しい。私を縛つていたものがひらひらと舞つて行つてしまつたみたいだ。だから私は身軽に動ける。上手く投げてもらえたので目的の場所に無事着地できた。早速近くにいた敵を薙ぎ払つ。

それは小さな猿みたいな変異種だった。薄い紫の短い毛を全身に生やし、目が異様なほど引つ込んでいる代わりに垂れ下がるほど巨大な鼻が顔面のほとんどを占めていた。背丈は五十センチメートル程だが、酷い猫背でかなり小柄に見えた。指先は毛が少なく、今にも折れそうに思えるほど細く長い指が五本覗いている。指先は毛が少なく、今にも不気味なだけで怖くはなかつたろうが、鼻に隠れるようにある口からはみ出した、まるでクワガタムシのような凶悪な歯があるため無視は出来ない。それに、猿を基にする変異種は大抵超のつく怪力を持つ。

「はあっ！」

鋭い呼氣と共に蹴りを放つ。それで三体の猿が転がる余地もなく吹っ飛んだ。これで六体無力化済み。流石に猿も學習したようで、警戒したように私から距離をとり始める。私は威嚇するように強く睨み付けると、踵を返し、目的地にしていた丸屋根の家へと入った。

「怪我はありませんか！」

「ミハちゃん……」

家中の中、物陰に隠れるようにしていったのは馴染みの老夫婦だ。逃げる間もなく囮まれてしまつたのだろう。私は安心させるように微笑んだ。

「大丈夫ですよ。今回は私一人ではないので、直ぐに片がつきますから」「もう自警隊の方が来て下さつとるのかい？」

私は今度は違う意味の笑みを浮かべた。きつとちょっと誇らしげで、和らいだものだ。

「いいえ。もっと心強い方たちで、私の 」

その先に続く言葉は呑み込んでしまった。きっとあの調子のシンさんなら怒るくらい力強く否定してくれるだろうし、シン君は笑顔で、口ウ君は迷うことなく頷いてくれるだろう。それでも、勢いだけで決めていいことではないと思つたので言葉の続きを愛想笑いのやうなもので誤魔化してしまった。

「さあ行きましょう。いつもの避難場所まで歩けますか？」

「走るくらい余裕よ余裕。なあばあさん」

「そうですよ。ミリヤんもあたしらばかりに構っちゃいられないでしようし」

元気な笑顔で頼もしげに言うと一人は力強く立ち上がった。バケモンと戦えなくとも自分には負けない。それが老人の矜持というものの、なんだそうだ。さすが伊達にこの世の中で長生きはしてないと感心する。

二人を阻む敵を蹴散らしながら進み、途中五軒ほど取り残された人を呼び集めると、村の少し奥にある建物へと導いた。それは入り口だけの小さな小屋だ。入ると直ぐに階段があつて、地下の避難用に掘られた空間に続いている。

シン君とシランさんが引き付けてくれているおかげか、相手をする猿も大分少なかつた。避難所に全員入つたことを確認すると、戸を閉め、改めて耳を澄ます。この辺り、猿がいる辺りにはもう人間はいないようだ。いるのは猿と戦う二人組と私だけ。幸い怪我人も出でていよいよだ。なら早く追つ払おう、と気合いを自分に入れた。

「ミリお疲れー！」

「シン君」

しばらく黙々と戦つているとシン君達に圧倒された。シン君は一口と労いの言葉を私に投げ掛けながら敵を牽制し、シラーンさんを気にかけ、度々援護していた。なんてそつなく器用に戦闘をこなしているんだろうか、と思わず感心してしまった。対してシラーンさんは随分と落ち着いたのか、冷静な足捌きと丁寧な剣筋で一本一本を正確に捉えていた。しかし一人共、見事に峰打ち。凄すぎるでしょう、それは。それもまたそつなく、特に意識せずにやっているようだつた。……殺さずに守る。理想を地で行く人なのは知っていたが、本当に筋金入りだな、と思った。でも、嫌いじゃない。甘くて優しいものが私は大好きだから。

「お強いですね、お一方は」
「アリモコわいじやん！」
「……はい？」
「おじシン、讃め言葉はもう少し選べ」
「はいすみませんっ！」
「……い、いえ、お気に、なさいや」

ドスの利いた低いシラーンさんの声に、シン君が私みたいになつていた。てかあんなに冷静に戦つていたのに……まだ、あれなのかと。あと『怖いじやん』は『強いな』という意味なのでしょうか？

「アリー！」
「は、はい！ なんでしょうか！」
「図書館や別の地区は問題なしか？」
「え、えと……」

さつき調べた時は何にもなかつたはずですが……と思いながら再び耳を澄ませようとするが。

「あのセーラー三三。やるなら安全なとこか、終わってからにしてくんないかなー」

「ええ?」

頭の後ろがヒヤッとしたかと思えば、ドサッといつ猿が落ちたような音がすぐ後ろでした。。

「危なつかしくてさあ。一人分見てるとけりと安全保障できねえし」

「す、すみません!」

背後から襲い掛かった猿に気が付かなかつた自分が恥ずかしくなつて、頬が赤くなつた。慌てて音を拾い易く安全な高所を探すあまり高い場所が手近にない。それに、大敵の数が減つていった。なら、決着をつけてしまつた方が……早い。

「手早く行きますよつ!」

深く息を吸うと止め、前屈みになる。だん、と足を踏み出すと勢いよく飛び出した。走るというよりは跳ぶ、翔ぶ感覚。敵の間を駆け抜けると同時に腕を手を足を腰を全身を、駆動させる。一休ずつ捉えるのではなく塊で捉えて、突ぐ、裂ぐ、吹き飛ばす。

「ひゅうっ

息を使い切つた頃には立つてるのは私とシン君とシジョンさんだけだった。

「すっぺえ! 三三すっぺえ! ズババババつて! うつひやあー

Γ Π / / / Γ

「ウルル」

今の動きで興奮したシン君が目をキラキラさせていたが、シランさんはあくまで冷静。淡々と私の名前を呼ぶ。息切れ中の私に間髪入れずの呼応は難しかつたが、それでも早い方だつた。なんせ普段なら全力出した後は半日以上、全身上手く力が入らなくなつてしまふのだ。膝が笑つて笑つてしまふがなくなる。でも不思議とまだ丈夫だつた。だから私はシランさんに応えられる。

私は改めて耳を澄ました。普段はしない音を拾え。異常を捉えろ。
私はそのために在るから。

「フ！」

あつたか?』

シリハさんの声が急に遠くなつたように感じた。

「う、そ……」

シランさんの強い声が私を呼び戻す。反射的に「はい」と答えていた。シランさんは険しい顔をより険しくさせるとシン君に向を直つた。

「行くぞ」

「図書館が襲われてるってことか！」

考えるのは後だ。
疲労状態の兔は来れるのか?」

私だと理解できたのは『鬼』だったからか。真っ直ぐに朝日すら

跳ね返す強情な黒が私を見ていた。待っていた。私はガクガクと意思に反して笑う膝を思いつきり掴んだ。

行けるよね？ 行かなきや意味ないもの。私があそこを守らなきゃ誰が守るって言うの？ そうです、私が守るんです。そう、決めたんです！

「行きます！」

「シン！」

「わかつたから怒鳴るなよー。オレの耳もそれなりに良いんだぞ？」

ちょっと不満そうにシン君はぼやくと、私とシラーンさんを掴み上げ、走り出した。さっきまでずっと戦っていたはずなのに全く疲れた様子は見られない、軽快な足取りに本当に感服した。だってその上二人の人間まで抱えているのだ。ロウ君や私とも違うものだと思った。でもやっぱりただの人間でもなさそうだ。しかし尋ねるタイミングではないので、私は前を見た。

……と言つたが、何故私はこんな緊急事態にそんなことを考えていたんだろう？ 図書館が危険に晒されていることがわかつたのに、不思議なほど心が静かだ。一人がいるからか、ロウ君が残ってくれているという安心感からか。

「直ぐ着くからきっと大丈夫だよ、ミミ」

「ロウは強い。いろいろな意味でな。ある意味シンよりずっと強い」

「そうそう。オレ、ロウほど戦うの好きになれないしなー」

「俺はおつむの話をしている」

「オムレツ？ いつから食べ物の話になつたんだ？」

「……どう思ひへ、ミミ」

「あはははー」

空笑いしか出ませんつてシラーンさん、と言いたかった。きっと知

らない言葉だつたんだろう。そしてシランさん、酷い。

「あ、見えた見えた」

シン君が言つたかと思つとブレーキをかけ始めた。よく考えるとかなりのスピードだつた。しかしそんなに見えていないのにブレーキをかけ始めるのは……安全運転？ いやいや、シン君は車じやないですよ。

「あれは……」

「つてまだ随分距離ありますよ！ シランさんも見えるんですか？」

「俺は目が割りと良いが。お前は聴力に偏つているのか？」

「そう表現しても、差し支えないと思いますね……」

実際視界は一般よりも狭いことを自覚している。田のつき方は人間と同じなのだが、知覚できる範囲が限られているようだ。視力が弱いというのも少し違う気がするが……視力も良くない。あまり遠くはぼやぼやになつてしまつ。だから当然今あるこの距離では口クに見えやしないのだ。

「なあアハハ」

「なんですか？」

トーンが下がつたシランさんを不思議に思いながら答えると、シランさんは神妙な顔をして言つた。でもシランさんの真面目の顔つて少し笑いそうになるな、といつ考へが一瞬過つたのは内緒なのです。

「お前は図書館を守る、守らなければ。そう繰り返し言つていたな？」

「え、ええ。だつて泉さんの、あの図書館で館長をなさつていた泉さんのお意志を守りたいから。大切な場所を守りたいと思うのは、普通のことです」

「そうだな」

「……何が言いたいのですか？」

含みのある相槌に、いぶかしげな問いを返して首を傾げてみせた。しかしひランさんはそれ以上は言わず、ただ前を見た。まるでこの先に答えがあると言つよう。

「あー、わかつた！　三三つて一人で戦つてるみたいに言つてるから、つてあう」

「抜け駆け禁止

「ひでえよシラン～」

鬼だ。自分を運んでもらつているにも拘わらず躊躇なく相手の脇腹を突いたこの人は、シランさんは、とつい思つてしまつたらシランさんに睨まれたので考えないことにした。でもせつかくのシン君のヒントも私には効果がなく、何が待つていると言つのか、どちらと怖くなつた。しかし走つてしているのはシン君で、運ばれているのが私なのだから抗つことは出来ず。

「ふふー、とうちやーく！　スケッチいたすぞー！」

「それ言つなら助太刀だからなシン」

「それ、助太刀つて言つたかつたんですか？」

「……一人同時に別々の言い方で訂正しなくていいじゃないかあ。一重でダメージだよ」

到着早々深手を負つたシン君は、でも丁寧に私達を下ろした。シランさんは慣れた様子で素早く立ち上ると前方へ真つすぐに視線

を向けながら私に話しかけた。

「いつまでも独り善がりな馬鹿兎に訊ぐがな。他にいなか?」

「何のことですか?」

まだ足腰が笑ってる私はようようとゆっくり立ち上がりながら問
い返す。顔はまだ上がり切っていない。でもシランさんが笑つてい
ることだけは伝わってきていた。一体何があると呟つかと、全身
と戦いながら起き上がり。

「お前に見えてない大切なものの話だ! 同じ志を持つ、そう、お
前の 前の 」

視界が開けた。

私は息を呑んだ。

「お前の同志と呼ぶべき者たちの話、だな」

「同、志……」

みんながいた。

図書館の常連のおじいちゃん。いっぱいお話ししてくれるおばあちゃん。遊ぼうと言ってくれる女の子。他にもたくさん私の大好きな温
かい人がそこにいた。晴太君も、いた。
みんな、戦っていた。

「どう、して……」

「まだわからないのか馬鹿兔? 簡単だ。お前と同じなんだよ」

ホウキを振り回す女の子。木槌を叩き付ける青年。フライパンを
構えたおばあちゃん。

みんな戦っている。何のために?

「ああ、ああ

「 そうか、と今初めて知った。初めて、わかつた。なんて私は馬鹿なんだろうと思つた。」

「優しいお前が好きなんだ。本を大事にするお前が好きなんだ。図書館を守るお前が好きだから……戦ってるんだ。お前と一緒にな」

おお みんが 三三姫艶 てめを か。

心しきおー。俺らがちやんと守つたからなつー。

図書館へかしてないよ
力アサナんたよ」

「我唔知佢係唔係咁想我呢？」

その呼びかけに応える声があちこちから上がり、空気を震わせた。
夢みたいだと思った。嘘じゃないかと思った。だってこんなにたくさんの人が私なんかを助けてくれるわけない。きっと泉さんの人徳と、みんなの図書館が好きって気持ちがあるからなんだ。でも、嬉しいよ、泉さん。

「お帰り、三人ともつ」

「おつかれさん口ウ。凄い人数だな、大丈夫か？」

口ウ君が私たちに気付いてやつてきた。何故か図書館の屋根の向こうから。そしてひょいと屋根を飛び越えるとシン君の隣辺りに降りてきた。

「うんつ。みんな大勢で戦つの慣れてるみたいで上手くカバーし合

つて戦つてくれてるから心配はあんまりしなくて良いみたい

「慣れ、てる?」

「やう。たまにやつて敵襲があるとみんなで図書館を守る」としてるんだって

「えつ ?」

初耳だ、それ。だつて今までそんなこと、なかつたの……。

「すまないね、隠すよつな」とじて

急に謝られびっくりする。振り返ると手に鍬を持った元氣なおじいちゃん、俊蔵さんがいた。

「アリサちゃんが気付かなかつただけで、随分前からやつているんだ、いつこことは」

「私が他に気を取られて、力使いきつて疲れて倒れている間、いつもこつしていたんですか……？」

「そうだよ」

「どうして、どうして言つてくれなかつたんですか…」

でもわかってる。私が守ることばかりに気を取られて、図書館を忘れていたんだ。だから代わりに……守つてくれていたんだ。

「泉が死んでから、アリサちゃんはもつと無理するよつになつただろう。下手なことを言つたらもつと無茶して……アリサちゃんまでいなくなつてしまふんじやないかとな、お節介ながら考えたのだよ」
「お前は周りが全く見えていない。わかつただらう。これがお前の現実なんだ、だからな」

ああ、もう、もう言わないで。優しく言わないで。諭すよつに言

わないで。わかつてゐるから。わかつたから。

「 もひへ、独り善がり、しませんつー。」

だからだからだから。

「 ありがとつ、ありがとつー。」

独りじやなかつた。私は独りじやない。そのことがどんなに素敵で優しいものか。

「 図書館を守りたいと思つていてのまあ前だけじやなかつたようだな。淋しいか？」

「 せびしいわけ、ないじやないですか。シワソさんは意地悪です溢れそつになるものを必死に拭うと前を見た。同志がいて仲間がいて、どうして泣いている暇があるところのか。

「 もひ一踏ん張り、頑張りましょひ歯さん!」

「 応!」

「 ええ!」

「 おーー!」

一番怖かつたことは泉さんがないくなつてしまつたことだつた。それからは一番私にとつて怖いことは図書館がなくなることになつた。それしかないと思つてしまつたから。でも違う。無意識ではわかつてた。だから図書館よりもそれしづめばかりに氣を取られていたんだ。今の今まで。

私が守りたかったものは、怖がつていたものは、きっと。

「話があるんだ」

敵を追い払い、一段落したところでシランさんが私に提案したのは、お人好し過ぎるものだつた。まるで近所の子供の初めてのおつかいを心配する、ちよつと心配性なお兄さんみたいだつた。

「一人で行くよりは良いだらう。俺だけじゃない、シンもロウもいる。その意思が、直接向き合うだけの意志があるなら來い。一緒に行つて、一緒に聞いて、嫌なら一緒に文句言つて帰ればいい。それだけだ」

言いたいことは言い切つたらしく、満足げな顔をするとシランさんはシン君らを呼び、宿へと帰つてしまつた。私は急な話に棒立ちだと言つのに、無茶苦茶な人だ、と呆けた顔で思つた。

「三ツ姉？」

不安そうな呼び掛けによつやく我に返る。晴太君が声と似た表情になつて私を見上げていた。きっと今の話を聞いていたのだろう。他にもそれらしき人達が、困惑したような、心配するような視線を私に向けていた。

私はぼんやりした顔をいつもの笑顔に切り替えようとして、やめた。愛想笑いも、強がりの嘘つきも、もう店じまいにしよう。

迷路は先が見えなくて怖いし、暗くて怖い。でも、誰かと一緒に歩きつと大丈夫。

皆で選んで決めた道なら、たとえ一人でも胸を張つて歩ける。私

はまだまだ未熟なんだから、泣いて喚いてまた戻ってきたって、仕方ないと黙つて迎えてくれるよ。もう一度一緒に考えようつて、言つてくれるよ。

それが甘えだとしても、ちょっとだけ。あと少しだけ。甘えて大人になりたいの。

身体は成長しなくとも、心は強くなりたい。独り善がりじゃない、本物の強さが欲しい。嘘を被らなくても、ちゃんと歩けるようになつ。

「……すみません、内緒にしていたことがあるんです。その上、厚かましいことなのですが、その……相談に乗つて、頂けますか？」

一緒に戦う仲間には、しなくてはいけないことだと思った。でも、本当は自分が決めることなんぢやないかと思つた。

でも、違うみたいだ。

私を見返す顔、顔、顔。それはどれも優しくて、温かいもので。私は目尻に浮かびそうになるものを必死に堪えると、心からの笑顔を浮かべてこう応えた。

「ありがとう」

026 図書館の守護者【狼】（前書き）

たくせん悩んだ、いっぱい迷ったその先には、めりと幸いが待っています。

そう信じたいし、そうあるために今日も考え方。今と未来を。

『』が笑って歩き出す第一一十六話です。

「お前ら行かなくていいのか?」「
行けるわけねえだろ?が!」

スバルさんがやけくそ氣味に叫んだ。確かに余所者が入つて行ける雰囲気ではなかった。皆の視線の先には多くの人を前に、頑張つて話すヨミがいた。ヨミはシラン達と一緒に行くことを選ぶのか否か。そんな大事な相談をしているところへ乱入なんて出来る訳がない。だからスバルさんの叫びももつともだつたが、それをいつもの顔で聞き流すシラン。シランって案外、感心のない人には冷たいよな。もうちょっと優しくしようよ、と思つ。まあシンがカバーするんだけど。

「よそもんが入つて行ける感じじゃないもんなー。まあ明日返事聞けば良いんじゃないの?」

「一二一二」とシンがそう言つと、スバルさんの表情も多少和らいだ。

「そうだな……まあ日暮れ頃にもう一度訪ねてみるか

しかしそれをませつ返すのが彼らだ。

「そうですよね、押しがちょっと弱すぎるリーダーがあそこに入つて行くのは厳しいですもんね」

「大人しく出直しましょ? ぜ、リーダー」

「だから何で君らはそう言つ子供の言い訳に乗つてあげた大人みたいな対応なわけ!? 僕リーダー! 君らも言つてのよつてリーダーなんぞ一応!」

「一応がつくと」シラがリーダーらしいですよね

「うあああああ

「……お前、ほじほじにしとけよ」

さすがのシランも憐れむような顔で一人に注意した。でもその返事が元気良すぎる「はーい」だったのが引っ掛かるなあ。シランも同じことを思つたようだが、結局面倒臭そうに眉を曲げると。

「帰るぞ、宿」

とだけぼそりと言つて返事も待たずにして歩き出しちゃった。シンが待つてよ、と追い掛け。口ウもそれに続くが、その前にスバル達を一度振り返つた。

「心配しなくてもなるようになるから大丈夫だぞ」「どうこいつ意味ですか？」

シズカさんが不思議そうに問い合わせたが、口ウは誤魔化すようにつっこりと笑むと背を向け、シラン達の後ろ姿を追い掛けたのだった。

「んんんーっ」

と伸びをする。それから全身をほぐすよつて身體震わせると、ぱつちり目を開いた。

「朝、
だぞ」

「ふおーはな」

「んん？」

寝惚け気味な第一声に入つた妙な相槌に目を向けると、シンがパンをくわえた状態でこっちを見ていた。どうやら朝食の真っ最中のようで。シンはゆつくりとパンを咀嚼すると、改めて口を開いた。

「わいい。おはよ口ウ。良い朝だな、雲も薄くて明るい朝だ」

抜けるような笑顔のシン。どうやらわつきの発言は肯定の意味だった模様。次いで違和感を感じ、室内をキョロキョロと見渡した。

「シランせ?」

かよにと浦山田でいた 父上山田をさう 朝餉しなる?

レノ

しかしシラソと離れている割りに冷静だな、と思った。見知らぬ土地でバラバラになるのは嫌がりそうだと思ってたんだけどな。ミミがいるからかな。

「じゃあこれ残り食べて良いから。オレはシン迫い掛けるよ。口
ウも終わったら図書館に来なよ」

「それから。ありがとう、シン」

一
う
ん

「どうか上の空な返事。引き留めかや悪いかなと思いつつも、ついそんなシンに尋ねていた。

「ビハレシランは一人でヨリのところに行ひやけたんだ？」

すると上着の袖に手をかけたヒルのシンがきょとんとした顔で止まつた。それから眉を困つたよつて曲げる。

「なんでって……謝るためだろ？」

「謝る……？」

シランがヨリコッ、どりして、と首を傾げていると漸く合点がいったようだ。「ああ」と勝手に納得した顔で頷き始めるシン。中途半端だった上着をわざと羽織るとロウに向き直つた。

「ほりシラン、暴走モード入っちゃったじやん？」

「暴走つて……それつていつも以上に遠慮がなくなつてる感じだつたあの昨日のシランっ。」

「やつや、それ」

と軽く相槌を打ちながらシンはベッドの上に腰を落ち着かせた。因みにロウは全く動いておらず、未だにシンの腰掛けたベッドの隣のベッドの上に座つたままだ。会話は成立するけどまだちょっと寝惚け気味。

「あれになると暴言だらけつか、しかなくなるんだよね。普段面倒だつたり、一応遠慮して言わなこようなことをズバズバ言ひやうんだ」

「で、後々冷静になると反省しちゃうづへ。」

「やつやつ」

案外普段がアレでも遠慮するところは遠慮してるらしいんだ、と一シシと笑いながら言ひシン。ちよつと意外だなと思つた。だってシ

ランだ。あんまり後悔とか遠慮とかしないと思つていた、シラソとは縁遠いものだとばかり思つていたが。

「シラソも人の子だつたんだなあ」

「口ウ……お前はシラソのことなんだと思つてんだよ?」

呆れたように言われてしまったのでアハハと誤魔化すように笑つた。ちょっと納得行かない顔をしていたシンだつたが、話は一段落ついたと見て。

「んじや先行つてるぞ」

と腰を上げた。止める理由もなかつたので、食べ終わつたら口ウも行くな、と軽く手を振つて応えた。

ぱたん、と軽くドアの閉まる音を聴くと改めて自分の格好を見て、一人呟いた。

「着替えよ」

まだ寝間着代わりのシャツのままだつた。くしゃくしゃだ。

しかしふとベッドを降りる前に、シンが残してくれたという朝食が気になり、上から覗き込むようにベッドとドアの間のスペースに置かれたテーブルを見やると。

「……大、きいね」

なんか握りこぶし程の厚さのパンが一個、皿に乗つっていた。いや、パンの厚さ自体は頑張つても親指程しかない。問題なのは。

「ジャム……やシロップ漬け?」

淡い、少し透き通る感じの黄色の果物が挟まっていた。それがでかい、ゴロゴロしてる。そのせいで凄いインパクトのある朝食となつていた。隣に置かれた水入りのコップが酷く小さく見える。近付いてみるとちょっと光沢があるのがはつきりとわかった。これは……なんだろう。素材まるごと感がびしひしするのだけど。なんの果物だろう。桃、いや杏とか？

暫しのにらめっこ。

サンドイッチの大半以上を具が占める朝食。しかし……。

「美味しそう」

キヨロキヨロと辺りを見渡す。うん、誰もいない。はしたなくても気にする人はいない。

し、仕方ないよね、こんなに大きなサンドイッチなんだもの。だから口ウハ丁寧に手を合わせ。

「いただきます」

と一人、厳かに言うとサンドイッチを持ち上げ、大きく大きく口を開けると。
ぱくり、と食べた。

普段だつたら視線が恥ずかしいポーズだけど誰も見てないもの。あ、あの鹿とか、狩りに関しては別だからな。あれはしようがない。これはまた別……だけど、良いよな、かぶり付くしかないじゃないか。

と一人言い訳を内心ぶつぶつ言いながら一皿のために再び大きく大きく口を開けて。

扉から覗く一对の黒瞳と目が合つて閉じた。

一度、目を閉じてみると、ちょっと待つて。あれ、多分あの人だよ

ね。目、合つちゃつたよね。見られたよね。上機嫌で大口開けてる間抜け面見られたよ。完全に油断してたぞ。本気で視覚以外の確認、忘れてた。いやでもあの人気配なさすぎでしょ。忍者ですか？トバさんですか？あ、トバさんは隣の第五守衛地区の副地区長さんなんだぞ、ってうわ、口ウ混乱してるな。

「どうぞ」

「あ、いいんですか？」

「……手遅れだし」

「では遠慮なく」

宣言通り、全く氣負つた風もなくあの人、シズカさんが部屋に入ってきた。それがデフォルトなのか、いつものほんのり笑顔な人だ。こういう気まずい時に笑顔を見ると笑われている気がする。まあ、多分被害妄想だけれど。

「で、何の用か？」

「紫蘭さんに続いてシンさんも出掛けたようなので、残った口ウさんに状況をお尋ねしてみようかなと思いまして」

「つまり返事を訊きたいから催促、ってわけかな？」

「お好きなように解釈して頂いて結構ですよ」

食えない笑顔に渋い顔になる口ウ。ため息を吐きつつ、投げやり気味に答えた。

「帰つて来たらどんな結果であれ出発。それは変わらないぞ。口ウも今から行く。シズカさん達はここから動かないで待つのが吉だぞ」
言つだけ言うと残りの朝食を口に、というか胃に放り込むと立ち上がつた。掛けていた上着を手に取ると、さつと羽織る。そんな一

連の動作を静かに目で追つてから、シズカさんは何気なく言葉を投げ掛けた。

「冷たいですね、ロウさんは」「あなたは得体が知れないから苦手なの。スバルさんみたいなお人好しとは違うみたいだから……」「よく見ますね。でも私がリーダーを裏切ることはありますよ。私は自負する程に嘘つきではありますが、リーダーを裏切る形になることはないですよ」

その『裏切る』というのはきっとスバルさんには嘘をつかない、ではないだろう。多分、スバルさんの本心に反することはしない、嫌われたくないってことでもあるのかな。でも、そこは信じられる。

「本当にスバルさんが好きなんだね」「その言葉は紫蘭さんに置き換えてロウさんにお返しますよ」

では邪魔者のようなので失礼させて頂きます、と嘘臭く笑ったシズカさんはさつさと部屋を出て行つた。本当に気配を良く消す人だなあ、とちょっと呆れながら音もなく閉じたドアをぼんやりと見ていた。動作が不自然なまでに自然だから気付きたいくいのだ。

「困る人だなあ」

対応に。といった感じ。何だかスバルさんとは違う目的みたいなものを持っているような印象で。

「あ、一つい忠告を。お出掛け前に自分の格好をきちんと見ることをお勧め致します」

ガチャ、と扉が閉まる音を呆けた顔で聞いた。自分の姿を見返す。ほんとだ、朝食を優先して着替えてなかつた。その上にコートを着てしまつていた。

「あー」

羞恥に思考が持つていかれる。
しばらく悶絶してた。

やつと復活して口ウは部屋を出た。宿からとつとと出てマリの図書館へ行くのだ。さつきのはあまり深く考えないことにする。

外の空気を胸一杯に吸い込む。朝の空気は澄みきり、くもじでさえ輝いているような気にさせる。

「よし復活」

自分に言い聞かせるように言つと走り出した。あまり人はいないので遠慮なく走れる。本当にあつという間に図書館に着いた。ノブに手をかけるが、中から漏れ出した話し声が耳に入り、一時停止だ。

「よしそくね、シン」

「ありがとう… ようじくくな…」

凄い、和やかな雰囲気。ヨリの声が前者、後者がシンだ。ヨリがシンを呼び捨てにしている……。さすがシンと思うが、なんだか入つて行きづらくなつた。仲間外れにされたようで、ついふて腐れた

気持ちになる。一人だけ仲良くなるなんてずるい。口ウはまだ「口ウ君」なのに。

しかも続いて照れたヨミの声がしてきて口が自然とへの字になつた。

「いらっしゃ…… ありがとう」

しかしそれをぶち壊すような馴染みの不機嫌声が割り込んだ。

「おい」

シランだ。気に食わないといった顔、になつていそくな声だった。思わず苦笑してしまつが、同時にこいつそり感謝した。

おかげで入りやすくなつたから。

「一人だけ除け者にされてふて腐れてるのかなシラン? 口ウを置いてくから悪いんだぞ?」

扉を開けると意氣揚々と言い放つた。ヨミとシンは既に気付いていたので普通に挨拶。シランだけは驚いた顔で口ウを迎えた。

「いつから居たんだ?」

「ついさつてきたの。シランありがとー」

「何を感謝されているんだ?」

「それは秘密。おはよっヨミ、シラン。良い天気だな」

「口ウ」と微笑んで相槌をつつヨミに対し、曇り空な不機嫌顔のシラン。さつきの口ウの台詞が嫌だったのかな、と思つ。しかし切り替えたのか、そんなことより、といつ風にヨミに向き直るとシランは口を開いた。

「支度は？」

「あ、はい、出来ますよ。決めたあと直ぐに荷造りしましたから」

「あ、やっぱり行く」とになつたんだな

さして意外そつでない表情でロウガが言つと、ミリは力強く口の端を上げて応えた。

「ええ。後悔しないためにも」

「あはは、前向きなんだか後ろ向きなんだか、わからなくなる発言だなつ」

「前向きだよきつと！」

「しかし『したくな』のために行動しようとは思つるのは果たして前向きなのか？」

「シラソ難しこ」と言わないでよねー」

シンが頭を抱えて、シラソは仏頂面で放置、それをロウは笑顔で見守る。するとミリは一〇一と微笑みながら。

「やっぱ変な人達ですね！」

と言つた。ロウ達はなんとも言えない顔で、きっと二三様な表情でミリを見ていた。ミリはそれがおかしかつたようどうとう吹き出して笑い出してしまつた。もうきょとんとするしかなかつた。

しばりへじてミリが落ち着くとよつやく会話が再開される。

「それで、挨拶は済んだのか？」

「はい。昨日決めて、ちゃんと挨拶回りも荷造りも済ませてありますよ。今すぐ出発で大丈夫です」

さすがミリ。準備は万端の様子。シランは頷くとロウとシンを見た。お前らもいいな？ という確認だろ。ロウは頷き返し、シンは目が合つ前から笑顔で肯定を表していた。

「ならとりあえず宿へ行こうか。昴さん達も待つていいだろ？」「はい。今荷物を持つてくるので、表で待つていて貰えますか？」

と言わされたのでぞろぞろと素直に図書館を出るロウ達。ちょっとと気になっていたのでシランを見た。シランはなんだ、と不機嫌そうに眉を上げた。

「シランは納得したのかな、と思つて」「俺がミリの決定にどうのいうのいつの言つ権利はないし、そもそも立場でない」

「それでもシランは納得しなきゃあんなあつさうとは話を進めないでしょ？」

シランはロウを睨むような目付きで見ていたが、やがてふつと力を抜くと答えてくれた。

「お前も聞いただろ。あれが答えた。あいつはもう逃げない」「……そつか。なら大丈夫だね」

ちょっとほつとした。昨日最後に見た表情がかなりの困惑顔だから。それまるで図書館の何かに縛られているような印象を受けていたから、気になっていたのだ。きっと思い出とか、そんなもの。ロウには求めて見えない鎖をミリは持つていた。でも振り切れただよ。

「なあに言つてんだよ。ミリは強いんだぞー？ そんな心配しなく

たつて大丈夫だよ

「どこから来ているんだその自信は」

「勘だ！」

シランは呆れた顔でシンを見たが、頭を振ると氣を取り直したようになつた。

「ヨミはまだか」

「スルーしなくてもお」

「明らかな話題転換は残酷だね」

「お待たせしました！」

不意にヨミの元気な声が響いた。一斉に三人の視線がヨミに向く。荷物は意外とコンパクトで、小振りのリュックサック一つ背負つているだけだった。

ただ。

「……ヨミ、太った？」

「ええ！」

流石のシランも口吻もつっこめなかつた。だつて、ねえ。

「凄い着膨れしてるね」

「変異種の兎のあごしたみたいだな」

「え、と……肉垂つて言いたいんですね？」

困惑気味に問い合わせ返すヨミに一人揃つて頷いた。『肉垂』という言葉は知らないが、ようはあの兎のやたらモコモコした胸毛というか、顎下の毛のことだよね。シンはシランに同感なのかしきりに頷いている。

ミミは何枚重ね着したらそうなるのかと解説を求めてくるほど一番上に着たコートはパンパンだった。あんなに細かったミミが数分の間に肥えた豚みたくなつてしまつていてる。横幅は三倍近いのではないか。しかも「丁寧にフードまで重ねているよつで、とりあえず三枚ほど判別可能だ。つまり最低三枚は上着を着てゐることになる。

「どうしたんだミミ、そんなにまるひじくなつちゃつて」

「変ですか？ 外は寒いじゃないですか。太陽は氣紛れにしか私たちを暖めてはくれないんですよ？」

「限度、つてものがあるだらつ」

「シラソさんまで……」

ちよつとショックだつたようで、頃垂れてしまつた。しかしこつちとしても衝撃を隠しきれない。思わず三人、顔を見合わせる。最初に動いたのはやつぱりシンだつた。

「ごめんて。ちよつとびつくりしただけ。まるひじくなつたミミもかわいいよ？」

「シン、それあんまりフォローなつてないぞ」

「え、ダメ？」

「もういいです、いいですから行きましょう……」

折れたのはミミの方だった。ちよつと涙目なミミだつた。

「あのー……頭、上げて頂けますか？」

「他に感謝の意を表す方法を知らん私を赦してくれ」「いや、あの……シランさん~」

「俺は助けないからな」

面倒臭いという感情を微塵も隠さないシランは、不機嫌そうに言い捨てた。ヨミは困り顔で前、といふか足下を見た。ロウも一緒に見る。

そこには凄い綺麗な土下座をする人がいた。てかスバルさんだ。頭が床にめり込みそうなほど深々と頭を下げていた。このまま一週間生活させて頂きますとか言い出しそうな勢い。流石にないとと思うけど。対するヨミは完全に困惑顔で、何だか慌てていた。

「あ、あの、そこまでする程の者ではないでしょ? 私は。だからもう十分です、どうか顔を上げてください」

「いえ! 今回の無茶な願いを聞き入れて頂いたことはもうこんなことじやあ足りません! おいお前ら! もつと気合を入れて感謝しろ!」

「オッス!」

「はい!」

「うああ、シン君口ウ君助けてください、どうか三人を止めてくださいよお」

しかもシズカさんとマルタさんまで土下座モードなのだから無理もない。またちょっと泣きそうなくらい困り果てているヨミだった。しかし三人は感謝の意を表したいだけで悪気は一切ない。

どつちの味方をしてもしなくて申し訳ない気分になれそうだ。これは傍観が楽だよなー、と思いつながら横目にシンとシランの様子を窺おうとすると、案外のほほんとしたいつもの顔のシンがいた。

「でもよー、多分気が済むまでやつて貰わないと度々こんなことに

なるんじゃねえの？

あつさつとそんなことを言ってしまつシン。せつかくなので便乗しちゃえ。長引いた方が面倒だといつ判断した口ウも畳み掛けるように言葉をつむいだ。

「不可能と思われてた結果だからね、喜びもひとしおなんだよきっと。良かつたね、スバルさん。つてことで多分もう気持ちは伝わってるから顔上げようよ、ね？」

しかし何故か事態は全く改善されず、ミリの困惑度が上がつただけだった。

結局そんなこんなで十分後、ミリが懇切丁寧にお願いして、といふか逆拌み倒しをしてなんとか全員が通常スタイル、つまりは一足歩行に戻り、ようやく普通の光景が戻ってきた。ミリの安堵は半端なかつたようで、疲れた笑顔も晴れやかだった。

「じゃあ明日出発で
「リーダーリーダー！ ちょっと待つてくれさい、紫蘭さんとの約束は……」

意氣揚々と翌日出立、と言ひしよつとしたスバルさんに、シズカさんがストップをかける。すると瞬く間にスバルさんが蒼白した。何か思い出した様子。

「やつだつた、三日田の今日までといつ約束だつたな……」

ズンと沈んだ顔になるスバルさん。しかし非常に軽い調子でそれを打ち碎のはくシランだ。

「もうミリの支度も終わっている。ミリが良いのなら今日出発しようかと思うが」

「そ、そうなのか！」

スバルさん復活。期待の眼差しを向けるスバルさんに、ミリも思わず苦笑しつつ、柔らかな物腰で応じた。

「はい、準備は出来ていますよ。昨日ロウ君に、翌日には出発するつもりだから、行くと決めたら出来るだけその日の内に荷をまとめとくよし」と教えて頂いたので

すると何故かシランに視線が集まつた。その意味はきっと「ロウに頼んだのはシラン?」みたいなものだと思つ。しかしシランは目線を誰一人として合わせず、不機嫌な表情をより深めていた。まあそうだよな、それはロウの勝手な判断で、シランはすっかり忘れていたんだから。

しかし皆が困惑顔な中　若干名不機嫌顔な人がいるが　一
人だけ別の行動を取つた人がいた。シンだ。

「えらいなあロウは」

そう言つて優しく頭を撫でてくれた。ビラやらシンには全部お見通しな模様。それを皮切りに、シランが素直に頭を下げた。

「……確かに、言つのを忘れていた……すまん

「あ、いえ大丈夫ですよ」

「ロウのフォローのおかげでな」

シンのとじめの言葉にぐつたりしたシラン。たまにシンつて容赦ないよな。しかし流石シン。フォローまでそつなくこなす。

「まあでも、明日出発じゃなくて明後日出発にしたのは一応行くところになつたヨリがゆづくやめ」とをやれるよつてこみたいな理由なんだろ？うなじな

「お心遣いありがとうございます、皆さまで

「……中途半端ですかな」

意外と堪えたようすべつたりしたままのシクンがヨリ謝罪する。

ヨリは苦笑していた。

「せひと。なら話は早い。出発で大丈夫ですか？」

異存のある人はいないようだった。

「ヨリやん
「ヨリ姉ー」
「ヨリ」
「……はい？」

宿を出ると老若男女、様々な人が待ち構えていた。ヤヒと二十はいくだらう。ヨリは目を丸くして棒立ちになつてしまつたが、そこは関係ないらしく、彼ら彼女らはぞろぞろとヨリの周りにやってくる。なので口ウ達は空氣を読んで場所を空けた。

どうも見送りのようだ。もう済ませたと言つていたヨリも不意討ちだったらしく、言葉もなくおろおろしていた。嬉しそうに困っていた。

「あつたかくていいところだな、ここ」

シンがそんな様子を見て、顔を綻ばせて言つ葉で、ロウとシラ
ンは素直に頷いた。ミリの人徳と住人の人柄なんだうなと思つ。

「でもちよつと心配性かもね」

「まったくだな」

シランの呆れた声が相槌を打つ。それもやはつどいか優しげで、
苦笑といった感じだつた。

「うーん、でもオレだったらそんなに心配なら意地でも行かせない
けどな」

「知つてゐる」

「うん知つてゐるぞ」

「な、なんで！」

衝撃を受けた顔をシンはするけど、だつて、ねえ？ 出発当日の
説得は最終的に脅しだつたし。本氣でシンだったら閉じ込めてでも
行かせないだろう。

「むー、これがウワサの読心術といつやつかあ
「違うからな」

完全に呆れた声でシランが言つと、シンは首を傾げて悩み始めて
しまつた。そんな深く悩むことじやないよと黙つべさか。

「ちよことお前さん、」

「ん？」

不意に何故か胸板をトントンと叩かれた。つまり相手は真正面にいるのだ。それはさつきまでヨリの傍で話していたおばあさんだつた。背筋はピンと張つてゐるがやたらと背が低く、口ウとあまり変わらない。でも変わらないならそんなところひ叩かなくてもと思つが……誰にも気にされず話が始まる。

「ヨリちやんと行くのはお前さんでいいじゃん？」

「うそ、やうだよ」

シンが頷く。おばあさんはそれにこいつと笑つと、手提げかばんから「ソシ」と何かを取り出した。それは綺麗に織られた布を縫い合わせた、四角いシリエットのもの。上の部分は白い紐で閉じられていた。手のひらにすっぽり収まる程度の大きさの、小さな平べつたい袋。

「御守り、か

「おまもり？」

シンが首を傾げて口ウを見るが、残念だが首を横に振つてみせることしか出来ない。

「なぜ鹿威しのわいしがわかつて御守りがわからない……」

シランから変な視線が。そんなのたまたま「御守り」というものに今まで遭遇しなかつただけだぞ？

「で、おまもり、つてなんだ？」

「まあ読んで字の如く、守つて欲しいといふ願いが込められたものだな。神社や寺なんかで神の加護があるようだと売られていたが、

今ではほとんどないようだ。でもたまに第八特区でも出回っているぞ

「ふへー。神さまなのか」

「「めんなさいねえ。これはおばあちゃんお手製だから神様の加護なんて大層なもんはないんねえ」

苦笑すると田尻に年月を感じさせる皺ができた。優しげな、くしやつとした笑顔だ。

「でも神頼みなんかじゃない想いが込められてる。俺はその方が効き田がありそうだと思うがな」

「ほり兄さん、かつじええ顔して良いこと言つと様になりますなあ

「…………」

シランが不機嫌な顔になる。まあ照れ隠しながら。おばあさんもそれがわかつてるので一々口一々口としたままだ。

「では貰つていただけますかねえ？」

その言葉に驚くのはロウ達だ。田を見張り、耳を疑つ。

「…………田、渡してやつてください」

「いんやいんや、田わせやんには渡しましたとも。あんたさんらにも持つていて欲しいと思いましてな。生憎、これ一つしかないだけどねえ」

三人の真ん中にしわくちゃな手がやつてくる。シランが何か言おうとしたが、シンとロウが息もぴったりに左右に分かれ、道を開けたのでそれも止まる。

「……何のつもりだ？」

「シラソが持つてれば皆一緒に守つてもいいだからだぞ」

「何故にやうなる」

『やくよつ』言づが、シンの輝く瞳と田が合つてしまい、ため息混じりにシラソはおばあさんの前へ出ると、深々と一寧に頭を下げた。

「……有り難く、いただきます」

「そんな堅くする」とじやがないですよ。婆の我が儘、受け取つてくれてありがとうございますね」

しわくちゃの顔をよつ一層くしゃくしゃになると、お婆さんはあちらの集団に戻つて行つた。

遠くからもわかる『』の綻んだ顔が微笑ましい。こんなにも想われている『』が眩しく見えた。

「『』と旅するの、楽しみだな」

「うん。それに頑張なんくちゃな。の人たちの想いの分まで」

「あまり気負うなよ」

少し心配そうなシラソの声。多分慣れた人しかわからないものだけど。シンはそんなシラソに、ニシシシ、と笑つた。

「シラソいや心配性だよ」

シラソは口元までの字にさせて、とても不服そうだったが、駆け寄ってきた『』を見て口をつぐんだ。

「すみません、お待たせしました！」

「 もうここのか？ もつとゆっくりしても良いんだぞ？」

「 いえ、あんまり居ると行きこくなってしましますから……行きましょ！」

切なさを噛み締めるような笑みだった。ロウは静かに頷き、シンは笑顔で肯定した。シランはキュッと御守りを大事そうに握り締めると、腰のポーチに滑り込ませてからコートに向き直った。

「 ああ、行こう。このたぐさんの想いを聴こへんな」

「 はー」

「 ここかむよ」コートは笑った。それはとても晴れやかで、幸せそうだった。

そして出立の最後の最後。やさきのお婆さんがコートに歩み寄ると、ゆっくりと言葉をつむいだ。

「 こっぽい迷いなさいな。迷わなきゃ見つかんもんもあるんですよ。決め付けちゃいけんよお。大切なものは少ないようでも多い上になあ、本当に大事なもんは分かりにくい場所にあるものなのよ」

お婆さんはコートの手を握つて、真つ直ぐな眼差しを向けて、願うよつと言つた。

「 やうしてお前さんの『本当』を見つけんしゃい。それは真実でなく、搖らがんもんじゃないかもしれん。でも必ず最後に辿り着く答えは、やうとコトヤマさんにとっての真実なんよ」

「 ……まこつ。ありがと。……行つてきます」

「 気を付けてね」

やうして背を向けたコートは、涙ぐんでいた。ちよつと恥ずかしそ

うにロウの視線に笑い返すと、ヨミは真っ直ぐにロウ達の横を通り、ずんずんと前へ歩き出した。

ほんの少し出掛けただけ、で終われば良い。抜けるような笑顔で、ヨミが「ただいま」と言えれば良い。そして彼らが安心して「おかれり」と迎えられるなら、それはハッピーエンドだ。

ロウはそれを、ただただ願うよ……。

「ヨミの笑顔はオレが代わりに守るわー！」

びっくりした。ヨミも驚いて足を止め、思わず振り返っていた。呆れたように笑むシランの隣。村の方を向いて仁王立ちしたシンがいた。

「だから笑顔で『行つてらっしゃい』って言つてあげてくれ。それがヨミの強さだからな！」

背中しか見えなくてもわかる。超笑顔なシンがいることが。だからロウはアハ、と破顔した。シンが居ればどんな不安だつて一瞬で吹き飛んでしまう。その隣にシランまでいたら百人力だ。ロウも心置きなく笑つていられる。

そうして一人で戦つていた、怖がりの癖に強がりな図書館の守護者は、第十六特区を旅立つた。世界中の人に起こしても足りず、地面の下の死者までびっくりして飛び起きてしまうんじゃないかつて言つほどの、特大の『行つてらっしゃい』を背にして。

「行つてきますー！」

共に旅する仲間と肩を並べて。

027 【メモリ】ついで名前【狼】（前書き）

一章最後の話はほのぼので行きます。

大体26話の3~4時間後の道中の話です。

ちょっぴり騒がしい彼らの旅を口ウ視点で見る第一十七話をどうぞ。

「アリ……観念して背負われる」

「あ、歩けまー！」

と言つた傍から何もないとこで躊躇^{ひまつ}へアリ。真つ白な髪が浮き上がり、本体に引っ張られて急降下する。それをシンが受け止めた。

「足が生まれたばつかのヤギみたいだな

「うう、すみません」

シロンとしたアリはようよひといひながら離れようとするが、シンが手を離さないので軽く磔状態^{ひきつけ}に。

「あ、あの、もう大丈夫です」

「大丈夫くなこよ。せっかくから何回転んでもとゆつてるんだ？」

「十回目ですか」

「胸張つて言つなよお

シンから呆れるアリの強情に、シランだけではなくスバルさん達も心配そうに見ている。しかし頑として自分で歩くと言こ張るアリ。だけどシンも結構頑固だ。シランに似て

「とにかくアリせむお休み。昨日頑張ったから疲れちやつたんだよ、な？」

「シン君離してぐだわこつ」

「やーだよー」

朝焼け色がいたずらにアリの田になっていた。シンはひょこっとア

ミを持ち上げた。まるで小わな子に『高い高い』でもするよつ。ミから器用にヨリミを背中に回すと、がっちりと上着の裾を握った。着膨れしてまるでくなつたヨリミは普通には背負えないサイズだ。でもそれだけでちゃんと固定されたよつでずり落ちる気配はない。ヨリミがもつ全身の血を集めたくらい顔を真つ赤つかにしている以外は問題はなさそうだ。

「シン君…」

「寝てていいんだぞ？ ヨリミにこんなに着ても軽いんだな。シラソとヨリミにヨリミに…」

「どういう意味だ？」

「もつと食えつてこと… 女の人より男の方が重いもんなんだろ？ 着膨れしたヨリミヨリミシランが軽いつて大丈夫か？」

シランはそんなシンの言葉に眉を寄せ、いつもの不機嫌顔で答えた。

「服の分を抜いて考えろ」

しかしシンはあっけらかんといつ答えた。

「だつてやうするとヨリミの体重がバレちゃ……あ」

「つまり私はシランさんより重いと言つことですね、服を抜いてもシランさん細いですし……気にしてませそ」

「ノーノーメン」

ちよつと地味にダメージを負つたのか、ヨリミがシンの背中にぐつたりともたれかかった。シンは慌ててフオローリしているが、何だか墓穴を掘っているようしか聞こえない。シンは自分のペースからみ出ると弱いなあ、とちよつと思つ。でもヨリミが精神的に弱つた

ので身体的には休めるだろ?.....どちらの方が良かつたかは、まあ、問わないことにする。

と、ゆつたりしたところで。

「セツニシテモアリハて名前、漢字はなんて書くの?」

ふと思いついた問いを口にすると、何故かシランとヨリが顔を見合せた。次いでシランとシンが見合せると、シンはちよつと申し訳なさそうにはにかんだ。

そんな何かの確認作業を終えたシランは、口ウに向き直ると書つた。

「口ウは、知らなかつたか」

「……知らないの口ウだけなんだな、そんなんだなシランへ」

落ち込む口ウ。まさかこんなところに仲間外れにされているとは。酷いや、酷いや。

「す、すみません、たまたま口ウ君がいない時に話してしまつて……じゃあ、今お話しますね」

「いいよ別に、口ウは仲間外れだもん、いいもん、ふて腐れてなんかないんだぞー」

やけつぱりになつて意味なく土を蹴り上げる。ヨリが困つてあわあわしている、と言つてもシンの背中の上でだけだけど。そしてその傍りでこんな会話が聴こえてきた。

「大体なんでお前は知つているんだ?」

「だつてたまたま話してる時に図書館に着いちゃつて、入りにくかつたからつい外からきこちやつたんだよ。ほら言つただろ? 土下

座のど、むぐつ

「言つな」

「ふは。手遅れだろー」

確かに手遅れだ。バツチリ聴こえるし。そつか、ヨリヒト下座しに行つてたのか、朝っぱらから。いろいろな意味で傍迷惑なシンの口を手で塞ぐという無駄な抵抗をしていたシランは小さく肩を落とした。

「もういい

「うして」機嫌斜めが一人になつた。因みにヨリヒトはもうさつきの体重の話は頭から吹き飛んだようで、とにかく慌てて、ひたすら謝りモードだ。そして一人無傷なシンは途方に暮れたように空を見て、唸つて、それから申し訳なさそうに言つた。

「悪かつたつて。あー、一人共、今度好きなもの作るからさ、なあ？」

「カレーだな？」

「カレーだぞ！」

「へ？ あ、うん」

ロウとシランは息もぴったりに言つた。そんな二人にきょとんとしたシンだが、『クンと快諾してくれた。それを見ると少し機嫌も上向きになつてくる。

「肉いっぱーいのだぞ！ 野菜も溶けそなぐらい煮込んで、ホクホクのご飯にこんもりかけて、はづく、最低でも大盛り五杯は行きたいなあ」

「そうなると炊き出し用の鍋が必要だな。俺の分がなくなる。具は

指定しても良いよなシン?」

「……現金だなあ、シリコンもロウも」

シンは呆れているが微笑ましそうな笑みを浮かべていた。密かにほつと/oriもいる。/oriとシリコンの注文を受けるシン。口も何だか今から楽しみになってしまった。

「早く食べたいな~」

「そんなに美味しいんですか? シン君のカレー」

oriが不思議そうに妙に浮き足立っている珍しいシリコンを見て訊いた。同じく浮き足立つての口ウガ満面の笑みで答える。

「カレーだけじゃなくて何でもおいしいぞ、シンの料理。たまに失敗するらしいけど、口ウはまだ当たったことないんだぞ」「凄いんですねシン君は。私もシン君のお料理食べてみたいです」

oriが羨望の眼差しをシンに向けていると、注文を受け終わったシンがにっこりと笑って言った。

「なら今度シリコンたちに来なよ。」とかやう、してもこいよなシリコン?

「ああ、問題ない」

「ありがとうございます。……で、どうりでお住まいですか?」

「あ……」

「…………」

「ロウ達はお互いに知らないことばっかだな。因みにロウ達は第八特区の第六守衛地区に住んでるぞ。鍛冶師の家はどこかつて訊けば直ぐわかる」

何だか気まずそうに顔を見合させたシンとシランの隣で説明をする口ウ。ミリはそんな二人の様子に困った顔をしていた。

「あの、知り合つたばかりですし、あんまり気にしなくていいと思いますよ。段々とわかつていけば良いことですし」

場を取り成すミリの言葉。しかしシンは納得が行かなかつたようで。

「モーはいかん！ ちゃんと、せめて好きなものくらいはわかつてないと！」

「親睦を深める必要はあるだらう」

とシランまで真顔でそんなことを語つ。今度顔を見合させたのはロウとミリだった。

「それにスバル達とも！ なんか空氣悪いし、もつと仲良くしようぜー」

「え、俺ら？」

とシンからスバルら三人衆にまで飛び火。確かに一緒に行動してはいるが、移動中はスバルらが前に、ロウ達が後ろにという一グループに分かれて歩く形になつてゐる。

しかし立場的にあまり仲良く出来る雰囲氣でもないけどなあ。案の定だけどシランがムスッとした顔になると語つにいくことをはつきり、むしろ堂々と言つた。

「それは必要ないだらう」

「それはそれで傷付くな……」

「リーダーは纖細なんです、あまりストレートにそういうこと語つ

のやめて貰えないツスか？」

「そうですそうです！ リーダーには見えないけど『割れ物注意』の文字があるんです、リーダーの心はガラス製なんですよー。」

「……お前らのせいでバラバラのぐちやぐちやだよ」

今度はスバルさんが落ち込んでしまった。仕舞いには地面にのの字を書きだす始末。いつの間にか皆の足が止まっていた。

結局平和的な話し合いの結果、スバル達は遠慮して、シラン、シン、ロウ、ヨミでの親睦会となつた。そういうことで漸く進行を開する。

「じゃあ言い出しつべのオレからな。えつと好きな物は温かい人と掃除とか洗濯、あとシランのつくつた刀だな」

「で、苦手なのは水だよなつ」

「別に、ちょっとくらいなら大丈夫なんだからな？ ちょっと人より……怖がりなだけだぞ？」

結構気にしていたのか、シンは頬を膨らまして不満げに付け足した。そんなシンがあかしくてヨミが思わずクスクスと笑うと、更にムツスーとした顔になってしまった。

しかしそんなお構い無しなシランが口を開くと、途端にそれが大分緩和される。やっぱり分かりやすいな、シンってば。

「俺は甘いものとシンのカレー、あとはまあ、刀が好きだな。読書もだ」

「あとお菓子作りはー？」

とシンが問うと、少し羞恥心があるのか、眉をひそめ、視線を下方に向けたシランがぼそぼそと答える。

「趣味、だな。金がかかるからあまりやらないうが……」

「趣味で刀造るよりは断然安いって」

苦笑されて不機嫌そうな黒い瞳でシンを見るシラン。そして刀造りも趣味で良いのかシン？ そんな二人に何だかいろいろと驚いたのか、目を丸くして固まるヨミがいた。

「刀を造るんですか？」

「鍛冶師だからな。本当は刀鍛冶を名乗りたいところだが……俺が新政府だかに誘われている理由がそれだ」

「そう、だつたんですね。でも多分欲しいのは金属を扱う腕なんでしょうね、刀造りではなく」

「だから余計に嫌なんだ。俺は刀を造りたいといふのに……皆が刀を使うなら、俺が好きなだけ造つても誰も文句を言わないだろうにな。刀の良さをわかつてない奴らばかりだ」

シランはなんだか子供のような文句を斜め下に吐き捨てるように言った。そんなシランに呆気に取られるマリ。大笑いするシン。口ここまでにやけて言った。

「無限に材料はないよシラン。それに鉄を刀ばっかりに使つたら、大事な防護壁とか家がつくれなくなっちゃうぞ」

しかしそれにびっくりな回答が返ってきた。シランは至つて真剣な顔で口を動かす。

「そもそも中央区の建物も木造にすればいいんだ。そして使わなくなつた鉄やらを俺に回してくれれば何も問題なく俺はずつと刀を

」

「あははは、シラン刀鍛冶スイッチ入つたなー」

「笑い事じやないぞ！ シラン何氣なく凄こじと、てか怖い」と言
い出したー！」

今なおぶつぶつと呪詛のよつな言葉を吐いてるシラン、怖い！
しかもいつも以上に無表情で妙な気迫まである。

「わわわ、ストップシラン！ そりだ、次は口ウの番だよな、な？
ねえシラン、いいか？」

「　の柱をシンに頼んで引っこ抜、あ？　ああ、それも、そりだ。
長くなつて悪かった、口ウ」

「あは、は、いいんだ、止めてくれるなり、な……」

最後に聞こえた台詞が不吉過ぎる。シラン、その『柱』は中央区
の大事な建造物のどれかから、じゃないよな？　そこにシンの名前
が出てくると洒落にならないんだぞ。とちゅうと戦々恐々していた
が、ミミもシランの半ば独り言のような呟きしき言葉が途切れたの
でほつとしたような顔で口ウを促した。

「じゃあ今度は口ウ君のお話を聞かせてください」

それどうやら口ウも落ち着けたので笑顔で応えた。

「住せるんだぞ。えっとな、口ウは住民名簿では観戸口ウって言
うんだぞ。シランからちゅうと借りたの」

そんなことを意氣揚々と言い放つと、ミミは驚いたとこりよつて
口に手を当てた。

「やうなんですか？」

「やうなんだぞ。名前しか覚えてなかつたからなつ。まあ、名字が

あつたかもわからないけど

「名前は、あつたんですね」

意外そうに相槌を打つヨミに首を傾げる。何だか引っ掛かる、妙な言い方だ。

「どうかしたか？」

「……口ウ君の血^{キメラ}紹介を中断させてしまふのですが、私の名前の話を先にしてもいいですか？」

きつと今口ウが気になつてゐるヨミの違和感の理由を話してくれんだらう。さつきはあのじやくなつてしまつたが、ずっと気になつっていた。だから口ウは頷くとヨミを促した。

ありがとう』『さ』します、と言つて話し始めるヨミは、小さくはにかんだ。傷痕を隠すように。でもあまり怯えの色は見えなかつた。

「私は生まれた時、製造番号^{キメラ}で呼ばれていました。でも私は人間と兎の子、まあ合成獣と言つた方が分かりやすいでしょうか？ その中でもイレギュラーだったの、特別な名前を与えられていたんですけど……嫌いだつたんです、私はそれが」「だから別の名前をつくつたのか？」

するとヨミは照れたよつにちょっと俯いて頬に手を添えた。

「泉さんがですね、番号で名乗つた私に言つたんです。『そんなものは名前じゃない』って

「泉さんってだれ？」

シンが遠慮なく質問を口にして首を傾げた。そんなシンにも笑顔でヨミは答える。

「あの図書館の館長さんです。夢見泉さんと言いまして、私を拾つてくださった、無愛想だけどても優しい方です。お年を召した方だつたので、数年前に亡くなってしましましたが、今も変わらず私の大切な人なんです」

「そつか……居なくなるのはきっとすんごい寂しいことだけど、今ヨミが笑えるのは、その人のおかげなんだな!」

「はい」

ふんわりと、本当に幸せそうに微笑むヨミ、シンの頬も緩んだ。

「そんな泉さんの言葉に背を押され、考えたんです。名字は泉さんの素敵な『夢見』を頂きましたが、下の名前は自分で決めるよう言われました」

「ヨミって名前にしたのは本を読むのが好きだったからだよね?」

「ええ。逆に言うと私にはそれしかありませんでしたから。でも、当時の私はとても心が弱い私で、名前に酷い意味をつけました。自傷に何の意味もないのはわかつていたはずなのに」

「それでも、置いてきた兄弟への罪悪感から逃げるにはそれしかなかつたんだ」

「……そう、私は逃げてばかりです。……て、私、ちゃんとその辺りのこと説明しましたっけ? 研究所から脱走したとか」

急に我に返つたヨミがきょとんとした顔で口元を見る。やば、と思わず口に手をやりそうになり、でも何とか意思の力で握り伏せると平静を装つた。

「……ほら、昨日ヨミ達が図書館飛び出す前にヨミとシシワン、言い争つてたでしょ? その時だぞ。ちょっとだったけどそれで何とかは事情わかつたぞ」

「あんな錯乱した支離滅裂な言葉でよくわかりましたねえ……そう、私は独りで研究所を脱走しました。贊同してくれる方が、逃げられる信じる方が、誰一人いなかつたから……」

肩を落とし、俯き、滝のように流れ落ちてくる罪悪感を背で受け止めるような覚悟を持つた背中だった。しかしががコミを背負い直すように揺らしたのでちょっとその悲壮感も薄れた。コミはびっくりしたのかシンの頭を凝視して、シンはコミに見えないけど背中を通して伝えるかのよつこシシ、と歯を見せて笑つた。

「コミは頑張ったよ。希望を捨てず、独りでも頑張ったんだ。独りで出来ることは少ないよ。それでもコミは勝つたんだ、研究所から逃げ切つたんだ。ならスゴいじゃん」

「……ふふ、そうですね。ありがとうございます」

コミは本当に嬉しそうに言った。シンの背中に顔を埋めて、微かに見える口端も笑みの形にして。ちょっととシンの言葉に報われたかなと思つ。コミの背負つものは重すぎる。しかもそれにコミの想いまで乗るから、コミ自身の重さで潰れてしまつんじゃないかと思つた。

でも、きっとコミは大丈夫だ。独りじゃなければ大丈夫。シンの言つ通りだ、コミは強い。

「……それにお前の言葉を信じなかつた馬鹿な奴らが悪い。何を罪悪に感じる必要がある」

空気が凍りついた氣がした。シラン、相変わらず凄いことやつづと叫つた。しかしコミは笑つた。シランのふて腐れたみたいな言い方があしかつたのもあるだろ。

「でもね、勇氣と無謀で分けるなら、私の選択は圧倒的に無謀寄りだつたんですよ。馬鹿なのは私だつたんです。でも奇跡が私を救つてくれたからいいでござつして、お喋り出来るんです」

顔を上げたヨリは、そんな時間を、事実をいとおしむように目を細めた。夕焼け色の瞳は温かな思いを湛えるようで、とても優しい色をしていた。

「で結局名前の話から脱線してるな？」

「あ、そうでした、『めんなさ』ロウ君」

「ううん。ヨリのじと、いっぱい聞けて嬉しかつたから良いよ」

本当にそう思つ。ロウが満足げに微笑むと、ヨリもほつとしたようになんだ。

「では脱線しないように單刀直入に言いますと、私の名前は黄色い泉と書くんですね」

困つたようなはにかみ笑いを浮かべ、眉尻を落としてヨリは言った。対してロウは呆けた顔をした。漢字だけは知らなかつた。きっと『読』とかそういう単純な名前ではないことは何となく察していたけど……『黄泉』。

「死者の国、かあ」

「ええ。最初は自分への戒めでした。たくさんの兄弟が生み出されて、殺される中、私だけが幸福だなんて許せなかつた。でも助けに戻ることも出来ない臆病者な私は……自分を苦しめて許された気になりたかつただけ」

唇を噛み、切なそうに手を伏せてヨリは言つた。

「それでも生きたいと思えたのは泉さんが居てくれたからで、恩人を悲しませるようなことはしたくないと考える内に少しづつ私の考えは変わりました」

ゆつくりと目線を上げたヨリは、ロウを真っ直ぐに見詰めてから。

「生きてるだけじゃ何も償えない。だからと言つて全てを忘れたり、常に自分を責めて生きるのは間違っています。だから、新しい意味を自分の名前に『えました』

シランに微笑んだ。シランは仏頂面の口元をほんの少し笑みの形にして頷く。それに勇氣を貰つたヨリは、胸を張つて言い放つた。

「死を忘れず、過去を恐れず、日々強く、力一杯に生き続ける。彼らに胸を張つて向き合つたために、私はそうして行きたいんです。戒めの意味合いはまだありますけど、でも、もつ自傷のための名前じゃないんです。それにたまたまですが泉さんからもう一字貰つた形になつてしましましたからね。大事な大事な、私の名前であり、泉さんの形見なんです」

「とっても良い名前だな、ヨリ」

「ありがとうございます、ロウ君。シランさんもそう言つてくれて……やつと自信を持つて名乗れるよになれそうです」

ほんわかとした空氣。しかしシランはどうも空氣が読めない気があるようで、いつも不機嫌な顔で淡々と言つた。

「それで。この話を先にした理由は『何故ロウは名前を持っている

のか』か?」

「あはい! そうなんです。特異ケースなら別に命名される場合もありますが、大抵の研究所では番号で管理しているはずなんですね。口ウ君の体にはナンバーは入っていないんですか?」

「なんばー?」

「数字だ。しかし……傷があるだけでそんなものはなかつたが

シランがそう答えると、『三は考え込んでしまつた。そんなに妙なことなのかなと思つ。

「……もしかしたら火傷の痕にあつたのかもしないが」

「火傷? 口ウ怪我してんのか?」

急にシンが心配そうに口ウを見てくるが、口ウは静かに首を左右に振つた。

「ただの傷痕だぞ。ほら」

とシャツの袖をまくつて見せる。右の肘から手首辺りまで、少し赤く爛れたような痕があつた。しかしそれは微かなもので、どうにほどんど治つている。それを見たシンも安心したようだ、良かつたーと呟いていた。

「……もしかしたら上から傷が出来て治癒したから消えてしまったのかも知れませんね」

「因みにナンバーがあると何がわかるんだ?」

「出身の研究所が大体わかつたはずです。その研究所のデータがあれば番号で誰が卵子提供者だとがわかります。でもはつきり言つて、どこの研究所でも不注意に近付くのは危険です……でも記憶の手掛かりにはなつたかもしません」

その言葉に、シランは歯噛みした。でもロウはわからない。思い出したいのか、そうでないのか。

シンとシランと住む理由の一つに記憶を取り戻すことは一応ある。でも微かに残る記憶の残さは、思い出しても酷く辛く苦しく悲しく、ただ虚しいだけだと伝える。

そして大切な人を守れなかつたと。それだけは痛い程魂に刻まれている。それが誰なのか全く思い出せないというのに。どうして忘れてしまつたのだろう。逃げたかつたのか。でも実際逃げたい。見え隠れする過去は恐怖を助長するだけ。

「ロウ、大丈夫か？」

「……え？」

いつの間にか足が止まつていたらしい。心配そうにシンがロウの顔を覗き込んでいた。ロウは慌てて魂が抜けたような顔から笑顔に切り替える。

「ごめんなさい。ちょっと考え方してた」

「顔色悪いって。ロウも運ぼうか？」

「川ミミを背負つた上にどうやってロウを運ぶつもりだ？」

「……抱っこ？」

呆れたシランが責めるような視線を送ると、シンは誤魔化すように笑つてロウの頭をポンポンと撫でた。

「大丈夫か？」

本当は大丈夫と即答したかった。でもさつきの考えが、不安がなかなか離れなかつた。

そのせいで返事が遅れてしまったから、今から大丈夫と言つても明らかに嘘になつてしまつ。どうしようかと困つたようにシンを見上げると、朝焼け色と並んで夕焼け色の瞳とぶつかった。そしてそこにはいたずらっ子のような誘いがあつて。

口ウはそんなワリに乗つかつて開き直ることにした。

「口ウあんまり大丈夫じゃないんだぞお、シンへ」

「ええつ！ ジヤあどうすれば大丈夫になる？ 何かオレに出来ることあるか？」

すると待つてましたとばかりに口ウは両手をシンに伸ばして、満面の笑顔でこいつ答えた。

「抱つ」

隣でシランがずつこけた。シンは呆気に取られていたが、直ぐにくしゃつと笑つた。

「いーよ、甘えん坊さん」

軽々とシンに持ち上げられ、抱き抱えられるワリと顔が近かつた。田が合つと二人揃つてえへへ、とにやける。

「シリヤンもやる？」

「誰がやるか！」

真つ赤になつたシランが面白くて、皆でこいつぱい笑いました。

028 椿に捧ぐ詩を【紫蘭】（前書き）

その笑顔のために。

共に在るためには。

ただそれだけを願つた兎の詩。

第三章に突入です。シラン語りの第二十八話をどうぞ。

森を抜けて現れたのは、簡素な一メートル程の柵だ。検問所と思われる小さな建物が柵の間に小ぢんまりと置かれていた。その向こうには大小様々な木造の建物が建ち並んでいるが、勝手口が見えるだけで人影はなかつた。

「(二)外縁部、なのか？」

「いや、(二)が入り口だろうから、第八特区で言う防護壁だろうな」

第八特区は五つの区域に分かれているが、特に守衛区を外縁部、中央区や農業区のある内側を内縁部と呼ぶ。それを区切る明確な境界線が防護壁という巨大な壁で、最終防衛ラインだとされている。言つておくと、この柵なんて田じやない。十メートル以上あるような壁だ。だからシンが外縁部と特区外の境界にある柵とを勘違いするのもわからなくもない。

「……あのお、第八特区と比べないでくれます？ あそこに勝てるところがそうあると思つか？」

「思わないな」と俺。

「確かにあんまりうちんとこみたいなところはないなあ」とシン。

「後ろに同じー」とシンの後ろにいた口ウは簡単な賛同をしただけだった。

口ウは行つたことがないのでわからないらしく、眉を落として小さく首を傾けるに留めた。昂さんは俺たちの返答に頭が痛いとばかりにため息を吐く。

「あそこはもう頭がおかしいんじゃないかつて程の理想主義の現実

主義者が創った都市だからな。しかもそれが未だに設立者の意志の下に運営が成り立っているつていう事実が本当に化物染みてるよ、あんたらの初代はよ」

「素晴らしいと同時に現実的な説得力を持つ理想だったからこそ、今でも皆努力し、理想を掲げ続けているだけだ。頭はおかしくないし、初代は化物ではない」

そう言つて俺は容赦なく昴さんを睨み付けた。引きついた顔で謝罪をする昴さんに、じそじそと後ろで囁く部下一人。「うやつたかつたのでついでにせちらも睨むと丸太さんは困ったように頭を下げ、閑歌さんは二二二二と手を振ってきた。

「シズカって神経図太いな。怒ったシランに手を振るなんてぞ」「そういう人みたいだからなあ。怖いもの知らずとは逆な感じだぞつ」

隣とその後ろまで「そ」と内緒話だ。思わず顔をしかめると、まるでそれが見えているかのようなタイミングで後ろを歩くヨミがクスクスと笑い出す。

「シランさんは怖くなんかないですよ？ ちょっと表情が固いだけです」

「悪かったな、仏頂面で」

「怒つてますか？ シランさんの素敵なチャームポイントじゃないですか、不器用さが滲み出ているその顔も」

それもまた答え難く、俺は眉を潜めた。チャームポイントつてなんだ、チャームポイントとは。

「……笑うな、シン」

「だつて、だつてよ、チャームつ、あははは、くふふつ」

しかも何故かシンが笑い出す。わかっているや、そもそも俺に『チャーム』となる点がない。笑われても否定出来やしない。ふん、とふて腐れたようにそっぽを向く俺。それが余計おかしかったのか、ミミは笑いを堪えきれていなかつた。

「ふふふ、シン君シン君。誤解がないように書つておきますとね、『チャーム』とは魅力という意味なんですよ。別に可愛いところだけに対してもうものでもなこと、思うのですよ」

「え、そうなのか？ ミミは物知りだなー。でもシンの魅力……
ふつ」

「笑うなど何度言えば良いんだ」

シンとミミはやつした俺はもう前だけを見るこじとした。しかし真っ先に目に入ったのは昂さんのすがるような視線。

「……まだ、気にしていたのか？ 怒らせたことを」

「え？ あ、いやいや、あはは、んな訳ねえですよ、俺はこれでも年長者だからな、そんなお客様だからってそんな反応窺つてびくびく行動するなんて、そんな訳ありませんよー」

「酷く目が泳いでいる上に、発言もかなり乱れているが？」

昂さんの拳動不審ぶりに半眼になる俺だったが、その隣で。

「ワーダーつたらあんなにおどおどしゃつて可憐ですー」

と変な嗜好を持つた女性が至福の笑みを浮かべていたので、何だかどうでも良くなりため息を吐き捨てる前進を提案したのだつた。

「はあ！？ ちょっと待つてくれよ、そんな話は聞いていない！」

昂さんが怒りに任せてダン、と机を叩く。しかしどいつも思つたより痛かつたようで、手をブンブンと振つていた。相変わらず何となく締まらない人だ。

そんな昂さんと対峙するのは、丸太さんとサイズ以外はお揃いな若草色の制服を着ている細身の若い男だ。胸には『片桐』と書かれた名札がぶら下がつっていた。

男、片桐さんは困つたように眉尻を落とすと、落ち着いた調子で昂さんを諭すように言つた。

「しかし部隊長には次の仕事があるので至急やひりへ行くことの指令書が」

「ボスは鬼かあ……」

新日本政府自治区。その境界の柵に挟まるよつとしてあつた詰所に來ていた。ここぞ手続きをすれば直ぐに本拠地に着くらしいが、何やら揉めている模様。苛々と机を鬱陶しく叩く昂さんを俺達は後ろの方から黙つて見ていた。

「じゃあ丸太、紫蘭殿らを」

「えーとですね、補佐を残すよつにとのお達しが……あります」「あーもー、閑歌！ 絶対紫蘭殿とヨミさん不利になるよつなことはするなさせむな！ いいな、頼んだぞ！」

今にも地団駄を踏みだしてしまひそうな昂さんの叫びに、どけ吹

く風な閑歌さんはのんびりと「では今度甘蜜堂のババロア奢つてくださいね?」なんてことを言つて微笑んでいた。昴さんは信用していいか不安に思つたようで、しばらく視線を上方に彷徨わせていたが、やがて諦念混じりに嘆息した。

「わかつたよ。おい丸太行くぞ。……すみません、ここまで連れてきた責任は俺が持たなきやいけなかつたのに……」

昴さんが申し訳なさそう振り返つて頭を下げた。それにいち早く反応したのはシンだつた。

「だいじょーぶつ、シランにはオレがついてるからな! それにシランは別にスバルが来てくれつて言つたから来たんじゃなくて、自分の意志で行つてみたいと思えたから來たんだから、そんなに責任感じなくていいと思うよ」

それは『昴さんは全く関係ない』と言つてゐるわけで『無関係なのに責任感じてるの?』のようにも取れて……とにかく無邪気に結構グサリと来ることを言つてゐるな、シンは。昴さんも同じことを思つたのか、胸を押さえていた。シンには理解不能な行動だつたようで首を傾げている。

続けてロウがぴょんと跳ねるように昴さんの前へ進み出た。ロウだつて察しているだらうからフォローの言葉だらう、とそれを横目で追つた。

ロウは太陽の笑顔を見せると口を開く。

「大丈夫だぞつ。他に仕事があるなら仕方ないし、スバルさん達を頼るつもりは全然ないから安心していいぞ!」

……ただの追い討ちだつた。

昴さんはもう何も言わず、哀愁漂う丸まつた背中を向けて出て行つてしまつた。丸太さんは引きつた愛想笑いを顔面に張り付けて会釈だけすると昴さんを追い掛けていった。

凍り付く部屋の空氣。理由が今一わかつてないのが一名。わかつていて尚呑氣な笑みを浮かべているのが一名。俺は片桐さんと田を合わせ、渴いた笑い声を溢すのだった。

検問所を出た先にあつたのは市場だつた。大人四人程度なら悠々と寝転べそうな幅の広い道を挟み、様々な店が並んでいる。天幕を張つて店を開いている者がいれば、ただ風呂敷を広げただけのような店まであつた。

「ここが南市通りです。入口の方は主に露店、奥は自治区に住む方々の住居兼店舗となつていてものが多いですね」

誰に頼まれたでもなく勝手に閑歌さんが解説を口にする。

しかし口ウはあまり興味なさそうに、それどころか縮こまるようにして俺の後ろを歩いていた。俺を守ると息巻いていたシンですらちょっと不安そうに忙しなく視線を動かす。人が多いせいだろう。しかもここは特区と違い知り合いが全くいない。挟み撃ちされてると思つていそうだ。

斜め後ろへ目を向けてみると、これまた違つた反応のヨミがいた。やっぱり忙しなくキヨロキヨロとしているのだが、その赤目は輝き、時たま足が止まり食い入るように陳列物を凝視していた。

俺はそんな姿に目をしばたかせる。

「何か気になるものがあるのか？」

何気ない問い掛けだった。しかし予想に反した食い付きの良さを見せたヨミは、獲物を見付けた肉食獣のような勢いで俺に迫る。

「はいはいはい！」

「な、なんだ？」

パタパタと振られる尻尾を幻視する程嬉しそうに顔を綻ばせると、ヨミはあちこちを指差し始めた。

「あれとこれとあちらにありました丸い物とそちらと、あ、あとあと、あの良い匂いがするものと…」

「待てヨミ、そんなに言われても俺は把握しかねる」

「ふはー、す、すみません、つい興奮してしまいましたっ。反省です」

我に返ったヨミが途端に真っ赤になる。頬に手をあて、あたふたあたふた。

「お気に召した物がありましたか？ 少し戻りましょうか、買いたいものがありましたら言つてくださいまつますよ」

話を聞いていた閑歌さんが微笑と共に問うと、ヨミは慌てて手を振る。両手を突き出してぶんぶんと。

「い、いえ、買つむ金もないので見るだけです。お気になさいや…

…」

恥ずかしそうに、口ウ達のようにヨミまで縮こまってしまいます。俺

は顎に手をやると黙考。遠慮の塊になつても気になるものは気になつてしまつよつで、そわそわと田を行つたり来たりさせてくるヨミが視界の隅に映り、迷つのはやめることにした。

「ヨミ、程々の値段のものなら買つてやる。それに様々なものに興味を持つのは悪いことではないんだから、そつ恐縮するな」

「ほほほ本当ですか！」

耳のよつこ跳ねた癖毛を揺らし、グッと拳を握り締めたヨミが瞳に再び輝きを宿して俺に詰め寄つた。どうして良いかわからず顔を背けると、思わず不機嫌そうな声が飛び出す。

「嘘は言わん」

しかしテンションが急上昇中のヨミにとっては些細なことだったのか、満面の笑みを顔に広げると雪のよつな肌を赤く染め、「ありがとうござりますー」と呟ぎながら俺の手を掴んだ。今にも一緒に踊りましょうとか言い出しそうな舞い上がりぶりだが、流石に分別はあつたようで俺の手を三度程力強く振るとパッと放し、一人で万歳をしていた。怪しい。

「ヨミのひとだし遠慮するかと思つたけど、杞憂だったね

とロウが囁くよつて言つた。まるでヨミが断つたらビリの説得するかを考えていたかのような物言いだ。

「それは俺がこいつ提案すると予測していたといつとか？」

俺が眉を潜めて問うと、ロウは「さうどうでしょ」「と誤魔化すように言つて小さく笑つた。納得が行かなかつたが、隣を歩くシン

が。

「やっぱりシランは優しいな

「へらと笑つて何だか嬉しそうに言い出したので更に眉間に力が入る。どうしてこいつらはそういうことに繋げるのか。

俺が嘆息していると、肩をつつかれた。さつきから俺は何度振り返っているんだと思いながらも素直に後ろを見ると、ヨミがもうべくにやぐにやな浮かれ顔をして立っていた。

「あのですね~、さつき通り過ぎたものが……欲しいんです」「わかった。わかったからその顔、何とか出来ないのか?」

「うん、さつきから直そうとしているんですが無理みたいですよ~。暫くは我慢してくださいシランさん」

締まりのない笑顔のヨミ。完璧なアホ面だ。でも図書館で初めて会った時よりも全然いい顔をしている。生き生きとした、今を楽しんでいる表情。そのためなら金は勿体無いと思わないし、まあ、アホ面でも良いだろう。

「少し待つていってくれないか? 直ぐに戻る

三人は快諾し、俺はヨミを伴って来た道を戻ることにした。

「にしても人が多いな

「ですね~。政府自治区という扱いになつていてる街も割と多いようですし、安定した、信頼性のある場所なので人が集まりやすいんでしょうね~

「そうなのか

「そうなのです~

くにやつとした笑顔で応えるミリは悪いが、ロウヤシンに次ぐ人混みを苦手とする人間なのでつい不機嫌そうになってしまつ。早く済ませようと早足になると、急にぐいっとミリに腕を引かれる。

「シリーンさん通り過ぎてしまします。これなんですか？」

「ああ悪い。これ……これが」

ミリが指をピンと伸ばして示したのはぬいぐるみだつた。カラフルな……いやもう毒々しいの域に入つてゐる、やたら色の種類の多い人形だ。ゾウ、だらうか。大き過ぎる耳が体の大半を覆つてしまい、耳の合間から覗く黒い目が正直怖い。しかも継ぎ接ぎだらけで歪だ。だからグラデーションがおかしなバランスになつて毒々しく感じるのだらう。

しかしミリが元氣よくいつ評した。

「虹色で可愛いウサギです！」
「ウサギ、か……」

しかも可愛いこと……駄目だ、わからない。ミリの可愛いこと判断する根拠がまずわからない。怪物と呼んでも間違いにならなそうだといつのに。

「……他は」「はい?」「他にまと 欲しいものは、ないのか?」「ありますけど……どうしてですか?」

他にまともなものはないのか、と訊くのは流石にまずいだろうな、とは思つた。……しかし本人が満足ならこのぬいぐるみで良いので

は……しかし。

そんな堂々巡りをしている傍ら、ヨリは首を傾げ何やら思案する素振り。そして。

「そうですね、わざわざシランさんにお金を出して貰うんですもんね。わかりました。実用的なものにします！」

と宣言するとまた俺の腕を取り、ぐいぐいと引っ張った。抵抗する理由も、抵抗する余地もなかつたので大人しく連行されていく。少しだごちゃごちゃした思いはあつたが。

次に連れて行かれたのは馬車を店代わりにしたところだった。積み降ろしの口に物を並べ、その脇に初老の店主が座布団を敷いて座り込んでいた。置かれた商品は大体が小さな箱の形をしていたが、たまに人形や剥き出しの機械も並んでいる。

「オルゴール、か？」

「ですよねですね！　はあ、实物初めて見ました！」

「ひとつひとつ、細かな細工がされた木箱やオルゴール本体を眺めるヨリ。実用的かと疑問に思つが、夢中なヨリに無粋な言葉は言えず沈黙する。

座布団の上でひとつとしていた無用心な店主が目を開いた。白くなつた眉を重たげに押し上げると、オルゴールに夢中なヨリに目をやり、立っているだけの俺を見る。

「なんだい、何台か欲しいんかい？」

「……一台、だが」

「ケツ、ツツヨミも出来んただの馬鹿正直木偶の坊かいな。ヘドが出るわ」

何故かボロクソ言われた。店主は本氣で侮蔑の目をしているようだつた。確かに詰まらない返答だつたが、何故初対面の相手から笑いを求められなきやならない。何か言い返そつと口を開く前にヨリノハラ山にてヨリノハラ山にて

がぴこんと跳ねるように立ち上がつた。

その時ちょうど俺の真後ろでも足音が止まつた。そして誰かがひよいと顔を覗かせてヨリノハラ山にて同時に喋り出す。

「喧嘩は良くないのです！」

「喧嘩はあかんで～」

前後から挟まれた俺は呆気に取られた。誰だヨリノハラ山にて微妙にヨリノハラ山にて

ツトしたのは？

「あら～り、余計なお世話だつたっぽいね。すまんなー」

全く謝罪する気のない謝罪の言葉を口にしながら背後の人物が並び立つ。

シンより背が低く、俺よりは悠久高い。茶色のふんわりとした髪を後ろで長い一本の三編みにしている女だ。細くつり上がつた狐目の奥は悪戯好きそうな光が隠す気もなく灯つていて見えた。

枯れ葉色のコートの下に、薄桃色のセーターが覗く。頭にはアルファベットが模されたキャップ。何だかちぐはぐな、妙な人だと思つた。年は多分俺より少し上程度だろう。

「何や揉めどる雰囲気やと思つたけどちやうんか？」

「こんなワラジムシ兄ちゃんと揉めるわけねえやろ。嬢ちゃん頭大丈夫かいな」

「あつははは、ワラジムシなー、お密さんこそりやないわ爺ちゃん。そんなんだから物が良くても卖れないんだよー」

「あほ抜かせ。客の見る目がないだけや。嬢ちゃんの余計なお世話

はこりんちゅうひしゆやれ

腕を組み、尊大な態度で三編み女を鼻で笑う店主。だが女は一切気にしていないようで今もケラケラ笑っていた。そんな二人を見ているだけの俺の横。

「ミミ、笑い上戸なのか？」

「だつてシラソさんがワラジム つぶ」

「……はあ」

ミミにまで笑われると流石に無視出来なくなつてくる『ワラジムシ』発言。深々とため息を吐き出していたらいきなり背中をバシリシと叩かれた。

「まあまあ、そう落ち込まんといてえな兄ちゃん。爺ちゃんの粋なジョークや、笑つとけ笑つとけ。本氣にしたら負けやで？」

「……痛いのだが」

「あはは、悪い悪い。そいやな、兄ちゃん細つこいもんな。力加減間違えてもうた。すまへんな」

もう俺は完全に沈黙した。細つこい……まあ自覚している。しかし割とスレンダーな女性にまで言わるとショックが大きいのだが。しかしあはり三編み女は頓着しない。今度はヨミに顔を向けた。

「そや、何か欲しかつたんやないの？ どないなオルゴール探してんや？ ここ店長は性格悪いけど、腕はええし種類はあるで～」

「性格は余計や」

ぼそりと抗議の声が上がったが、女は聞いちやいなかつた。耳が良いはずのミミまで華麗にスルーすると、頬を赤らめ、手をバタバ

タセセヒザヒちなく口を開く。

「あ、あのですね、これが欲しいというのは……実はないのです。でも本で見て実物見てみたいな、聴いてみたいなって、憧れていたんです！」

えへへ、と照れ臭そうに笑うヨミ。かわええなあ、と何故かでれしてこる三編み女。もしさ危ないやつなのか、と一応警戒する。

「そいやな、小さいのが良いかねえ。大きいのは高張るし、馬鹿みたいな値段やから」

「あ、因みに小さいものはいくらなんですか？」

すると三編み女はにたー、と怪しげな笑みを浮かべるとおどけたよつて。

「ありや聞く？　聞いたらやう？」

「訊いてはいけないことだつたのですか？」

「いんや、訊いても大丈夫やで。ただ買えなくなつちゃうかもなあ。

それは嫌やろ？」

「やです、けど……」

「なら黙つとくが吉やでー。な、兄ちゃん？」

「…………そつか」

何となく読めた。相当高いのだろう、オルゴールというものは。

ヨミが冷や水を浴びたように我に返つて遠慮を思い出してしまつてか何故俺が金を出すことを知つているような口振りなんだ？

いぶかしげな視線を送るがどこ吹く風。女は上機嫌にヨミを見て、あの曲好きそうやな、あれが似合つんやないか、と提案しては老店主に持つて来させていた。人使いが荒いやつだ、と呆れて見ていた

が、店主も嫌々といつ雰囲気はない。さつと三三が本当にオルゴールを楽しんでいるからだろ。職人冥利に酒がある、ところのわくわくする気がする。

そんな感じにしてぱらりと取つ替え引っ張り替えやつてみると、とつとつ「ならとつておき見せたるで！」と店主が言い出した。三三を相当気に入つたようで、馬車の奥の梱包の山の更に奥。何だか大規模な発掘作業の末、店主は田町の『とつておき』を掘り出すと自慢げにそれを三三の手にちゃんと置いた。

「わしが作ったもんやないけどな、かなりの上物や。爺さんから貰つたがまだまだ死なん、『じつづもんよ』

それは手のひら大の、塔のような形をした箱の上に青い鬼が座つたオルゴールだった。脇にネジがある。促されるまま三三が丁寧に巻くと、奇妙な曲が流れ出した。俺に音楽はわからないが、しかしリズムがでたらめじやないかと思つた。

「壊れていなか？」

「いや、壊れどらん。確かに三拍子四拍子、三拍子三拍子、かと思えば一拍子と、聞き慣れるとおかしく聴こえちまつかもしけんけどな、これがこいつの歌や」

ふん、と腕を組んで睨む店主。一方三三は惚れ惚れとした表情で聞き入つていたが、隣で三三の手を覗き込んでいた三編み女は何か引っ掛けたようになふると。

「爺ちゃん、これ曲になつとるん？なんか伴奏だけ、てな風に聴こえるんやけど」

「や。相変わらず鋭いの、嬢ちゃん」

「やつ、と愉しげに笑つて応えた店主は、動きを止めた兎のオルゴールを手に取り、語り出した。

「「じこつはな、」で一つの曲を奏でるオルゴールなんや。曲名は『蒼い兎と玄い兎の詩』。蒼が伴奏、玄が旋律だと伝わつちよる。それ以外は全くわからんがな」

「たつた一人、メロディを歌える相手を待ち続けとる兎、なあ……ロマンチックやんか。ええやん、これにしたらどうや？」

三編み女がミミの肩をぽんと叩く。ミミは迷つていつのうだつた。目線は兎のオルゴールに釘付けなため、ミミが気に入つたことは誰の目に明らかなつたが、恐らく私なんかが持つていいものなのか、とかどうじちやじちや考えていふよりうだ。しかし俺は別のところが気になつたいた。

「爺さん、」これは売り物なのか？」

『とひつおき』だ。それに話を聴く限り一つしかないのだうつ。大事そうな物だし、果たして売る氣があるのか。

「なに辛氣臭い顔しとるんや。売ぬ気はあらへんど」

「や、そりですよね、あはは」

それを聞いた途端にミミはしゃん、と頃垂れて空笑いしだす。どうしたものとか思つていたら「ちやうぢやつ、けやつでお嬢さん」と店主が言つので一人拗つて首を傾げた。

「お金貰ひ氣はあらへんつう」とや。やる。貰つてくれ

「つえええ！ い、いいんですか？」

「ええ、ええ。貰つてくれるやつ搜してたといや。」「ひつ氣に入

つてくれたよつやこ、男に「畜生ねえー。」

田を真ん丸にして驚く三上。皿に切った店主は、さすが店長男前と三編み女が離す。

何だかよくわからない内に三上は蒼い兔のオルゴールを手に入れたのだった。

「はあ～、良かつたんでしきうか?」

「ええんやええんや。店長の言質も取つてゐしなつ」

何度そのやり取りをする気だ、と尋ねたくなる程繰り返された問答にけりよつとうんざりする。しかも親切なんだかただの物臭なのか、三上寧にも三編み女が全く同じ台詞を返すのだからもう頭が痛くなる。そもそも、だ。

「お前、いつまでついて来る気だ?」

「おやおや～、お邪魔虫やつたかな、うちは

「……別にそういう訳ではないが」

「なら暫くはあるで～。なんてつたつてこんな可憐い子があるんやもん。親しくならんと嘘やでえ」

上機嫌に三上の隣を歩く女はにへらと相好を崩した。女のはずだが……なんか無性に親父臭いのは何故だ？

「そや、まだ名乗つとらんかったな！ つか、さかきばりやま榎原陽ひづるさんや。よろしくー

ぱたぱたと手を振る動作付きでやつと自己紹介してきた限りなく怪しい謎の三編み女、改め榎原は、やけくそへらと笑っていた。しかし挨拶されたら返すが礼儀。渋々といった感じで俺も名乗る。

「観月紫蘭だ。第八特区から来た」

「私は夢見黄泉と申します」

ペコリと丁寧に頭を下げるミミとは大違ひだつたが自己紹介は済ませたので俺は視線を彷徨わせ、目的のものを探し出した。

「ほつほつ、ミミちゃんにシラン君やね。うそつこ。で、シランは何探してさるん?」

……何故フルネームで名乗ったにも拘わらずいきなり下の名前で更に『君』付けで呼んでおきながら次の瞬間で呼び捨てになる。

「あれ、何か気に障つた? もののいつ仮面なんやけど」

「……、……」

「あ、無視決めたやろー。全く意地悪でツンテレなんだからしうがないねえシランは」

「……誰がツンテレだ」

つい言ひ返すと、勝ち誇つたよつた顔で指を差された。

「意味知つてゐんや。あはは、おもひ。やつぱりシランテレなんやなシランは」

とりあえず無視することにする。顔を背け、榎原の言葉は左から右へと受け流すことにして、目だけ探し物続行だ。

そしてやつと見つけた。一応確認のため、ミミの手を掴むと「ちよつと」と店先まで連れていく。

「これ、まだ欲しいか?」

「あわわわって、はー？　あ、はー！　欲しいですか、ナビ？」

混乱してこんなアリ。だが欲しいの日本車の好みなので、ナビで店番をしていた子供に買いつ意思を伝えた。

「まごどーー」

高くよく通る少年の声に腰を押され、再び通りを歩き出す。呆けた顔のアリの腕には鬼のぬこぐみがあった。

「やねやん彼氏だよ」

榎原のおかゆくのよつな仕事。

俺とアリは息もぴつたりに立んだ。

「付合つてない！」

029 天邪鬼な彼女と【真】（前書き）

だれかが本当の笑顔で代わりに笑ってくれるはずだから。自分は今日も道化でいよう。偽物な笑顔の仮面を被ろう。素直になれない怖がりな彼女と一緒に、二十九話をどうぞ。

029 天邪鬼な彼女と【真】

灰色の空の下、流れしていく人の波。

喧せ返るような様々な匂いに音に揺れる空気に、景色が歪んでいるかのように錯覚させられる。そんな途方もない数の生き物がひたすら右往左往する通りは呼吸すら難しく思えた。

シランとヨミを待つオレ達は南市通りを横切る道へと避難し、建物に張り付くように座り込んでいた。

「はいどうさんやん」

「ありがとお」

陶器のコップを受け取る。中身はうっすらと黄色が透けた水だった。水面を舐めてみると甘い。あとちょっとぴり酸っぱかった。

「レモンジュースですよ」

もう一方に持ったコップをオレの隣で脱力した口ウにも差し出しながら、シズカが教えてくれた。ふうん、と何気なくまた液体を口に含むとすつきりとした甘味が広がり、ちょっと落ち着いた。口ウもコップを小さな両の手で包み、ちびちびと飲みだす。

「あ」

「どうかしましたか？」

「お金。いくらだった？」

ふと思い出してジュース代を尋ねると、何故かシズカは目元を和ませ、ゆつたりと押し留めるように言った。

「これくらい奢りますよ」

「でも」

「いいんです。それに、子供は大人に甘えるものですよ?」

キヨトン、とした。

瞬きをして、また瞬きをパチパチと繰り返す。逆にシズカがそんなオレを不思議そうに見ていた。

「私、何かおかしなこと言いましたか?」

「や、その……はじめて子供扱いされたかも。あ、でもハンダも子供扱いしてくるか……むう」

でもここまでストレートに言われたのは初めてかもしぬなかつた。実年齢はオレだつて知らないが、見た目だけなら十八とか二十くらいに見えるらしい。だから滅多に子供と認識する人はいない。まあどれもこれも過保護な知り合いばかりなので、いろいろ言われて來たが、それについては年はそこまで関係なかつたと思つ。とにかく……なんか、いつもと違う感じ。

「……意外だね。シズカさんつて結構子供好きなんだ」

隣で背中を丸めて黙々と飲んでいたロウがぽつりと言つた。シズカが切れ長の瞳をすっと口ウへ向けた。

「つて、それじゃオレが子供みたいじゃん! ロウまでオレを子供扱いすんのかよ」

すると直ぐ様シズカがまたオレを見て、ロウまでこっちに顔を向けると、二人は神妙な表情で頷いてみせた。変なところで無駄に息ぴったりだなんたら。

「だつてシンの精神年齢はさうとさういいく低いもの」
「ロウさんと違つてシンさんは割と供っぽくて可愛いですね。
あ、シンくんとお呼びしても？」
「ぐはっ」

ひでえ。しかもシズカは超真面目。こんな時に笑顔引っ込めて真
顔になんないでおくれよ。

「ふふ、『冗談です。本当、可愛げのない誰かさんは大違いですね
「あはは、ロウに喧嘩売つてゐなら買つちゃうぞ？ シズカさんつ
てやつぱり性格悪いなつ
「ロウさんに言われる程ではないですよ？」

空気がピリピリと肌に突き刺さるやつ。なんでこの二人はこんな
に喧嘩腰なんだ？ 仲悪かったのか？

でも確かにこの二人が一人きりで話しているところはあまり見た
ことがないかもしれない。と言つたが、なるべく離れたところに居た
ような気もする。

どうしようどうしようと焦つていたら聞き慣れた声がして、ハツ
と立ち上がつた。ロウもシズカから視線を外し、耳を澄ませる。シ
ズカが何か言つて首を傾げたが、全く頭に入つてこなかつた。慌て
たオレはロウにコップを預け、直ぐに駆け出していた。

人混みの中でもわかる。たくさんの匂いに音に呑まれていようが、
それは唯一輝くようだから。無駄に利く鼻も耳も目も、それを見付
けるためにあると言われば、簡単に納得できてしまう。

オレは満面の笑みで叫んだ。駆け寄るや否や、その細く長い割に
硬い、働き者の手を掴んで。

「おかえりシラノー」

「た、ただいぬ」

少しこいつもより大きく田を開いて、驚いたよつこシラソは頷いた。

「ミリもおかえり。良いもの買つてもらえたか？」

「はい。後でお話を聞いてもらえますか、シン君？」

「むむ、自慢かよミリ。でもここよー」

こしき、とにかくけた顔を誤魔化すように笑う。ミリは照れたよう
にぎゅっと持つて居るカラフルな人形を抱き締めた。どうもそれが
買つてもらつた物らしい。ミリは幸せそそく、大事そうにそれを抱
えていた。

「ヒレハロウと闇歌さんはどうだ？」

無精な声を出す相変わらずの仏頂面。辺りを見渡しながら、いぶ
かしげにシランが尋ねてくるので、とりあえずぐいぐいと口ウ達の
待つ脇道へと引っ張つていくことにした。

「あ、おかえりー」

ロウが手を少し挙げて迎えると、シランはちょっとホッとしたよ
うに胸に手を当てた。しかし直ぐに肩を落とす。

「すまない。随分待たせただろつ……」

「つづん。たつぱり休めたし、ミリも嬉しそうだから、逆に一石二

鳥で良かつたくらいだぞ」

落ち着いたのか、よつやくいつもの柔らかな笑みをシランに向ける口ウ。それを見てシランも納得したようで、表情も和らいだ。

「なら良かつた。しかし待たせたのはすまなかつた」
「「」みんなでこぼれやん。つい夢中になつてしまつました」

ミリがシランの隣で深々と頭を下げる。それを気にしなくていい
よとやれぞれの言ひ方で宥めていると。

「仕方あらへんて。女の子やもん、買に物に夢中になるんは可愛い
もんや。なあお一方？ ニイニちゃんもわかるやう？」

ミリの隣にいつの間にか居た知らない女の人が、妙な言葉遣いで
口を挟んだ。誰だこの人？ 特徴は長い髪を編んで尻尾のように垂
らしている三編みだろうか。背も高くスタイルも良いお姉さんだが、
言動がそれを打ち消しているおかげで近寄り難ではない。けど、逆
に怪しくも見える。

しかしそれよりも気になつたのはその人がシズカを見て言つたこと
だ。

「「「」」」ちやん？」

オレとロウが首を傾げると、ロウの左隣で佇んでいたシズカが苛
立つたように口を開いた。

「新見ですと何度も言わせるおつもりですか？」
「「」」」ちやんつて可愛いやないの」
「可愛くありません。それにセミみたいじやありませんか」
「「」」」イゼミ？ よく見るとなかなか可愛いんやでー」
「訊いていません。そんなことより

何が何だかわからなくなつてきたぞ？ ロウもシランもミリも困

惑顔だ。

シランが「ちょっと待て」とでも言いたげに手を出しかけたが、その浮いた手は次のシズカの言葉に遮られた。

「何故私服姿で客人と接触をはかつているのですか大将殿？」

空気が凍えた氣がした。

誰よりも何よりも、シランの空気が変わったのがわかつた。

「シラ」

「騙していたのか？」

低い低い声。

シランはオレの手を引いて後ろに引くと、代わりに一步前に出了まるで~~ミリ~~とオレを庇つよう。そして出来るだけ口ウの近くにいるよう~~ミリ~~。

「え？　ええ！？」

言われた当人、三編みの女性は最初自分のことだとは思わなかつたようで、数拍遅れて声をあげた。

「そんなつもりあらへんよー。」

「なら何故所属を明らかにしなかつた？　俺達のことは知つていたのだ~~ミリ~~。」

「いやけど、~~ミリ~~はそういう階級とか苦手やねん。せーやーかーりー！」

女の人は困つたように手をぶんぶんと振つたりぱたぱたさせたりと忙しい。でも傍田から見たところ、別に騙すつもりなんてなさそ

うだけどなあ、と思いつつシランの顔を覗いてみるが、その表情はまだ険しい。

「だからなんだ？」

「せやから！ うちはそういう肩書きつちゅう面倒なもん関係なしに笑つたりお喋りしたかったの！ 」 ひつ感じになるのが嫌だつたんや！」

拳を握りしめ、懸命に訴える三編みの人。それでようやくシランの表情が変わった。何と言つか、あれだ……オレが変なことを言った時の呆れ顔。

「はあ……」

「なにい、ため息！？」

「……なら最初からそう言つて正直に接触すれば良かつただろ？」「それだとはなつから警戒されてしまうやん！」

「誠意があればこちらも素直に受け取る。俺は嘘と隠し事が大嫌いだ」

『立腹なシランは腕を組み、至極不機嫌な顔で顎を突き出した。』と詰つか三編みの人を見上げた。三編みの人はと詰つと何だか決まり悪そうに俯いて絡めた指を見詰めていた。

「ほんに鐵の旦那によう似とるわ」

「鐵のことを知つていたならもつと予測できただろ？ とにかく俺はお前を信用できなくなつた」

「信用して欲しけりや 誠意を見せねつて？」

「ああ」

すると三編みの人は一タア、とこやらしく笑うとシランの一歩近

付いた。既に相当近かつたのだからもう距離はないも同然。ぴたりと、くつついた？

「じゃあ身体で払っちゃおうか

」

ガツ、とシランが三編みの人の肩を掴んだ。

「へ？」

そしてシランが勢いよく一步下がった。いや、よろけたとも呼べそうな動きだつた。

そんな誰も予想しなかった動きに当然ヨミだつてついて行けるはずもなく、その背中に押されてよろけた。それをオレは慌てて支える。

シランは肩を震わせ、地面を怒鳴りつけるように下を向いていた。垂れた髪に隠れ表情は読めないが……。

「ばああっ、かつかあお前！」

「……照れてる？」

「違ひー！」

否定するシランの顔はそれはもう真っ赤だつた。でも照れると「いづよりは恥ずかしい」とか怒りとか。

「おつ前は何を考えているんだ！ 誠意だと？ お前にとつての誠意はそのつーね、うう、そ、そのー、色仕掛けだとでもつ、言つつもりがあ！」

「つぶやなあ、シランは」

「つむきーー 大体つ、お前は一体何をしたいんだ！」

「そうですよ大将。お客様をからかってはいけませんよ

飄々と涼しい顔で口を出すシズカに半田を向けるシラン。シズカは本当に怖いもの知らずだなあ。しかしそうとシランが落ち着いたみたいだ。

オレは四三三を支える手を離すと、シランの肩をトンと叩いた。

「落ち着けよシラン。えつとタイショウさん？ シランは女人苦手だからあんまり変なことしないでくれよ」

「違つ！」

「はいはい落ち着く。深呼吸深呼吸」

眉間に壮大な山脈を作るシランをこっちに向かせる。熊でも殺せそうな黒い瞳が睨んで来るが、慣れているので気にせず、お手本のように大きく息を吸って見せる。そうするとシランも不満ながらも素直に吸い、深々と吐き出した。それはもう大量の苛立ちを吐き捨てるかのようだ。

「流石シンだなあ」

シランはそう咳くように言つた口ウヘ視線をやつたが、もう険しさは大分抜けていた。そしてまた嘆息を一つ。

「とにかくちゃんと名乗れ。次ふざけた時は切り捨てるからな」

その台詞の時だけは剣呑さを帶びた、研ぎ澄まされた刀のような光が瞳を過つたが、その後はただ顔を背けただけだった。

「悪気はなかつたんや。ついつい……なあ？」

「……大将？」

「すまんて！ 閑歌さんまで睨まんといってえな。ちやあんと名乗る

からカソーンしてやあ

「……どつも」

最後には何だか投げやりな口調でシズカが促した。しかし女の人は全く気になった風もなく、ふふん、と上機嫌に胸を張つてオレや口ウを一人一人見る。

「じゃあ仕切り直して自己紹介するでえ。うちは榎原陽。新日本政府、実働部部隊長や。んでもって総司令代理の親友で、肩つ苦しいのがだーい嫌いなびっちびちの一十三歳やで！ ハルハルとでも呼んでえな。宜しゅう頼んます！」

パチパチパチと一人で拍手してる変な人、じゃなかつた、サカキバラハル……ハルでいつか。何か緩そうな人だし。ハルハルとか自分で言つてたし。……うん。

「つまり、スバルさんと同じ位、なのかな？」

ロウが首を傾げて問うと、大当たり～と言つてハルが飛び跳ねた。忙しい人だなあ、と妙な感心と共にオレはそれを眺めていた。

「そんなことより大将」

「また『そんなことより』。大事やでえ、質問タイム。ほらほら、お姉さんに訊きたいことあるなら今之内よ？ 今なら大サービスしちゃうで～。スリーサイズまで教えちゃうかも！ どや？」

催促するように耳に手を当て、にじり寄つてくる。ちょっと怖くなつたのでシランの背中に避難だ。また嘆息が漏れた。

「いい加減にしてくれ。用件があるならわざとと言え。なければ帰

れ、お偉いさん

「シ一君ひつどーい。それにあんまり偉くないで？ 実権は頭と管理部の上が持つてるようなもんやし。実働部で一番田に偉いっつってもなあ」

「誰が『シー君』だ。鳥肌が立つ。やめろ。それに俺はお前らの組織図などに興味はない」

シランは不機嫌全開だ。ハルは上機嫌全開だけど。しかしハルに
とつての「やめろ」は「やれ」と同義なようで、超笑顔で続けた。
シランの不機嫌は大無視で。

「総司令の下に部が二つありますのは実働部。そこで実働部のま
とめ役の下に秋峰君やうぢらがいて、その補佐が閑歌ちゃん達やで

わかつたぞ。オレは今よつやく理解した。説明しなくていいと言
われた説明をわざわざ実行し、恐らく嫌がるだろつと察していふこ
とをやる。わかつたぞ。

あまのじやくつてまさにハルみたいな人のことなんだな！ と。シランの肩がこれ以上ない程震えている。オレはすかさずシランの腰にぶら下がっている刀を奪い取った。あ、という顔をしたシランの視線が突き刺さるが我慢だ。

「人斬りはだめっ！ シランは余計にだめなの！」

うーうーと唸つて抗議の目攻撃。そんなオレにシラクは簡単に折れると肩を落とした。

「……もう嫌だ、こいつと話すの」

心の底からの言葉。もつこいの辺りの空氣はぐりゅぐりゅだ。ちゅつと泣きたくなってきた。

そこでようやくロウが重い腰を上げる。

「どうこいしょ」

「ロウお爺さん大丈夫ですか？」と茶々を入れるシズカ。

「うん、大丈夫」なんか怖いくらい輝く笑顔で応えたロウ。

些細な動作すら一触即発の空氣を作り出す一人。やめてくれよこれ以上の混沌は！

でも暗黙の了解でもあるのか、一人は和やかに微笑み合いつと直ぐに視線を外し、ロウはシランとハルの間に割り込んだ。

「はいはい仲良くなー。ハルさんは思い付いたまま言わない動かない。シランも簡単に乗らない。ちょっとは忍耐強く生きてよ」

まあまあといふように掌を上下に振つて宥めるロウ。ハルは苦笑しながら頬を搔いて、シランは気まず気に視線を反らした。

「大人げない大人がいたら示しがつかないぞ？　いいかな？」

目配せに渋々頷いたシランを見てロウははにっこりと笑った。

「じゃあハルさんの用件を訊くぞ？　言つとくけど、女人の人でもロウは遠慮しないからな？ 戦える人には。だからふざけちゃダメだぞ？」

ハルに向けた笑顔は見えなかつたが……背筋が何故か寒くなつたとだけ言つておこう。

「わかつたで～」

それに曇りない笑顔で応えるハルもなかなかに怖かつたけど。ようやく真面目な顔になつたハルはこほん、と咳払いをすると話し始めた。

「うちはあんたらを案内しよう思て来たんや」

「それは私の仕事なのですが」

「堅いこといわへんでえ。それにボスさんの注文やしな」

「……聞いていませんが」

眉を潜めたシズカがうろんげな目をハルに向けた。しかしハルはにこーとしたままだ。左右に体を揺すって、楽しそう。

「さつき頼まれたんやもん。うち、丁度今さつき帰つてきたとこやつたしな。んでな、閑ちゃんはお付きの一人の許可証発行を頼みたいんや」

「確かに必要ですが後でも良いはずです。それに

「でも早く手続きせんとあかんやろ?」

ゆらゆら揺れていた体をぴたりと止め、首をコトコと傾ける。下から覗くように首を伸ばしてくるハルを、不可解だと言つたげにシズカは見下ろしていた。

「貴女はそれでいいのですか？」

「それこそそちちはその言葉、あんたに返すで? そんな問い合わせをする気持ちでいいん?」

ぱたぱたと三編みが浮いては落ち、浮いては落ちを繰り返す。で

も何だか自分で揺れているハルではなく、シズカが揺らされている
ように見えた。

そしてシズカは俯くとぽつりと。

「私は、あの人があざけない表情でいられれば、いいんです。……それだけ」

小さくて風に紛れてしまいそうな咳きだつた。でもそれを塞き止めるような、受け止めるようなため息が聞こえた。それはハルだった。

「新見ちゃんもほんに難儀な位置に居るなあ。意地悪言つてごめんな。でもまあ……うちは新見ちゃんにない可能性を見付けられたらな、と思つたから来たんや。なあ、バトン渡してみいひん?」

ぴたりと止まつたハルは真剣な顔をしていた。オレ達はよくわからぬなりに息を詰めて見守つていた。

のだが。

ふふ、とシズカが吹き出した。口元に上品に手を当て、ハルを見返す。

「甘い甘い砂糖を振り掛けた上に砂糖だけを積み重ねたパフェのような貴女に。甘いものしか食べない食わず嫌いな貴女に。そんなことが出来るのですか?」

「それパフェやないやん! 最早ただの砂糖の塔やん! せめてクリーム! それにうちやつて流石にフレークやらフルーツも盛り付けるわ!」

「本当に? 本当に、貴女は苦い苦い毒薬ですか、一緒に飲めますか?」

「ぐぬつ。てか毒は流石に避けよくな?」

しかしクスッとシズカは笑つて一歩、歩いてハルから離れると、振り向いた。

「それが甘いと言つのですよ、大将殿」

妖艶な笑みをそつと形作ると、シズカは背を向け歩き出し、雑踏に溶け込むように消えてしまった。残されたメンバーは畠然とするしかない。

「大将に任せた、ということかな~」

口ウの場違いに明るい声に、皆何だか疲れたよつと肩を落とすのだった。

「ところでなんで『大将』？」
「あ、私も気になつてました。どうしてなんですか？」
「え、聞きたい聞きたい？　しょうがない子らやなあ。可愛さに免じてお姉さん教えちゃうでえ」

なんか。

益々《ますます》良くわからぬことになつた、と思つ。
最後尾を歩くオレとシランはとぼとぼという感じ。対して口ウとヨミは図太いんだか鈍感なんだか、普通にハルと並んで歩いていた。ハル、口ウ、ヨミの順番だ。何だか口ウは、おっさんぽいことを喋りでれでれとヨミを見てる怪しい人とヨミとの緩衝材の役目を負

つてゐる気がする。だつて時折見える口ウの田、全然笑つてない。

「……そう怯えるな」

「だつていろいろな意味で前が怖いんだよ……」

「……場所換わるか?」

因みに後列はオレ、シランだ。ハル側にいるオレはたまに口ウの顔も見えるし会話も聞きやすい、特等席だ。……嫌だな。

「でもシランだつて、その……苦手だろ?」

「隣のやつが怯えている方が落ち着かんだけりうが」

『もつともな意見。でも断つた。シランと話していれば平氣だしな』
しかし会話はやつぱり聴こえてくる。

「でもなー、いつの間にか大将になつてたんよ。うーん、あれかな、先陣切つて突撃してたからかね。だから部隊長なんつう面倒な役職に放りこまれてしまんやし」

「嫌、なんですか?」

「そうやねー。面倒な事務仕事がなけりや好きなんやけどね、リーダーみたいなんも。慕つてくれる部下とか可愛いや〜ん」

「下心たつふりだね?」

「そないにおだてても何も出えへんで?」

「あはは、全く誉めてないぞ?」

無心。そつ、無心になればいい。

そうすれば何故かさつきから寒々しい笑顔の口ウとか、ポジティブシンキングにも程がある謎の人とか、そんな諸々を綺麗にスルーしてゐるヨミとかも気にならなくなるさ。うん、大丈夫だぞ。オレは

大丈夫だぞ！

ポン、と肩にシランの手が置かれた。

「あの露店の耳栓、買つてみるか

オレはちよっぴり涙目で頷いた、その次の瞬間、何故かハルが残像を残す勢いで振り返り、腕をふりかぶった。

「なんでやねーん！」

や、なんでやねん？

勢いの割には叩かれた肩は痛くなかった。どうしよう、あんまりこの人と上手くやつていける気がしないんだけど。

オレは密かにこの不安が速く雑踏に紛れて消えてくれることを祈るのでした。
道のりはまだまだ長い……。

「はあ……」

「着いて早々にため息で出迎えかい！」

「……私は寄り道厳禁と言いましたよね？」

「うん、そうやね」

「ではあれは何かしら？」

「うん、お土産やなー！」

「……………そつ」

絶望のような沈黙だった。

りんご飴とやらをしゃぶりながらその気まずさをどうにか流せないかと試行錯誤していたらシランに小突かれた。

「今は食べるな

「ええーー」

同時に声を上げたロウの手にはもくもくとした真っ白い雲のよつた砂糖の山が巻かれた割り箸が、綿菓子とこうらしこそれを上機嫌にはむはむと食べていたロウも不満たらたらの様子。オレだつてりんご飴を食べたい。

「密にもマナーはあるだろ？　お前らは食い意地張りすぎだ」

口を尖らせ、抗議したい気持ちはあったが、シランの言葉に利があるので渋々りんご飴を手に持った。ロウも綿菓子から口を離す。そんなオレらの様子を横目に見ていた冷ややかな雰囲気の女人人は、疲れたように息を吐いた。

ここは新日本政府の本部、最上階突き当たりの司令室とかいう部屋だ。随分広く、入ってきたドア以外の方位全てに窓があり、部屋を朱に染めていた。いつの間にやら夕方だ。随分長い間、市場でうろうろしていたようだ。

部屋には正面に木製の立派な机があり、窓以外の壁は全て本棚に埋め尽くされている。しかも窓の下までラックがある作りだ。生活感はゼロ。本当に仕事のためだけの部屋なんだと驚嘆した。

そんな神経質そうな部屋の主は姿勢正しく机に着き、書類を手にしていたが、ハルがノックもせずに扉を開け放つと深々と嘆息し、立ち上がったのだった。

肩を覆うくらいの長さの黒髪を真つ直ぐに垂らしている。つり上がった瞳は深い黒。凜々しく綺麗だが、突き刺すような鋭い視線がちょっと怖く見える。でも凄い美人だ。年はシランよりちょっと上

だろうか。

服はスバルらと同じ緑色の制服だが、肩に白い飾りがあり、ひだが垂れ下がっていた。左胸にも何か鳥のようなものを模した銀色のバッヂがついていた。そう言えばスバルのにも、シズカ力達にもさりげなく付いていたが、一方は灰色、一方はアップリケみたいなものだった。偉さの度合いを表してゐるのかな、とちょっと興味を持つ。司令室とやらにいた女性の胸のそれは夕日を弾き、自慢するよつて光輝いていた。

彼女の胸はあまりなかつたが。

「つい、な？ セっかく遠くから来て貰つたんやし、楽しい思い出をと思つたんや」

ハルが「な、な？」と首を傾げ女性に近付く。部屋の主は鬱陶しげに首元にかかる髪を払い、鋭い黒瞳をハルに向け、槍を突き立てるような容赦ない言葉を放つた。

「私は彼らに思い出作りをして貰うつもりはないわ。この地に留まつて頂きたいのよ。貴女はどうして余計なことをしようとするの？」

痛い。

思わず顔をしかめる。チクリと刺されたように感じる。なのに。

「だつてうちには美智乃が悪役になんのは嫌やもん。美智乃かでそいやろ？ 楽しかつたつてちょびつとでも思つて貰えたら、どっちも後腐れなくハッピーayanか！ なあ？ それに」

どうしてハルは笑顔なの？

どうしてさつきよりも嬉しそうに話すの？ どうしてあんな冷た

い、突き放すような、あるいは貫くような、そんな冷ややかな視線を向けられているのに。

どうしてハルは笑つていられるんだ？
しかも止めのようだ。

「勝手な同意を求めるで。わかつたよくなこと言わないでください
る？ 榎原、下がつて結構よ」

氷点下の視線、と呼ぶに相応しい。最早攻撃だった。人を殺すよ
うな言葉。

それでも。

「あはは、『めんなあ』

彼女の答えは笑顔だった。

ハルは力尽きたように後ろに下がつて来たが、部屋の外には行か
なかつた。ただへらへらと笑つて立ち尽くすだけ。笑つているのに
泣いてるように見えるのは何故なんだろう。

そんなことを考えていると早速シランが進み出た。正義感が強い
と言つよりは単に、お節介が過ぎるお人好し人間だから当然と言え
ば当然だろう。通り過ぎた横顔は厳しかつた。

オレもそれに付き添うように前へ出る。ミミはシランの隣。口ウ
はオレの隣。ハルの顔は見えなくなつた。

「では改めまして。私の我が儘のため、遠路遙々お越し頂き、誠に
有難う御座います。私は須原美智乃と申します」

部屋の主はそつと乗つた。ちよつとさつきの会話でムカついたの
でスハラと呼ばう。名前で呼びたくない。

スハラは長い黒髪を揺らし、机を迂回するとシランとミミの前に

立つた。

「お前が喚んだ観月紫蘭だ。ここに来るまでに何となくわかつたことがある」

「何が、でしようか？」

「贊否が分かれているのだろう？　俺達を強引に引き込むことについで。秋峰昂に榎原陽が否定派。あんたが無理矢理推し進めていた强硬派、とでも呼ぶか？　そしてお前の息がかかつた新見闇歌、といつたところか」

シランの口調にギヨッとする。シズカが何だつて？　しかし口ウまでそれを受けて喋り出す。

「シズカさんはスバルさんを大事に思っている」とくらい知つてたよね？　なのに何で中途半端なスペイみたいなことさせるの？」

怒りのこもつた黄玉の瞳は、夕焼けに照らされ、燃えているみたいだった。

「……いいわ。器用だからよ。秋峰では出来ないことをして貰うために必要だつたから。今回はあまり機能しなかつたようだけれどね」

「スバルさん情報？」

「ええ」

スバルは涼やかに答えた。でも何だかオレは嫌な気分になつて、変な顔になつた。とにかく我慢ならなくて口が勝手に動く。

「よく、わからないけど、あんたはシズカとかスバルを傷付けるようなことしたんだよな。それにハルにもひどい」と言つたんだ

「そうね」

その、短い、簡潔過ぎる答えがとてもなく悲しい気分にさせた。
虚しくて、切なくて、泣きたい。

「お前は人を、仲間を、何だと思っているんだ？」

震える声が、俯いたオレにのし掛かるよつこ響いた。シランの声
だ。足まで震えているのが見えた。

「駒よ。チエックメイトたくさん^{ヤング}の住人^{ボーン}を守るために歩兵。効率良く動かせなけれ
ば死^{デス}が待つ^ワている。それくらい知つ^ワっているでしょ^ウう？」

ぴたりとシランの震えが止まつた。思わずオレは顔を上げた。
目に入るのは信じられないという驚愕。怒りを通り越した表情だ
った。口は何を言つていいかわからず半開きだ。

「貴女は世界をチ^Hスの盤面にするおつもりですか？」

春風のようにそつと、柔らかな声が差し込まれた。

「例えよ」

「貴女が動かせるのはゲームの駒ではなく、生身の人間です」

「ええ」

「なら何故彼らの心を、汲み取つて下さらないのですか？」

「…………」

スハラは口をつぐんだ。マリセ一步前に出て、しん、とした空氣
を背負うように立つた。

「どうしてわかっていて無下に扱うのですか？ 貴女の思いまで压

し殺して　」

風船が割れた。ような音が鋭く響いた。

「なん、で？……違ひ」

スハラは振り切った手は掲げられたまま止まつた。ヨリはよろけて尻餅をついた。

「かつ、勝手なことを言わないでと言つたでしよう！」と静まり返つた世界を破るよつに、迷いながらもスハラは叫んだ。

「そうやつたそうやつた。すまんかつたな美智乃」と背中からもわかるへらへら笑いのハルがそれに応えた。

ヨリを庇つてビンタを受けた自分の頬を押さえて。

「ハ、ハルさん！？ 大丈夫ですか！」

「んー平氣平氣。こなんんナイフでグサーに比べたら虫に刺されたようなもんよ。気にしなーい気にしなーい。な、美智乃？」

能天氣過ぎるハルに、スハラは唇を強く噛み締め、固く目を瞑つた。

「美智乃？」

「密室が、用意されているわ。疲れているでしょう。ゆっくり休んでください。本題は明日にしましょう」

それだけを早口に告げると、机上に設置されていたベルを乱暴に二度押した。すると入るのに使つた扉が外から開けられ、制服の女人が顔を覗かせた。

「**「」**案内致しますね」

「頼むわ」

「はいっ。では皆様**「」**ちらへ」

案内を任せられたその人はすっと指を伸ばし、手のひらを上に向けて扉を示すと、笑顔と共に小さく首を傾けた。

「密室**「」**案内致します」

困惑顔のオレ達はハルに背を押され、案内に先導され、司令室を出たのだった。

「**「」**ちらが観月様のお部屋となります」

にっこりと紹介されたその部屋は無茶苦茶広かつた。もしかして百人くらい住めるんじゃねえ?

「いや、それは無理だろう」

と冷静なシランに突っ込まれながら、オレ達は部屋に踏み込む。床はなんか焦げ茶色の絨毯が敷かれているし、大きな窓にはクリーム色の分厚いカーテンが備えられている。左手にはベッドが四つ並んでいるし、右手には木製の丸テーブルと四脚の椅子まであって。なんだこれ? これ部屋なのか? 施設とか店じゃなくて?

「……と、こちらに点灯スイッチがありますので、自由にお使いください。では失礼致します」

簡単に何か説明のようなことを口にするとき案内人はヨリイを伴つて行つてしまつた。

ハルはいつの間にか居なくなつていた。

「『転倒する位置』がある、ってどういう意味だあ？」

「シン、多分『点灯スイッチ』、つまり灯りを点けるためのボタンだぞ」

「点灯、ああなるほどビー」

ふむふむ、とロウの解説に納得しているとシランが壁をしげしげと眺めていた。

「これがスイッチか

「どれどれ？」

シランの見ている箇所を見ると、小さな棒みたいなものが壁から生えていた。

「……なにこれ？」

「だからスイッチだろ？」

「どこの？」

「……あれかな」

シランが指差したのは天井の大きな花の飾り。よく見れば確かに電球がある。

「でもならなんでスイッチつてのがこんなところにあるのさ？」「

「…… わあ？」

「ほんとに点くの～？」

疑つようただのつまみにしか見えない『スイッチ』とやらを見る。そんな問答をしていたら口ウが覗き込んできた。

「なら使ってみればいいじゃない」

「どうやって？」

「多分ー、」ひやり、てー

口ウがつまみを人差し指と親指で挟むと、くいっと押し上げた。

「うわー、口ウ壊した！」

「口ウ壊してない！ ほら、ほらー！」

「え？」

口ウに促され天井を見ると、なんと光つていてる。花のよつな『ザイン』の中にあつた電球が黄色みを帯びた白い光を放つていてるではないか。

「す、すっげえ！ なんでー、こんな遠いのに点いたあー！ うそみてえ。マンガみてえだ！」

「ほら口ウ壊してないー。口ウ凄いー」

「うんスゴいスゴい！ 口ウスゴー！」

有頂天になつて飛び跳ねていたりシランにぽかりと殴られた。

「静かにしる」

「うー、はーい」

「『』めんなさこシラン」

スイッチはわかつたので消し、窓辺に駆け寄る。夕焼けも紺色に呑まれつつあるようだ。でも今は一際赤く太陽が輝いて見えた。

「雲と地平線の間にあるこの瞬間が一番太陽が見えるなあ。しかもこの四階からの眺めは格別やで。沈んでいく太陽がよう見えるんや」「確かに。スゲー……て、あれ?」

窓から田を離し、隣を見たら。

「や、少年」

「うああああ!」

いつの間にかまたハルがいた。すんごいフレンドリーに手を上げて笑い掛けられる。

「いつ入ってきたんだよ!」

「今や今。ちゃんとノックしたし挨拶もしたでえ」

「うそだあ」

「嘘やない。どないしてそないしょうもない嘘吐く必要があるんや」「そうだけどさ」

でも本気で気付かなかつた。自然過ぎる。何この人。気配ないのか? しかし対峙すればこの人程自己主張が激しい人も滅多にいないというくらいの存在感を振り撒く人なのだが。

やつぱり謎な人だ、ハルは。

につこり笑つて首を傾げるようにして瞳を覗き込んでくる。どうも揺れたり首を傾げるのはハルの癖みたいだ。ちょっと下から見上げるように真っ直ぐな視線。嫌いじゃないけど苦手かもなあ、と苦笑する。

「夕焼けもええけどな、シンシンもこいつち来てみい。おもろこことんなつてるで」

「おもろこじと?..」

ハルに促されるまま部屋の中、ドア付近でシランとロウとヨミが何だか揉めているようだった。ヨミもこの間にか戻っていたようだ。オレはなんだなんだと輪に入つていく。

「どうかしたの?」

「一緒に寝たいんです!」

「断固として反対する」

「……はい?..」

両拳を握り締め、それをブンブンと振つて主張するヨミ。肘を張り、仁王立ちでしかめつ面なシラン。一人の間で乾いた笑みを浮かべて取り成そうと頑張っているロウ、の図。

「あのな、ヨミは一人で寝るより皆で固まつていた方が安心だからここで寝るつて言つてるの。それに知らない場所で一人は寂しいからな。でもシランが駄目だの一点張りなんだぞ」とロウが親切に教えてくれてよつやく把握だ。

シランは堅物だからあんまり融通が利かないんだよなあ。と不安を胸に一人を見守る。

「とにかく年頃の女子を男子三人と一緒にする訳にはいかないだろ

う

「私は気になせんよ?..」

「俺は気にする」

睨み合いの膠着状態。なんか今日は「んなんばつ」かだ、と嘆息した。口ウも眉をへの字にして助けて光線を目から出している、気がする。仕方ないのでオレはずかずかと一緒に割って入った。

「待てよ一人とも。一緒に買い物して仲良くなつたんじゃなかつたのか？」

「私はもうと仲良くなりたいんですよ！」

「買つてやつただけだろ？ これとそれとは話が別だ」

「シランさんの分からず屋！」

「分別を弁えろ、子供じやないんだから」

「まだ私は子供です！ だって十六歳ですもの！」

それにシランは虚を突かれた顔をした。オレも多分似たような顔になつているだろう。口ウは細く白い眉を落とし、桜色の唇をツンと突き出して不満そつな声で言つた。

「何か文句でもおありますか？ 言つときますが、私は三歳くらいにはもうこの姿でサイズでしたよ。今はたまたま実年齢と一致しているのであまり違和感がありませんが」

「……十八かそこらに見えたが」

「そうですか？ 我ながらまだまだ子供っぽいと自認しているのですが」

とほけた顔でシランの言葉に相槌を打つ口ウ。

「おーおー、そんなこと言つたら口ウは何歳だよ？」

「さあ？ 口ウも知らないぞ」

とにかくの疑問など解さず、涼しい顔の口ウ。そんな口ウにオレ

は力が抜けてしまった。口ウはそうこうの、全く氣にしてないみた
いだなあ。

「そう言つむ前だつて年齢わからず、やはり氣にしていないじゃ
いか」

何故かシランに白い目で見られた……なんでだ?
ぎやいぎやいわいのわいのとしている内に本題はどこかへ流れて
いく。それを。

パンパン、と。

まるで仕切り直すように柏手が一度打たれ、一斉に皆の視線が一
所へ集められる。ハルはにたあと笑つてそれを迎えた。

「解決策を教えてたるで?」

「こいつらの生きてきた年数がわかるのか?」

「ちやうわ! お前さんらマジでさつきの話題忘れとらん?」

「……ああ、ヨミが一人で寝られないという話か?」

「そうです! 私子供なので一人じゃ寝れませんっ!」

開き直ったのか、ピシッと背筋まで伸ばして拳手するヨミ。見な
い振りをするシランに対抗するようにぴょんぴょんと跳ねながらシ
ランにまとわりついている。

「ああもつ……解決策とはなんだ榎原?」

「ふつふつふー、よくぞ訊いてくれたね觀月くん!」

ハルは自慢気に手を細めて笑い、人差し指をチツチツ、と振る。
明らかにシランの頬が引き吊っていたが、何とか堪えたようだった。

「ズバリツ、うちの部屋にヨミが泊まる!」

「却下。信用ならん」

「ならうちがヨリの客室に泊まる。」

「却下。以下同文」

「ならなら添い寝を……」

「何故そつなる！却下と言つたら却下だ」

「シラソさん、私は気になせんよ？」

「頼むから少しあは気にしてくれ……」

シラソは疲れたようにふらふらと椅子の方へ行くとビックリと腰を落とした。シラソは本当に心配性だなあと思いつつ、ベッドの間に置かれた台にあつた水差しを取り、少し注ぐとシラソに出しだ。オレはシラソの隣に控えることにする。

「ありがと。……ふう。とにかくお前は何を考えて動いているかわからない。そんな底の知れない相手にヨリを預けられるか」「でもシラソさんも私にとつてはまだ数日の付き合いでどうこいですよ？まあシラソさん達はとつてもわかりやすく、裏表がないので助かりますが」

「…………そりやあ、良かつたな」

複雑な心境はあるで苦いものでも食べたみたいな変な顔で表されていた。

「シラソをさつてやつぱり過保護ですよね」

「せやうせやうへ、こんな面倒人間よりつづるのが楽やで～」

ハルが粘つこい笑顔をヨリに向けて誘う。それにヨリせりふに微笑み、机の方へ一步進んだ。

「それは素敵なお誘いですねえ」

「面倒な人間でわるかつたな」

言つて口を真一文字にするシラン。しかしヨミは静かに首を左右に振つた。

「いえ、私はそんな自他共に面倒臭いと思つような感情でも捨てずに胸を張つて生きている、シランさんのそんな不器用なところが好きなんですよ」

あ、誉めてるんですよ？ と付け足しながらヨミはまた一步近寄る。シランはやけくそ気味に水を煽つた。ヨミはそれに微笑み、また一步進むと純白な毛糸の束のような髪を浮かせ、くるりとオレたちに背を向けた。

「でもシランさんの言つ通り、訛然としない部分があるんですね。ハルさん、どうか貴女が誤魔化す大事な欠片を一つでいいからお見せいただけませんか？」

ハルを真つ直ぐに見詰めてヨミは問い掛けた。ハルはまるで撃ち抜かれたようなハツとした顔で固まつた。迷つているのか、はたまた単に驚いているのか。

沈黙の間にロウガオレたちテーブル組のところへやつて来ると、シランのコップから勝手に水を飲んだ。それに「ロウはマイペースだな」と言つと「お互い様だぞ」と返された。うーん何でだろ、と内心唸りつつも水を注ぎ足すオレ。

そんなことを外野でやつていると唐突にハルが叫んだ。

「よつしわかつたで！」

何か吹つ切れたのか、ハルは迷いなくずんずんとヨミに近付くと

意氣揚々と雪のような白い手を掴んだ。

「お前さん、に遠回しは逆効果！ ならつけばド直球で行くしかあらへんやろー。つう訳でヨミー。」

「は、はい」

「友達になつてくださいー！」

ハルは大真面目に言い切つた。

「…………はい？」

「ダチ、フレンド、親友、悪友、腐れ縁、友人、友。自由に呼べばええよ。な、うちと友達になつてくれやヨミー」

ハルはヨミの手を両手で握り、目線をがっちり合わせると真剣な面持ちでそう頼んだ。

オレは思わずシラソニビツコウこと、とばかりに顔を向けたが、シランは口ウに似たような視線を送つており、口ウは肩をすくめて困惑顔で応えた。

言われた当人はと黙つと、俯いてぶるぶると武者震いみたいになつてゐる。まあ武者震いではないだろうとは思つくな。

「ヨ、ヨミー？」

「わ、わ私！」

「ふあい！」

ヨミは急に顔をあげるとハルにグイッ、と顔を近付けた。肉薄したと表現した方が良さそうだ。唐突なヨミの勢いに、ハルが裏返つた声で応える。

「私、そんな」と訴われたの初めてです！」

「そんなんて」

「友達のお誘いです！ 私はとっても嬉しいんですー。」

「あ、ありがとお」

ハルが押されてるよ、と睡然とするオレたち。しかしへも我に返つたようで、すつと身を引くと唇に指を当て、不思議そうに言った。

「あの、でもどうしてやつ思つたんですか？」

ようやくミミが落ち着いて、ハルはふうと息を吐くことが出来たようだ。そして早速水を得た魚のように意氣揚々と話し始めるが、心なしかさつきよつも声が大きい気がした。

「やつやなー 理由も明白にしなきやあかんもんな。ま、一つはミミが可愛いからに決まつとるわー」

「お前はそれしか言えないのか？」

シランが呆れる程、本当にハルはミミを大普ッシュだ。調子が戻ってきたハルは、仕方あらへんやん~、とにやけた顔でぱたぱたとシランに向かつておざなりに手を振った。シランも諦めたように嘆息だ。

「他にもあるんでしょ、理由？」

「おつ、わかつとむな口ウ君は。一いつ田はな、あんせんりの味方になりたいからや。なら仲良くなつときたいやう？」

「じゃあどうして味方になりたいの？」

口ウの素朴な疑問に、ハルは軽妙な顔で答える。

「いやあ、あんまり印象よろしくあらへんやうが、でも正直に言えば美智乃のため、やなあ」

「それで好転するとはあまり思わないけど？」

淡々と、容赦ない問いをするロウは顔色一つ変えない。でもハルはやつぱりへらへら笑うだけ。見てるこっちが何だかもやもやする。シランも心なしか不機嫌度が上がつてゐる。

「ま、いろいろあるんよ。三つ田もあるけどこれはプライバシーの問題になるからな、言わへん」

「ふうん。強要はしないぞ。まあ、良いんじゃない？」

「おーおーおおきにな、ロウ」

締まらない笑顔をロウに向けるハルに嘘はないように見える。まあまあ。

「つせんぐさい人だけど、悪い人じゃあなさそうだよな」

ここに来るまでもいろんな店を教えてくれて、楽しい話を絶えずしてくれて、しかもロウやオレが人混み苦手なのも察して人通りの少ない道を選んでくれたり、気をまぎらわせてくれたり。

凄い気遣つてくれた。たりげなたすぎるし、ここいうキャラだと言われたら信じてしまいそうになるが、本当は物凄い人なんじゃないかな、と思う。でもちょっと損な役回りの人、でもあるようだ。司令室然り、ここでのやり取り然り。

何だかオレは思つ。

「ほんと、ハルってシランみたいに不器用な人だよなつ。な、シラン？」

自然と笑っていた。シランはオレの言葉に苦い顔だが、否定はない。シランの沈黙は概ね肯定だ。シランはただただ一人を見ていた。主にヨミを。口ウも同じ真つ直ぐな視線を送っている。待っているのだ。

だつて最後に決めるのはヨリだから。

「私で、いいんですか？」

「我が儘言つとるんはつちやで？ ヨリ自身を気にすることはあらへんやろ」

「でも、ですね……」

と言ひながらヨリは何故か口ウをチラチラと気にしている。口ウもそれに気付いたようでにっこり微笑んだ。

「ヨリ。心配しなくとも口ウは嫌なことがあればちやんと言ひしき間違つていれば訂正するわ。だからヨリは思つたことを素直に言葉にして」

優しい声に背を押され、ヨリはキュッと小さな拳を握り締め、ハルに挑む。きょとんとしたハルに。

「ハルさん！ 貴女は知つてらつしやるかもしけませんが、私は人間ではないんです。変異したウサギと人間を掛け合わせた生物の中でも、異様な力を持つて生まれてしまった私は……私は！」

ヨリは手をつむり、絞り出すように呟んだ。

「化物なんで」

「ふざけるなっ！……」

「化物やあらへん！」

「何言つてんだよ！」

化物なんです、なんて、言わせる訳がなかつた。

ヨミは立ち戻^シくす。

その肩をハルは掴んだ。シランは椅子を蹴り飛ばすよ^ウに立ち上がり^タた。オレは一歩踏み出すのが精一杯で、泣きそうだつた。そしてロウは、

「お前もお前だロウ！ どうじて怒らない、どうじて否定し訂正しない！」

「つたあ……」

シランの逆鱗がゲンコツになつてロウの頭に落つこ^チいた。ロウは殴られたところを痛そうに擦りながら、迷いなく言い返す。

「間違つてない、ロウに関しては」

但し夜色の瞳から目を反らして。

ガタン、ヒーブルが揺らされた。

「この、アホがつ。俺は絶対に肯定してやらん。何が私は化物だ、自分もそうだと？ 言語を解し、誰かを慮り、弱々しい笑顔が精一杯なお前らが、お前らごときが『化物』だと？ 笑わせるな。お前らは弱い弱い人間の一人だ。俺の定義に何か文句がある奴はいるか？」

日本刀のように鋭く澄んだ瞳が炉で燃え盛る火のごとき怒りを湛えていた。力任せにテーブルを叩いた右拳は解かれず、ギリギリと

苛立ちを表すよつて強く握っていた。

「……不満はある。けど」

「あるなら言え」

「……口ウは弱くなんかない」

「やつこいつが弱いと言つんだ」

浴びせられた言葉に、口ウは何も言えなかつた。俯く口ウは見てられない。

「シラソ言ひ過ぎー。」

思わず非難するよつな声を上げてしまひ。シラソは一瞬オレを横目に見ると背を向けた。口ウもオレもヨリモハルもない、ただの淡いシンプルな縦縞模様の壁を見詰めて言つた。

「……とにかく、お前らが思つてる程、お前らは人間離れしちゃいないんだ……」

それが自分に言い聞かせるよつな台詞に聞こえて、何だか居たたまれない気持ちになつた。でも確かに口ウとヨリモハルも、オレなんかよりはずっと人間に近い。だってオレは……。

パンパン、と氣の抜けるような音がぐぢゃぐぢゃもやもやした空氣を払つよつに打ち鳴らされた。何だかデジヤヴだ。

「まあまあ。うちは人間やけど化物や呼ばれるからな。そんなん気にしちやあかんでヨリ。何と呼ばれようが榎原陽は榎原陽やし、何と思おうが夢見黄泉は夢見黄泉やで。何も違わへんや。ならポジティブに考えよつやないの」

ハルは打ち合わせた手を合わせ、な？ とヨミに笑い掛けた。ヨミはぽかんとそれを見ていたが、直に肩を揺らし、小さな笑声を溢し出した。

ハルと向かい合っている小さな背中は、ほつとした空氣を漂わせているようにオレには見えた。

「随分と大雑把な考え方ですね」

「ええやん。難しく考えたつて能天気に捉えたつて、生きることには変わらへん。大事なんはスマイルやで！ 可愛い子が笑顔なら皆幸せ、素敵やろ～、世界平和も夢やないでえ」

なあヨミ、と言つてヨミの手を取つたハルに。

また馬鹿なことを、と呆れるシランがいて。ハルさんの夢は大きくて本当に素敵ですね、と口溜まりのような笑顔のヨミがいた。ハルの根っこはやっぱりそれなんだな、と苦笑いの口ウもいるし。うんハルらしいな！ とオレは笑顔で言えた。

ハルはすごいと思う。

刺々しかつたシランも、寂しそうだったヨミも、俯いてた口ウだつて顔を上げてた。ハルの言葉が優しい空氣を作つたんだ。だから今のハルはとっても良い笑顔だ。

ハルはすごい。

だつてもう皆と友達になつてしまつたから。明日がどうなるかなってわからないけど、とりあえず今は平和だ。ハルの願つた世界はこの瞬間、現実になつた。皆、それぞれの笑顔でいられてる。でも。

ハルが本当にそう在つて欲しいと願う未来は、世界はなんだろう。一生懸命なハルの声が虚しく響いた冷たい部屋。

それを思い出し、オレは心の隅っこでハルの笑顔が全部本物になる未来になりますようにと願つた。

030 腹田も藤原か【紫蘭】（前書き）

どうでも真っすぐい。
大切な人のために。
そんなシランの第三十話です。

〇三〇 脳田も振りか【紫蘭】

滞在一日目。

……長い。

灰色の憂鬱な廊下は延々と続き、カツカツというブーツが床を蹴る音が響くだけだ。

また曲がり角。しかしその先はまた灰色灰色灰色。

「壁くらい白か他の色にしろよ」

苛々と無駄な悪態が思わず口をついた。無限にループしてるのではないかと疑いたくなる程不可解な建物だった。とにかく切れ目なくひたすら廊下が続く。

「……どうだい？」

と呴きながらも足は止めず、灰色の世界を闊歩していた。

扉はたくさん見掛けるが、しかし昨日訪ねた司令室とやらがなかなか見付からなかつた。一応昨日の道を遡つていたはずなのだが、どこかで記憶違いがあつたのか、いつの間にか全く見覚えのない場所に来てしまつた。扉の間隔はやけに広い。会議室とかそういう大部屋の区画なのか？

しかし、だ。

「何故朝の六時だといふのにここまで人気がないのだ……」

珍しくシンが寝坊していたので単独行動が可能になつたのは良いが、本当に誰にも会わない。安全面として大丈夫なのかと疑心を抱いてしまう。

因みに口ウは熟睡だった。早起きなシンに対し、口ウは空腹か誰かが動き出さないと起きない。ほつといたら一田二日は寝ていそうだ。寝る子は育つと言つが、あれは寝過ぎだらう。今までどんな生活を送っていたんだか、とちょっと不安になつたものだ。危険が迫れば飛び起きたのだろうが。

とにかくだ。早々に話し合いに決着をつけて帰る。それだけが俺の為すべきこと。ここまで来てしまつたことへのけじめだ。早くもここに来たことを後悔し始めた。妙な対立や人間関係。何やらきな臭い空気が漂う、危なつかしい組織。長く居てもろくなことにならないだろうし、最悪あの司令官様の作った落とし穴にでもはまつて帰られない状況になつてしまいそうだ。そんなのそれこそ詰みだ。俺は帰らなくてはならない。あいつの日常は、平穏な幸せは、チエックメイトあそこでなければならない。第八特区の住人がいる、あの場所でなければあいつの家にはならない。

「……帰らなくては」

そう、強く思った。

何だか見覚えのある雰囲気だな、と思つてみると田代の扉を見付けられたようだつた。急に狭まつた一直線な廊下の突き当たりの、小鳥のレリーフがある扉だ。小さく息を吐き出すと早速戸を叩いてみる。

「観月だ」
「コンコン。」

「須原美智乃、昨日の続きを話したい」

「コンコンコンコン」。

「開けてくれないか?」

手を止める。しかし鎮まり返るだけで全く反応がない。これは留守なのか。それとも滞在期間を引き延ばしたいがために話し合いをしたくない、という理由で居留守を使っている、とか。

「おい須原さん、観月紫蘭だ、話し合いで来た」

しかし沈黙。

仕方ないので次のアクションだ。俺はドアノブを握った。もしかしたら開いているかもしれない、という可能性があるからだ。あまり良い気分ではないが物は試し。いつまでもここに引き留められているわけにはいかない。

ガチャツ。ガチャツ。

「…………」

やはり鍵がかかっているようだ。どんなにノブを回そうとも、引っ掛けたような音しか返らない

。ならば、としゃがみこんだ。これこそ邪道だが、やううと思えば鍵程度上手く行けば解錠、上手く行かずとも破壊程度は軽いものだ。……流石に破壊はしないが。とにかく一條の光にすがるようにノブの下を覗き込んだ。

「…………なんだこれは」

ノブの下には鍵穴がありそうなスペースはあった。しかし、ない。

鍵穴がない。

俺は腕を組む。これは内側からしか鍵がかけられない作りなのだ

る。だがもし部屋の者が全員退室した場合、鍵は誰がかけると言つのか。密室か。な訳がないだろ？が。こんなところでミステリーしていくどうする。普通に考えて他に出入りがあるんだ。例えば上か下の階に続く階段があつて、私室に繋がっているだとか。あることは。

「みつしー、おひまよおー」

「…………まあ」

シシ「ねえ」も起きなかつた。多分名字と名前から一括りつ取つたんだろ？が。もうどうでもいい。

「お前は一体何がした」

背中にかけられた謎の挨拶にため息を吐きつつ、後ろを見て言葉をなくした。

ピヨコピヨコヒと明るい茶色の三編み尻尾が、女の割に広い背中を見せ付けるように跳ね回る。とても、良く見える。何故なら。

「…………わざわざ後ろ歩きをしてこる理由を、訊こうか……」

「なんだ、って、三編みがうちの特徴やん。早く覚えて貢うためにはやっぱ特徴をアピールしなあかんや」と囁つてなー

背中をじりじり向けて喋る不審者は、器用にそのまま兔跳びで進んでくる。跳ぶ度に三編みがピヨンと跳ねた。

「昨日のあれでもう十分だからこれ以上の奇行はよしてくれ……」

「えー、何やつまらへんなあ」

これ程インパクトのある人間も珍しいだろ？に、こんなに濃い人

間を直ぐに詫わられるやつなんているのか？ そしてここには敢えてやっているのか？ それとも無自覚なのか、このキャラの鬱陶しさは。

神原は何故か渋々といった体で体の向きを修正した。すたすたと近寄つてくる。

「で、お前もここに用か？」と扉を田で示す。「生憎留守のようだが」

「そうみたいやなー。でもうちの用は美智乃やなくて紫蘭くんやで

？」

「は？」

予想だにしない回答に思わず柄の悪い訊き方になつてしまつ。だが神原は朝から相変わらずの半笑いでへなへな笑つてゐるだけだった。

「つか仕事やから制服着なあかんなー思て早起きして、男子部屋覗いたら紫蘭くんだけおらくん。なら美智乃でも脅しに行つたんかなーと思つたんや。どや、名推理やろ！」

「…………まあ、そだな」

「適当やなあ！」

何がツボだつたのか、ガハガハ大笑いする三編みの変人。付き合い切れないでの強引に話題を戻す。

「おい。この扉、外からは鍵の開け閉めが出来ないようだがどうしているんだ？」

神原は田尻に涙を浮かべながらも普通に答えた。

「わざ別の出入口があるからに決まつとるやう。それよか紫蘭くん、よつこじまで辿り着けたな。この辺り、特別複雑になつとつて、一度通つたくらこじや道がわからへんよつなるもんなんやけど」

「別に……昨日の道を辿つただけだ」

「てつあつ迷子になつてゐ思て來たんやけどな」

「……」

否定出来ないが肯定するのも癪で無言で榎原から皿をいぢります。素直やなあ、と笑つて言つてくるもんだから面白くない。

「あは、ふて腐れとる~」

「つるむねこ」

「うん紫蘭くんもかわええな。つちのーいつやつたか。やつぱり年下はええなあ」

「こつが言つとびつしても変態発言にしか聞こえないのは何故だね?……。灰色を背景に、落ち着きなく爪先立ちをしたり戻したりと伸び縮みを繰り返す榎原はしまりのない笑み。

「まそれは置いといて。ほな行こか」

「行くつてどここ」

「紫蘭くんらの部屋や。一人で戻るんは大変やう?」

「俺はまだ用が済んでいな」

「どうせ強行突破でもしない限りあの扉は開かへんし、やつしたつて美智乃が不機嫌になるだけで話し合ひになんて持つていけへんよ。うち、仕事の報告まだやから、そん時に訊いとくで」

動きを止め、わざわざ下から覗き込んでくる榎原。真剣な眼差しだあるし、ふざけることがあっても嘘は吐かないだろ?と思つ。下手そうだし。

「な、ダメ？」

しかし、おじけたよつた言ひ方があざわら手だ。口はすりぱり真っ向から堂々と行けばいいだらうに、ざつこて下から田線なのだ。

「およ？ なんかシーケン、不機嫌？」

「お前の、な」

「ん？」

「お前のその逃げの姿勢がオレは大嫌いだ」

「ぐああーん！」

「……は？」

「ショック！ ショック受けとんのや、ガーンて！」

手を振り回して説明してくる榎原に、何だか白けさせられる。こいつは眞面目にやると死ぬ、不治の病にかかるとかいう事実でもないだらうか。その方が納得できるんだが。

「紫蘭くん！ うちのこと嫌いやのー。」

「まあ、どちらかと云ひつと」

「ガガガガーンー！」

グレードアップしたらしい。

「なんでそういうとこ素直なんや！ しかもツンデレ解釈もできひんような微妙に生々しいアンサーやなんて。そんな酷い人だつたやなんてーー！」

「もう勝手に喚いてる」

付き合ひきれないほどばかりに踵を返した。こいつと話してると非常に疲れる。すたすた歩き出すと、待つてえな、と榎原が追い縋ってきた。粘るな。

「なあなあ、また迷子になるで？ そりやつてどんどん紫蘭くんが迷子になつたことが広がつて、最後には『觀月鐵の息子は方向音痴で、本部棟で迷子になつたんだつてー』てな噂で持ちきりになり、密かに連綿と語り継がれる伝説になるんやで？」

「……それは脅しか？」

「ん？ なんで？」

自分がその噂を流布するぞ、という脅しだ。しかし本気で全く考えていなかつたのか、ぱちちらとした明るい瞳を瞬かせる。天然、なのか……。

「これはこれでまた質が悪い……」

ぼそりと呟くと、やはりしつかり聴こえていたようだ、半田につた榎原が低い声で問い合わせた。

「なんやてえ？」

面倒なことになりそつたので早足になる。突き当たりにある窓から見えるケヤキの木を見て確かに右だつたかと思い出し右折した。

「シラーン、左やで？ マジで方向音痴だつたりする？」

「……」

沈黙は雄弁に語る。それは何だか嫌なので俺は悪あがきのよつこ口を開いた。

「残念ながら否定する材料は、ない」

寒い風が、この長大な廊下を吹き渡つた気がした。
暫く気まずい沈黙に包まれる。しかし榎原は果敢にも口を開いた。

「訊いてもええか?」

「却下だ」

「……本当に嫌いなんやな、うちのひと」

「まあまあな」

しおぼくれる榎原を先導に、ゆっくりと歩く俺。灰色の廊下は相変わらずだが、時間の経過に伴い、ちらほらと住人と呼ぶか職員と呼ぶか。若草色の制服にワッペンを付けた人間がせかせかと歩く姿を見掛けるようになつてきた。

「おはようございます!」

「おっ、はよー!」

とひらひらと手を振つて応える榎原に急ぎながらも勢によく頭を下げ、ハキハキと挨拶をしていく制服姿の女性。なんと云つか。

「案外慕われているんだな、お前」

部下が可愛いとか言つていたのもそれなりのことはしているからこそこの台詞だったか。

「いんやあ~、それほどでも~、あるでえ?」でれでれと、えへえへと、締まりのない笑顔で頭を搔く榎原。「頑張つてるからなつ。」んぐらこぢりやほやされるんわ、まあ、普通やなあ。でも特に女の

子は……ええなあ

「お前は絶対に女の分類に入る人間ではないどころか、人類の枠にすらいれなくなるな……」

「うちは人間やで！」

プンスカという効果音でも付きそうな怒り方だった。自称人間の榎原は、肩を怒らせて、不満そうに歩く。三編みが随分と景気良く揺れていた。

「もう言えば……」

「ん、なんや？」

思ひ出しつゝ口をついたが、言ひるのは憚れることだった。しかし榎原はきょとんとした顔で首を傾けるだけだ。

「別にうちは『お前は既に死んでいる…』とか言われてもちゃんと受け切る自信あるで！」「グッ」と親指を立てる。「どんと来ーい！」

誰かの台詞なのか、『お前は』の下りだけ無理矢理な低い声で言つていたが、とにかく無駄にテンション高め。何を受け切るだのんと来いなのやらさつぱりわからない。

「ひああ。そんな冷たい目で見ないでえな。うひ、もううう『ふうん』みたいな冷めた対応がうひうひ苦手なんや！」「

「なら対忾に困る発言は自粛しろ」

「なんやつて！ そんなんつまらへんやないの！ 当たつて碎けるんや！」

「もう勝手に碎けてるよ……」

「ほりあー。ほりほらまたその田代ー。ランランのドードーー。」

また呼び方が増えてるよ。『ランラン』ってなんだよ。

じと目で淡々と視線を送つてると、榎原は「いーやー」とか言って顔を手で覆い、いやいやと全身で表現していた。口ひつ揺れるのが好きなのか……？

しかし唐突にぴたりと動きを止めるとそつと指の間からあのぱつちりとした目を覗かせた。ちよつと怖いが、見た目。

「さつさの『さつまえば』の続きを、きこわやあかん？」

「……そんなに気になるのか？」

「うん」

真っ直ぐで澄み切つた、まるで小さな子供のような純真な眼差しに面食らつた。俺より年上で、ちやらんぽらんなイメージで、言つてることは大抵滅茶苦茶、やつてることも無茶苦茶。なのに急にそんな顔をするのかと。

掴み所のない女だとほとほと思ひ。

「お前が嫌な気分になる話だぞ？」

「そんなん聞かなわからへんて。それにひか、気にせえへんし」

「……それが気になるんだ」

「あはは、シラソつてばやつさーーー」

笑つてるはずなのにどうしても笑つてるように見えない榎原の顔が、悲しい。どうしてここつはいつもそんな感じなのだ。何だか榎原がヨミにいの一一番に友達になろうと言つた理由がわかる気がする。似ているんだ、二人は。

でも似てない。何故なら片方は怖がり、片や強がりだから。でも、生き方が似ていると思つ。彼女らは悲しい時も、苦しい時も、怖い時も、寂しい時も。

全部笑うのだ。

どんな時でも笑うんだ。

それしか知らないかのよう。まるで自分を殺すよつ。俺には出来ない生き方だ。シンも悲しかつたら泣き喚くし、口ウは嘘つきが嫌いだから無理に笑つたりしない。

「お前のそういうところが……嫌いだ」

「うええ！ なんでこの流れでまた嫌い宣言出るんー？ はつ！ もしゃシン げふつ！」

腹を小突いた。美崎以上に鬱陶しいわ質たちが悪いわでもう二つ、嫌。

「し、し紫蘭がぶつた！ あのフユミースト紫蘭が！ 略してフュランが！」

「略すな」

「ええやーん。でもただ略してもつまらへんよなー。なんかええ略あらへんかな？」

「はああああああああ～」

「うわっ、超特大ため息ー！」

もう畠に穴が開きそう。きつと相性の問題なんだ。ユミや口ウなら全く問題にしないのだろう、やたらと話を脱線させたり相手の嫌がることを繰り返す二つの相手をしても。

でも俺は無理だ。二つやつは大の苦手だ。

自分もろくなこと口こじない氣がする。幸い見覚えのある景色になってきた。

「あとせーの右手にある階段を下り、その先の角を曲がって暫く歩けば俺達が借りてる客間。合つてるとか？」

「合つてるけど、なんでや？」

「もう道はわかる。だからお前はもう仕事に行け」目を合わせようとしてくる榎原から逃げるように顔を背けながら。「もう俺は大丈夫だから。流石に方向音痴でもそれだけわかつていれば大丈夫だろう?」「…………

返事がない。怪訝に思い前に顔を戻すと。
ぼろぼろ泣く榎原がいた。

「さ、榎原?」「それ、それも、嫌やねん、名前で呼んでえな、ハルハル呼んでえなあ」

なんで泣いているんだ? 訳がわからない。音もなく、ただただボタボタと涙を落としていた。

「うちはウザいって知ってるけど、でも笑ってるしかあらへんし、楽しそうにしてなきや挫けてまうような氣にするし、本当に弱虫なんやけど」それでも真っ直ぐ俺の目を見詰めて。「でもシラン君に嫌つて欲しくない。うちのことは別にええけど、こことか美智乃のこと、嫌つて欲しくないんや。うち、我が儘で嫌な奴や。だからうちだけにしてな。帰りたいって思うなら、うちが帰すから、何とかするから。だから」

ああ、こいつ以上の馬鹿はいるのか、と思つた。だから「お前は阿呆だな、真性の」と言つた。そして本当に天の邪鬼だ。

「お前、言つていることが間違つているぞ」

「な、なん?」

「一点だけ、間違つている。お前は嫌われたくないんだろう? 組

織や友人だけでなく、自分も好きになつて欲しいのだらう。なのにどうして自分を傷付けるようなことを言つゝ、そんなお前は阿呆としか表現しようがないだらうが」

呆然とした榎原の間抜け面を見上げる。情けないくらい涙でぐちやぐちやな顔だ。

「お前が我慢したり想いを圧し殺す必要はどこにもない。もつと素直に生きろよ」

「……あはっ。シラン君に言われたか、ないわあ」涙に震える声、でも喜色も混じり、ちゃんと笑顔だった。「シンデレ王子がよく言うわ」

「俺はシンデレでも王子でもない。それに……お前、自分で言つておいて自分はそうしないなんて不公平だぞ？」

「な、何が？」

「シラン『君』ってなんだよ。呼び捨てにしろ。でなければ俺は延々と榎原と呼ぶが？」

もづ、泣いていなかつた。我慢出来ない笑みが溢れていた。

「ほんまシランはシンデレやな！」

榎原は、ハルは笑つていた。夏の太陽のよう。

訊きたかったのは何故化物と呼ばれたことがあるのか、だつた。しかし訊くのは憚られ、結局口にせず、部屋前に辿り着いた。窓も

ない灰色の殺風景な廊下。等間隔に並ぶ無機質な乳白色の扉。

その前に赤銅色の髪をした少年が一人俯き、座り込んでいた。

「シン……？」

俺は慌てて駆け寄る。パツと見た限り怪我はないようだし、服も汚れていない。一体何があつたのか、と考えていろいろと引きなり抱き着かれた。

「どおお」行つてたんだよおおおおお……」

ぎゅう、とベストが掴まれ、顔が強く肩に押し付けられる。冷たかった。シンの田元は濡れていた。

「…………悪い」

「居なくなんないでよ、消えないでよ、心配するだろおおお……」

ひつくひつくと泣きじやくるシンに、何を言つていいか分からず、沈黙する。情けない。俺は情けなさ過ぎる。一体俺に何が出来るといつのまにか慰め方なんて知らない。今も昔も。

シンが落ち着くまで、俺はただ影像のように手を垂らしていくだけだった。

「い、めん、なさい……」

田元を乱暴に拭おうとするシンを止め、カバンから手拭いを出し、拭いてやる。

「何故謝る。お前に非はないだろ」
「うん、シン悪い……」

お前なあ、と苦笑したがシンは思い詰めたような固い表情のまま
だった。自然、眉尻は落ちる。

「どうしたんだ、何があつたんだ?」

「シランが置いてつた

「で?」

「……それだけ」

「それだけ? 本当にそれだけか?」 いぶかしむよつに皺を寄せで
顔を近付けた。「何かあつたんじゃないのか? 無理して隠し事す
るな。言いたいことはちゃんと聞け!」

「じゃあ、言ひなさい」

「ああ

「シランの鈍感! バカ! あほおおおおー!」

こきなり叫び出したかと思うとシンはダダッと駆け出して行つてしまつた。バタンという音が廊下の奥から響く。ミミの部屋に駆け込んだようだつた。

「……何なんだ?」

「いやあ、流石にうちでもわかつたんやナゾなあ

ハルまで呆れ顔だ。一体何だと叫ぶんだ。つい憮然とした顔にな
るが、俺は仮に自室になつている部屋の戸に手をかけた。

「あれ、追い掛けんでええの?」

「そうだな」 やつぱり覗き込もうとしてくるハルから視線を反らし
て鬱々とした気分のまま言つた。「しかし俺はこれ以上ろくなこと
を言わないだろ? だからそつとしつくのが最善だ」

「まあ、ええけどや、きっとシンはシランに声かけて欲しいと思つ

で？」

「……仕事行け」

「それもそりやな。ま、頑張れやシラン」

すつと離れたハルを田で追うと、歯を見せてにっこり笑っていた。

「ほな、またな～」

ぱたぱたと手を振ると、ハルは小走りで去つて行った。本当に大丈夫なのか、と思う。須原の次の次に偉いんじやなかつたのかと。

「慌ただしいやつだな」

「賑やかで、楽しい人だよね～」

「つ！」

のほほんとした顔でいつの間にか背後にロウが立つていた。手には何故かお盆と食器四セツトで作ったタワーがある。

「全くもつ。シラン、勝手にどつか行っちゃダメだぞ。シンがすつごく心配するし、ロウもそこそこ不安に思うんだぞ？」器用にバランスを取りながらロウはすたすたと近寄つてくる。「で、スハラさん見付かった？ 話出来たか？」

「……いや」

「（）でもお見通しなのか、と苦く思つ。そんなに俺は馬鹿で阿呆で单細胞なのか。どうしようもない人間なのか。いや、わかついたと言えればわかっていたが……改めて突き付けられるのも結構心に來るものがある。

「とにかくシラン、（）飯食べよ。まだでしょ？ 折角四人分、頑張

つてもうひて来たんだからね。食べないなら勿論もりひなだ

「いや……ありがとう、頂こう」

「うん」二つこいつと満足げな笑顔で頷くと。「じゃあひなだ」アナチュラルに鉄槌、いや、判決だらうか、それを口ウロ下した。

判決は鱗の部屋を示していた。

「……氣まずいんだが」
「ちやんと謝ったか?」
「……………」
「はいじやあ行こうな」
「まだ全部言つてないだろ?」
「口ウガ『一応』を認めると思つてるのか?」

振り返つた黄玉の瞳は怪しい光を湛え、一瞬金色にすり見えた。蛇に睨まれた蛙。

そんな言葉が頭に過る。俺は気が付けば素直に頷いていた。すると口ウはへにや、といつもの癒しな笑顔に戻ると、三三の部屋へと足を向けた。

俺は氣を抜くと溢れてしまつたため息を呑み込み、何と謝罪するかに頭を悩ませることにした。

031 傍に居たいだけ【真】（前書き）

何にもわからずただ生きてる。

すがる思い出も持たず、目指すものもなく。

何のために生きているかわからない世界は灰色だったんだ

。

泣き虫真太郎の第三十一話です。

031 僕に居たいだけ【真】

今日もシラソがいなかつた。

泣き喚いたつてシラソは戻つてこないし、慰めにもならない。
もう泣き疲れた。

それが滞在三日目の朝のこと。

「元気出してシン。シラソはほつといても大丈夫だろ?」
シロは口ウがついてるや?」

「……ありがと」

でもオレは笑い返すことも出来ず、ただ俯いて、うつすら笑おう
としたように顔面がひきつつただけだった。嬉しいはずの言葉さえ
素直に受け取れない、喜べない。オレ嫌なやつだなあ、と余計に落
ち込む。

「……口ウ居ても、何にも出来ないのかな?」

「……」めん、わかんない

膝頭に顔を押し付け、くぐもった声でオレは答えた。口ウが心配
して隣にいてくれていることを感じる。でも顔を上げる気力はない
し、ずぶずぶと沈み込むだけだ。

どうしてシラソはわかつてくれないんだろう。

昨日だつてちやんと謝ってくれたんだ。申し訳なさそうに、いつもは無駄にピソと跳ねている眉をへなつとさせて、頑張つて言葉を選んで。

なのにシランは今日も、昨日なんて何にもなかつたかのよつに行つてしまつた。オレを置いて行つてしまつたのだ。もし田の届かないところでシランが危ない目に遇つたらどうしよう。もしもシランが……いなくなつちゃつたらどうしよう、なんて。

考えたくないよ。

考えさせないでよ。

やだよ。

シランはビリうじて一緒にいてくれないの？

「……あ、れ？」

ふと顔を上げるといつの中にか口ウの姿がなかつた。隣の部屋も、人の気配はない。シランも勿論いない。

オレ、独り？

サーーと血の気が退いた。鏡を見るまでもなく顔は真つ青だらつ。もしかしたら土氣色かもしだなかつた。

「シランー！」

返事がないとわかつていても呼ばずにはいられなかつた。オレは堪らずシランの密室を飛び出した。大嫌いな灰色一色の廊下が出迎え、ギヨッとして思わず一步後ずさつたが、直ぐにまた走り出した。

「シランー、シワアアンー！」

廊下を行き交う草色のお揃いの格好をした人たちが変な目を向けてくるのが、意識の隅っこでまだ膝を抱えてる冷静なオレは認識出

来ていた気がする。

でもダメだ。普段の感覚は全部へそ曲げて仕事を放棄している。今仕事をしているのはろくでもないのばかりだ。いつもは宥めて諭しておやつをあげて、無理矢理心のどこにある箱の中に押し込んでいたやつら。そいつらが総出で孤独の看板を振りかぶり、オレを内側から壊そうとしているんだ。

だからオレはたった一つの名前にすがるしかない。だって世界を変えて、オレの目を覚ませて、手を引いてくれたのはその人だから。独りの虚無から掬いあげて、平穏をくれたのは誰でもない、シランだつたから。だから。

「シラアアアアアンンンン！」

頼むから。

「シラアアアアアンン！」

お願いだから。

「シラアンン！」

応えてよ。助けてよ。

「シ、ラン……」

傍にいてよ。

安心させてよ。

また呼んでよ。

名前、呼んでよ。

それだけで良いんだ。それだけを望むんだ。だって……。

もう独りは、いやだよ……。

叫び疲れてとぼとぼ歩いている時だった。

「どうかしたの？ 泣いてる？」

「……ふえ？」

のろのろと顔を上げると、針金みたいにピンと長細い男の人気がいた。

真っ黒いコートに身を包むその人は本当に細く、背はオレを優に越していた。しかし顔は何だかやたらと幼い印象で、顔だけなら口と並べても違和感ないだろう。夜が溶け込んだような黒い瞳はすうっと細く澄んでいた。

不審者だ。そう思った。制服を着ていない人をここで見たのは初めてだった。

大男と呼んでいいくらいの長身だが、顔がそんな印象を打ち消すので何だかちぐはぐ。針金みたいだからとりあえず針金男としこう。なんか長細くて簡単に曲がりそうだから。それでいて簡単には折れそうにない固さみたいなものを感じるから。

針金男、は。

暗雲みたいに垂らしたちよつと伸ばし気味の闇色の髪に封をするような、焦げ茶色の地味な鍔付き帽子を深く被り直すと、鍔の陰の

下から覗く、細めた瞳を下へ向けた。つまりオレを見下ろした。

「ねえ、どうしたの？」

マイペースな、おつとりと間延びした声で再度尋ねられた。オレは急に恥ずかしくなって俯いた。

「な、何でもない！」

田畠がして、今にも崩れ落ちそうなくらい疲れていることに急に気付き、オレはよろよろと廊下の端へ寄ると、膝を抱えて座り込んだ。ちよつとだけ落着く。少なくとも世界はぐいぐいせんぐるもしない。ただ。

何故か針金男までよろよろ歩ってきて、オレの隣にぽつと腰を下ろしたのは想定外だった。

オレは田を丸くしてそいつを見上げる。真似なのか同じように膝を抱えてくる針金男は、それでもオレより頭の位置はずつと上だつたし、膝の高さも勝っていた。

長い、長すぎる。

「なんだよお前……」

「僕は怪しこけど、君に危害を加えたりはしないよ

「普通自分で自分が怪しいこと、認めるか？」

「怪しくないって言う方が怪しいよ

「怪しつて自称する方が怪しいじゃん」

「そうかな？」

「…………」

「やつか

針金男は細めた瞳をぱり、ぱり、とゆっくり瞬かせた。

「とにかく話すだけで何もしないから、安心してよ」

「……うん。わかった」

あんまりこの問答は意味がないだろ?なと思い、こくんと頷いた。針金男はにこりともせず、淡々と視線を送つてくるだけだったが、何故だか目の奥の黒は深いのに温かく、怖さはなかった。真っ黒い炎が光が灯されているみたいだ。

不思議な闇を湛える不審者を、不思議そうに赤銅色の濁つた瞳でオレは見上げた。

「何かあつたの?」

三度目だ。

見掛けによらず相当なお人好しなのかなと思いつつ、何と答えようかと困った。上手く整理出来ず、ぽつぽつと話し出す。

「シランに、置いて、かれて……」

「置いていかれた、ね。『シラン』って人名だよね。それは大切な人?」

「うん、大切な人」

迷いなく肯定すると、少しだけ針金男の口元が緩んだ。大切な人がいることは良いことだ、と大きく頷いてくれた。その動作はコックン、という感じで何だか人形っぽく、人間味が薄くてほんの少し怖い気がしたけど、本心からの同意なのは真っ直ぐに伝わってきて、ちょっと嬉しかった。

「じゃあ、どうして泣いていたの?」

小さく首を傾けて、ぼくとした調子でまた訊かれたのでびっくりした。

「え？ だから、シランが……」

「それは原因で、泣いていたのは結果だよ。原因でどうだったからその結果に行き着いたの？ つまり、何が“理由”だったの？」

濡れたような黒瞳の奥にある不思議な光がちらりと揺れている、気がした。

「置いてかれて、悲しかったのか寂しかったのか怖かったのか怒りたかったのか嬉しかったのか苦しかったのか、とか。理由はいろいろあるでしょう？」

「置いてかれて嬉しくて泣くわけないだろ！」

「そうかな？ 一概には言えないし、可能性はどんなに確率が低くても、その可能性を捨て去れる要素がない限りは無視すべきでないよ」

「や、や……」

ちょっとだけ高めな針金男の声はよく通り、耳にすっと入つて来るに止まるのだが……なんか面倒臭そうなことを言つてゐる気がする。

「ほら、置いていかれた君は何を思つたんだい？」

「そりや、悲しかったから、泣いてたんだよ」

「そり？ 別に涙は悲しい時にしか出ないものではないよ。演技ですり出すことは可能だしね。楽しくて笑つても、涙は出ることはあるよ。頭(じ)なしの否定や決めつけは、あまり良くない。それに、理由は一つとは限らないどころか、たつた一つの純粹な理由であるこの方が難しい」

「何が言いたいんだよ、お前……」

当惑したオレの顔を見て、針金男はちょっと考えるように視線を上に上げた。その横顔はほんの少しだけ申し訳なさそうな、決まりの悪い表情にも見えた。

「そうだね。つまり僕は疑問を抱いてるんだ。確かに君は悲しんだかもしないし、純粋にそれだけの理由だったかもしないけど、他の理由もあるんじゃない？ それに悲しいにもいろいろあるよ」

……それは気のせいだったかもしないけど

なんなんだ？ こいつ何者なんだ？ それにどうしてこんなに詳しく訊いてくるんだ？ 訳がわからない。

針金男は退き気味なオレの反応に、小さく首を傾げた。

「ごめん、嫌だったかな？ ただね、理由はつきりさせといた方がいい。口に出せる形にしておくのも大事だけど、せめて自分の中に答えがあつた方がいい」

「どうしてさ」

「勘違いや間違いがあつたら、悲しいし、後悔は少ないに越したことはないでしょ？ 自分の感情を知り、相手の考えを知ることは、とても大事なことだよ」

とても、大事。知ることは。

そんな言葉に、視線は自然と下へゆく。ツルツルとした妙な質感の床を見詰めながら、考える。

自分が何を思つたか？ それを知る。

でもそんなこと、決まつている。悲しかった、悲しかったさ。シンランがないなくて、口ウもヨリもいなくて。また、独りになつたみたいで。

「怖かつたんだ……寂しかつたんだ、本当は」

透明な霊がぽたぽたと落ちていくよ。澄んだ思いがぽっぽつと口から溢れていく。

「シラソがいないと世界がまた大嫌いな灰色になっちゃいそうで……もつこや。独りぼっちはやだよ。シラソいなきゃ、オレ、だめだ……『シン』って呼んでくれないと」

また戻つてしまいそうで。

何もなかつたことになつてしまいそうで。世界が色褪せて消えてしまいそつになる。

それが怖くて怖くて仕方ない。恐ろしくて仕方ないんだ。

「なら、そう言わなきゃ。伝えなきゃ、伝わらないんだよ」

不思議だけの人の言葉は本当にすんなりと心に染み渡る。飾り気なんてない。けどその分純粹で、温かさが真つ直ぐに伝わってくる。

氣負うことなく、しかし透明ではない、芯のある瞳がオレを映した。

「だから君はその人に今度会つたら記くんだよ、『どうして僕置いて行つたの?』つて」

その言葉も染み渡る、のだが……。

「……オレ、『僕』じゃない

どうも素直になれない自分が変なところで挙げ足をとる。それで

も針金男は変わらず続けるだけだ。空氣に搖りさわらない。嫌な顔一つせずに訂正する。

「じゃあ『じうじてオレを置いて行つたの?』だね。そしてちゃんと理由を尋ねるんだ」

「……もしも、納得出来ない答えだつたら?」

「そつ素直に言えばいい。納得いくまで、いくらでも、何度も。脱線した話も、くだらない話でも、いっぷこするといい。仲違いをしてしまつことを恐れちゃだめだよ」

彼は闇が棲む、細い黒い瞳を遠くに向け、優しい聲音で懐かしむよつこ、やんわりと瞼み締めるよつこに言つた。

「大切な人と大切な時間を過ぐすためには、必要なことだよ

夜の湖のような瞳がまたオレを映す。

「君はまだ大きくなれるんだから、あんまり怖がらなくていいよ。いろんなことがあって、人生だから」

「じいちゃんみたいなこと言つな」

そんなことを口にすると、針金男は小さく微笑んだ、と思つ。和らいだ田元はひどく優しかつた。

「僕は見た目に反して結構長生きだからね。お爺さんみたいなことを言つてしまうんだ

つい。

「……きかなきや、だめかな」

ぱつりと溢れた言葉に、彼は真摯に答えた。

「一方通行じゃ、だめなんだ。ちゃんと相手の思いも受け取らないとね。それはやつぱり、とてもとも、大事なことだよ」

「でも……」

「怖い？」

「怖いよ」

「でも逃げるのは許さないよ？」

急に獵犬のような怪しげな煌めきが黒い瞳に灯り、オレはギョッとした。まるで怒った口ウみたいだった。

「大切な人は大切にしなきゃダメなんだよ。だからちゃんと向き合つて、知つて、君も彼の望みを知らなきゃいけない。どうしても」

しん、と再び静まり返った湖は、朝日を浴びてキラキラと輝くようだ。

「君はそれを望んでいるはずだよ。それは一緒にいるための一つのルールだ」

大切な人の思いは、絶対に守られなきゃいけないんだ。

どこか自分に言い聞かせるような台詞だった。落ち着いた瞳も、その一瞬だけは激しく燃え立った。

彼の雰囲気は本当に森の主のように、泰然とそこに在る湖のようだ。しかしその奥には決して譲れない激しいものが秘められている。絶対という言葉を使ってまで、自分に言い聞かせるように口ににする、搖るぎない決意。

オレはそれを知っている。

当たり前だ。

だつてそれはオレの意志だから。

「オレ、シラソ守りたい」

けど、うう。それだけじゃ守れてない。だめなんだよ、独り善がりじや、自分勝手な正義じや、だめなんだ。

だから、だから。

平淡な色の薄い唇がそつと笑んだ。真っ黒な瞳は漆黒の鏡だ。焦るオレが映し出されているのが見えた。

「まあ、ゆつくつで良いと思ひよ」

柔らかな声が、優しく頭を撫でるよつて耳に届く。

「君はまだまだ子供だから。でも、ね」

彼は急に目を閉じた。いや、きつとただでさえ細い目を細めただけだ。うつすらと覗く黒がオレを射る。

「君らの時間が永遠ではないことは、知らなくてはならないよ。それは子供でも大人でも、無条件に、無情に、時には理不尽に、襲つてくる化け物だから。逃げる術は」

誰にもないから。

その言葉は心臓を貫くようだ。無意識の中に胸元をギュッと握り締めていた。服に皺が寄るだけで済まず、気を抜くと破つてしまいそうだった。

シランがないなんてこと、考えられない。シランがない世界

なんて。そんな未来、信じたくない。想像したくもない。

でも。知っている。

永遠はないってこと。

どんなに強いシカだって死ぬしクマも死ぬ。花は散るし草木も萎れ、やがて死ぬ。いつかは死ぬ。どんなに自由に空を飛べる鳥だって、永遠には飛べない。遠くない未来に墜ちるのだ。そう決まつているから。

運命つてやつなんだ。

だからシラソだつていつかは時間の闇に、運命に呑まれてしまつんだ。

抗いようもなく。

必然という理由を押し付けられて。

そんなの、いやだ。信じたくない。いやだ。言うな、教えるな、そんな優しさいらない！ やめろ！

なんて。

叫べるはずもなくて。その優しさを踏みにじる勇気もなくて。ただただ膝を抱えて、懸命に堪えるオレを針金男は切なげに見ていた。

「難しいことだけど、悔いなく、一瞬一瞬を大事にしなければならないんだよ。特に君は、きっとそういうなんだよ」

「なんで、オレは違うみたいに、言うんだよ……」

ギリギリと引き締められる内臓の痛みに喘ぎながら、けれどそれは幻想なんだと理解しながら、無理矢理針金男を下から睨むように見えた。

答えなんてわかっているのに。

それでも確認したかったんだ。

「推測だけど、君は人間でも僕らでもないでしょ？ だから

彼は秋風のように飄々と、何でもないようになつた。

オレは苦しくて痛くて悲しくて哀しくて、行き場のない幻痛に涙をこぼした。受け流すことも誤魔化すことも出来なくて、胸が張り裂けそうで、いつそそくなつてしまえば楽だつた、そんなこともなくて。

ただうずくまり、自分にしがみつくことしか出来なかつた。

彼はオレが落ち着くまで傍にいて、オレがやつと普通に息が出来るようになると静かに立ち上がり言つた。

「どんなに辛くても、苦しくても、怖くても、逃げちゃダメだよ。絶対に後悔するから」

オレは顔を上げられず、膝頭に押し付けるだけだつたけれど、きっと彼はやつぱり笑わなかつただらう。ただ淡々と、けれどどこか力強い光を秘めた無表情で、言つたのだらう。

「でも大丈夫だよ。君の強さを信じてあげて。誰だって大事なものがあるんだ。誰でも、大事なものは大事にしたいと、素直に願つていいんだよ」

頑張つて。

そんな言葉を残して去つていいく彼の背中に、オレは小さく「うん」と応えた。

「シンー やつと睨つけたあ」

声がしてゐる顔を上げると、へこやつとした安堵の笑みを浮かべた口ウがいた。少し疲れているみたいだ。それでもちつとも速度は緩めず、結構なスピードでオレの前までやつてくると急ブレーキをかけて停まり、口ウは膝をついてオレの田の畠をに合わせた。錆びたような黒い髪の下に、虚ろに濁つた赤い玉がはまつているのが映し出されてるのが見える。

心配そうな黄玉の瞳が微かに歪んだ。でも直ぐにいつものしゃんとした、お兄ちゃんのようななじつかり者の顔になるとオレの田元に触れた。

「むづ、痰でぐりやぐりやじやなこか。部屋で顔を洗おう。腫れてるわ」
「すぐ、浴ぬるよ」

田の畠といふて腐れたよひこ糞の口ウせ腰に手を抓り、ひみつと怒つたように眉間に小こなしづわを寄せた。

「だーめっ。確かに直ぐ浴ぬるのだかど、ちやんと顔洗つて冷やした方がすつかりするよ。そのままじや、だめだよ」

それに、と続ける口ウを見て、母ちゃんみてえでもあるなー、とか呆けた思考が眩いでいた。

「こくらシンが丈夫だつて言つても、今日は真冬の寒さだよ、雪降るかもつてくらいだぞ? こんな寒いことひきはずつと畠たら動けなくなつて、寝ちゃつて、風邪ひいちやつかもしれないよ」
「ほのくらごで風邪なんかひかねえよ、シランじゃなこし」

そう自分で言つてから、はつと氣付き飛び起きた。近くで覗き込むようにして口ウは驚いて尻餅をつく。けれどオレの頭は今気付いたことでいっぱいだった。

「やうだよ！ シランどに行つてんだよ！ 本当にカゼひいやうじゃんか！」

どうしようどうどう、とあたふたしていると口ウが嘆息しながら起き上がった。呆れたような、でも優しげで、悲しげでもある月色の瞳が諭すようにオレを映していた。

「大丈夫だよ。シランだつて馬鹿じやな」

「バカだよ！ 何かに夢中になると周りが見えなくなつて自分も見えなくなつて、一つのことにも全力注いじゃうバカだから充分ありますー。」

やばい早く搜さなきや、と焦る。しかし太く小さな、コンパクトな感じの手に、がつしりと肩を掴まれた。口ウはオレ以上に焦つたような、怖い顔をしていた。

「待つて！ ねえ、氣付いてる？ シン、すうじく顔色悪いよ。死にそなぐらじ調子悪そうな顔してるんだぞ？」

「だからなに！？」

思わずまた叫ぶと、口ウは酷く脅えた顔をして、オレは呆気に取られた。それでも無理矢理言葉を続けた。

「オレはそんなんじや死なないけど、シランは簡単に…」
自分の言おうとしたことに気付いて一瞬息が詰まつた。「…だか

「う、オレが守んなわやー。」

「本気で、そう思つてゐるの?」

「え……?」

泣きそつた顔で見上げる満円は、見間違によつたのによつた哀しみを湛えていた。口ウはそれを隠すよつに顔を伏せると、オレの手をギュッと握つた。

小さな小さな手だつた。

「シンだつて生きてるんだぞ? 簡単に死んじゃうんだ、生きているものは皆……だから、皆頑張んなきやいけないんだ。」

何かを吐き出すよつて、口ウは弱々しくオレの手を掴んで言つた。

「生きる」ことを

それは途方もない、きつと口ウ自身にも理由のわからない重みがあつた。さつきの針金男の話と被るものがあつて、どこかがキリキリと痛む。そんなやり場のない痛みを適当に胃のせいにして噛み殺すと、無理矢理口ウに笑いかけた。

口ウは顔を上げない。でもその方がいい。きつとろくな笑顔になつてないから。慣れないことはするもんじやない。それでもそうしたかつた。

そうでもしなきや一緒にこの寒さに押し潰されてしまつたつだつたから。

「オレはこつとも一生懸命だよ。生きる」と、頑張つてゐよ。だから大丈夫。そうだろ?」

しばらく沈黙が続いて、何かが切り替わつた気がした。口ウはゆ

つくりと顔を上げた。そこにあるのは明らか過ぎる作り物。貼り付けたような、取つて付けたような笑顔だった。

ひゅお、という変な音がして数瞬後、それが自分の呼吸音だったと気が付いた。

完璧過ぎる笑顔の仮面が怖かった。

「ねつだな。シンは頑張り屋さんだからな」「

「口一一口とする言葉と、口ウの奥の方にある心の温度との酷い落差にクラクラした。

「口ウ、笑うなよ……無理して、笑うなよ」

「シンが言わないでよ。シンだつて無理して笑つたじやない」

「違う」

オレはそんな完璧じやない。感情を圧し殺したわけじやない。ただ面を取り繕つて、ただ口ウに笑えるだけの力をあげたくて。それだけだつたのに、どうして。

「じつしてそんなウソで笑うの？ オ、オレ、そういうのこやだ。口ウも、知つてるだろ？ だつて、いつも」

「笑顔は得意だぞ？ いつもはもうちょっと上手なだけ。それにな

絶対零度の笑顔なんてのがあるだなんて、オレは知らなかつた。瞳だけ全く笑わないのに、きれいな笑顔だつた。

「口ウ、シン達が思つてるほど、いい子じやないんだぞ？ 嘘つき狼でも、あるんだぞ？」

そんな言葉が、告白が突き刺さるようで我慢出来なかつた。だつ

てこれはさすとロウにも返る痛みだから。

オレはロウの肩を掴もつとしてするつとかわせれ、逆に手を掴まれるといきなりすんずんと歩き出したロウに止められていた。

「ちよ、ちよと待つて、待つてつたらー。」

足で突つ張るつとするがロウの手は容赦なく引っ張つてくれる。もう声で、言葉で抵抗するしかない。

「ねえ、どうしてそんな顔するのー。泣きたいなら泣けばいいじゃんか！　ねえやめてよ、お願ひだから……」

「シンって我が儘だ。でも、ロウの方がずっと、我が儘だ」「え？」

呆けた顔でロウの背中を見詰める。でもロウは振り向かないし力も緩めなかつた。オレは話を聞きながら引き摺られていくしかない。

「ロウ、シンに泣いて欲しくないんだ。ロウが泣いたら、やつと泣き止んだシンが泣いちゃうから、泣かない。ロウは泣かないよ」

「なんでそんなつ、やめろよそんなのー。強がりやめろよー。」「やだ」

「泣かない、もう泣かない！　オレ泣かないから、約束するから、ねえ！」

「無理だよ。シンは凄い泣き虫なんだもの」

知つてる。そんなの自分がよく知つてる。

手を引く背中を遠くに感じながら、思いを遠くに感じながら、オレは自分を省みる。

わがままなどじょうもない上に堪えるのが下手くそ過ぎて直ぐに泣いてしまう。情けないくらいに心が弱い……アリコンだ。体が

丈夫なだけ。

シランにすがつてよつやく居ることが出来る。ロウやミハがいるからやつと立つていられる。

そんな弱々しい、情けなにやつだ。オレはそんな頼りないやつだ。でも。

「変わりたい」

そう思つたんだ。

「ロウが思つてる程オレは弱くない！」

オレは引っ張つてくるロウの手を逆に引っ張つてロウの動きを一瞬止めると、ロウに迫つてその腕を掴んだ。

もう逃がさない。

手を繋いでいたけど心なんてちつとも繋がつてなかつた。人の話を聞かないロウは、勝手にオレから逃げようとしていた。でももう逃がさないんだ。

「ロウ！ オレ、強いよ。ロウが思つてる程弱くない！」

「……なんで？ 弱虫の泣き虫が、何を言つてるの？」

俯いて発された言葉は床に当たつて跳ね返る力もなく、溶けてしまいそつだつた。それがいやで、オレはロウの腕を強く引いた。いつも向けようとばかりに。

「弱虫の泣き虫だよ！ 知つてる、知つてるに決まってるー。だからだからだからー！」

わがままだ。わがままだけどオレの望みだ。

腕を引っ張られて振り返るロウを見ながら、オレは叫んだ。

どこかへ届けと。

ロウに云われと願いながら。

「信じてよー。」

呆けたロウの目を口を、赤銅色に焼き付けるように、目を大きく見開いた。

「今は弱虫で泣き虫だけど、強くなるからー。強くなるから信じよー。なるって、なれるって信じじてー。」

「今、泣いてる癖に?」

「そうだよつ、悪いか!」

なんでもまだ涙は渴れていないのだろう。

散々泣いたのに、まだ残ってる。ぼたぼたぼたぼたと、情けないつたらありやしない。

でももういい。今はそれでいい。

これからも、それでいい!

「弱さでは泣かないやつになる。甘えで泣かないやつに、泣いても負けない、ドラゴンになるよーだからー!」

弱づちいオレを、まだ見放さないでくれるな。

「見ていて。信じていてよー。」

「そしたら、どうなるの……?」

恐々と、震える声は真っ直ぐ斜め上に、オレに向けられていて。真ん丸なお月さまは今にも雲が溢れそうな、不思議な色をしていて。

オレは涙を溢して笑つて答えた。

「そしたら、強くなれる」

「ほんとうに?」

「ほんとに!」

「単純……ほんと、シンは単純だあ」

「シンプルは良いことだ! シンプルは一番だつて言つだろ?」

「なんか、違うよ」

「うかが? 別にいいだりつ、笑えればさ」

口ウの泣き笑いの顔を見て、オレはお揃いの顔で微笑んで言つと、口ウの手を掴んだ。今度は横に並んで、お互いの顔を見て歩く。元気になつてと願つて、ぎゅっと握つていた。

もう片方の手は、あの人のために。

そんなことが頭を過つてまた痛みが少しだけ戻つてくる。でもオレは口ウの手を離さない。離したくない。

口ウが離さない限り、ずっと、一緒に歩いつ。手を繋いで、オレたちらしい速さで。

どこまでもどこまでも。
限りある時間の中で。

032 馬鹿馬鹿じくて【狼】（前書き）

不器用な彼らの思ひはどこへ辿り着けば救われるのか。
彷徨うロウの第三十一話です。

032 馬鹿馬鹿じぐひ【狼】

「オレ、シランと話せなきや。シランにさかなをやつけないんだ。
『じうじて一人で行つちやうの?』って」

その言葉を口にする時だけ、シンの朝焼け色の瞳は力強い光を秘めていた。
だからロウは。

「じゃあシランが帰つてきたら起じてあげるから、ちやんと休む
んだぞ」

つて言った。
言った、のに。

ロウは約束を破つた。

部屋の四つのベッドは、奥の左手がシラン、その右がシン、シンの手前がロウで使つている。因みにロウの左隣は空いていて、ミハヤハルがやつてくると使つていた。

昨日はシンが寝付いた後、本を読んでも全く落ち着かず、内容が頭に入つて来ないので自分のベッドに腰掛けてぼーっとしていたら、そこへシランが帰ってきたのだ。

シランは部屋に入ると、シンのベッドをちらりと見てからロウに向かつて小さな声で「ただいま」と短く言つた。ロウは上手く舌が回らなくて「おかわり」、とぼやぼやと返した。

シランは気にした様子もなく、ロウを通り過ぎてシンとシランの

ベッドの間で立ち止まつた。荷物をラック前に置くと、シンに皿をやつた。

その時の顔だ。

今思い出しても むかつく。

シンの寝顔を覗いたシランは、顔面の筋肉の制御を全部放棄したみたいな、そんなふやけた顔で微笑んだんだ。

叫ぼうかと思つた。

怒鳴り付けてやろうかと思つた。

シンがいなきや、寝てなきや、きっと実行しだらう。それほど腹が立つた。だって今シンが寝てるのはお前のせいなんだ。シランを捜して、彷徨つて、叫んで泣いて、疲れきつて。叫べないし泣けなくなつても、まだ叫んでいるような、泣いているような顔で。

それでもたつた一人。

観月紫蘭を捜していたんだ。

なのにお前が、そんな顔するのか。

「するいよ
「ん、なん」「

音もなく口ウはシランに飛び掛かつた。シランは驚きのあまり、いや、単に時間がなかつただけかもしれないが、声も出せずに押し倒された。肩に爪を立て、腹の上に膝を揃え、正座をするようにのしかかつた。抑え込んだ。

「なん、だ。何をしているんだ口ウ？」

落ち着き払つた、いつも通り過ぎる聲音に気持ちを逆撫でられる。真つ黒い瞳は真つ直ぐ過ぎてムナクソ悪くなるから見ない。目から視線を反らすと首が目に入った。キメの細かい、しかし小さな傷が混じる、薄茶と白に近い肌色の斑な肌。

噛み付いてやるのか？

口を突き出す。

牙を剥ぐ。

きっとシンだつてシランが居なくなれば気付くはずだ。……どん
なに時間がかかるつとも。

「俺を喰うのか、狼？」^{口ウ}

シランのせいでシンは盲田になる。シランが居なければシンは自由だ。囚われる理由はなくなる。

ガブリで、終わる。オワル。
なんて。

「出来るか……ばかあ」

だつてそんなことしたら、シランが居なくなつてしまつ。シランが居なくなればシンは支えを失つて、崩れてしまつ。縛る理由はな
くなるだらう。けど、生きる理由までなくなつてしまつかもしれない。

それはダメだよ。誰も救われなこよ。
口を閉じ、瞳からも首からも逃げるようにシン、ヒシランの胸
板に額を押し付けた。

「どうしたんだ口ウ。何か、あつたのか？」

訊くなよ。お前のせいだよ。
聞いてよ。シンを助けてよ。

そう思つのに嘘はないはずなのに、狼の口は勝手に動く。

「シランには、わからぬよ……」

貴方が脇目も振らず、ただ突き進む限り。きっとわからない、気付かないんだろう。シンの懸命な眼差しに。切なくなるような必死な思いに。

シランは残酷だ。

でも口ウは、最低で最悪、なんだぞ……。

「わからない、よ、きっと

シランの口が開きかかるが、口ウはその前に飛び退き、自分のベッドへと逃げた。布団に潜り込み、耳を塞ぐ。

言いたくないんじゃない。シランに苛ついてるから意地悪したい、嫌な気分にさせたい、というのはあるかもしれない。

でも違った。

聞きたくないんだ。

優しい声とか、生温い上にズレた台詞とか、シンを大事にしてるつてわかつてしまう言葉とか。シンの一番はシランで、シランの一番がシンであること、とか。

つまり口ウは、口ウが独りであることが浮き彫りになってしまいのが、怖いのだ。

シンが泣いてるのは嫌だし、シランが空回りしてシンを傷付けたり、シラン自身の思いを否定する形になつていても嫌だった。でも口ウは最悪だ。我が儘でもう何をしたいのかわからない。誰かの一一番になつて、大切にして欲しい。ずっと見ていて欲しい。いなくならないで。ずっとずっと、最後まで口ウの傍にいてよ。もう独りにしないで。彷徨うのはいやだ、口ウを見て、好きだと言って、一番大切なんだと言つて安心させて。どこにも行かないで！

……そう思う癖に、そう願う癖に、心の奥底で叫び続いているの

に。ロウは知っている。微かに漂う記憶の残滓の鎮すら振り解けない、臆病な狼は知っている。

きっと誰かの一番になつたら、ロウは逃げるんだろうなといつことき。

また失うのが怖いから。

だからこれは最悪の我が儘だ。

そしてロウは最低だ。シンとの約束を破つた。シランにハツ当たりをした。仲立ちになるべきなのに、放棄した。

三人一緒にいるのが居心地良くて、ずっと居たい癖に。一人が見ているのがロウじやないからとふて腐れて、ひねくれたことしか出来ない。

最っ低だよ、ロウ。

ごめんなさい、なんて、おこがましいよね。

ロウは布団を被つて丸くなつて、いつの間にか眠りに就いていた。シランは何か言おうとしていたはずなのに、ロウを起こすことはなかつた。

そんな優しさ、いろいろのこ。

それが昨日のこと。

今日は滞在四日目。

シランはになかつた。

シンは泣きそうな顔で、小さく微笑んで「おはよつ」と言つたんだ。

ああ！ ロウの馬鹿！

お前のせいだじやない！

……ロウのせい、じやないかあ。

シランはシンに助けを求めるべきなんだ。

それがシランの助けになるし、シンの支えになる。それをわかつてないシランが巻き込むわけには行かないとか思つて独りで動くから、シンが泣いて探し回る。

そんな馬鹿馬鹿しくすらある悪循環。

シランは本当にわかつてないし、シンは不器用すぎる。と言つか二人共不器用過ぎるよ、本当に。なんでも少しの付き合いしかない口ウがこんなにわかつて心配してるとんだ。

しかも多分ヨミもわかつてる。わかつてないのは当事者一人。

あほか、つて話だ。

どんだけ一直線ばかなんだ。

そんなことを口ウがうだうだ考えていると、ある弦きが耳に飛び込んできた。

「シラン、何してるのかな……」

朝食のため食堂へ向かう道中だ。ポツリとシンが呟いた。何故か手を繋がれているのでシンが保護者みたいだが、どちらもどちらな心境なので、客観的に見てどう思われるのかは少し気になるところ。じやなくて。

口ウは変な、明後日な方向へ流れしていく思考を止めるように頭を振つてからシンを見上げた。何だかぼんやりしている。瞼がゆっくり落ちて、ゆっくり上がった。瞬きすら億劫そうである。

シラン、か。

シンの頭の中にはそれしかないんじゃないかとさせ思つ。溢れそなため息を飲み下し、答えを探す。

「……多分、探してるんだぞ」

「何を?」

「希望」

「へ？」

「つまり、ここから出でていく手立て。シランはシンを早く家に帰してあげたいんだぞ……だから、それしか考えて、ないんだぞ……」

ちょっととは周り見ろよ、とか、あほでばかで猪突猛進なんて表現をしたら猪に失礼なくらいの愚か者だぞ、とか。もじもじと口の中で文句を転がす。

小さな笑い声がして顔を上げると、シンがおかしそうに口元を緩めていた。

「何かおかしいか？」

「いやや、むくれるロウが面白かつただけ」

くふふ、と堪えられない笑いが溢れる。むくれるつて……ロウは普通に怒ってるんだぞ？ むくれるつて、なんかちがくないか？

「ほら、ほつぺた膨れてる」

「これはシンの表現が不適切で不満だからだぞー！」

しかし今一伝わっていいのか、ロウの言葉に首を傾げるシン。まったくつ。わかつてない。シランとずっと暮らしてたせいだ。空氣読めない病だつ。

「まあ、いいや」

「何が！」

「いや、ちょっとだけ……元気そつに見えるから」

……
むづ。

頬を搔いて、照れ笑いのような顔をするシン。やつぱりシラン似だ。もしかしたらシンにシランが似た可能性もあるけど。

するい顔。

不満とか悲しいとか嫌だと馬鹿シランとか。どうでも良くなつちやうじやないか。

「なあ、シンは良いのか？ 放蕩馬鹿シランが、どうか行つちやつても」

「よくは、なによ」

寂しそうに目を伏せて、でもどこかに優しさを秘めた横顔。口は緩く引き結ばれていて、朝焼けのような瞳はほんのりと輝くよう瞬いた。

「でも、今度シランに会つた時にちやんと訊くつて決めたから、いい。それに」

一転して大きく見開いた赤銅色の瞳は、太陽が溢れてもおかしくないくらい力強い温かな光に満ちて。口に向けられていた。

「ロウが独りなのも、だめだよ。だから、いい。ちょっとだけ、ガマンする。オレはロウの傍にいるよ」

救われたみたいに、思った。

目ん玉が転がり落ちそつなくらい不意討ちで、驚いた。そして感心した。

強くなる、って言った。

泣くけど弱さで泣かない、て言った。

ああ凄い。そして思う。ああ、強いな、って。本當だ。本当に言

つた通りだ。シンは全然弱くなんてなかつたよ。
シンには、ちゃんと強さがあつたよ。

「はは、『めんな』

「な、なにが？」

「ガマンする、じゃなくて、くつちやうだーって言えればいいのに、
カッコ悪いなオレ」

あは、はは、と空笑いをするシンの手をグイッと引つ張つた。口
ウは真剣な顔で大真面目に叫んだ。

「そんなことないぞ！」

シンがまた違う意味で目を見開いた。真ん丸なシンの瞳は本当に
太陽みたいで綺麗だなとかいう考えが頭を過る。

「シンは凄い！ 胸張つて大丈夫だぞ！ 口ウ、嬉しかつた、ほん
とに、ほんとに！ ありがとウ！」

「お、おう」

どうもやつぱりわかつてない感じがするが、いい。これでいいよ。
確かに救われたから。

「シラソもちよつとは気付いてくれたらいいのに」

そんなことをぼやくとシンは乾いた笑いの後、仕方ない、と言つ
た。そんな諦めが口ウは嫌だった。でも、シンほビシランを尊重し
たいと願う人はいないだろう。

隣に居て欲しいと切望するのも、シンだけ、だらうけど。
ばかだな、シラソは。

それと同時に。

ほんとばかだ、シンは。

そもそも思つ。

客室から出て、長い長い曲がりくねった廊下に階段を進んだ。灰色の無機質な壁はコンクリートだろう。床は何か違つツルツルとした素材が板状に敷き詰められている。壁には時折案内の札がかかっている以外、扉が点々とあるだけだった。

ロウ達はそんな殺風景で、コツコツと一人の靴音が響き渡る廊下を黙々と歩いていた。この辺りはあまり使われていないのか、往来はほとんど皆無だ。客以外には使われないのでないかと思う程。だから、ある意味必然だつたかもしれない。ここを通る人が限定されるなら、数少ない鉢合わせする可能性のある人間は限られる。でもすれ違うことすら稀だと、思っていたのに。

「あ」

「シ」

角を曲がると。

ランがいた。心構えが出来てないといつよくな顔をしたシリ

ンは。

最悪なことに。

「 ラ……」

背を向けた。

「あ」と、微かな声がした気がする。違う。もっと確かに聞こえた別の音がある。それは。

「う、あ、あ……」

何か大事なものが崩れ墜ちる音。

「あんで、な、で……や、いあ　」

意味を為さない音が口から流れ出る。それを止める術を口ウは知らず、持ち合わせていない。

手が離された。

シンはしゃがみこんだ。何かを堪えるように、元気と押し込めるように頭を抱えて。

「シイイイイラアアアアアンッ！」

何かが破裂した。

腹の底から、心の奥底の方から響く声。気が付いたら口ウは叫んで走り出していた。

我慢ならなかつた。

どうしてシンのことを一ミリもわからつとしてくれないのか。ナノでもマイク口でもいい。何でも良いから。ちょっとは気付いてよー

「はいストップ」

「ぐえっ」

飛び掛かろうとした首、襟首を掴まれ、口ウは床に引き摺り降ろされた。意識は一瞬だけ吹っ飛び、次の瞬間は天井がよく見えた。はい？

「一体何をやつていいのですか？ よつともよつてシン君の田の前でなんて、浅慮とは思いませんか？」

そう言われて見れば、シンは殺氣に氣付いたからだらう。口ウを止めた人の後ろで、駆け出そつとしたような中途半端な体勢で固まつていた。

でもどちらかといつと、今見てしまつた信じがたい出来事に固まつてゐるよう見えるが。

「だ、だからってヨミ、何も首縊めなくたつていいじゃないか」

引き吊つた声で抗議をするが、首を縊めた当人、今現在もロウの襟首をしつかり握つたヨミはにっこり笑つてさらりと抗議の言葉を流した。代わりに口にした言葉は向こうにいる人へだ。

「シラソさんもどこ行つとしているのですか？ シン君もロウ君もここにこますよ？」

シラソは氣まずそうな顔で振り返つた。口を開こつとして失敗し、もくもくと何か言つように口を動かすが、声にはならない。ヨミは腰に手を当て、全くもう、という顔をしている。

「逃げるのですか？」

「ちがう」

「じゃあこちらに来てください」

「……だめだ

「何故ですか？」

シラソは俯く。

ヨミは静かに待つ。

口ウは体を素早く捻り、ヨミの拘束を外すと飛び起きた。首が締まつたのなんてほんの一瞬。何の問題もない。だから早速思いつくり息を吸い込んだ。

「ほひつつかじやないのーー！」

全ての空氣を吐き出すよひて叫ぶ。頭にカアーッと血が昇る感覺に襲われるが、気にしない。周りの視線ももちろんだつた。

「勝手にしょーこんでっ！　勝手に暴走してっ！　勝手にダメだと決め付けてー！」

一つ怒鳴つては一步踏み出す。一つ叫んではは一步踏み出す。情けない顔のシランにドシン、ドシン、と大股で歩み寄つた。そして顔を近付けて真正面から怒鳴り付けた。

「ばかじやないか！」

「ばかとは、なんだ……」

「そのままの意味だぞばかあほシランー！」

憤懣やるたかな口ウは肩を怒らせ、シランを睨み上げる。気に入らないな。なんで怒つてる口ウが見上げなきやなんないんだ？

「えい！」

「ぬあつーー！」

足払いと油断していたシランをすつ転ばす。尻餅をついたシランを口ウは悠々と見下ろして、人差し指をピシッ、と突き付けた。

「謝れ

「……」

「シンに謝れ！ シンがどんな思いでお前を待つて居ると思ってるんだ！」

「それ、は……」

浮かんだのは困惑。どうこいつ意味だと訊きたげな視線。ロウは愕然とした。

違う。ロウが欲しかったのはそんなんじゃない。申し訳なさそうで、眉根が高く上げられた、情けない顔だ。謝るのが下手くそな、でも馬鹿正直で隠し事が苦手なシランだ。

なのに。

「本当に、わからなって、いつののかあ？」

やめろよ。わからないんだ、教えてくれみたいな、曇りない夜色の瞳を、見せるな。

泣きそうだよ。

泣いちやうぜ、って齧したくなる。でもシランは既に困った顔をしていた。わかっていないんだ。本当にわからないんだ。

シンの懲しみも。

ロウのやめさせなとも。

「……………シンは、頼らないし相談しないの……………じつしてわからんとしなこ……………じつして」

シンを見よつとしなこのや。

「もう知らない」

何か言いたげなシランに背を向けた。肩を大きく揺りし、歩く。シンの手を強引に掴むと更に歩いた。

「待つて……あくんだ……」

背中に投げ掛けられた台詞に、昨日の、意志の込められた朝焼け色を思い出して、直ぐに打ち消した。他ならないあの真っ黒い愚直な瞳が、打ち碎いたんだ。

「今のシランに訊いて、何か変わるものか?」

シンの手をぐいぐいと引き続ける。足は止めない。シンは足を止めようとするが、直ぐに引っ張られてたらを踏む。ほり。シンだって信じられないんだ、シランを。シンなら簡単に振りほどける、元の手。何もしない。結局はされるがままだ。

シランはダメだ。

シランは愈えない。

ロウはぎゅっとシンの手を強く握った。シンまでもがシランを信じられないなら、もういいよな。もう、シンはロウが連れてく。シランはいらない。

「必要ない」

あんな、揺らいだ夜色の瞳は、ロウ達にはいらないんだぞ……。

033 貴女の笑顔が【黄泉】（前書き）

初めての友達。

優しくて強くて面白くて温かくてかっこいい、でも弱くてお人好し
な人。

だから直ぐに大好きになつてしましました。

不穏な雲行きの中、笑い合う二人に和めたらいいなー、な第三十三
話。

033 貴女の笑顔が【黄泉】

「ということがあつたんですよ」
「いやー、なかなかに縛もつれてんなー。シランも鈍い鈍い。ひひひ」
「笑い事じゃありませんよお」

カラカラと笑うハルさんに、私は膨れた。

ここは食堂だ。私達は建物の外に出るのを禁じられているため、ここで食事を貰うしかない。部屋で食べても良いが、運ぶには遠いし、一人部屋だから寂しいし隣の部屋は……あんな状態だし。

でも元々大抵ここでいろんな人と話しながらこの数日は食事を摑っていた。情報収集と力になってくれそうな味方集めが目的だ。それなりにこここの状況はわかつたつもりだが……わからないこともある。それを知りたいがハルさんに訊くのも……ちょっと躊躇してしまう。それに何だかそれどころではない状況になってしまったし……。

私は力なく食堂のテーブルに突つ伏す。するとハルさんが小さく首を傾けた。

「なんや、そないに困つとるんか?」

「そうですよお。」そのままじやシラソさん達が帰られたとしても、崩壊しちゃいます」

「家庭崩壊やなあ」

「ですよー」

はあ、とため息を吐くと、ハルさんがにゅっと首を伸ばして下から私の顔を覗き込んできた。ふわりと前髪がひっくり返る。

「なんですか?」

前髪を戻してあげながら、太い眉だなあ、とぼんやり思う。茶色がかつた色だからあまり気にならないし、それはハルさんぽい気がした。そんな眉をひそめたハルさんが、心配そうな目で私を見上げる。

「疲れどるみたいやん。ちゃんと寝どる？」

「寝てますよ、しつかり七時間」

「ああ、ほなら大丈夫やな。でもなんか手伝えることあつたらちやんと言うんやで？」

歯を見せた底抜けの笑顔。何だかほつとした。

気が付けば周りはぐらぐらのぼろぼろになっていて、でも彼らなら大丈夫だろうと小さな手助けしかしないでいたら、どんどん暗雲垂れ込めるムードになってしまつた。

私のせいじゃないけれど。

私のせいだよな、って思つ。

とうとうロウ君まで放り出してしまつたし、どうしていいのやらと途方に暮れている状況だ。まあ、無理もないだろう。多分、ロウ君も私と同じようなイメージをシランさんに持つていただろうから。でもきっと、私よりも前から一緒にいたロウ君の方がショックが大きかつたのだろうとも思つ。

シランさんはただひたすら前を見て、突き進む人だ。そしてその方向は、彼が信じる正義に向いている。お人好しとか、馬鹿みたいに見えるようなことも、自分を曲げられないから、自分が正しいと思う信念のまま突き進むのだ。

だから信じられると思つた。

親しい人にしか関心がない癖に、困っている人、苦しんでいる人はほつとけなくて。大切な人に良かれと思うことをいつも考えて、行動する。不器用で上手く行かなくても、思いは確かに伝わる。ど

んなに真っ直ぐ進んでも、彼ならビートル居ても大切だといつ気持ち
は忘れない。

そんな愚直だけど温かさのある彼の道には人が集まつてくる。そ
れはそんな彼の信念が好きだから。生き様が好ましいからだ。
なのに。

今のシランさんは周りが見えていない。誰かのためなのに、その
誰かが見えていないなんて。ほつたらかすなんて。

本末転倒じゃないですか、シランさん。

貴方の光に集まつた人の中には、貴方が傍にいないと迷子になつ
て泣いてしまう人もいるんですよ？

「『わかつてよ』……ロウ君の気持ち、痛い程わかります」

「シンが可哀想やもんな。裏で泣いてるような顔して笑つてんやも
ん。しかも笑つてんの、素やろな。美智乃やロウとのとはちやうな
あ、重いなあ……」

「ロウ君も笑うの得意ですけど滅多にやりませんよ。受け流すよ
うな、誤魔化すような本心では笑つてない笑顔は。相当堪えている
んだと思います。ちゃんと隠せないくらい」

「やなあ」

ふはー、とハルさんまで突つ伏した。長く並べられた食堂のテー
ブルを横断するように二人は真ん中で顔を見合せ手を伸ばす。

ちょっと屈かないな。

そんなことを考えていたら。

「どうい」

と掛け声と共にハルさんが伸びてきて私の手を握った。完全にテー
ブルの上に腹這い状態だ。

「ハルさんお行儀が悪いですよ」

と言いながらもつい笑ってしまう。ハルさんも笑うけど、テーブルに腹這いになっているため笑いにくそうだ。そんな自分までおかしかったのか、更に笑ってガタガターブルを揺らしていた。私はそつと手を自分の顎の下に引っ込めて枕の代わりにした。

「ハルさんは横着者ですね」

「あはは、そういう性分なんや」

「……ありがとうございます」

私は居住まいを正すと、丁寧に頭を下げた。ハルさんが慌てる。

「なななんやあ？」

「笑わせたかっただんでしょう？ 私を元気づけるために。でも嘘は吐かなくていいですよ」

「嘘？ 嘘やないでヨ!!」

「だつてハルさんつて、案外よく考えて、結論出してからじやないと動けないタイプでしきう？だから本当は横着者じやないんですね、不器用さんなんです」

「……それ笑いの説明させられる並みに恥ずかしいんやけど」

突つ伏したまま、顔を真っ赤にするハルさんは何だか可愛かった。

「頭なでなでしてもいいですか？」

「この流れで！？ まあ、ええけどお」

「じゃあ失礼して」

私はそうっと手を伸ばした。丁寧に慎重に、柔らかいハルさんの髪の上に手を置く。

「ふわふわですね」

「そういう毛質なんや。ほんまほわぼわして結ばんと収集つかんし、困った頭なんやあ。……嘘やないで！」

「そうですねー」

優しくゆづくとハルさんの頭を撫でて微笑んだ。ハルさんはふう、と息を吐き出すと皿を閉じた。されるがままにハルさんは何か犬みたいだつた。

「犬好きですか？」

「ほえー？ んー、動物全般が好きやで。特に鳥が好きやけど」

「鳥ですか。ハゲタカとかコンドルですか？」

「そいやなー、って、どないして猛禽、しかもごついのばっか並べるんや！？」 うちがいつとう好きなんはカナリアやで！」

「小鳥、ですか？ ハルさんは可愛いカナリアがお好き……」

「なにその信じられないみたいな反応！ 似合わない、意外ね、みたいな！ うち女の子！ 一応女子やで！ カナリア好きでもええやないかあ！」

バシバシテーブルを叩いて猛抗議なハルさん。私はにつこり笑つた。

「はい。カナリア好きなハルさん、可愛いと思います」

するとまた分かりやすく真っ赤になるハルさん。あまり耐性がない模様だ。

「そんな直ぐに顔が赤くなつてしまつハルさんもとつても可愛いですよ」

「お世辞はやめてえなあ～」

「お世辞は言いませんよ。ハルさんと話してるととても楽し
いです。ずっと声を聞いていたいし、顔を見ていたいです。落ち着
けます」

「つうにそないな便利機能、ついてへん……？」

警戒したような顔で、おどおどしたような変な顔で自分を指すハ
ルさん。

「ハルさんってちょっとシラクさんによく似てますよね」

「ふえい！？」

一応驚きの声らしい。

田を真ん丸にしたハルさんがまじまじと私を見た。

「似てるか？ 全然似とらんよ！」と思つたが

「そうですか？ 不器用で巡回つしやすこと」いや、自分よつもま
ず自分にとつて大事なものを優先させようとするヒル君、似てます
よ？」

「つああ、不吉やあ～」

とハルさんは頭を抱えてうめいた。確かに今のシラクさんを見て
いると、そして似てるなんて言われたら明日は我が身か、なんてこ
とを考えてしまいそうだ。でも。

「反面教師といつ言葉もありますよ？ ハルさんはちゃんと手段と
目的を混同せず、広い視野を保つよつ、『気を付ければ』ことつこと
とがわかります」

「でもうちも創と一点集中型なんやけど……」

不安そうに人差し指と人差し指をくっつけたり離したりと、何だから小さな子供みたいな仕草をしながら上目遣いで私を見るハルさん。だから私は安心させるように笑つた。

「大丈夫です。もしハルさんが道を逸れそうになつた時は、私が教えますから。遠く離れてしまつたら難しいと思いますが、でも今は私がいます」

だから。

「だから大丈夫ですよ」

頭を撫でて、優しく微笑んでそう告げた。まあ私じや頼りないでしうけど、いないよりはマシですよきっと、なんて茶化してみる。ハルさんはへにや、と相好を崩した。何だか無駄な力が全部抜けた、ほつとした顔に見えた。

「マシなんてもんやない。百人力、いや、百万人力や！」

「やっぱりハルさんは笑顔が素敵です」

「ヨミィ！ 脈絡なく誉めんといてえな！ 心臓に悪いわあ

「そんなに刺激的ですか？」

「うちの心はガラス製やからなつ」

胸を張つて、というか海老になつて腹這いのまま胸を張る、器用なハルさん。うーん、ここも似てるかもしれない。手先とかは器用だけど、対人関係は不器用。……違うかな？

「やつぱりハルさんといふと楽しくて癒されますねえ」

「大袈裟やなあ、ヨミィは」

ふと思つた。

「やう言えばシラソちゃんのことは割とあだ名ですか？ 不思議な呼び方をこりこりしてゐるみたいですが、私やシン君には普通ですよね？ どうしてですか？」

「つい。ほら、嫌がる人には意地悪したくならへん？」

「……ハルさん、最低です」

「すまんつ！ でもこれこそ性分なんや！」

「それは……わかる気がしますが」

「あ、納得された」

ちよつとショックだつたらしく、テーブルに倒れ伏した。やはりハルさんは本当のことと普通の冗談としてはあまり使わないよつだ。じやあ微妙に無自覚だつた？ ……シラソちゃん、御愁傷様です。

「まあ、ええけどな。あ、あとシラソの方が何となく弄りやすいからな。名前もシ・ラ・ン、で三文字やし」

「でもシン君は真太郎君なので六文字、一倍弄りやすいのでは？」

固まつた。ハルさんが顔を上げたかと思つたら口をあんぐり開けて固まつてしまつた。

「どうかしました？」

「シンが名前やないの！？」

「フルネームは異真太郎ですよ、シン君」

「うああああ！」

友達の名前すりひりちゃんと把握しようとなんてつむけ最悪やあああああああ、と本気で頭を抱えて苦惱し始めてしまつた。私は慌ててフォローの声を挿む。

「シン君は！ シン君はですね、あまり自己紹介が得意ではないようで、シンとしか名乗らないことがよくあるようなので、えと」「それでもちちゃんと訊かんかったうちが悪いんやあああ！」

何だかほつとくと頭でも打ち付けそつな勢いだったの、その顔を両手で挟み込み、こちらに向けさせた。

「ハルさん。今知りました、それで良いじゃないですか。気が済まなければ後でまたちゃんと自己紹介すればいいんですよ。だからあんまり自己嫌悪しないでください」

真剣な瞳でハルさんの明るい茶色の瞳を見た。ハルさんは呆けた顔で私を見上げた。

「それでええんかな？」
「それでええんです」

大真面目な顔で繰り返したら、何故かハルさんが吹き出した。

「な、なんで笑うんですかあ」
「だつてヨミ、かわええ！ 全く、もづ、あは、あはは」

大きく開いた口から大きな笑い声が生み出される。テーブルの上で転げ回るハルさんに、私は苦笑した。
なんだか、和んだ。

ハルさんが笑って、皆も釣られて笑って、それで平和は具現化される。現実になる。
ならそれで良いじゃないか。なんて、思う。
現実的ではないのだろうけど。

「そや！ すっと言おひ出でたんやけど」

「はい？」

ハルさんはぐるりと一転して起き上がるどすりすり膝でテーブルを歩き、私の隣の席に降りてきた。にひひ、と上機嫌な笑顔を向けて口を開く。

「『ハルさん』ってなんつうか、他人行儀っぽくあらへん？ なんか可愛く呼んでえな」

「可愛く……例えば？」

首を傾げて問うと、ハルさんはくねくね揺れながら楽しげに答えた。

「やうやなそやな。ハルっち、ハルハル、ハルルー、さかちやん なんや恥ずかしくなつてきたんやけど……」

「恥ずかしくないですよ。可愛いかがよくわかりませんが」

「そつかあ……まあ、とにかくさん付け以外がええな、つう我が家 儂。仲ようなりたいし、なあ？」

「そうですね、では……」

「ウンウン」

何だか期待の眼差しを受けて、私は発表した。

「ハル……ちゃん、とお呼びしても、よひじいでしょうか？」

「『ハル……ちゃん』ねえ」

「うわあああ、その不自然な間は除いてくださー！」

顔がカバーと熱くなる。呼び捨てにしようかと一瞬思つたけど無

理だったのでも苦し紛れに「ちゃん」を付けてしまった。恥ずかしい。
中途半端で情けない、臆病な自分が壮絶に、恥ずかしい。

「じゃあわいしょか

ハルさんはこくり笑つて頷いた。

「ハルちゃんね、なんかかわええなあ」

「そう、ですか？」

「今までそんな呼ばれ方されたことあらへんし、新鮮やわ。是非呼んで欲しいな～」

嬉しそうに細められた、温かな視線に、私は急に氣が引き締まる
ような気持ちになつて、慌てて背筋をぴんと伸ばした。

「は、はい、は、ハルちゃん……せん」

「『せん』は取つて！？」

「はい！　す、すみません！」

ああ恥ずかしい。何故だらつ。年上の方だから、なのか。つい『
さん』を付けてしまう。うひひ、と私がうめいてるとハルちゃん、
じやなくてハル、ちゃんがくすりと笑つた。

「まあ、頑張つて慣れてえな。待つとるで」

「うひ、はい……ハル、ちゃん」

「ああもう可愛い過ぎるで!!~、抱き着くわいど~」

締まりのない顔でハルちゃんがこへへと笑つ。でもその言葉に急
に冷めてしまった。

「抱き着くのは、NGです」

「なんでやー」

「駄目なものは、駄目なのです。危ないのでハルさ……ちゃんは、駄目なのです。私にはそれに応える術が、ありませんから……」

私は逃げるよう下を向いて、突っぱねた。ハルさんの困り顔が見えなくとも見える気がした。でもハルさんは苦笑混じりに、柔らかな雰囲気で、でもちょっとおどおどと慎重な感じに言った。

「うち、割と丈夫やから、ちょっと氣を付ければ平氣やと思つで？ 簡単にはペッちゃんこにや、ならへんよ？ まあ、うちも氣をつけるし、なあ？」

「あ、お見通し、ですか」

また顔面が沸騰した。さっきよりもっと顔が熱くなる。

私は怖い。自分の瞬間的な怪力が。もしつい力を入れてしまつたら？ 卵でも握り潰すように……してしまつたら？

私は力の調節が苦手だ。何故なら普段はそんなに力が強くないのだ。本気を出さなければ、多分シランさん並みに弱い。でも、本気を出せば多分口ウ君にも勝てる。純粹な力比べで。

瞬間瞬間に出せる力の上限が半端ないのだ。だから私は氣を付けなくてはいけない。身近な人を傷けないように。

人が怖い理由の一つがこれもある。人は弱くて柔だ。^{やわ}近くにいることすら怖い。

はずなのに、なんでだろう。さっきなんて頭を撫でてしまった。自然に出た欲求で、とても自然な行動に思えた。その後も顔を両手で挟んで、いやでもあれはハルさんが頭を打ち付けたりしないように必死で、つい……。

だめだ。ハルさんに対する防衛線、ぼろぼろだ。きっとハルさんが……近いからだ。

「ハルさんって、確信犯だったんですね」

割とよく近付いてくる。正直いつも……怖かった。なのに数日で馴染んでしまったらしい。自分から手を伸ばしてしまつへり。

「う、すまん。でも、ほっとくとマリヤでどんびん逃げゆみから、近づいとせえへんと、ダメやん。」

まあしくその通り。

私は大切に思うほど適度な距離を測る。物理的に、精神的にも。そのはずだった。

「……そうですね。すみません。でも、ハルさんも少しあは知っているんでしょう？ 私の存在は凶器みたいなものです。そもそも、そういうこつ風に使つたための物でしたから」

「凶器やない。マミは凶器でもバケモンでもない。道具でもあらんあらへんのや」

ちやんと私の言葉を最後まで聞いてから語ってくれた台詞は、噛み締めるようだ、丁寧に認められた手紙のようだ。

「だからもう言わんでえな。悲しいやないの。切ないやないの……」「すみません……ありがとうございます。つい、語ってしまうんです。嘘を吐きたくない人に対しては、思つたまま、語りてしまつんです」

です

嬉しかったから、私もちやんと答える。不安そうに私を覗き込むハルさんの視線を受け止めようとして、胸に手を当て、目を閉じた。

「簡単には考え方は変わらないと思います。でも、変わりたいとも、思っています。だから」

目を開ける。明るい茶色の大きな瞳を真っ直ぐに見た。

「私の変化をゆっくり、見守つてくださると、嬉しいです。悲しませるようなことを出来るだけ言わなくて済む、強い人に少しづつなりますから。だからこれからも」

恐る恐る。情けないくらい震える手で、ハルさんの、ハルちゃんの手を握った。割れ物を扱うようにそつと、怖くてほとんど力を入れられなかつたけど、温かさが伝わる手を取つて口を動かす。

「友達になつていてください」「当たり前やないの」

ハルちゃんは唇を緩く笑みの形にして、目元を和ませた。

「それに変な言い方やな。『友達でいよ』でええやん。それに友達はずつと友達や。友達やーめた言つてもな、そう簡単に消えたりせえへん。脆いかもしれんけどな、繋がつた縁はきっと見えへんとこで繋がつてる。だから『なつていて』なんて、言わんでええよ」

力強く握り返してくれたハルちゃんの手が、何かを補つてくれている気がして、ほつとした。

「ハル、ちゃん」

明日も明後日も。いつか、ずっとずっと遠い未来の日も。そんな笑顔が、私を癒すでしょう。そんな笑顔が、私の支えとな

るでしょう。

「 ありがとう」

「 おひー！」

向日葵のよつな、あなたの温かな笑顔が。

033 貢女の笑顔が【黄泉】（後書き）

久々に『蒼天の真龍』のことを考えたら予定がまた変わってしまいました。ちょっと順番やらが替わつただけですがね。この方が三章の前半終了、つて感じになりそつたたので。次で三章前編が終わり、後半戦スタートになります。てか一気に話が進む、かな？ その勢いのまま四章に突撃し、終幕、の予定です。まだ長いなー。話が進むと言つても更新スピードはきっと変わらないでしよう、すみません。rrz 展開的に勢いが出るかなって意味です。終幕に向かってガンガン行きますよー。

さて次話は……ちょっと部屋の片付けしたいのと、合宿のためと落とす予定の科目拾いのための勉強（）のために、恐らく9月後半になる予定です。まあ息抜きとか行って更新する可能性もなきにしもあらず。まあ書けたっちゃ書けたので直せば更新出来ますが……出来ればパソコンで確認してから更新したいんですね。たまにルビが変なことになるので。とにかくお待ちください。

それから漸くWeb拍手のお礼短編を更新しました。今回はロウの昔話と夏。はいもう終わりますね夏。でも私の夏休みはこれからなんですよ（ノ－T）まあ9月になつたらまた考えて変えますよ。押してくれる方滅多にいませんがね……コメントくださると大変嬉しいです。ありがとうございます！ 一応コメントに対するお礼文も短編と一緒にちょっと変わつてるので（後書き的なもの）、ぐだらないコメントでも良いので気が向いたら見てみてくださいな。こちらの文章も適当ですがね

では次回更新でお会いしましょう。

P . S .

この後書きは更新の度に消しているのですが、ブログに残しています。そしてここに書きづらかつたりする裏話やどうでもいい話をぶつぶつ言つてたりするのでHPからブログに行ってみても面白いかも？汚い絵もあるよー

034 ただそれだけを願つて【陽】（前書き）

三章前半戦がこれにて終了します。
ハルの思いを詰め込んだ三十四話です。

034 ただそれだけを願つて【陽】

『大丈夫です。もしハルさんが道を逸れそうになつた時は、私が教えますから。遠く離れてしまつたら難しいと思いますが、でも今は私があります』

ああ。

『だから大丈夫ですよ』

うちが言った言葉や。
美智乃に、うちが……。

懐かしい記憶はいつも鮮やかな緑の翼と共に。

「本当にについて来るつもりなの？」

九年前。

短く切つてしまつた髪をなびかせ、振り返る美智乃。凛とした表情になかなかそのショートは似合っていた。切つたと聞いた時はシヨックだつたが……結構、いやかなり似合つとるなあ。

そんなことを考えていたら酷く嫌そうな顔をされた。

「私は真面目に話しているつもりよ。……その顔やめなさい」

「だあつて美智乃の可愛さがもう尋常じやないんやもん。にやけ
るしかないやん！ ああこれがギャップ萌えつづやつかいな～」

「だらしないし、気持ち悪いわストーカー」

「ちやうちやう、ボディーガードやボディーガード…」

どうしてもニヤニヤしてしまつた嫌気が差したらしく背を向けられてしまった。でも髪が短くなつて見えるようになつたうじがたまらんな、とか考えてたら何故か振り向き様に殴られた。

「なんでやー?」

「……変質的な視線を感じたわ」

「変質的やない! まつとうな性癖、あることは趣味による視線やー!」

「……変態ね」

「別にええやないか減るもんでもあらへんじ」

「汚されるわ」

「汚れへんわ! むしろ淨化してみせるー!」

「……はあ。バイバイ」

「せやからうちも行くつてばー!」

慌てて美智乃をとおせんぼするよつに前に立つと、美智乃はくすりと笑つた。

「変な顔ね。さつきよりは一千倍くらこマシだわ

「うちどんだけ変な顔やつたのー?」

「そうね、まさに犯罪を犯している真つ最中の犯罪者の顔だつたわ

「うち犯罪者ー?」

ガーンとショックを受けていたらまた笑われた。

「冗談。娘をイヤらしい田で見る父親くらこよ

「十分最低やん!?」

「これで懲りたらもうだらしない顔はしないで。出来ないなら連れて行けないわ」

「んなアホな！」

美智乃を見て『レーレーしないなんて難しい……丸一日動くなと言
われる倍くらい難しいでえ……命題かもしけんぞ。
でも……つちは行かなあかんのや。

美智乃の爺ちゃんが四口前に倒れた。

その翌日、爺ちゃんの遣いの人�이가来て、万が一の時に渡せと言わ
れていたという手紙を置いていった。中身は簡潔で、要する必要も
なく、自分の居ない間の新日本政府を頼むといつもの。

美智乃の爺ちゃんは新日本政府の総司令官だ。同封されていたの
は美智乃への総司令官代理の辞令書だった。

美智乃は全く迷わなかつた。つちも迷わなかつた。だつて約束し
ていたから。ずっとずっと昔から。

「そりやな。頑張るわうち。だから連れてつてや、美智乃。美智乃
は約束破つたりせえへんやろ？」

「貴女が一方的に押し付けたようなものじゃない」

「イシシ、そうやつたつけ？ まあええやないの。護衛があつた方
が気が楽やろ？ つちは約束守るで！」

「約束、ね……」

「そりや。うちが美智乃の代わりにズバーって突っ込んでつて、ザ
ッパンとピュンピュンボコボコやりまくってな、そんで美智乃が
やりたいのはこりこりことなんやー！ つて皆に伝えるんや。皆守
るんや！ な！」

にひひ、と笑うと何故か美智乃にため息を吐かれた。な、なんでや?
「変わらないわね……流石に擬音語連呼からは卒業しなさこよ。

四年も前のをそのまま言わなくても……」

「あれ、五年前やなかつたつけ？ まあとにかく昔やな、昔」

「まあ貴女も大分マシにはなつたわ。あの時は連れていくなんて考

えられなかつたし。不眠症の人なんて連れていけないと思つたわ

昔のことをほじくり返されて顔が真っ赤になる。あれは人生最大の汚点やわあ……あれや。まさに若氣の至り。結果オーライつかやオーライなんやけどなあ。

「もう無理はせえへんからわあ……その話題は出さんといでえな」「貴女の行い次第かしらね」

「そんなあ……」

クスクスと笑う美智乃が楽しそうのはいいが、軽くトラウマを掘り返されて、うちは傷心ですよ？
しかし直ぐに笑いを引っ込めると、美智乃是意味深な笑みを浮かべた。

「でもそうね、そなんじょしうね……」

「へ？」

「きつと私独りで挑んでも無駄つてことよ」

「そんなことあらへんやる。美智乃やし、それに孫娘やしな」

「でも祖父の人望で集まつた人は多い。そこに孫娘つてだけの私が

行つて納得してくれるのは極一部よ。まずは信用を得なればならぬ」

「美智乃がなるより『うちがなつた方がマシー』って思つやつが居るかもしれんつてことか？」

「居るでしょうね当然」

薄く笑みを浮かべる美智乃にちょっと釈然としないものを感じた。
まあ美智乃らしいっちゃ美智乃らしいが……。

「そんなケンカしに行く訳やないんだし、そう構えんでもええやん。

な？」

すると美智乃は仕方ないとばかりにため息を吐いた。しかしどこか楽しげで嬉しそうに見える。うちに首を傾げると更に笑みが深まつた。

「なんやなんや？」

「やっぱり私だけ行つてもダメね、って思つただけよ。ケンカはないわ。大丈夫だから情けない顔もしない」

「えー、そないに情けない顔になつとる？」

顔をぺたぺたと触つて確認をしていたら、美智乃に眉間に押された。

「ひゃあ

とたたらを踏むつち、「また笑い出した美智乃が諭すよ」ついに言つ。「顔はピンと元気良く跳ねわせとなさいな。こんな風に落としちゃダメよ」

「ふえ~い」

「返事は伸ばさない」

「イエスツ、マムー」

「日本語で」

「はいっす！」

「……まったく。相変わらずね、貴女は」

困つちやうわ、と言いながらも楽しそうに柔らかく笑んでいるのを見て、うちはほつとする。

やっぱり笑つていて欲しい。怒つたり、困つたり、はにかんだり、

呆れたり、泣いたり、疲れたり、照れたり、しかめたり。そんなた
くさんの表情は大事だ。でも最後には笑つていて欲しい。辛いこと
があつても最後に嘘なく笑えるのが、一番のハッピーだとうちは思
つていい。

でもやつぱり笑つていて欲しい。大切な人は尚更、ずっと笑つて
いて、笑顔でいて欲しいんや。これはうちの我が儘やけど……うち
はそう在つて欲しい。

美智乃に笑つていて欲しいよ。

「貴女が本氣で着いてくるつもりなら、言つておかなければならな
いことがあるわ。貴女には知つていて欲しいの」

しかしちょとだけ笑顔が陰る。心中では気になつて気になつ
てしまふがなくて眉を潜めたいくらいだけど、うちまでそんな顔を
してたらいつまで経つても美智乃是笑顔になれないから。
だからうちは笑顔で応える。

「当たり前やろ！ うちは本氣や！ なんや、何でも聞くで？」
「ありがとう……あのね」

美智乃是空を見上げた。釣られてうちも顔を上げる。けれど黄昏
時の空は曇つていて 。

「何にも見えないわね」
「そうやな……つて、何が言いたいんや！？」

あんまりにも普通の調子で言われたのでついツッコンでしまった。
美智乃是おかしそうにクスクス笑つていてが意味がわからない。う
ちがクエスチョンマークだらけになつていると美智乃がごめんなさ
いと言うとすつ、と腕を伸ばし、あるものを指差した。それは。

「夕陽？」

「太陽よ」

「まあ、そつやけど……えーと」

困惑顔で美智乃を見ると、うつすら微笑んで彼女は答えた。どこか寂しげに。

「例えるなら貴女は『太陽』なの」

「……まあうち、陽^{はる}やしなあ」

「名前は関係ないわ。ただ貴女が太陽のようだというだけ。そして私はね」

今度は空に腕を伸ばし、ピンと人差し指を立てた。例えるなら、つて話なんだよな。なら……。

「北極星とか？」

「私はそんな人を導けるような、どんな人でも道を指し示してあげられるような大層な人間じやないわ」

澄んだ声、淀みない答え。けれど何だか寂しく思った。
誰も迷子にならないように。勉強した人もしてない人も。得意なことがある人もない人も。どんな人でも。ちゃんと導ける人に私はなりたいの。そのためにたくさんの本を読んで勉強しなければならないのよ。

そう言つた美智乃を見て、うちは本で読んだ北極星みたいだと思つたんや。だけどそれじゃあ。

「前に言つてたこととちやうやんか……」

「人は変わるし成長するわ。昔の発言は自分を知らなかつただけ。

私が言いたいのはね」

「うん」

「私は月だと言つ」とよ

ついでに、その答えは意外で、田をぱちくつせた。……用なあ。

「どう一いつ意味や」

「月はね、太陽の光を反射してるだけなのよ。ただ、それだけのこ

見えない月を探すように空を見詰める美智乃はそんな「」とを言った。どうこの意味なんや？　と再度首を傾げる。

月にし、雲に隙れしる有る間に先一少し、満月に
いが雲の切れ間から見えたりする。しかしそうして知る月のイメー
ジは儂い。うつすらと白く光つてしたり、鈍い金色に輝いていたり
するが、やはり薄い雲越しなのでぼんやりとしか見えず、何だかあ
やふやで不安定なもの、という感じだ。探さなければ見付からな
いような、弱々しく儂いもの。

それが美智刀やつで

「なんやよつわからんから、うちなりな解釈で言つとな」

一
え?
」

答えとか意見なんて期待していなかつた、みたいな驚きの顔で見られてちょっとショック。しかし確かにあれだけじゃわからないし、もう説明する気配がない。だから勝手解釈で言いたいことを言つま
でだ。

開き直ると少し軽くなる。自然と一シシと笑っていた。

「月だろうが太陽だろうが北極星だろうが、うちは美智乃を見るよ。もし隠れて見えなくなつてもうてもちやんと探すからな。だから安心してええで！」

そう、そう解釈したのね。

小さく美智乃が嬉しそうに、どこか満足気に呟いた。それからうちを見て言った。

「……なら、私が間違えないように見ていてくれないかしら」

「おう見てるで。大丈夫。独りだつたら不安でも、一人だつたら安心やで。美智乃が美智乃らしくなかつたらちやんと教えるから、美智乃是胸張つて皆に言いたいこと言いまくるんやで」

大丈夫。

「うちがついてるんやからな！」

「じゃあ……頼らせていただきましょつか」

その時の美智乃のはにかみ顔が最高だつたことを記憶の奥の奥に今でも大事にしまつている。

でも。

『貴女には知つていて欲しいの』

そう言つた癖にその後はいくら訊いても『月』である理由は答えはくれなかつた。その意味を知つたのは入隊して随分経つた頃だつた。

理解して欲しくはなかつたの、美智乃……？

ぱんやつと明るくなつていいく視界を薄く細く、開いているかすら怪しい瞳で見送る。瞼が重い。

「大将さん大将さん。朝のミーティングに遅れちゃいますよ?」
「あう……あと一分」
「本当にですか? ジヤああと一分で実力行使に移りますよ? 良いですか?」
「ういー」

明るくなつてぐるのが嫌で寝返りを打つ。誰かの悪態が聞こえた気がした。暫しの微睡みの時間。
しかしそれも長くは続かない。

「参りますのですよ~」

空気が一刀両断された。

「うおお! ?」

一瞬、殺氣でさくれ立つた空気に叩き起しきられるようこづけつけられた。やつきまで頭があつた場所には薙刀が置かれている。てか振り下ろされている。因みにベッドは無傷だ。何故なら現在、うちが安眠を貪っていたベッドは最早ベッドではなくただの鉄板が敷いてあるだけになつていたから。

特注品なんやつて、凄いやろ? 一枚板を抜くだけでただの鉄板の台になるんやで。これなら薙刀を振り下ろしても安心安心~。つて、何の需要があるやあ!

まあ答えはうちを起こすためなんだけどな。よつこんなもん引き

受けてくれたなあ職人はん。そう思つた。

まあとにかく今寝惚けていたうちは殺されかけた訳で。

「なあ〜、もうちつとばかり手加減せえへん？ 今の避けなきゃもうつりの頭が真つ二つロースやつたやんけ、ちづちゃん」
「でも大将さん、手加減すると適当にいなしてまた寝けりつじやないですか。仕方ないのです」

ウンウン、と可愛らしく小さい丸っこい顎をコクコク上下させる
小柄な女の子がいた。手には物騒な薙刀。身に付けているのは若草
色の新日本政府の制服。胸には鳥の紋章のワッペン。右腕には黄色
い腕章があり、「第一部隊長補佐官」の文字。柔らかに波打つ明る
い栗色の髪の上には、制服と同色のベレー帽がちょこんと乗っつい
た。

「朝なのですよ。早く支度してください」

腰に手を当て、少し膨れた顔をしてみせる彼女はちづちゃん、五
辻千鶴子さん、という。何だか生まれつきの明るい髪色と名前の和
風色の強さの食い違いで妙なことになつてゐるが、可愛いから良い
と思う。うん。

一十五歳にはとうてい見えない、コンパクトでキュートな彼女を
ぼへー、と見ていたら薙刀を向けられた。

「またわたしがボス様からお怒りを頂いてしまつじゃないですか。
しゃきしゃき動いてくださいよ、お願ひしますよ大将さん～」
「……いつの間にボス『様』と呼ぶようになつたんや？」
「大将さんのせいですー」

ちょっと泣き声うに目を潤ませて訴えられる。申し訳なさでいつ

ぱこになつたのでわんわんと翻毛玉した。

「勝」とは勝つとなるんぢやないで?

「態度で示してください」

「なまやども」

2

怒っているちづちゃんは可愛いのでつい顔が緩む。 可愛いを愛でるのに年上だとかは関係ないんや。

「デレデレしないでください。はいこれで最後です」
「さんきゅう」

制服をきつちり纏い、ちづちやんから受け取った制帽をぼんと頭に置けば終了だ。まあミーティングん時しか被らへんけどな、帽子。三編みよし、着替えよし、えーと。

「これが今日の資料です。あとこれ、チェックの付いているところが多分今日必要なところです。着くまでに軽く目を通してください」「ありがとうございます」「

薄手の甲子一串を受け取る。有能な部下を持っていたのは幸せやなあ、と思いながら血室を後にした。

そう言えばあの後、ミミと友達になつた後の話だけだ。

ミミはすかさず三人に「友達になつてください」宣言をした。

多分今まで『友達』というものを知つていても実感のある理解にはなつていなかつたのだろう。明確に『友達』という存在が生まれたから、それに近い存在であつた三人にも『友達』という自分にとって嬉しい、好きな存在であるという認識に入れたかつた。だから、今になつていきなりシンらにも言い出したんだろうなあ、とうちは勝手に解釈した。

それに対する三人の反応はと言つと。

「うん、いいよ」

「えあ、うん！ 喜んで、なんだぞ！」

「得はないが」「損得なんて関係ありませんー」「……好き元しき

「ありがとうございます！」

なんてやり取りがあつた。
続いてうちが「友達になつてやー」と三人に突撃すると。

「もちろんだぞ！」

「まあ、怪しいけど悪い人ではなさそだしいいよ？」

「……本気か？」

「なんでもないにヨミん時と反応がちゃうのー？ シンだけやない
かまともに対応してくれてはるのー！」

えへへ、と照れたシンが幼げでちょっと可愛かったが、顔立ちからしてまだ幼いはずの口ウはちょっと偉そうで全く可愛くなかった。うろんげにうちを見てきたシランは論外やな。

「シランー、うちは本気やで！」

ズン、と迫るとシランは仰け反った。これは面白いし少しだけ可愛いがあつていい。しかし直ぐに落ち着きを取り戻すとシランは咳払いをした……なんかシランって若さ足りん感じするな、拳動からして。とにかくシランは咳払いすると言つた。

「俺と友達になつてどりあるんだ」

「友達するだけや。仲良つして、助け合つて、笑い合つ仲になりたいんやー。」

「……どうして俺なんだ。ヨリだけで良こじやないか」

「全員やー。」

「うちちは迷わずピシッと人差し指をシランに突き付けた。てか額にぴったり付けた。」

「は？」

「ヨリ、シン、ロウ、シラン！ 全員うちが何とかする！ やから繋がりを作るんや。信用して貰つために必要なんやー。」

「……指差すな、くつづけるな」

椅子に座るシランが下から睨んでくる。普段の目つきの悪さと今のは不機嫌オーラと相俟つてかなり怖い。でもシランは払つたりしなかつた。じつと待つだけ。面倒なのもしけないが、嫌なことは嫌だとはつきり言つてどなそなものが何もしない。多分相手が女だからもあるんだわ。でもそれをシランの不器用な優しさだと思つた。

「何を笑つてゐる、どけろよな」

「ひひ。やっぱり友達なりたいよ、紫蘭君とはな」

シクンは憮然とした顔で、もつ覗むと黙つより呆れたよつた顔で、半眼を向けていた。

「一応言つておぐが…… らくなことにならなこと思つが?
「わへなこと?」

おつむ返しに訊くと、シクンは俯いてモゴモゴと何か言つた。相性がどうのこうの、何々だから堪えられる気がしな……とか。それを打ち切るようにバンバンとうちがテーブルを叩くとシクンは皿を丸くした。

「細かこじとはなつ、氣ーにてーしーなーいーんーやー。」

グイッと身を乗り出すとシクンがまた仰け反るが仄にせす迫る。

「問題あつたとしても何とかなるもんや。それに下手の考え方休むに似たり、つりやん?」

「おい」
「あはは、怒つとねー」
「……はあ」

それでも。

どんなに呆れた顔していても、それでもたくさん考えてくれたんだろう。一瞬の気の迷いなんかで彼は決めないし口にしない。何かを決意して覚悟して。

その答えを口にするんだ。
わつと、やうこつ人なんだ。

「勝手にしろ」
「じゃあ勝手にさせと貰つな!」

握った白く細い手。握り返す優しい手。

その意味もわからずあの時はとにかく嬉しくてしょうがなくて握手したけど、今思えばシランは本気で考えて友達と認めてくれたんだってわかる。

あんたとの繋がりはいつも誇りなんやで、シラン。

だからそれに胸張れるよいつもちは頑張らなあかんのや。元々も……呆れられたがあらへんしな。

頑張るよ、うち。

ミーティングは長く険しかつた。

「眠かったね」

「眠かったで済まないでください！」と言つかですね、何のために冊子を大将さんに渡したと思っているのですか？寝ないでくださいよー。結局わたしが発言することになってしまったではないですか。情けないです恥ずかしいです……」

おこおこと泣く振りをしてみせてくれないじゃん。うちはウンウンと頷いて。

「じゃあ今の言葉をひづちゃんが本気で号泣して言った時は真面目に起きてくる方法考えよつか」

「今一、この瞬間から号泣みてくださいー。」

肩をいからせすんずん歩くひづちゃん。でも身長差が三十センチ

近いので当然歩幅も大差が出来ていて、なので普段よりちょっと歩調を上げるだけでもちづちゃんには追いつく。それに彼女も気付いたようで、疲れたように肩を落とし、いつも通りの速さに戻したようだった。

「理不尽なのです」

「やうやなあ、うちの世話をやれって言われたら絶対イヤやもん、うち」

「自分の世話を放棄しないでください！」

「例えばの話や、例えば。いやあ、ちづちゃんは頑張ってくれてるで？ いつも有り難うな」

「感謝されたくてやつていいのではありませんー。わたしはわたしのために働いているのです。そしてその仕事がたまたま大将さんなのです。そして割に合うか微妙な、でも中隊長補佐より給料がいいから渋々やつているのですー」

可愛い顔を悪そつに歪ませて、睡でも吐くよつてちづちゃんが文句を垂れ流す。

そりなんだよなあ。

何故かうちの周りに寄越される子って、有能だけど何か黒いとうか、何か腹ん中に潜んでいるような、癖のある子ばかりなのだ。特に補佐官なんてその筆頭だ。給料が悪かったら寝首でも搔かれ兼ねないような、野良猫みたいな子が多い、気がする。

何だか素直で良い子は秋峰君。ひねくれてるけど仕事は出来る子はづち。淡々と仕事をこなす子は永海さん。ながみという感じで大雑把に分けられている気がする。

因みに永海さんは三人目の部隊長だ。実働部部隊長内では最古参で、年齢不詳。てか何にも教えてくれず、とにかく美智乃の爺ちゃんが大好きな人だ。崇めていると言つべきか。

中性的な顔立ちに真っ直ぐな黒髪、黒目。腰には觀月鐵が鍛えた

「十刀一」^{じゅうとういつ}。十本の刀が一本に収束したような重さ、長さ。そこから繰り出される凄まじい斬れ味は最早伝説だ。それもあってここでは観月鐵がやたら有名で、観月紫蘭召集がある程度支持されている理由である。

でも父は父、息子は息子だと思うがねえ。シランだつて生業として成り立っているからには腕は良いのだろうが、父が駄目だから息子だと、別の人間への期待をその人に押し付けるのはあまり感心しないし、うちは嫌だ。

「話は変わりますが大将さん」

「なんや？」

ちづちゃんが神妙な顔になった。うちはきょとんとしながら促す。

「大将さんはどうするつもりなのですか、ボス様 美智乃さんとの対立を」

「別に対立とかケンカする気はあらへん。……ただ美智乃が全く話を聞いてくれへんのや。報告すらうちには書面だけで良いとか言って、いつの間にかちづちゃんに報告させて終わらせよったし。うちと会つてくれないんじゃどうしようもあらへん」

「大将さんがそのつもりでも、周りは黙つてないのですよ。この状況、大将さんが思つてる以上にかなりやばいのです」

「や、やばいって……？」

視線を彷徨わすうちにため息を吐くちづちゃん。そして当たり前のように言った。

「だつて人気のある大将さんが美智乃さんを熱烈に支持し、その大将さんを上手いタイミングで昇進させて来たからこそこの組織は総司令官代理になつてもなんとか回っていたのです。その一人が仲違

いしたら勿論組織は真つ一つ。下手すると真つ一つどころか美智乃さんの孤立、という形で決着がつき兼ねないのです

「そんなアホなあ」

なんでもういちと美智乃が上手く行つてないと組織が成り立たなくなつてまうんや？ おかしいやる。

そんな呆れ顔をしていたらちづちゃんがまたやれやれと頭を振る。

「大将さんは全く正しく自分を評価出来ていないのでとても困ります」

「だつて部隊長になつたのやつて、美智乃が勝手にうちを昇進あげただけやん。うちに何の力があるつていうんや」

「良いですかー」

困惑するうちに呆れきつたちづちゃんが、じとーとした目で見ながらコツコツと床を爪先で叩いた。いつの間にかうちらは立ち止まつていた。

「突然入つてきた子供。でも何故かとんでもなく強くて、入つてきただばかりなのに平氣で戦いの最前線に出てくるし、周りにフオローカを入れる余裕すらある。普段はアホっぽいが陽氣で気が利き、ムードメーカー。あなたは直ぐに誰からも信頼され、支持され、好かれれる人になりました」

わたしは見てましたから。

そう言つちづちゃんはその頃副班長だらうか。正式には『副班長』の役職はないが、大抵の班で決まつてゐる。小隊長を班長が補佐し、班長を副班長と隊員が補佐する、みたいな形だ。ちづちゃんはあまり前線に出るタイプではないから、多分良く見てたんだろうなあと思う。隣の班だったから、同じ任務になる機会も多かつたし。

羨望でも嫉妬でもない、真っ直ぐにうちを見る眼差しは何を思つているのだろう。

「そんなあなたが美智乃さんのことばかり話すんです。良いところだけじゃなく悪いところも含めて、楽しそうに散々語つてましたよね。誰もがそんな姿に納得しましたよ、ああこの人は美智乃さんが大好きなんだなあと。だから皆、総司令官の孫が代理になつた、という見方だけでなく、須原美智乃という一個人としてちゃんと見てくれたんです。そうでなければ皆は頭ごなしの否定しかしませんでしたよ。そういう空氣でしたから」

「なんでや。だつて爺ちゃんは人気あつたんやろ?」

「でも所属してなかつた十六歳の女がいきなり組織のトップなんて、簡単には受け入れられませんよ。しかも実績がありませんから」

「でも美智乃はたまに仕事手伝つてたんや! それに勉強もぎょうさんやつてたんやで!」

「そりなんですか。しかし表にはそういうた情報は出てきていません。それは実績がないとイコールです」

「そんな……」

あんなに頑張つてたのに。

遊びもせずにずつと本ばつか読んでたのに。
好きでも……なかつたのに。

「そないなアホなことがあつて、ええんかあ?」

頑張つて溜め込んだものを噛み碎いて咀嚼して飲み込んで、それを皆がわかりやすい形にして出す。必要な時、必要な形にして使う。そんな風にして九年の時間を経てきたのに、その頑張りは何一つ報われないって言うんか? しかも適当に生きてきた榎原陽なんて人間に負けてまつんか?

……ちやうやる。

そんな訳あらへんやる。
なあ、美智乃 。

「あなたはわかつていなさ過ぎます」

「違う、皆が間違ってるんや。誤解してるんや……」

「どうしてそこまで頑なに美智乃さんを持ち上げるのですか？ 実は演技だつたんですか、あの楽しそうに美智乃さんのことを話す姿は」

冷たい瞳を振り払うように「ちやうやー」と叫ぶ。

「ただうちは美智乃を助けたくて、皆に知つて欲しくて、美智乃の努力が報われて欲しくて……そんで美智乃の願いを叶えてやりたかったんや……」

たくさんの人を守りたいっていう、願いを……。それだけだったのに。

俯き、泣きそうになるのを我慢して、ギッと握り締めた手を見詰めた。

「……あなたが盲目的に美智乃さんを支持しているだけだつたら皆着いて来てませんでした。でもあなたは様々な人と話し、意見を聞き、美智乃にわかつてもらうから大丈夫だと笑つて、実際にそれを実現してきました。わかりませんか？ あなたが居なければ回らない歯車なんですよ、美智乃さんという総司令官代理の存在は」

その言葉にハツとする。蘇る美智乃の言葉。

『月はね、太陽の光を反射してるだけなのよ。ただ、それだけのこ

と『

月は太陽の光がなければ地上から見えない、光らない星。いや、衛星。地球が在つて、太陽が照らし出して、漸く存在出来るもの。うちが太陽で、美智乃が月。

つまりそういうことだ。美智乃はずつと前からわかつていた。月は太陽がいなければ輝けないと。それをうちらに当て嵌められることを。

だから知つていて欲しかつた。

「んな訳あるかあああああああ！」

ビクッ、とちづちゃんが肩を震わすが、承知出来る訳がない。手加減出来る訳がない。承服なんて、出来るかあ！

「美智乃はずうっと好きでもない本とにらめつけばかりしようつたんや！ 今も頑張つとるんや！ 美智乃は何とか出来る人や、一人でもきつと旨を守るために頑張つた！ 走り回つた！ うちが保障するで！ それでも言つんか？ 美智乃は一人じや何にも出来ない人間だなんて！」

鼻息荒く、ちづちゃんに詰め寄るとぽかんとした顔で見返されてしまつた。

「美智乃は凄いんや！ つちはただ美智乃の代わりにやつただけや、うちは手伝つただけーー！ はい返事ーー！」
「はい！ つて、ええそんな……」

むちやくちや過ぎる、と口の中で呴く気配があつたのでギロリと睨むと直ぐに「すみません」と消え入りそうな声でちづちゃんは謝

つた。

「わ、わかりました。確かにボス様は凄い人です。それに異論ありませんが……しかし最近の不信感はまた別じゃないですか?」
「それは……」

言葉に詰まる。

そんなつむを隠しきれいな皿で見るかげりや たままつめつと続けた。

「わたし達はですね、怖いのです……」

「怖い?」

「…………陽さんはるが泣く結末になることが、です」

「ええ?」

かづちやんは言ひにくへてうそを俯いていたが、思い切ったよつに顔を上げると言つた。

「陽さんには笑つていて欲しいのです。眞まう思つています。でもだからこそ陽さんを苦しめている美智乃さんが……憎いのです、怨めしいのです」

つむは今度は啞然として言葉が出なかつた。なのにかづちやんは怖い顔をして続けるんだ。見たこともない本氣の顔で、うらを見るんだ。

「……もしもあなたが望むなら……わたし達はいつでも待つています、あなたの言葉を」「何、の……?」

震える声には彼女の強張つた声が応える。

「総司令官代理降ろしです」
「ボス

「そんなこと言つ訳……」

「ないんですか？」のまま、納得出来ないまま、ボスの判断に唯々諾々と従うのですか？」

「従うんやない！ けど美智乃を降ろすなんてことひは言わん……」

「でもあなたが蠱脅している客人、今の美智乃さんでは彼らに何をし出すかわかりませんよ？」

「止める！ 守る！ 今までそつして來たし、これからもやうするまでや！」

「……陽さんらしい台詞なのです」

寂しそうに呟くちぢちゃんに、何だか切なくなってしまつ。

「どないしてこんなことになつたんや？ いつの間にか、美智乃と話が通じなくなつていた。何かを一心に見詰める瞳に、間違つていると言えなくなつてしまつた。

約束したのに。

約ひの、せいやひか……。

「でもお願ひです、陽さん……客人をこれ以上構わないでください。これ以上、対立を深めないでください……」

「せやけど……」

「余所者の好感度なんかを気にする前にこの組織の中を氣にしてください。ここにはあなたが必要なんです。美智乃さんと対立しているだけなら良いんですよ。正しい答えを一人が見つけて仲直りすれば、それでハッピーホエンドなんです。だけど具体的な対立の要因なんものがあつたら拗れてどうしようもなくなつてしまひます」

お願いですからもうこれ以上傷付かないでください、と懇願する
ちづねやん。

そんなこと……。

「新日本政府が大事ではないのですか?」
「…」

そんなことを言われても……。

「つちは選ばへん」

「陽さん!」

「いやや!」

「そんな我が儘を言つて、この間に最悪の事態になってしまつんですよ!」

「嫌なものは嫌なんや、順番やなんてつけたくない!」

「いつ抑えが利かなくなるかわからないんです! 暴走した彼らの矛先は必ずボスに向きます! それで傷付くのは陽さんなんですよ? 嫌なんですよ? でも陽さんが迷う限りわたし達は何も出来ない。だからもう美智乃さんを消す以外にあなたを助ける方法がない!」

「助けて欲しいやなんて言つとらんわ!」

「苦しむ陽さんは見たくないんですよ!」

「そつちこそ我が儘や!」

「そうですが儘です、でも他にわたし達に何が出来るつて言つんですか! わたしはあなたの力になりたいのに!」

必死過ぐる叫びが急に怖くなつた。

「なんでや……だつてうち仕事せえへん嫌な上司やろ? なのにどうないしてそんなこと言つたんだや……」

脅えたように問いつかれて、おぢちゃんの眉尻が下がる。

「あな、たは、本当にバカ、です……」

吐き出すよつこ言つた言葉は今にも泣き出しそうだつたが、急にガバッと顔を上げると突進された。見事に不意打ちだつたせいでもちは綺麗に仰向けに転がされた。むづちやんのしかかりながら叫ぶ。

「あなたはバカ過ぎます！ 確かにそうです、あなたは上司としては最悪なまでに自由奔放で大人しく仕事なんてしてくれません。でもですね、あなたを一個人として見たら、友人のためにあれだけ奔走する、懸命に語るあなたの背中をずっと見ていたら 嫌いになんてなれるはずがないじゃないですか」

こんなこと言わせないでくださいよ……。

拭つても拭つても尽きない零に困りながらひづけひんは震える声で言った。うちは何と言つていいかわからなかつた。
嫌われてもいいから。

美智乃を守る。美智乃を助けよう。

そう思つて今までやつてきたのに。現実は全く違つた、といつことなのか？

「なんでや」

嬉しくない訳じやない。でも……やつするとどうして美智乃が悪役になつてしまひんや？ ひづけひんは間違つてゐやん……。

「どないして皆美智乃のこと信じてくれへんのや。つひのことなんてどうだつていい

「良くないです！ それに信じてない訳じやないですよ」

涙を拭うのを諦めたちづりちゃんは、小むく笑つた。楽しそうに苦笑した。

「だつて誰よりもあなたが美智乃さんを見限れずにいる。まだあなたは信じている。そんなのわかりますよ。それでもあなたが迷っていることも確かだから……わたし達もどうすべきか迷っています。けれど……あなたはそれでいいんです」

真つ直ぐうちの田を見据えて、ちづりちゃんは囁く。

「皆が美智乃さんに不信感を抱いている今、あなたが対立していることで『何とかしてくれるんじゃないか』という期待が生まれます。だから何とかもつてているんです、この組織は。……だからこそ」

「ミミ達に関わるな、てか？」

「ええ……」

わかった。

力チリと何かが嵌まつた気がした。馬乗りになつていたちづりちゃんをひょいとどけると、ちづりちゃんは立ち上がった。呆けた顔で正座してうちを見上げるちづりちゃん。

「……五辻千鶴子」

「は、はい！」

「何やようわからんけど暴挙に走りそつうなうちのこと好いてくれてる奴ら、暫く宥めといつてや」

「良いですが……どうするつもりなのですか？」

「話つけてくる」

「……短期決戦はあまり勧められませんが」「でもやらなあかん。うちらの大切なもんを守るためにね、逃げたらあかんのや……すまん」

今まで逃げてたこと。問題を抱え込ませてしまつたこと。頼みを聞いてくれたこと。いろいろな意味を込めた謝罪に、ちびちゃんは笑つた。

「あなたが臆病なのは今に始まつたことじやありません。それでも立ち向かうあなたの強さに、皆は憧れ、信頼を寄せ、助けたいって、思つてしまつのですよ」

行つてらつしゃこ大将さん。
行つてぐるで、ちびちゃん。

うひりは首を向け、歩き出した。

「ち、人のこと言えんな。やつぱりの言つ通つシラソウ
ち、似てるみたいや。けどな、負けたくないんや。よつわからん大きな流れに呑まれて
終わりやなんて赦さない。」

きつと満場一致のハッピーホンドにしてやる。
だから。

一緒に戦いに行こう。

ついで、言ったかったのに。

不自然に倒れている椅子。

足跡のある袋。

転がっている誰かのおにぎり。

もぬけの殻となつた密室。

「ア、ミ……？」

まだ始まつてすらいなかつた物語がキシキシと音を発して動き始めたのが聴こえたような気がした。

034 ただそれだけを願つて【陽】（後書き）

そろそろ前書きが鬱陶しくなってきましたね
次回からはテンポ重視ということで前書きなしで行きます。そして
10月はイベントだらけ過ぎて更新できそうにありません。平日は
授業で埋まってしまいますし、パソコン開く時間が今以上になくな
ってしまいます。なのでいつぞ宣言してしまいます。
次回更新は11月にします！
その間になるべく貯めるつもりです。出来たら。
終りまでの道筋を補強したりもするのでどうかお待ちください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6335j/>

蒼天の真竜

2011年10月6日17時15分発行